

# 達磨寺遺跡

## 発掘調査報告書

1986

日本道路公団仙台建設局  
山形県教育委員会

<sup>だる</sup>達 <sup>ま</sup>磨 <sup>じ</sup>寺 遺 跡  
発掘調査報告書

昭和61年3月

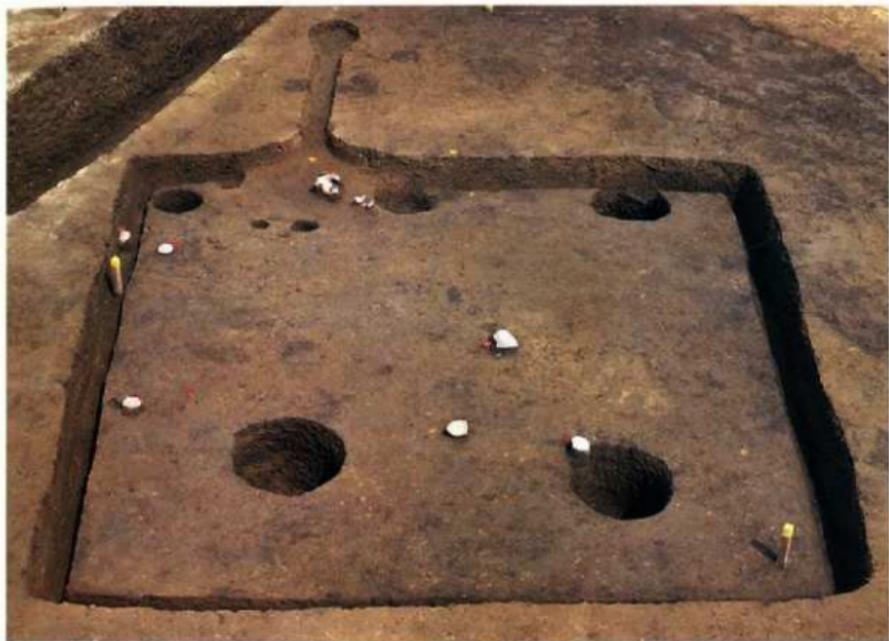
日本道路公団仙台建設局  
山形県教育委員会



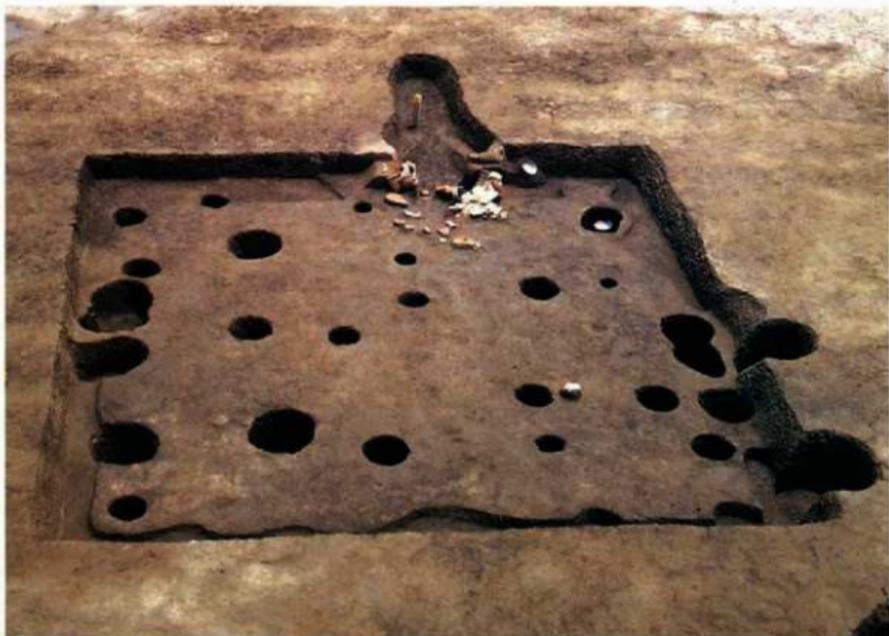
A地区全景



C地区全景



ST85全景(W↑)



ST86全景(W↑)



EL117(ST93)全景(N↑)



SK55堀セクション(E↑)

## 序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和58年・59年に実施した東北横断自動車道の仙台～寒河江線の建設工事に伴う中山町「達磨寺遺跡」の発掘調査の結果をまとめたものであります。

発掘調査では、住居跡や建物跡をはじめとする遺構が発見され、数多くの土器などの遺物が出土し、本県の平安時代後半を解き明かす上で貴重な資料が得ることができました。

これらの文化遺産は、私達の祖先が自然環境と歴史の中で創造し、育んできたものであります。これらを理解し愛護することは、祖先の歴史を知ると同時に、今日の文化を見つめる事になると思われまふ。現代に生きる私達は、これらを長く後世に伝え残していくことが、重要な責務であると考えます。

近年、県内各地での土木工事などの開発事業が増加するに伴い、埋蔵文化財とのかかわりも増加の傾向にあります。この両者の間には、困難な問題も山積しておりますが、生活文化の向上とする同一の立場から調整をおこない、今後とも埋蔵文化財保護のために努力を続けてまいる所存であります。

最後ではありますが、調査にあたって多くの御協力をいただきました地元の方々をはじめ日本道路公団山形工事事務所・山形県土木部道路建設課・中山町・中山町教育委員会の関係各位に対し、心から感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財の理解を深め、その保護普及の一助となれば幸いと存じます。

昭和61年3月

山形県教育委員会  
教育長 高橋 和雄

## 例 言

- 1 本書は日本道路公団仙台建設局の委託を受け、山形県教育委員会が昭和58・59年度に実施した東北横断自動車道仙台～寒河江線建設にかかる「遠磨寺遺跡の発掘調査報告書」である。
- 2 発掘調査は、第1次調査が昭和58年6月20日から10月17日まで延77日間、第2次調査が昭和59年4月17日から8月30日まで延87日間実施した。
- 3 遺跡の所在地は、山形県東村山郡中山町大字遠磨寺字遠磨寺2548外である。山形県遺跡地図（昭和53年）には遺跡番号399・400番として記載されているが、昭和57年度の分布調査において両者が同一遺跡として確認された。

- 4 発掘調査体制は下記のとおりである。

調査主体	山形県教育委員会		
調査担当	山形県埋蔵文化財緊急調査団		
調査担当者	主任調査員	佐々木洋治（山形県教育庁文化課	埋蔵文化財主査）
	同	佐藤 庄一（同	埋蔵文化財係長）
	現場主任	佐藤 正俊（同	技 師 ）
	調 査 員	長橋 至（同	技 師 ）
		後藤 浩（同	主 事 ） 昭和58年度
		大泉 俊彦（同	嘱 託 ） 昭和58年度
事務局	事務局長	浜田 清明（同	課 長 ） 昭和58年度
	同	小関 陽三（同	課 長 ）
	事務局長補佐	後藤 文夫（同	課長補佐 ）
	事 務 局	斉藤世都子（同	主 事 ）
	同	梨本 稔（同	主 事 ） 昭和58年度
	同	中嵐 寛（同	主 事 ）
	同	氏家 修一（同	主 事 ）

- 5 発掘調査にあたっては、日本道路公団仙台建設局・同山形工事事務所・山形県土木部

道路建設課・中山町・中山町教育委員会・中山町達磨寺地区・同向新田地区など関係機関ならびに地元の協力が得られた。記して感謝申し上げる次第である。

- 6 本書の作成にあたっては佐藤正俊・渋谷孝雄（文化課技師）が担当し、執筆した。（佐藤 I～IV章-1、渋谷IV章-2、V章は佐藤・渋谷）。編集は佐藤・長橋至が担当し、全体については佐々木洋治が総括した。遺物の実測・版組作成は、荳司宏子・佐藤めぐみ・徳永裕子・富田和子・漆山順子・荒井久美子・原田ひろみ・辻 広美の補助を得た。
- 7 調査期間中、多数の方々の来跡を受け御教授を得たことを記して感謝の意を表する。

## 凡 例

- 1 本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。  
ST：竪穴住居跡 SB：建物跡 SE：井戸跡 SD：溝跡 EL：カマド跡 EP：一竪穴住居跡桂穴 ED：竪穴住居跡壁溝 EB：建物跡桂穴 RP：一括完形土器 RM：鉄製品を表わし、遺構・遺物番号はそれぞれに分け一連番号で、桂穴・壁溝は各挿図毎に番号を付し、焼土については赤色で示した。
- 2 挿図の縮尺はそれぞれにスケールを示し、基本的には住居跡・土扱は1/40、建物跡1/60、溝跡は1/80とし、遺物は1/3とした。また挿図中の水系レベルはBM標高を表わした。方位記号は磁北を示し、Y軸方向グリッド基線より東へ29°傾く。
- 3 付表として本遺跡の出土遺物について、観察表・計測値を記した一覧を遺物の項目に付した。
- 4 平安時代の土器実測図で、断面白ヌキは土師器・黒が須恵器・点描は赤焼土器を表わす。
- 5 土層セクションの説明については、最後に付編として一括した。

# 目 次

I 遺跡の位置と環境	
1 立地と環境	1
2 周辺の遺跡	2
II 調査の経緯	
1 調査に至るまでの経過	4
2 発掘調査の経過	5
III 遺跡の概観	
1 調査の方法	8
2 遺跡の層序	8
3 遺構と遺物の分布	10
IV 遺構と遺物	
1 遺 構	13
1) 竪穴住居跡	13
2) 建 物 跡	42
3) 井 戸 跡	46
4) 土  墟	48
5) 溝  跡	66
2 遺  物	70
1) 竪穴住居跡出土の土器	70
2) 建物跡出土の土器	90
3) 土墟出土の土器	90
4) 溝跡出土の土・陶器	98
5) 遺構外出土の土・陶器	98
6) 鉄製品・石製品	102
V ま と め	
1 遺跡について	116
2 遺構について	116
3 遺物について	118

## 挿 図 目 次

第1図	遼磨寺遺跡位置図と周辺遺跡 (S=1:50,000)	3
第2図	遺跡全体図	9
第3図	土層柱状図	10
第4図	遺構配置図	11
第5図	1号住居跡	14
第6図	37号住居跡	15
第7図	72号住居跡	17
第8図	73・74号住居跡	19
第9図	75号住居跡	21
第10図	76・77号住居跡	23
第11図	81号住居跡	26
第12図	85号住居跡	27
第13図	86号住居跡	31
第14図	87・88号住居跡	33
第15図	90号住居跡	34
第16図	91・97号住居跡	35
第17図	93号住居跡	39
第18図	36号建物跡	43
第19図	43号建物跡	43
第20図	67号建物跡	43
第21図	94号建物跡	44
第22図	95号建物跡	44
第23図	96号建物跡	45
第24図	108・110号建物跡	47
第25図	土壇(1)	54
第26図	土壇(2)	55
第27図	土壇(3)	56
第28図	土壇(4)	57
第29図	土壇(5)	58

第30图	土城 (6)	59
第31图	土城 (7)	60
第32图	土城 (8)	61
第33图	土城 (9)	62
第34图	土城 (10)	63
第35图	土城 (11)	64
第36图	沟跡 (1)	67
第37图	出土遺物 (1)	71
第38图	出土遺物 (2)	72
第39图	出土遺物 (3)	74
第40图	出土遺物 (4)	75
第41图	出土遺物 (5)	78
第42图	出土遺物 (6)	79
第43图	出土遺物 (7)	81
第44图	出土遺物 (8)	83
第45图	出土遺物 (9)	85
第46图	出土遺物 (10)	86
第47图	出土遺物 (11)	87
第48图	出土遺物 (12)	90
第49图	出土遺物 (13)	92
第50图	出土遺物 (14)	93
第51图	出土遺物 (15)	94
第52图	出土遺物 (16)	96
第53图	出土遺物 (17)	97
第54图	出土遺物 (18)	99
第55图	出土遺物 (19)	100
第56图	出土遺物 (20)	101
第57图	出土遺物 (21)	102
第58图	出土遺物 (22)	103

## 図 版 目 次

- 図版1 遺跡近景 (NW↑) 遺跡近景 (SE↑)
- 図版2 土層セクション (1) 土層セクション (2)
- 図版3 A地区全景 (1) (W↑) A地区全景 (2) (W↑)
- 図版4 B地区全景 (1) (E↑) B地区全景 (2) (W↑)
- 図版5 C地区全景 (1) (SE↑) C地区全景 (2) (NW↑)
- 図版6 粗掘作業風景 (A地区) 平整理作業風景 (C地区)
- 図版7 体験学習・粗掘作業 体験学習・遺構検出 体験学習・面整理作業
- 図版8 1号住居跡全景 37号住居跡全景
- 図版9 71号住居跡・72号土壇全景 (1) 71号住居跡・72号土壇全景 (2)
- 図版10 71号住居跡確認状況 71号住居跡土層セクション RP70出土状態
- 図版11 RP73出土状態 (72号土壇内) 73・74号住居跡全景
- 図版12 73号住居跡全景 74号住居跡全景
- 図版13 73号住居跡土層セクション EL133土層セクション
- 図版14 75号住居跡全景 (1) 75号住居跡全景 (2)
- 図版15 75号住居跡土層セクション EL135土層セクション
- 図版16 76・77号住居跡全景 76号住居跡全景
- 図版17 76号住居跡東西土層セクション 76号住居跡南北土層セクション
- 図版18 EL136土層セクション RP67・77出土状態 77号住居跡全景
- 図版19 77号住居跡東西土層セクション 77号住居跡南北土層セクション
- 図版20 EL137全景 77号住居跡土器群出土状態
- 図版21 RP78・79出土状態 RP81出土状態 RP82出土状態
- 図版22 RM66出土状態 80号土壇・81号住居跡全景
- 図版23 85号住居跡全景 (1) 85号住居跡全景 (2)
- 図版24 85号住居跡東西土層セクション 85号住居跡南北土層セクション
- 図版25 EL102確認状況 EL102全景
- 図版26 EL102南北土層セクション RP25出土状態 EL102完掘状況
- 図版27 RP28・29出土状態 RP30出土状態 86号住居跡全景 (1)
- 図版28 86号住居跡全景 (2) 86号住居跡南北上層セクション
- 図版29 86号住居跡東西土層セクション EL103全景

- 図版30 EL103完掘状況 EL103土器群出土状態
- 図版31 EL103南北土層マクシオン RP35出土状態
- 図版32 RP36・43出土状態 RP41・42出土状態 RP36・37外出土状態
- 図版33 87号住居跡全景 87・88号住居跡全景
- 図版34 87号住居跡土層セクション EL104土層セクション外
- 図版35 89号住居跡全景 89号住居跡土層セクション
- 図版36 90号住居跡全景 (1) 90号住居跡全景 (2)
- 図版37 90号住居跡土層セクション 91・92号住居跡全景
- 図版38 91号住居跡全景 92号住居跡全景
- 図版39 92号住居跡南北土層セクション 92号住居跡東西土層セクション
- 図版40 EL116全景 EL116近接
- 図版41 EL116完掘状況 EL116完掘状況近接
- 図版42 EL116東西土層セクション RP49出土状態
- 図版43 RP44出土状態 RP46出土状態 RP50・52出土状態
- 図版44 93号住居跡全景 (1) 93号住居跡全景 (2)
- 図版45 93号住居跡土層セクション EL117土層セクション
- 図版46 RP53出土状態 RP54出土状態 EL117全景
- 図版47 RP55出土状態 RP56出土状態 RP57出土状態 RP58出土状態
- 図版48 67号建物跡全景 94号建物跡全景 (1)
- 図版49 94号建物跡全景 (2) 95号建物跡全景
- 図版50 96号建物跡全景 (1) 96号建物跡全景 (2)
- 図版51 96号建物跡発掘作業 EP1土層セクション EP2土層セクション
- 図版52 FP6土層セクション FP7土層セクション RP63出土状態
- 図版53 108号井戸跡全景 108号井戸跡土層セクション
- 図版54 112号井戸跡全景 112号井戸跡土層セクション
- 図版55 2-5号土坑全景 2号土坑全景 3号土坑全景 4号土坑全景
- 図版56 6号土坑全景 13・14・19号土坑全景 9・10号土坑全景
- 図版57 53号土坑全景 53号土坑土層セクション
- 図版58 54・55号土坑全景 54・55号土層セクション 56号土坑全景
- 図版59 57号土坑全景 58号土坑全景 59号土坑全景 60号土坑全景
- 図版60 61号土坑全景 62号土坑全景 65号土坑全景 66号土坑全景
- 図版61 63号土坑全景 63号土坑土層セクション

- 図版62 64号土壇全景 64号土壇土層セクション
- 図版63 68・69・70号土壇全景 RP69出土状態 78号土壇全景
- 図版64 97号土壇全景 98号土壇全景 100号土壇全景 101号土壇全景
- 図版65 106・107号土壇全景 106・107号土壇土層セクション
- 図版66 110・111号土壇全景 113号土壇全景 118号土壇全景
- 図版67 120号土壇全景 121号土壇全景 122号土壇全景 123号土壇全景
- 図版68 124号土壇全景 125号土壇全景 126号土壇全景 139号土壇全景
- 図版69 127・128号土壇全景 127・128号土壇土層セクション
- 図版70 130号土壇全景 130号土壇土層セクション
- 図版71 11号溝跡(A地区)全景 11・12号溝跡(B地区)全景
- 図版72 11号溝跡(C地区)全景 11・12号溝跡(B地区)全景
- 図版73 12号溝跡全景 12号溝跡土層セクション
- 図版74 21号溝跡全景 21号溝跡土層セクション
- 図版75 50号溝跡全景 50号溝跡土層セクション
- 図版76 51号溝跡全景 51号溝跡土層セクション
- 図版77 52・60号土壇全景 52・60号土壇土層セクション 82号土壇全景
- 図版78 99号溝跡全景(1) 99号溝跡全景(2)
- 図版79 99号溝跡上層セクション(1) 99号溝跡土層セクション(2)
- 図版80 129号溝跡全景 131号溝跡全景
- 図版81 出土遺物(1)
- 図版82 出土遺物(2)
- 図版83 出土遺物(3)
- 図版84 出土遺物(4)
- 図版85 出土遺物(5)
- 図版86 出土遺物(6)
- 図版87 出土遺物(7)
- 図版88 出土遺物(8)
- 図版89 出土遺物(9)
- 図版90 出土遺物(10)
- 図版91 出土遺物(11)

## 付 表 目 次

表—1	周辺の遺跡一覽	2
表—2	土器計測表 (1)	104
表—3	土器計測表 (2)	105
表—4	土器計測表 (3)	106
表—5	土器計測表 (4)	107
表—6	土器計測表 (5)	108
表—7	土器計測表 (6)	109
表—8	破片集計表 (1)	110
表—9	破片集計表 (2)	111
表—10	破片集計表 (3)	112
表—11	破片集計表 (4)	113
表—12	破片集計表 (5)	114
表—13	破片集計表 (6)	115

## 附 図 目 次

附図1 溝跡 (1)

附図2 溝跡 (2)

# I 遺跡の位置と環境

## 1 立地と環境

達磨寺遺跡は、山形県東村山郡中山町達磨寺字達磨寺に所在する。中山町は、山形盆地の中央部やや西寄りの山形市の北西方10kmに位置し、西は山形西部丘陵（出羽丘陵東麓）、北には最上川、東から南にかけて須川によってそれぞれ限られ、米作と果樹を主産とする田園地帯である。本遺跡は中山町の南東端部、達磨寺地区より東方へ1.3kmに所在し、須川下流域の左岸に位置している。また、遺跡の南端には、樹齢600年以上といわれる山形県指定天然記念物「お達磨のサクラ」が自生し、かつては達磨寺という寺があったとも言い伝えられており、この辺り一帯が「達磨寺」と言う地名の所以とみられる。

遺跡の立地する一帯は、須川によって形成された自然堤防上に在り、須川が遺跡付近で大きく蛇行し、自然堤防が東方に舌状に張り出しており、河床面から比高は5～6mの差があり、東側にいくぶん傾斜し須川の氾濫原に続いている。遺跡の西側は、自然堤防から連なる微低地となっている。標高は93.5mを計り、地目は畑地・果樹畑・水田となっており、現在の地形でほぼ平坦となっている。また、「お達磨のサクラ」の根本近くで「一字一石経」なども発見され、さらに近世には中山町長崎と山形市中野を結ぶ街道の渡舟場があったともいわれ、遺跡周辺は中世から近世にかけて交通の要所地でもあり、往時を偲ばせる所でもある。

遺跡周辺の堆積状況に関して、興味深い資料がある。同じく横断自動車道建設に伴うボーリング調査によって得られた深度50m以内のコアの年代資料をもとに、25,000年B・P以降の平均堆積速度を計算した阿子島功氏によれば、その平均値は1.3m/10<sup>4</sup>年になるという（阿子島1984）。単純な計算ではあるが、1,000年に1.1mの堆積ということになる。阿子島氏の分析によれば、本遺跡の場合は深さ1.2mで住居跡が検出され、山形市の去手呂古墳（山形県教委1985）では1.5～2mで住居跡などが確認され、古墳時代から平安時代にかけては須川流域にある遺跡群は平均値1.3m/10<sup>4</sup>年を示している。本遺跡の南西1.3kmにある自然堤防に立地する山形市の境田C・C'・D遺跡（山形県教委1982・1984）では、現地表下50cm未満で縄文時代晩期・弥生時代・平安時代の各生活面が確認され、ほとんど比高を持たないで存在している。このことから、2,000年B・P以降は自然堤防を埋没させるような堆積作用はなく、少なくとも居住地となった自然堤防はかなり安定していたとみられる。

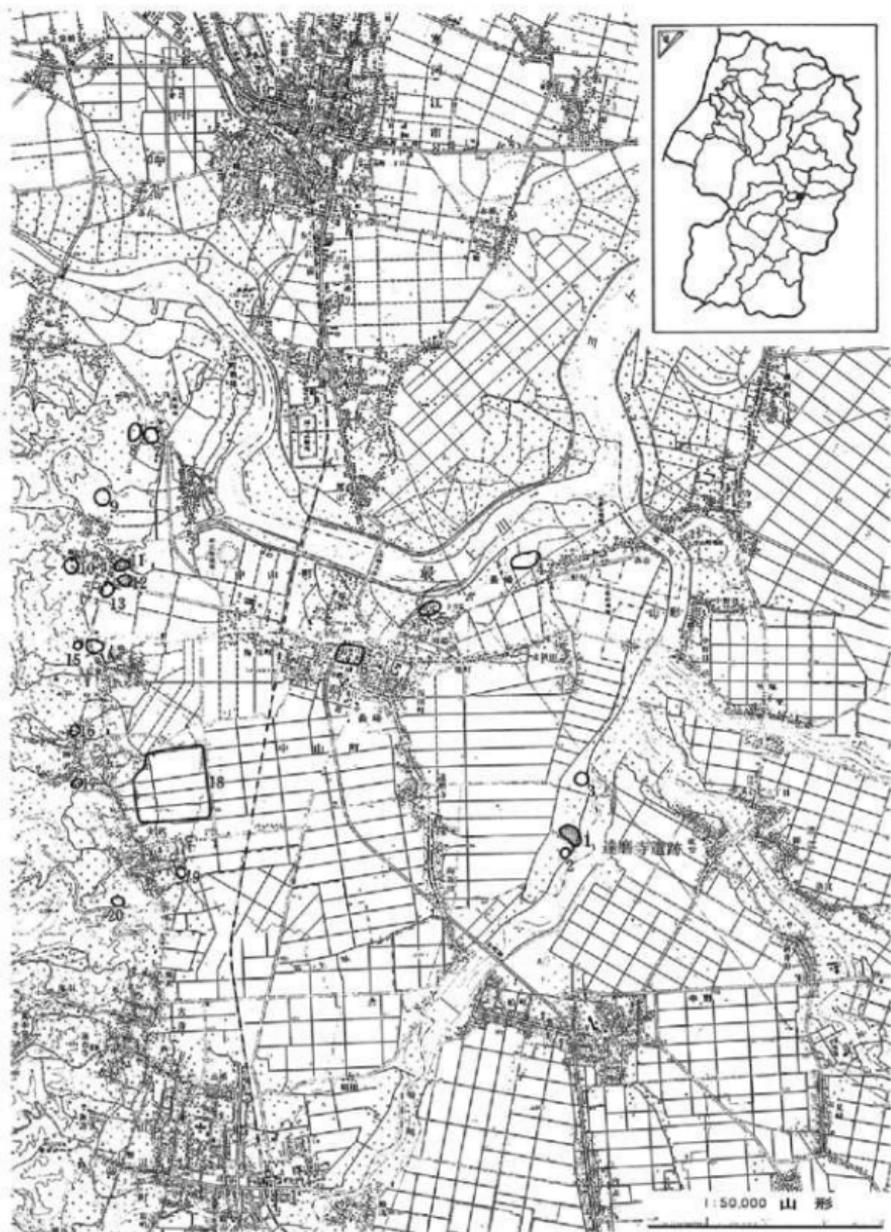
このことは、最上川や須川流域に中山町物見台遺跡（古墳時代）をはじめとして、古墳時代から平安時代にかけての遺跡が漏在することも考えられる。

## 2 周辺の遺跡

中山町で確認されている遺跡は、これまでの調査から44ヶ所の遺跡が知られており、その大半が縄文時代と古墳時代から平安時代にかけての時期である。その分布する状況は、地形や水系とのかかわりから、西部丘陵および傾斜変換線付近と最上川や須川の自然堤防上に立地する遺跡と大きくわかれていた。また、町中央部の微低地には現在のところ遺跡が確認されていない。

前者の場合は、小塩地区から柳沢地区にかけ最も多く遺跡が分布している。旧石器時代では滝1遺跡があり、畑地掘削のおりナイフ形石器が1点発見される。縄文時代の遺跡は塩ノ原遺跡・松岡山遺跡・墓戸遺跡など前期から晩期の遺跡がある。弥生時代の遺跡は庚申山遺跡1ヶ所、平安時代は滝2遺跡・八幡前遺跡が確認されている。中で規模の大きい柳沢条里遺跡があり、畦など明瞭に存在しているが時期は明確になっていない。この地区はその大半が、縄文時代と平安時代の遺跡が多く存在する。

後者は、須川流域と最上川流域の自然堤防上にあり、古墳時代から平安時代の遺跡が分布しており、中でも昭和58・59年度に横断自動車道建設に伴う発掘調査が実施された物見台遺跡（山形県教委1983・1984）では、古墳時代遺跡では県内でも大規模な集落跡が発見されている。やや大形の竪穴住居跡約30棟と大規模な溝跡からなる遺構の配置状況が確認されている。とくに大溝からは大別して3層からまとも土器が出土しており、住居跡と考え合せ、古墳時代後半期の土器編の指標となるべく期待される場所である。



第1図 達磨寺遺跡位置図と周辺遺跡

## II 調査の経緯

### 1 調査に至るまでの経過

東北横断自動車道仙台～寒河江線は「国土開発幹線自動車道建設法」にもとづく、総延長7,600kmの高速自動車網の酒田線の一部として建設されるもので、宮城県の前田町を起点として山形寒河江市に至る延長約65kmの高速自動車であり、昭和67年度「山形国体」の開催に向けて建設工事が急ピッチに進められている。

これに先立って、山形～寒河江間は昭和48年10月に、山形市の関沢～釈迦堂間は昭和53年11月に整備計画が決定され、日本道路公団に建設大臣より施工命令が出された。路線の決定にあたっては、地形・地質・文化財の有無等についての調査、関連公共事業との調整が必要とされ、文化財については日本道路公団仙台建局（後に仙台建局山形工事事務所）より分布調査の依頼を受けて、山形県教育委員会が主体となって昭和50～51年に山形～寒河江間、昭和55年に山形市の関沢～釈迦堂間の遺跡詳細分布調査を実施した。

分布調査の実施範囲は、推定路線を中心として2kmの幅を対象とした。その結果、山形～寒河江間では54遺跡（うち新規発見20遺跡）、山形市関沢～釈迦堂間で22遺跡（うち新規発見18遺跡）の存在が明らかとなった。路線はこれらの調査結果に基づいて、昭和54年に山形～寒河江間、昭和56年に山形市関沢～釈迦堂区間の経路が正式に決定し、山形～寒河江間では山形市西の沢遺跡、同じひやく寺遺跡、同お花山古墳群、同境田C遺跡、中山町達磨寺遺跡、同物見台遺跡の6遺跡の一部が線路内にかかることが明らかとなった。

山形県教育委員会では、路線内にかかるこれら遺跡の保護対策について、日本道路公団仙台建設局山形工事事務所、山形県土木部と協議を重ねた結果、路線等の変更が無理との判断から、用地買収後に順次記録保存のための緊急発掘調査を実施することで合意した。緊急発掘調査の実施は、昭和56年に山形市境田C遺跡、昭和57年に新たに山形市境田C・D遺跡、昭和57～58年に山形市お花山古墳群（継続2ヶ年）、昭和58～59年に中山町物見台遺跡（継続2ヶ年）、昭和59年に山形市にひやく寺遺跡の発掘調査が実施され、本遺跡については昭和58年～59年の2ヶ年に亘りそれぞれ第1次・第2次発掘調査として実施した。これら成課品としての発掘調査報告書は、昭和57年に境田C遺跡、昭和58年に境田C・D遺跡、昭和59年にはお花山古墳群・にひやく寺遺跡それぞれの発掘調査報告書として刊行されている。

本遺跡については既述のとおり、昭和51年に遺跡詳細分布調査を実施したが、以前より遺跡周辺、とくに樹齢600年以上といわれる「お達磨のサクラ」（県指定天然記念物）を中

心とした畑地一帯から、古くは地元の方々によって土器片などの遺物が採集され、また須川の河川敷内からも土師器や須恵器の土器が発見され、これら周辺に3～4ヶ所の遺跡の存在が知られていた。今回の横断自動車道の建設工事は、本遺跡の中央部を通るために、昭和57年11月に試掘調査を実施して、遺跡の規模や内容・生格等を明らかにした。

山形県教育委員会では、これら試掘調査に基づいて経費の積算を行ない、昭和58・59年の単年度ごとに日本道路公団仙台建設局と発掘調査委託契約を締結し、昭和58年6月20日から第1次調査、昭和59年4月17日から第2次調査を実施することになり、昭和60年には印刷製本費を別途委託契約を行ない発掘調査報告書を刊行することになった。

## 2 発掘調査の経過

発掘調査は、横断自動車道建設工事の進行状況や一部用地未買収地があるため、調査区をA～C地区の3ヶ所に分けて発掘調査を実施した。

第1次調査（昭和58年6月20日～10月17日・延77日）

6月20日～6月24日

発掘器具の搬入、路線内の草刈作業、鍍入式。A・B地区に5×5mを単位とするグリッドを設定。2.5×15mトレンチを設け、路線内の中央部より粗掘作業を開始し、深さ1.2～1.3m掘り下げる。

6月27日～7月8日

トレンチ掘による遺構の確認調査。溝跡・焼土ブロックを多量に含む土壌を検出する。この段階で遺跡中央部の約3,375㎡の精査・拡張地区を設定する。7月6日より重機機械を使用して拡張作業を実施する。部分的に平面整理作業を平行する。

7月15日～7月22日

重機使用による10～14～28～42グリッドの拡張作業と平面整理作業、溝跡や円・楕円形をなす径1～1.5mの土壌を確認する。土壌は炭化物・焼土混りの土層堆積である。

7月12日山形県研修所による体験学習が本遺跡において実施され、県職員52名が参加し、道路公団山形工事事務所の講演を始めとして、埋蔵文化財保護と開発について考え、実際の発掘調査を体験した。

7月22日からの週作業は、雨降りの日が多く、重機使用による拡張作業は断続的なり12～15～47～51グリッドを中心に晴れ間をみて、粗掘作業を実施する。

7月24日～8月12日

重機使用による拡張作業が29日で終了する。本遺跡は地下水の水位が高いため、精査地区の排水溝を掘る。遺構を確認するため面整理作業を開始し、B地区の10～14～40～42

ブリッドより実施する。10～14-30～40グリッドと順次作業を進める。B地区の面整理作業終了しだい、A地区の面整理作業を行なう。A・B精査区内に5×5mを単位とする小単位でのグリッド杭の設定。B地区の南西側から中央部にかけての土坑群より平安時代の土器片が多く出土する。

8月22日～9月2日

盆明の22日に調査を再開し、A地区の5～8-39～42グリッドより面整理作業を始める。B地区からの南に延びる溝の確認、住居跡・土坑を確認する。22・25日雨のため遺物洗浄、ネーミング作業および記録の整理。9月1日をもってA・B地区の面整理作業をほぼ終了する。1日B地区より遺構の精査・検出作業を開始。1号住居跡・2～9号土坑より検出作業を始める。

9月5日～9月22日

9月6日伏山形果研修所による本遺跡での発掘調査体験学習を実施、県職員65名参加。10・12～19号土坑・11・20号溝跡とB地区の東側に向けて遺構の精査・検出と土層断面図や写真撮影などの記録作業を行なう。なお、9月中旬は雨の日が多く遺構検出作業が進まなかった。

9月26日～10月7日

B地区の10～14-38・39グリッドをさらに面整理作業を実施して、5基の土坑38～41号土坑を確認し、精査・検出作業や記録作業を実施する。

10月11～10月17日

全体的な記録や写真撮影など実施、発掘器具の搬出し、B地区を中心に作業を進めて第1発掘調査を終了する。

第2次調査（昭和59年4月17日～8月30日・延87日）

4月17日～4月20日

現地への発掘器具の搬入。鉋入式。第2調査は横断道建設工事の進行状況を考慮して、C地区より調査を開始することになった。C地区は粗掘作業の結果にふまえて、最初から重機械を入れて、拡張作業を実施することにした。重機械使用範囲のクイ打作業や環境整備を行なう。

4月23日～5月18日

4月23日より5月15日の期間で重機械を使用してC地区の拡張作業。並行して面整理作業、5×5mを単位とするグリッドを設定する。竪穴住居跡10、建物跡3、土坑23、溝跡5等を確認。C地区全体の土層セクションの測図と遺構確認状況などの写真撮影作業。

5月16日よりC地区南側に位置する85・86号住居跡、94号建物跡など遺構精査・検出作業を実施、一部土層セクションの測図作業を開始する。

5月21日～6月8日

85・86号住居跡のカマドの精査・検出と記録作業。87・88号住居跡はカマドの切断作業を終了しほぼ完掘。90～92号住居跡はカマドの検出を残し完掘。93号住居跡もほぼ完掘する。これら住居跡は、土塚や井戸跡さらに溝跡の検出作業と並行して進め、とくにカマドの精査・検出を充分に行なった。

6月11日～6月29日

C地区の全体図の作成と測図（S=1:200）・住居跡・土塚・溝跡・建物跡の検出をほぼ完了する。各遺構のセクションベルトの土層実測と写真撮影。86・87号住居跡を始めとする土塚等の全景写真撮影。各住居跡カマドの平面図（S=1:10）の測図とレベルリング。C地区の簡易遺方の設定（1mを単位とする）。各遺構の平面図実測作業。14～56グリッドを北端とする2×25mのトレンチ掘り作業。6月25日（月）C地区を主体とする第1回目の現地説明会、終70名の参加者あり。

7月2日～7月27日

C地区の平面実測作業とレベル測点読み作業、7月4日C地区の調査を完了する。7月2日よりA地区の調査を開始し、面整理作業と環境整備。63号土塚や11・12・82号溝跡の検出と精査を実施完了する。7月23日からは74～76号住居跡の精査検出と土層セクションの測図や80号土塚、21・50・51号土塚の面精査。下旬には雨が3日間降り続いたため、排水を取りながらの作業が続く。

7月30日～8月10日

住居跡カマドの精査検出と平面・断面実測作業。51・52・60号溝跡の精査と検出と土層セクションの実測と写真撮影。53～59・61・62号土塚の掘り方と土層セクションの測図。71・73～77号住居跡の完掘状況や全景写真撮影。8月3日（金）A地区を中心に関係機関の出席と地元約70名が参加して、第2回現地説明会を実施する。

8月20日～8月30日

発掘調査の日程から当初8月10日までとしていたが、調査の進行からみて無理と判断し道路公団と協議・理解のうえで8月30日までの9日間延長した。A地区の各遺構の全景・全体の写真撮影と平面実測とレベルリング作業。B地区の環境整備と全体写真撮影を実施する。28日～30日器材撤収の準備と発掘器具の運搬。8月30日関係機関への連絡をおこない第1～2次調査のすべての調査を終了する。調査期間中、関係機関の御助言・指導や地元の方々の方々の御協力を得ましたことを心から感謝申し上げます。

### III 遺跡の概観

#### 1 調査の方法

発掘調査は、路線の幅員内に限って約55～60m幅を対象に、東西約120mの範囲である。発掘対象面積は約12,600㎡について実施し、とくに遺構や遺物が密集する地区(精査地区)を重点に発掘調査を進め、遺跡の中央南寄りから東側にかけて拡張し、精査区域の面積約5,625㎡を発掘調査したものである。

調査は、高速道路事業区内の全体にグリッドを設定し、グリッドの基線を工事杭のセンター杭No539とNo400を結ぶ線をY軸に、直交する方向にX軸をとり、No539に基点を設けて10-45グリッドとして、グリッド基線のY軸方向はN-29°-Wを計り、5×5mを一単位とするグリッドを設定する、X・Y軸とも算用数字で呼称した。第1次調査で、調査対象地区の中央部から東側・西側へ、2.5×25mあるいは2.5×20mのトレンチを併用して、トレンチの方向を東西・南北と地形や土地の状況を考慮し、粗掘作業を開始した。遺跡の中央部から東側にかけて、大きく拡張しA地区・B地区・C地区と呼称して、順次調査を進めた。

調査の進行状況は、第1次調査で粗掘作業より始め、A・B地区を重機械によって拡張し、B地区・A地区と面整理作業や遺構確認、B地区より遺構の精査・検出と記録・写真撮影を実施、A地区の遺構精査・検出やB地区の一部作業を残し、第1次調査を終了する。第2次調査は、C地区に重機械を使用して拡張作業を開始する。C地区の調査終了しだいA地区の調査にとりかかり、B地区の一部写真撮影を行い第2次調査を終了する。

#### 2 遺跡の層序

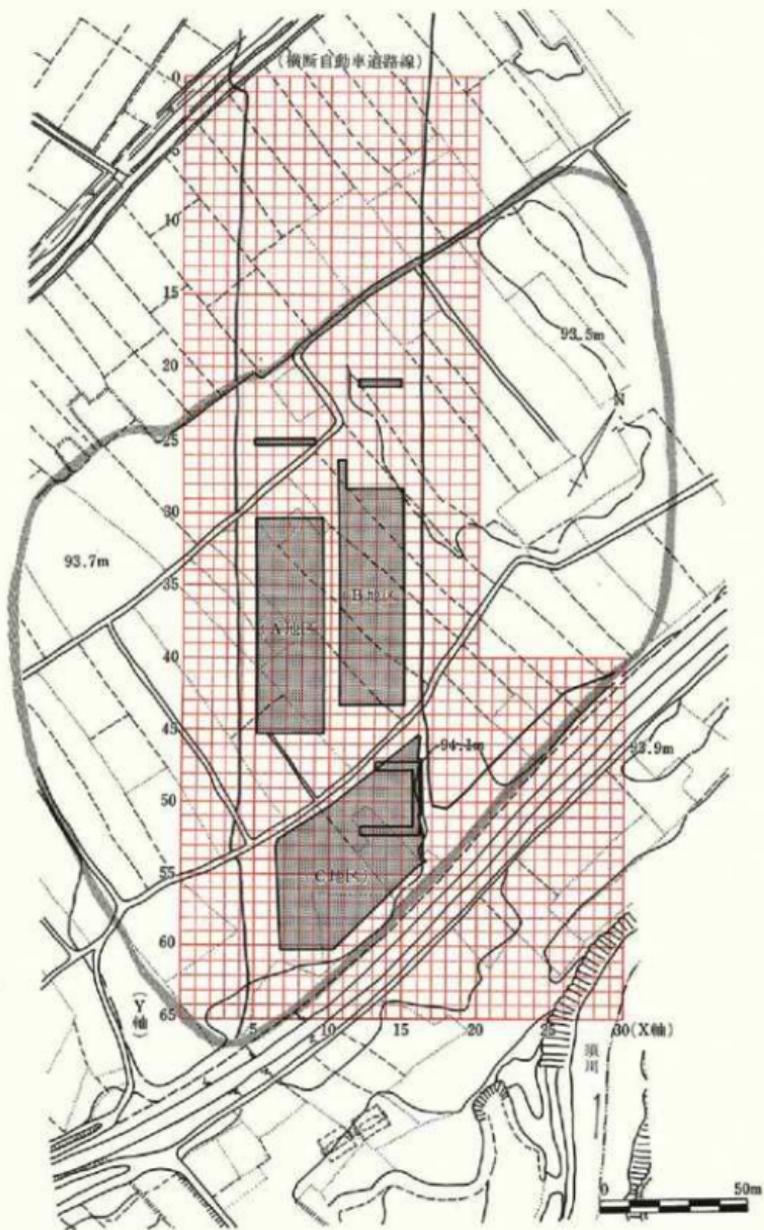
本遺跡は、須川によって開析された沖積河川投丘上に立地し、全体として平坦で起伏はみとめられない。原地形は、I～III層は全体にほぼ平坦で、IV～V層にかけてはC地区の中央部からA・B地区の南側までは微高地上になり、それより東側と西側で若干の傾斜地で比高差70～90cm程になっている。土層の状態は、上部層でこの辺一帯が果樹畑であり、40～60cmの深さで樹木の跡がみとめられ攪乱を受けている。下部層の遺構が確認される面まで90cm～1m深く、全体として遺存状態が良く攪乱などは受けていない。

(基本層序)

I層 暗褐色土 細砂質で畑・果樹による耕作土 (20～25cm)

I<sub>1</sub>層 黒褐色土 砂質土で炭化粒子を多く含む (20～40cm)

I<sub>2</sub>層 黒褐色土 I<sub>1</sub>層に近似するが堅くしまっている。



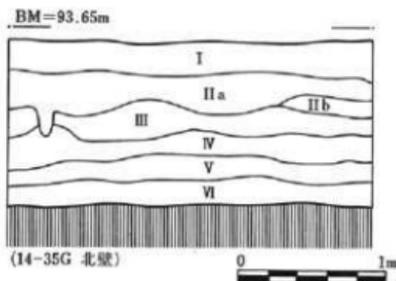
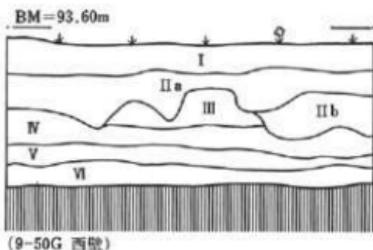
第2図 遺跡全体図

III層 褐色土 砂層 (SD11はこの層より掘り込まれている。)

IV層 黒褐色土 炭化粒子を含み細砂質である。(遺物包含層・遺構確認面)

V層 暗褐色土 シルト質粘土・IV屈の漸位層(若干の遺物を含む)

VI 褐色土 シルト質粘土(地山)



第3図 土層柱状図

### 3 遺構と遺物の分布

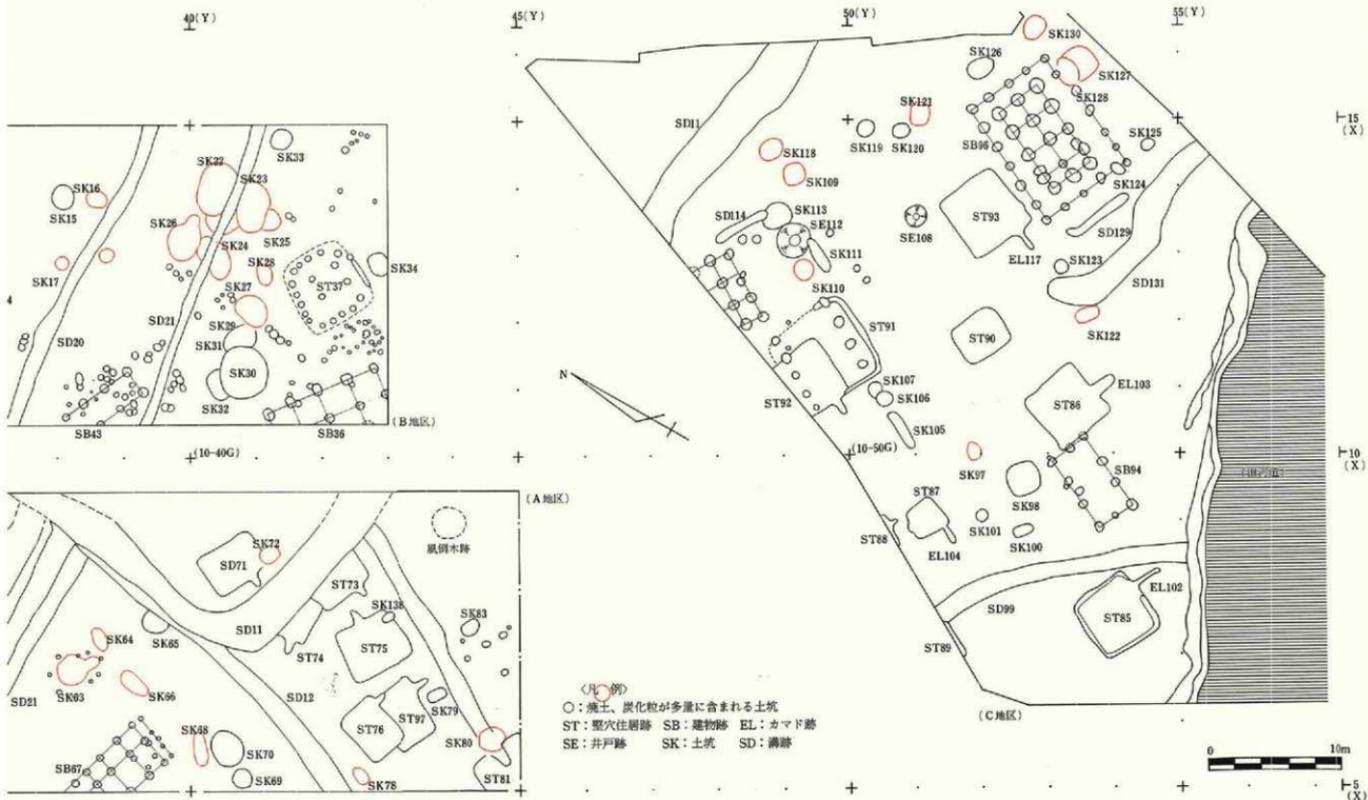
(遺構について)

達磨寺遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡17(うちカマド跡12)・建物跡6・井戸跡2・土壇76・溝跡12・不明ピット94である。遺構の時期は、平安時代後半以降がその大半で、調査区の中央部から東側にかけて集中して検出された。

遺構の分布は、住居跡ではA・B地区の東側からC地区の原地形がやや微高地に遇在しており、住居跡の基軸方向が東西あるいは南北方向になっている。とくにA地区にある住居跡は重複しており2時期の段階がある。カマドの方向が南・東になるのがほとんどであり、75号住居跡のみ北方向になっている。建物跡は、住居跡群の外辺部に位置しており、その方向は東西になる36・43・67号建物跡と(A・B地区)、南北に基軸をとる94~96号建物がある(C地区)。井戸跡はいずれもC地区のほぼ中央部にあり、いずれも隣接している。土壇は、調査区全体に遍在しており、とくにA・B地区では西側に住居跡群とは別に集中している土壇もある。焼土を有する土壇群は全体的に不規則にある。溝跡は、11号溝は平安時代よりも新しく、A地区で南北方向から東西方向に変化しており、その地は東方向になっている。

(遺物について)

遺物はその大半が住居跡内か、カマドの、周辺その他焼土を有する土壇より出土する。IV・V層よりの出土は少ない。



第4図 遺構配置図

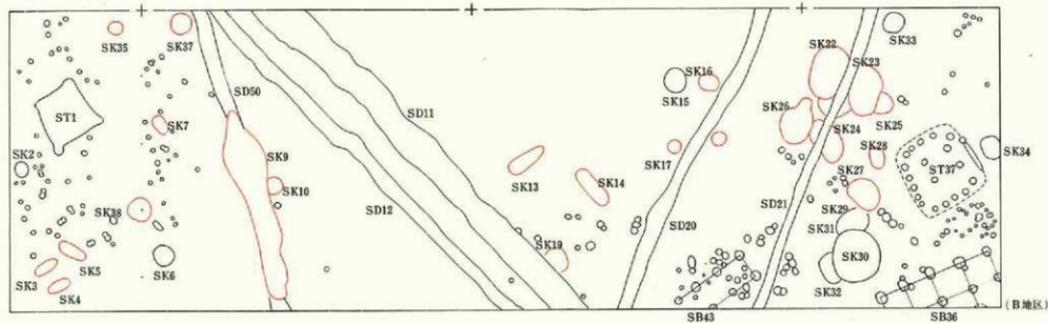
5  
(X)

30(Y)

35(Y)

40(Y)

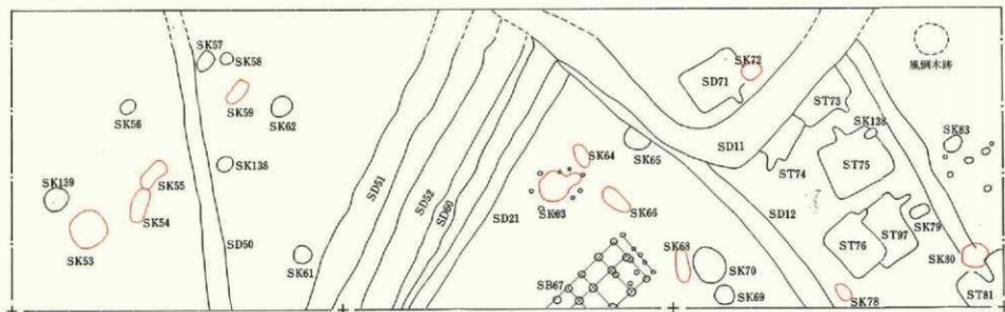
45(Y)

10  
(X)

10-39G

10-40G

+

15  
(X)

○(凡例)  
 ○：炭土、炭化粒が大量に含まれる  
 ST：竪穴住居跡 SB：建物跡  
 SE：井戸跡 SK：土坑

## IV 遺構と遺物

### 1 遺構

#### 1) 竪穴住居跡

##### 1号住居跡 (第5図 図版8)

B地区の北西部の平坦地、12・13-28・29グリット内に位置し、西側で2号土坑と重複している。遺存状態は全体として良好である。確認され層序は、北側から東側にかけてはV層下部で、南側から西側にかけてはVI層の上面で確認される。住居跡の構築状態は、VI層上部を掘り込んで、床面を構築して造られている。

平面形は、住居跡のそれぞれの隅部で張り出し、北辺が他よりも短い台形状になる不整形を呈している。大きさは長軸3.80m・短軸3.65mで長軸方向N-60°-Eを計り、確認面からの深さは16~19cmである。壁の状態は、全体的に緩やかに掘り込まれ軟弱ではあるが、南側の中央部付近はやや堅くしまっている。壁溝や周溝は認められない。床面の状態は、炉跡周辺でやや起伏があり堅く踏みめられているが、他はほぼ平坦で軟弱であり、とくに西側と東側の壁付近では軟弱である。柱穴は認められていないが、住居跡の隅部の張り出しが柱穴に相当するとみられる。

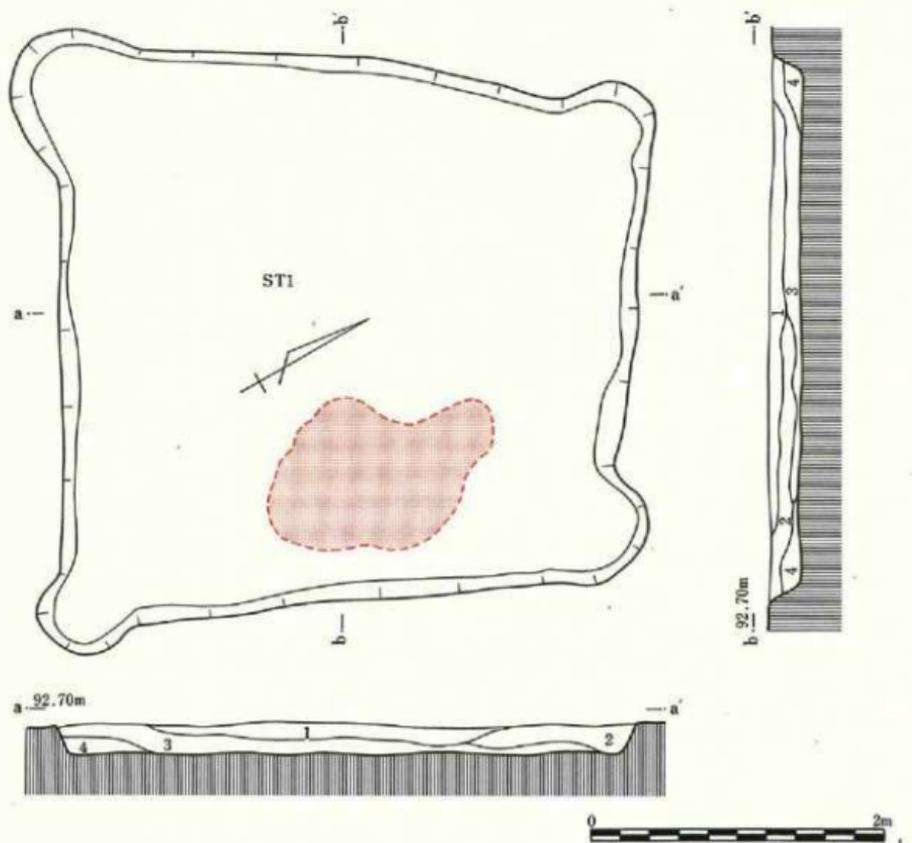
炉跡(EL)は、住居跡の北側の東寄りに位置する他床炉である。平面形は不整形円形を示し、大きさは長径1.65m、短径1.15mである。炉跡の状態は、床面が炭化物に混って若干焼けている程度である。

本住居跡の時期は、遺物が出土していないため時期は不明であるが、他住居跡の覆土の状態が類似しているため、平安時代中頃と考えられる。

##### 37号住居跡 (第6図 図版8)

B地区の東側の平坦地、11~13-41・42グリット内に位置し、東側で34号土坑、西側で28号土坑、南側で36号建物跡とそれぞれ隣接している。確認面は、VI層の上面で周溝・柱穴・炉跡のみで検出されたものである。住居跡の構築は、壁が検出されていないが床面はVI中を掘り込んで造られていたとみられる。

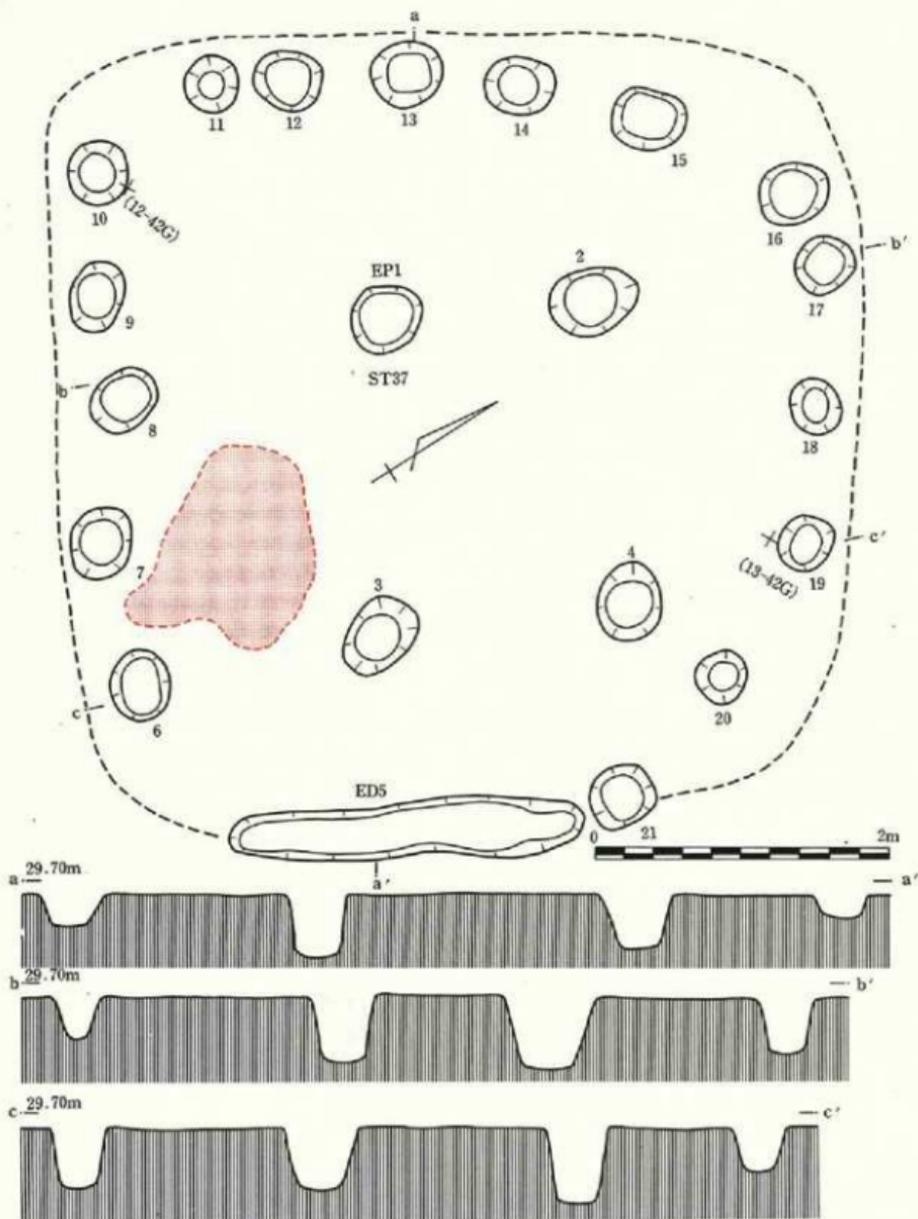
平面形は、柱穴の配列状態からみて方形を呈すると考えられる。大きさは推定長軸5.50m・短軸5.40mを計るとみられる。周溝(ED5)は、東側の中央部で一部確認されており、幅35~40cm、長さ240cm・深さ10~14cmである。床面はほぼ平坦で軟弱であるが、住居跡の中央部がやや堅くしまっている。柱穴は20本検出され、EP1~4は支柱穴で、住跡中



第5図 1号住居跡

中央部に在り、径50~60cm・深さ45~60cmと一定で、いずれも相対に配置されている。EP 6~20は壁柱穴とみられ、北側から西・南側に集中し、径35~55cm・深さ35~40cmである。EP 8・1・2・17とEP 6・3・4・19といずれも一線に配置され、等間隔の間尺をもって配されている。炉跡(EL)は、南側に位置する地床炉で、全体として若干焼けている程度である。

本住居跡の時期は、遺物が床面よりわずか出土しているが、その内容からみて平安時代10世紀前半と推定される。



第 6 图 37号住居跡

#### 72号住居跡（第7図 図版9～10）

A地区の中央部の東寄り平坦地、7・8-40・41グリッド内に位置し、東側で71号土城と重複し、西側から南側にかけては11号溝跡と近接している。遺存状態はおおむね良好であるが、一部住居跡北西隅で後世の攪乱を若干受けている。確認された層層は、IV層下部であるが、西側ではV層上面で確認された。住居跡の構築状態は、IV・V層を掘り込んでおり、住居跡の中央部での床面が若干VI層を掘り込んでいる程度で、全体としてはV層下部面床面としている。

平面形は、南側の中央部がやや脹らみをもち、やや隅丸を示す長方形を呈している。大きさは、長軸径3.93m・短軸径3.41mで短軸方向N-37-Eを計り、確認面から床面までの深さが19～24cmである。壁の状態は、全体として緩やかになるように検出され、北辺の東側寄りで堅くなっている他は、軟弱である。壁高は15～20cmである。床面の状態は、東辺壁から中央東寄りにかけては、階段状に掘り込まれておりやや起伏がみられる。また他は、壁付近で多少の凹凸がみられるがほぼ平坦で、カマド付近では堅くふみしめられている。柱穴・周溝などは検出されない。南辺壁の中央部に、径60cm・床面からの深さが15～18cmの落ち込みが検出されているが、覆土の状態からみて恐らく貯蔵用の施設と考えられる。この中からは遺物は出土していない。

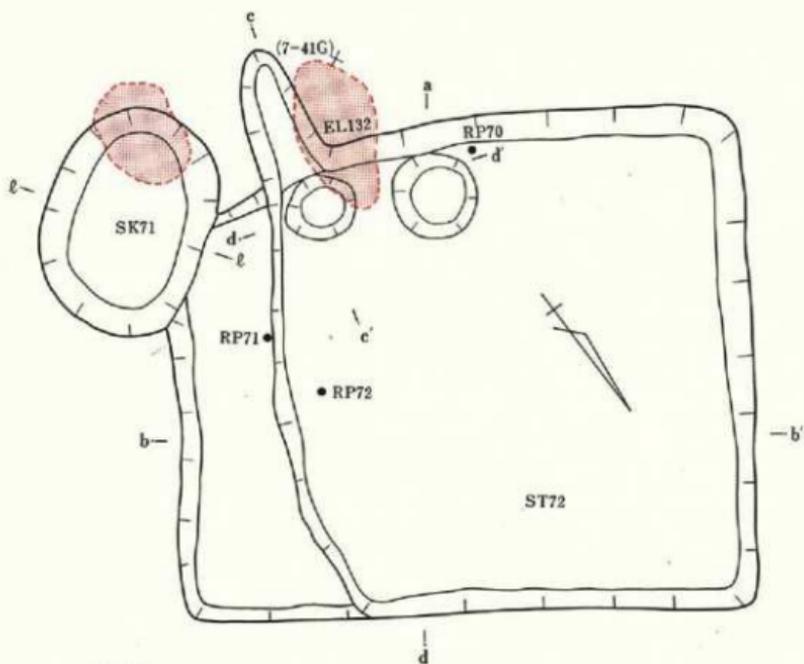
カマド（EL132）は、住居跡の南辺・東側の隅部付近に位置し、煙道部が壁外に張り出している。カマドの長さは推定150cm・幅85cm・焚口幅約45cmで、長軸方向N-17-Eを計る。検出された状態は、全体として崩れ落ちており、袖部などは明確に検出されなかった。焚口部から熱焼部にかけては、粘土ブロックや褐色土ブロックに混じり焼土粒子も広がっており、熱焼部には炭化物や焼土さらに砂が混っている。熱焼部には径50cm・深さ5～10cmの落ち込み状のピットが検出されている。煙道部は、長さ95cm・幅25～35cmでやや傾斜をもって立ち上がり、掘り方が熱焼部と同じ幅であり、壁際より溝状をなすように突き出す形を示している。カマド内から出器片がわずかに出土したのみである。

住居跡の土層の堆積状態は、ほぼ中央部へ向けてレンズ状に推積している。遺物は覆土内より土器片が少量出土したのみで、床面よりRP70～72が密着して出土している。

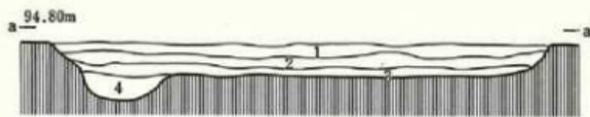
本住居跡の時期は、71号土城より旧く、また土層の掘り込み状態から11号溝跡よりも古い。年代は、出土した土器からみて平安時代・10世紀前半期に比定される。

#### 73・74号住居跡（第8図 図版11～13）

A地区の東側の北寄りの平坦地、7・8-41・42グリッド内に位置し、北西側で11号溝跡と重複し、南西側で75号住居跡と隣接している。遺存状態は11号溝跡によって大半が切



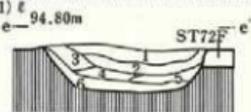
(ST72)



(EL132)



(SK71)



(SK71)



第7图 72号住居跡

られている他はほぼ良好である。確認面は、IV層下部で両住居跡とも検出されている。住居跡の構築状態は、73号住居跡はV層中位まで掘り込まれ、床面を構築しており、また74号住居跡はVI層上面をやや掘り込んで床面を形成している。73・74号住居跡はいずれも重複している。

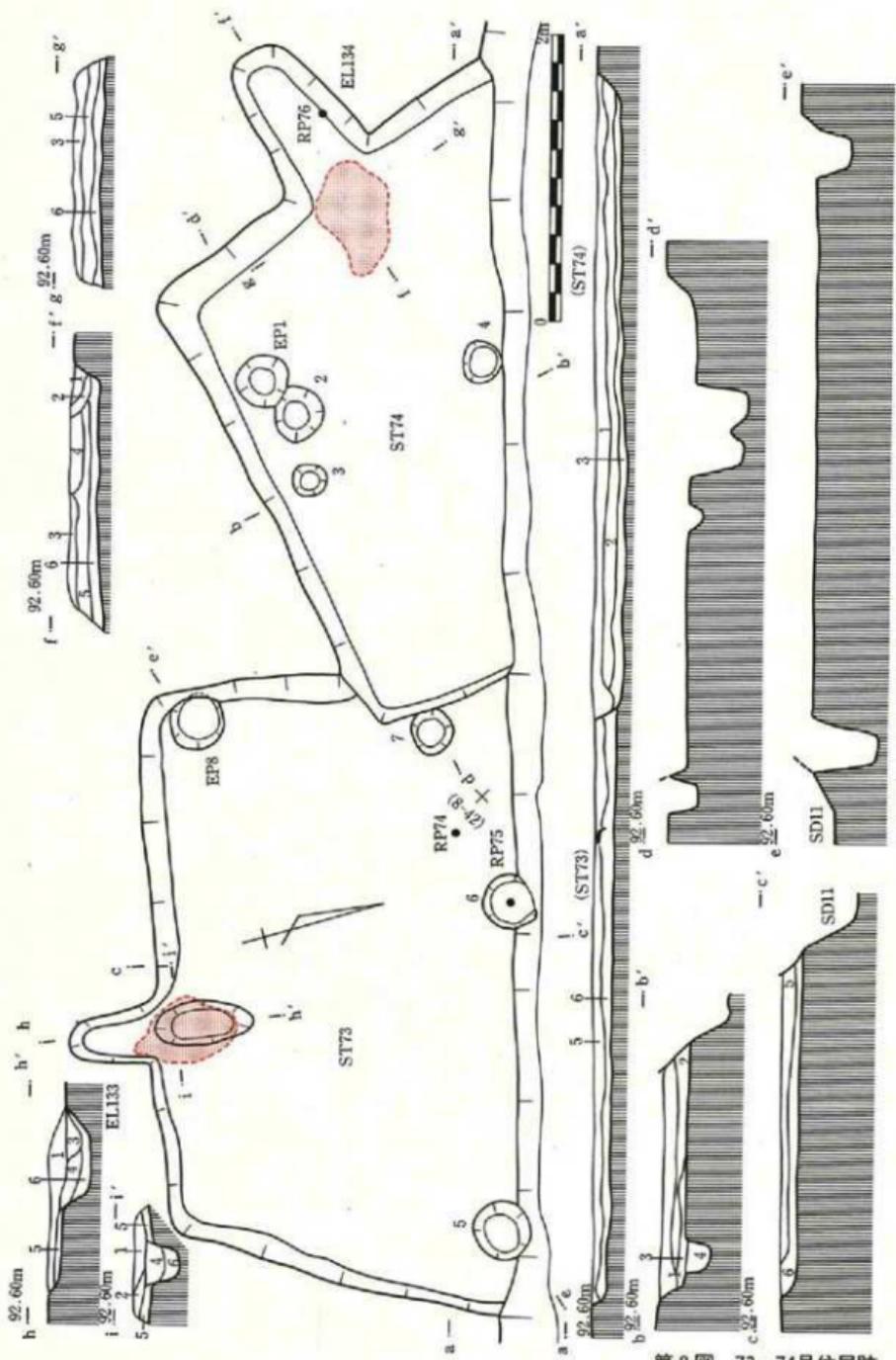
#### (73号住居跡)

平面形は、東辺壁がやや脹らみをもち、南辺・西辺壁がほぼ直線となり、やや隅丸となる不整形を呈している。大きさは現存する長さ東西4.25mで、カマド方向でN-7'-Eを計り、確認面からの深さが12~16cmである。壁の状態は、全体と緩やかに傾斜をもって検出され、とくに西辺壁は傾斜が急になっており、南辺壁から西辺壁はやや堅くしまっている他は軟弱である。現存する壁高は10~13cmである。床面の状態は、東側の半分域が起伏に富み堅く踏みしめられ、西側の半分域はほぼ平坦で軟弱である。周溝は検出されていない。柱穴は4本検出され、EP5・6が主柱穴とみられ全体として東側に片寄って確認され、径40~50cm・深さ35~40cmであり、EP6からはRP75が出土している。EP7・8は支柱穴あるいは壁柱穴であり、EP8の内部は壁外に傾斜をもって掘り込まれている。径30~40cmで、深さは25~38cmである。

カマド(EL133)は、住居跡の南辺壁の中央寄りの東側に位置し、煙道部が壁外に張り出している。検出された状態は、全体として崩れ落ちており遺存の状態が良くなく、袖部や燃焼部などは明確に検出されなかった。カマドの規模は推定値で、長さ140cm・幅60cm・焚口幅35~40cmであり、長軸方向はN-8'-Eを計る。状態は、袖部では若干の粘土ブロックや砂が混り、燃焼部と焚口部では焼土や炭化材が多くみれ粘土ブロックが崩れ落ちている。燃焼部と焚口部付近では径70cm・深さ15~17cmの楕円形のピットが検出されている。煙道部は壁外に、長さ55cm・幅35~38cmでやや傾斜をもって立ち上がり、突き出しており、恐らく燃焼部と同程度の幅をもっていたと考えられる。

#### (74号住居跡)

東側で73号住居跡と重複しており、住居跡の方向が異なっている。平面形は、南辺壁が直線的であり、東・西辺壁も恐らく同様とみられ、やや隅丸となり南北方向がやや短かい長方形を主すると考えられる。大きさは現存する東西3.58mで、カマドを有する方向でN-8'1"-Eを計り、確認面からの深さは18~26cmである。壁の状態は、全体として緩やかに傾斜をもって立上っており、若干程度軟弱であるが東辺壁では堅くなっている。現在する壁は15~18cmである。床面の状態は、住居跡の中央部が凹凸が顕著で堅く踏みしめられているが、壁付近になると平坦で軟弱となっている。周溝は検出されていない。柱穴は4本検出され、EP1・2は径25~35cm・深さ34~38cmで、EP3・4は径20~28cm・深さ12~18



第8图 73·74号住居跡

cmであり、柱の構成は不明である。

カマド(EL134)は、住居跡の西辺壁のやや南寄りに位置し、煙道部が壁外に張り出している。検出された状態は、全体として崩れ落ちており遺存の状態が良くない。袖部や燃焼部などは明確に確認されなかった。カマドの規模は推定で、長さ184cm・幅約100cm・焚口幅50~55cmであり、長軸方向はN-81°-Eを計る。状態は、全体として西側から東側にかけて崩れているため、粘土ブロック、炭化粒子、焼土が平均的に広がっているため、袖部や燃焼部がはっきりと判別しにくい状態である。なお焚口部から燃焼部の下面では焼土が2~4cmの厚さで堆積している。煙道部も崩れているため状態は不明であるが、長さ98cm、幅60~72cmで掘り方のみが明確に検出されている。また煙道北壁の中央部でRP76が出土している。

住居跡の覆土は、全体として南側から北東にかけてレンズに堆積して、南側で各層とも厚く堆積している。遺物の出土量は少ない。

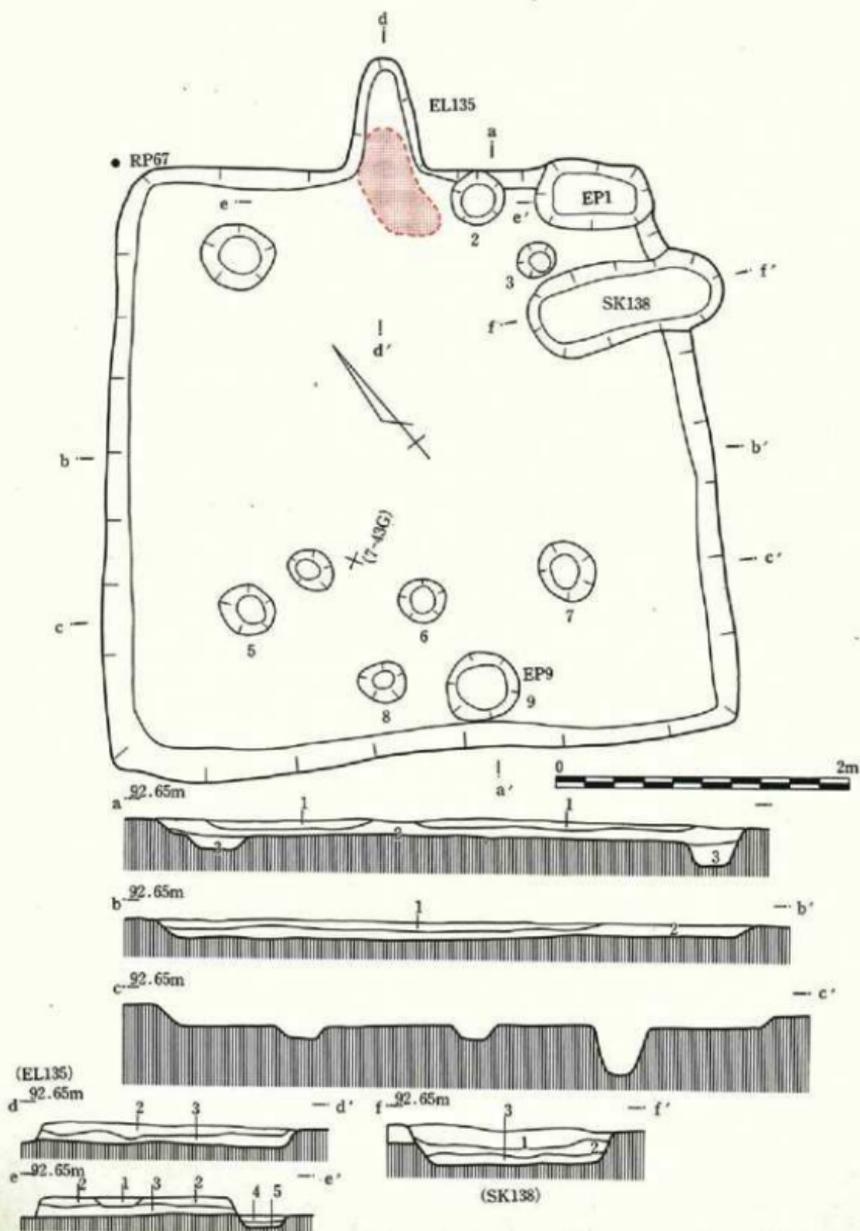
73・74号住居跡の新旧関係は、土層断面の観察により74号住居跡が73号住居跡よりも新しく、時代は出土した土器からみて、平安時代の10世紀前半の時代に比定される。

#### 75号住居跡(第9図 図版14・15)

A地区の東側の中央部やや平坦地、6・7-42・43グリッド内に位置し、東側で138号土壇と重複し、北側で73・74号住居跡、南側で76・77号住居跡とそれぞれ隣している。遺存状態は住居跡の南側部分が後世による攪乱が、住居跡上面までたっしている。確認された層序はIV層下部で確認される。住居跡の構築状態は、壁がIV層中を掘り込み、床面はV層をわずかに掘り下げている程度で、V層上面が床面として造られている。

平面形は、東辺壁と南辺壁がやや不整形をなし、北辺壁がやや短い台形状になる不整形を呈している。大きさは長軸、短軸とも4.20mで、カマドを有する方向でN-30°-Eを計り、確認面からの深さは13~18cmである。壁の状態は、全体的に軟弱で若干の凹凸がみられ、緩やかに立ち上っている。現存する壁高9~18cmである。壁溝あるいは周溝は検出されない。床面の状態は、北西側の一部が若干の起伏がみられる他は平坦であり、全体としては軟弱であるが、EP9ならびにカマドの周辺部がやや堅く踏みしめられている。柱穴は9本検出され、主柱穴としてみられるEP2・4~7であり、径26~49cm・深さ32~48cmで、住居跡の形状にならって配置され、とくにEP5・6・7は等間隔で直線的に配されている。EP3・8・9は、径24~58cm・深さ15~23cmで補助的な支柱穴と考えられる。

カマド(EL135)は、住居跡の北辺壁の中央部に位置し、煙道部が住居外に張り出してい



第9図 75号住居跡

る。カマドの検出された状態は、全体として崩れ落ちており遺存の状態が悪い。袖部や燃焼部あるいは焚口部が明確に確認することが出来なかったが、煙道部の掘り方やカマド下面が判明する程度である。カマドの規模は推定値で、長さ125cm・幅約50～70cmで、焚口部は50～55cmとなり、長軸方向はN-30°-Eを計る。状態は北側から南側に崩れ落ちており、焼土・粘土ブロック・炭化物が広く混っている。袖部・燃焼部・焚口部の状態は不明である。なお、煙道の一部から焚口部の下面には、焼土や灰が若干堆積している。煙道部は掘方の状態が判別されたのみで、長さ70cm・幅32～40cmである。

貯蔵穴(EPI)は、住居跡の東側の隅部にあり壁と接している。平面形は不整の方形を呈して、大きさは長軸79cm・短軸54cm・深さ22～26cmである。遺物は坏やカメの破片が多出土し、炭化物や焼土ブロック・灰が多量に混じっている。

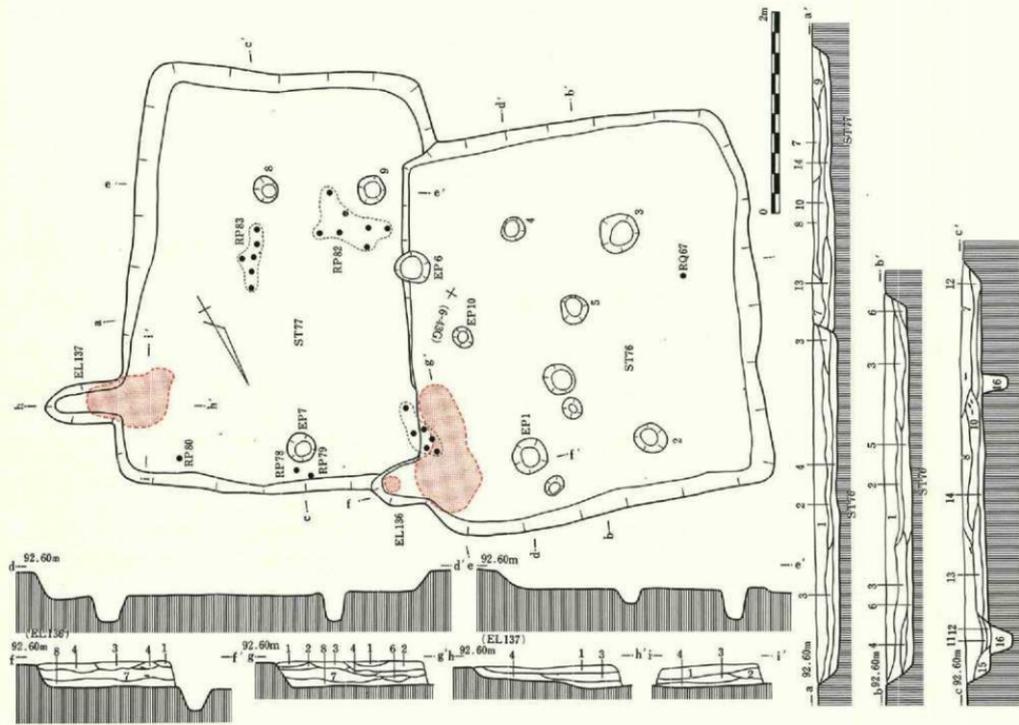
本住居跡と138号土壇の新旧関係は、土層の堆積状態から観察して、本住居跡より138号土壇が新しく、また本住居跡の年代は、出土した土器からみて平安時代で10世紀前半に相当すると考えられる。

#### 76・77号住居跡(第10図 図版16～22)

A地区の南西側のやや傾斜地、5・6-42・43グリッド内に位置し、76・77号住居跡とも重複しており、北側で75号住居跡、東側で79号土壇、西側で78号土壇とそれぞれ隣している。遺存状態は、それぞれの住居跡の中央部が後世の擾乱が、住居跡の上面まで一部たっている他は良好である。確認された層序は、いずれもIV層下部で確認されてV層を掘り込んでいる。床面の状態は、76号住居跡はIV層中を4～7cm掘り込み床面としており、77号住居跡はVI層上面を部分的に掘り込んでいるが、全体的には、V層下部を床面として構築して造られている。壁はいずれの住居跡ともIV層からV層が壁体となっている。

#### (76号住居跡)

平面形は、北辺壁と西辺壁がやや脹らみ隅丸となる不整の長方形を呈している。大きさは、南北方向に長軸3.90m、東西方向に短軸3.58mで、長軸方向がN-65°-Wを計る。確認面からの深さは28～36mである。壁の状態は、全体に凹凸がみられ堅くしまっており、とくに北辺壁から西辺壁にかけては非常に堅く構築しており、緩やかに傾斜をもって立ち上がっている。現存する壁の高さは18～24cmである。壁溝および周溝は確認されなかった。床面の状態は、EP2・3・5より西側では非常に起伏があり、堅く踏みしめられているカマド周辺の焚口部付近も同様に堅く踏みしめられ、その他はほぼ平坦でやや軟弱であり、壁際ではとくに軟らかい。柱穴は6本検出され、EP1～4は主柱穴で住居跡の中央部から



壁寄に位置し、南北方向が長い間隔となっており、径24~34cmで深さ21~35cmである。EP 5は主柱穴を補うように中央部にあり、径31cm、深さ20cmである。EP 6は壁柱穴とみられ1本検出されている。

カマド(EL136)は、住居跡の東辺壁の隅部に位置し、煙道部が壁外に突き出している。検出された状態は、全体として崩れ落ちており遺存の状態が良くない。袖部や焚口部などが明確に確認することは出来なかったが、煙道部の掘り方やカマドの下面が判明する程度である。規模は推定値で、長さ112cm・幅約72~83cmで、焚口部が45~62cmとなり、長軸方向はN-66°Wを計る。状態は東側から西側に崩れ落ちて、燃焼部、袖部の下面には焼土が厚く堆積している。煙道部は、半月状に住居外に張り出しており、状態も崩れている。長さ50cm・幅43cmである。カマド内より出土した土器は、南側の袖部土部からカメ、坏などの一括土器が出土している。

住居跡の覆土の状態は、中央部にレンズ状に炭化粒子や焼土・粘土ブロックが多く混る層がレンズ状に入り込んでいる。出土遺物はカマド周辺部より多く出土する。

#### (77号住居跡)

平面形は、全体と直線的となっているが、南辺壁が短かく台形状を示す不整の長方形を呈している。大きさは、南北方向に長軸4.16m、東西方向に短軸方向が推定3.30mで、長軸方向がN-65°Wを計り、確認面からの深さは18~24cmである。壁の状態は、北辺壁から東辺壁にかけては凹凸があり堅くなっており、南辺壁は軟弱であり、全体としては緩やかに傾斜をもって立ち上がっている。現存する壁の高さは、13~21cmである。壁溝および周溝は検出されなかった。床面状態は、概ね平坦で軟弱であるが、カマド周辺部と住居中央部北側寄りがやや堅く踏みしめられている。柱穴は4本検出され、EP 7~10であり柱穴の配置は不規であるが、EP 7~9が主柱穴とみられ、EP10は壁柱穴ないし支柱穴と考えられる。径25~38cm・深さ31~42cmである。

住居跡の覆土堆積状態は、全体とし東側から西側にかけ流れ込むようにレンズ状に堆積し、中央部には黄褐色土ブロックや粘土が混り、人為的に埋めもどしたような堆積となっている。土器の出土状態は、とくにRP82・83は中央部の覆土中層より、廃棄した状態で一括に出土している。

カマド(EL137)は、住居跡の東辺壁の北側隅部付近に位置し、煙道部が住居外に張り出している。検出された状態は、全体として崩れ落ちて遺存の状態が悪い。袖部・焚口部、燃焼部が明確に確認されなかった。規模は推定値で、長さ131cm・幅約60cmで土層観察によって焚口部と燃焼部の幅が一致するものとみられる。状態は、北西側から南西側に崩れ落

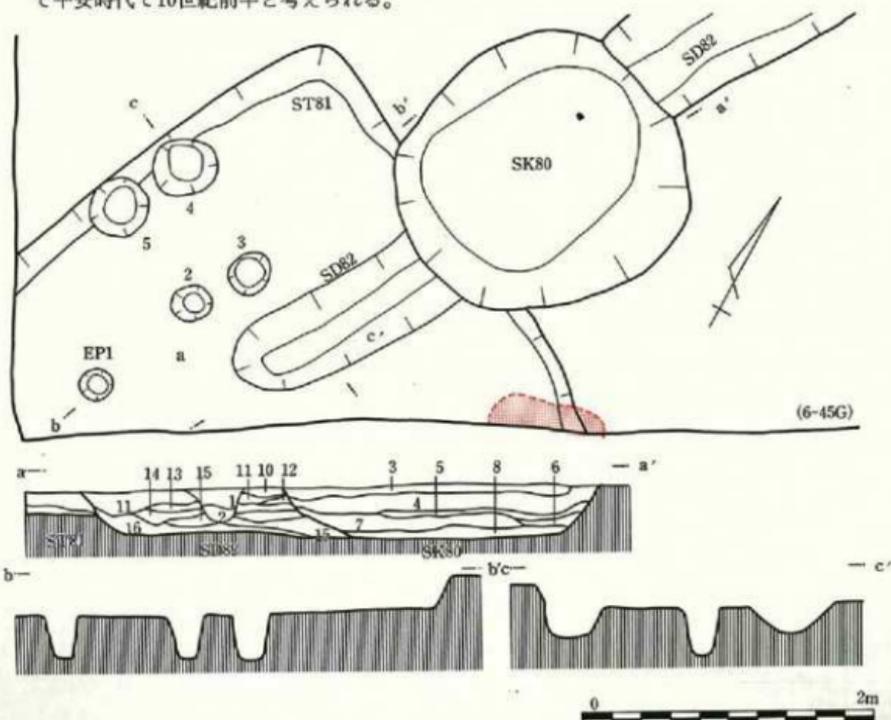
ち、粘土や焼土・炭化物が広く散在している。煙道部も崩れ落ちているが、溝状に壁外に突出しており、長さ70cm・幅34～42cmである。煙土部から焚口部の下面には焼土や灰が2～4cmの厚さで堆積している。

76号住居跡と77号住居跡の新旧関係は、土層観察からみて77号住居跡が旧く、76号住居跡が新しい。時代はいずれの住居跡とも、平安時代に10世紀前半に相当する年代である。

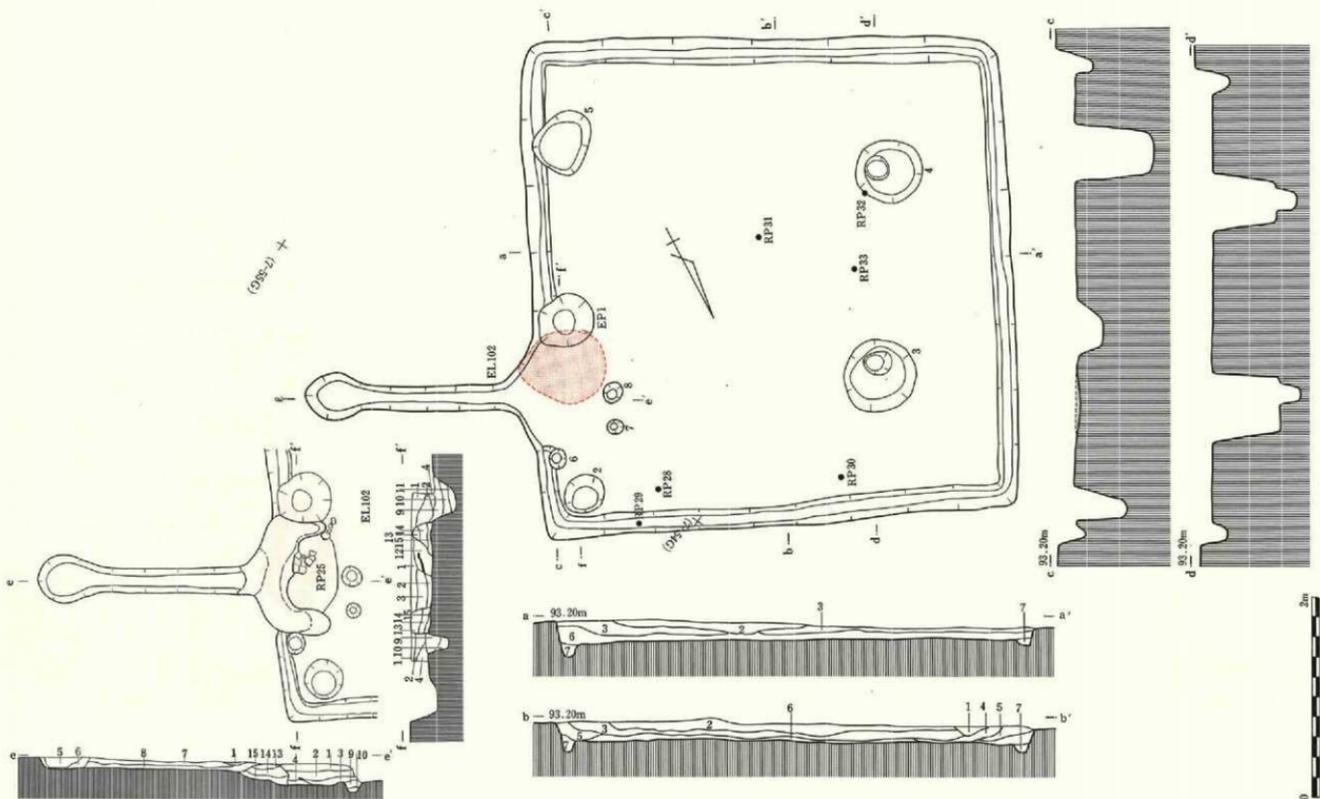
### 81号住居跡 (第11図 図版22)

A地区の南東側のやや傾斜地、5-44グリッド内に位置し、北側で80号土壇と82号溝と重複している。東側と南側は未掘で不明である。確認はIV層下部で、V層中位まで掘り込まれ、床面はV層中となって、全体として軟弱である。平面形は方形を呈するとみられ、壁は緩やかに掘り込まれ、柱穴が6本検出され、東側で焼土が堆積している。

新旧関係は、80号土壇・82号溝跡よりも81号住居は古い。時代は、出土した土器からみて平安時代に10世紀前半と考えられる。



第11図 81号住居跡・80号土壇



(932-2) +

(932-2) x

第12图 85号住居跡

## 85号住居跡（第12図 図版23～27）

C地区の南側の平坦地、6～7-53・54グリッド内に位置し、東側で99号溝跡と隣接している。遺存状態は、全体としてほぼ良好である。確認された層序は、IV層の下部からV層上面にかけ確認される。住居跡の構築状態は、壁体がIV層の一部からV層中にかけ掘り込み、床面はV層を10～15cm掘り下げ床面として造られている。

平面形は、各辺がほぼ直線となり、やや隅丸になる不整の正方形を呈し、各辺が4.50～4.60mである。大きさは、南北にやや長軸方向をとり4.85m、東西方向に短軸をとり4.80mであり、カマドを有する方向でN-60°-Wを計り、確認面からの深さは16～27cmである。壁の状態は、概ねほぼ垂直に掘り込まれ、全体として凹凸がみられ軟弱であり、現存する壁の高さは14～25cmである。壁溝は、カマドの位置する部分を除き住居跡を全周し、床面をU字状に掘り下げており、上幅約15cm・深さ10～16cmである。床面の状態は、カマド焚口部周辺と西辺壁際の中央部からカマドまで幅50～60cm帯状に堅く踏みしめられ、起伏に富んでいる。他はほぼ平坦で壁際に近づくにしたがって軟弱となっている。

柱穴は6本検出され、EP 2・6は北東隅部に位置し、径65cmと21cmで深さ6cmと26cmであり、支柱穴と考えられるが、EP 6カマドに付随する補助柱とも考えられる。EP 1・3～5は主穴で、全体として南側に片寄って配置され、EP 1・5は壁際に寄っている。EP 3・4は、いずれも掘り方を有し、覆土も柱穴のまわりを黄褐色土ブロックを混ぜて踏み固めている。大きさは径55～71cmで深さ72～93cmである。

カマド(EL102)は、東壁辺の中央部から北側寄りに位置し、煙道が住居跡外に長く突出している。遺存状態は、南側の袖部がやや崩れ落ちている他は全体として良好な状態で検出される。規模は、長さ300cm・幅110cm・焚口部幅75cmである。カマド内土層は、両袖には黄褐色土や粘土を互層に構築し、燃焼部では黒色土や粘土を混入している。全体としては焼土や粘土ブロックが広く混っている。燃焼部に使用されカメの一括土器が出土し、恐らく焚口部付近に落ち込んだものも推定される。焚口部から燃焼部にかけての下面では焼土や灰・炭化物が厚く堆積している。煙道部の先端は円形状に掘り込まれ、煙り出し穴と推定される。煙道部は壁外に細長く突き出し、長さ220cm・幅25～45cmである。カマドの掘り方は、焚口部から燃焼部にかけては、楕円形状に落ち窪むように傾をもって立ち上り、煙道部は緩やかに掘り込まれている。

住居跡の覆土は、東側から西側に流れ込むようにレンズ状に堆積している。遺物RP 28～33まで坏やカメが床面より出土している。

本住居跡の時期は、出土した遺物の観察結果に基づいて、8世紀末葉から9世紀初頭の平安時代初頭の時代である。

## 86号住居跡（第13図 図版27～32）

C地区中央部西寄りの平坦地、10・11—52・53グリッド内に位置し、南側で94号建物跡と重複し、西側では98号土坑・東側で90号住居跡と隣接している。確認された層序は、IV層下部からV層上面にかけ確認される。遺存状態は、全体としてほぼ良好である。住居跡の構築状態は、壁体がIV層の一部とV層中にかけて掘り込み、床面はV層を5～10cm掘り下げて床面として造られている。

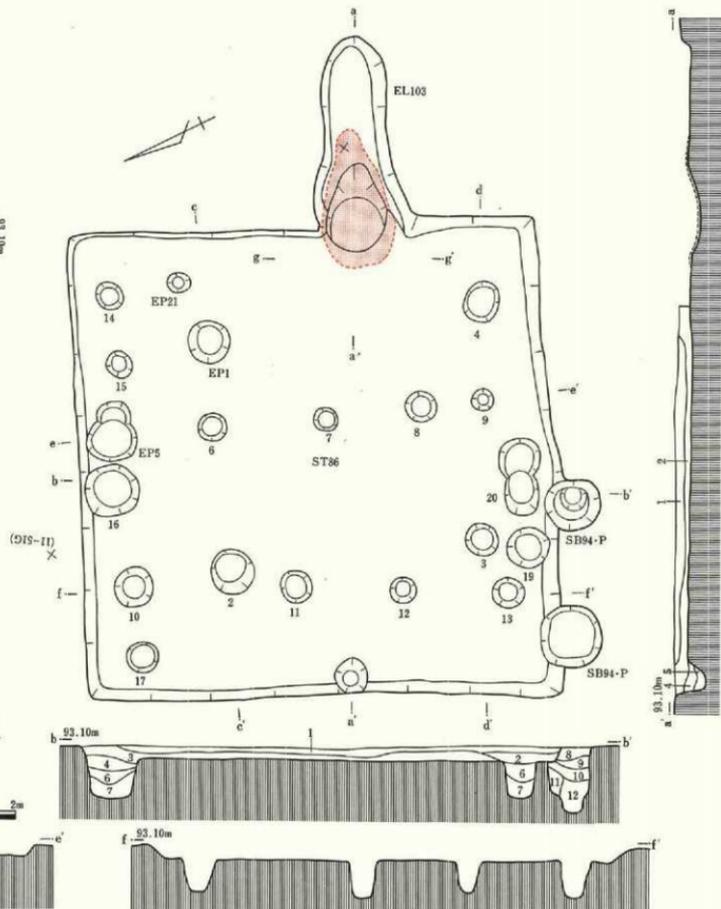
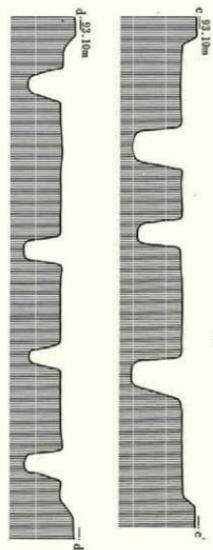
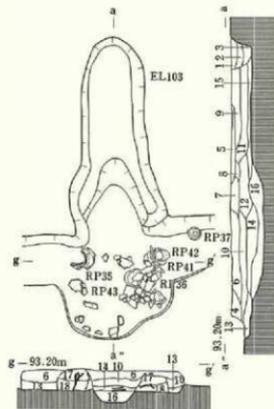
平面形は、南辺壁の中央部がやや脹らむ他は、直線的になりやや隅丸となる不整の正方形を呈している。大きさは、長軸が南北でやや長く4.75m・短軸が東西方向で4.60mであり、東西の短軸方向がN—54°—Wを計り、確認面からの深さは16～21cmである。壁の状態は、全体として軟弱であり、緩やかに傾斜をもって立ち上っているが、西辺壁の中央部辺壁の中央部付近はやや堅く踏みしめられている。現存する壁の高さは12～19cmである。周溝および壁溝は確認されない。序面の状態は、カマド周辺部からEP18にかけて幅35～40cmで帯状に、凹凸があり堅く踏みしめられ、その他は概ね平坦で軟弱である。

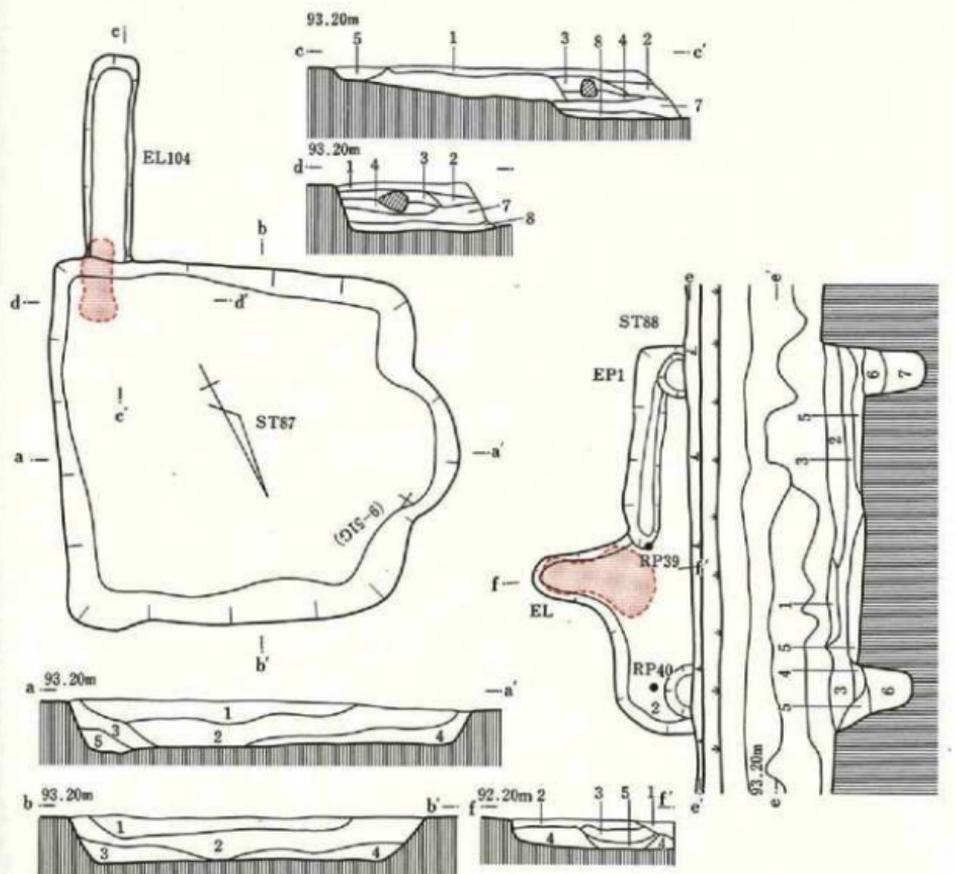
柱穴は20本検出される。支柱穴はEP1～4で径24～43cm・深さ25～28cmと一定の深さを持ち、住居跡の南側へ片寄っている。EP5～17は支柱穴あるいは間切りを考えた補助柱で、大きさ・深さも一定している。EP10・14・15・16・17は北辺壁に沿って等間隔に配置され支柱穴群を形成している。また、間切り用の補助柱として、住居跡の中央部に南北向にEP5・6・7・8・9があり、地方住居跡西辺壁に寄ったEP10・11・12・13が南北方向に配置して在り、これら柱の間隔も一定である。

住居跡の土層跡の土層堆積は、概ね南側から北側にかけ流れ込むようにレンズ状に堆積しており、上部層で粘土、焼土ブロックが多量に含まれている。遺物の出土状況は、カマド周辺の南東隅部より、床面に接するように多く出土している。

カマド(EL103)は、住居跡の東辺壁中央部から南側寄りに位置し、煙道部が住居跡外に長く張り出している。遺存状態は、両袖部の壁際に寄った部分が明確に検出されたのみで、焚口部・燃焼部などは崩れ落ちているため良好な状態とはいえない。袖部は粘土と砂・黒色土を混じて構築して、両袖とも土器のカメを支脚として利用し、いずれも土器は流れ落ちているが、RP41・42は正位の状態で合せて出土している。燃焼部から焚口部は粘土ブロック・焼土・灰などが広く混り崩れている。カマドの掘り方は、焚口部を若干掘り込み、燃焼部から煙道部にかけては円月状に傾斜をもって立ち上がり、煙道部は緩やかに立ち上がっていく。規模は、長さ約300cm・幅150cm・燃焼部と焚口部幅は一致し75～82cmとなる。94号建物跡との新旧関係は、土層観察により本住居跡が古い。

本住居跡の年代は、カマド内出土土器から8世紀末葉から9世紀初頭の平安時代である。





第14図 87・88号住居跡

87号住居跡 (第14図 図版33・34)

∞ C地区の南西側平地、8・9-50・51グリッド内に在り、西側で88号住居跡と隣接している。遺存状態はほぼ良好である。確認面はV層中位で確認される。住居跡の構築状態は、IV層を掘り込んで床面を構築して造られている。

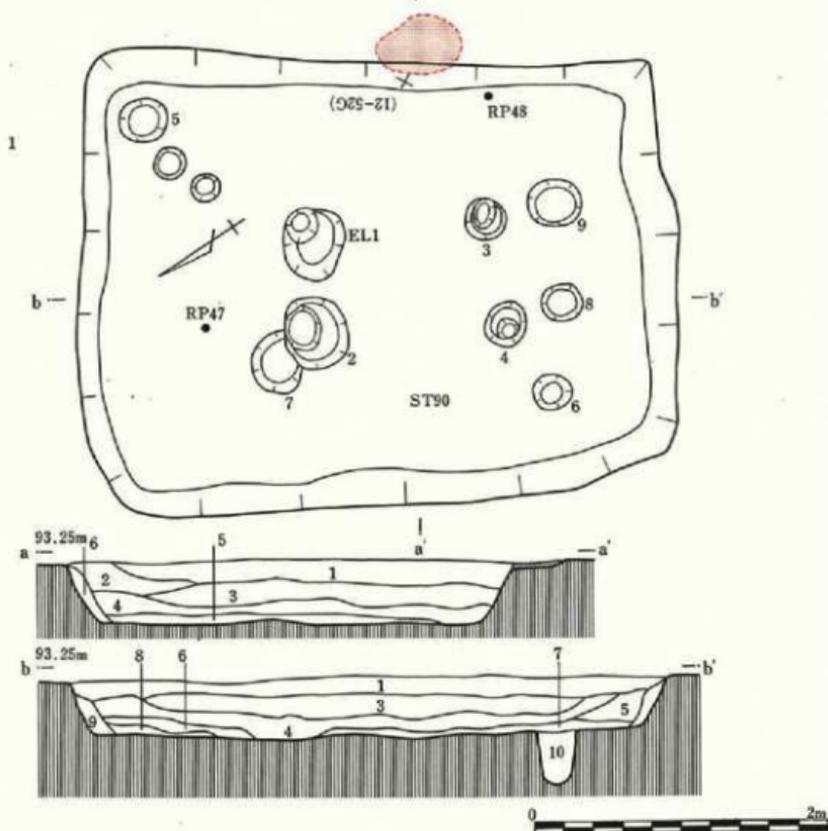
平面形は、西側の中央部が壁外に大きく張り出す不整の正方形を呈している。確認面からの深さは34~38cmである。壁は全体にほぼ垂直に立ち上り、軟弱である。床面は、概ね平坦で軟弱であるが、西側壁寄りが堅く踏みしめられている。柱穴、周溝などは検出されなかった。

カマド (EL104) は、住居跡の南東側の隅に位し、煙道部が壁外に長く突き出している。遺存状態は崩れ落ちているため悪く、全体的な構造は不明である。掘り方は、燃烧部から煙道部にかけて急激に立ち上がり、煙道部では緩やかに掘り込まれている。長さ200cm・幅45~60cmである。焚口部から燃烧部下面で焼土が堆積している。

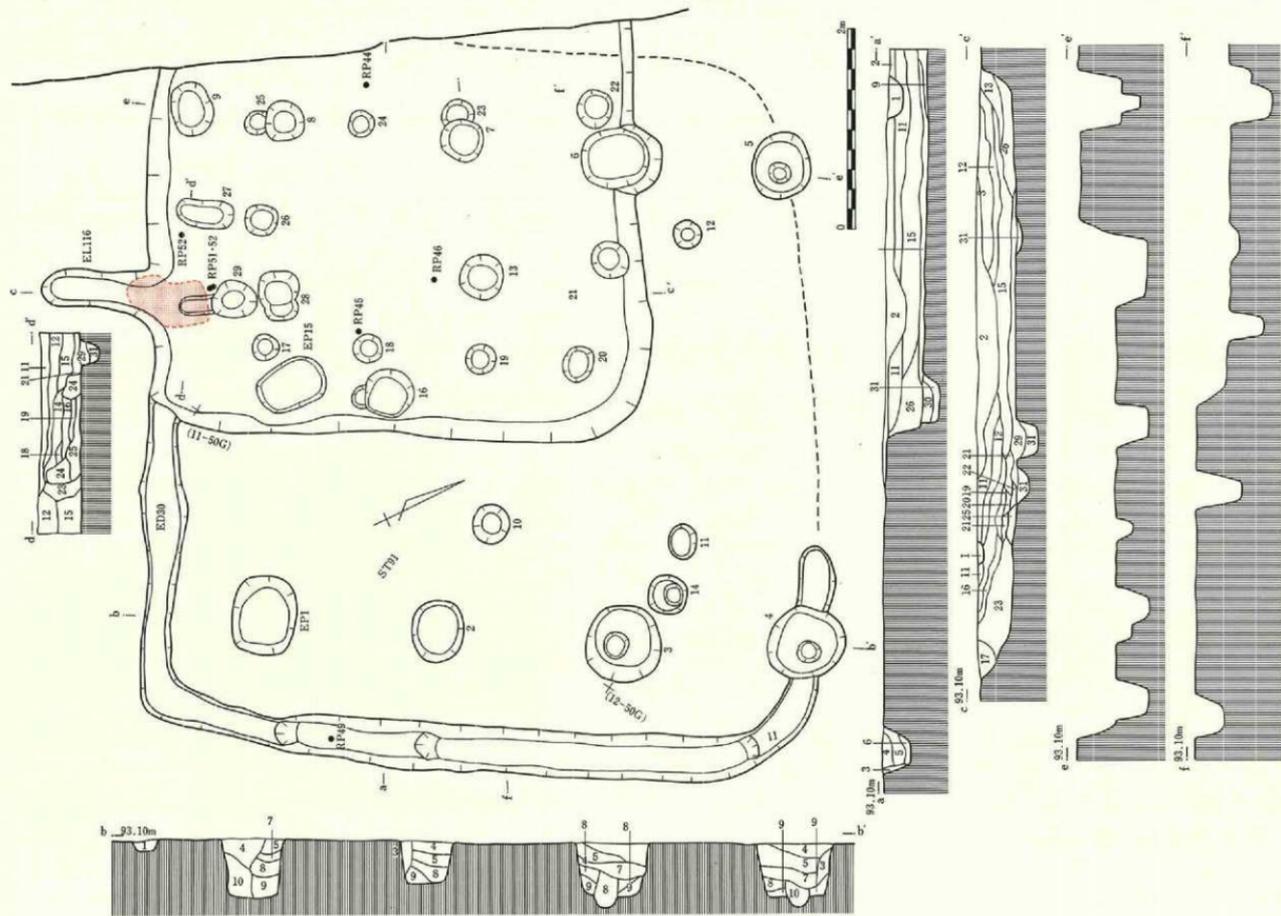
本位居跡の年代は、出土した土器から考えて、平安時代で10世紀前半に比定される。

#### 88号住居跡 (第14図 図版33・34)

C地区の西側平坦地、8・9-50グリッド内に位置し、西側は未調査のため大半は不明である。確認面はV層上面より確認される。住居跡の構築状態は、V層を掘り込んでV層



第15図 90号住居跡



下部を床面としており、全体として平坦で軟弱である。

平面形は、恐らく不整の正方形を呈しているとみられ、確認面からの深さ19~30cmである。大きさは東西方向で2.70mで、主軸のカマド方向でN-58°-Eを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、軟弱である。壁溝は東辺壁の南側で検出されている。柱穴は2本検出される。

カマドは、東辺壁の中央部より北側にあり、煙道部が楕円形状に壁に突き出している。遺存状態は悪く、袖部・燃烧部・焚口部がすべて崩れているため、全体構造は明確に出来ない。

本住居跡の年代は出土しに土器からみて平安時代（10世紀前半）に推定される。

#### 90号住居跡（第15図 図版36・37）

C地区の中央部の平坦地、11・12-52・53グリッド内に位置し、周辺地区には住居跡や土壇などが偏在していない。確認面はV層上部で確認される。遺存状態はほぼ良好である。住居跡の構築状態は、壁体がV層からVI層にかけて掘り込まれ、床面はVI層中を10~15cm程度掘り下げて造られている。

平面形は、北側隅が大きく脹らみ、隅丸の不整形を呈している。大きさは、長軸4.11m・短軸3.07mで、長軸方向がN-34°-Eを計り、確認面からの深さは39~44cmである。壁の状態は、上部で緩やかに傾斜しているが床面付近になると、ほぼ垂直に掘り込まれており、全体として軟弱である。現存する壁高は、確認面からの深さと一致する。周溝および壁溝は検出されていない。床面の状態は、住居跡の中央部で起伏が認められ、堅くしまっている他は、概ね平坦で軟弱である。柱穴は9本検出される。主柱穴はEP1~4で住居跡中央部にまとまって相対的配置にあり、径29~59cm・深さ42cmと一定の深さである。その他の柱は支柱穴であるが、EP8・9は主柱穴のEP3・4の補助柱的な役割を果たしていると考えられる。カマドは検出されないが、東辺壁の中央部に焼土が厚く堆積して、壁自体も加熱を受けている。RP47・48は住居跡の土層より出土している。

本住居跡の年代は、出土した土器を観察した結果に基づいて、平安時代、10世紀前半の時代に相当する。

#### 91・92号住居跡（第16図 図版37~43）

C地区の西側中央部の平坦地、10~12~48~50グリッド内に位置し、両住居跡とも重複しており、周辺地区には95号建物跡や106・107号土壇と隣接している。遺存状態はほぼ良好である。91号住居跡は92号住居跡の土層観察際に確認され、壁は検出されず床面と柱穴ならびに周溝によって確認された。92号住居跡はV層下部で確認され、IV層を5~7cm掘

り下げて床面として造られている。いずれも西側の一部が未調査である。

#### (91号住居跡)

平面形は、周溝の状態や床面の範囲から推定して不整の隅丸正方形を呈する。大きさは推定東西方向に長軸を57.20m、短軸7.00mで、長軸方向N-28°Eを計る。周溝は、検出された状態や土層観察に基づくと、西側中央部から南・東・北東側まで巡らされており、U字状に掘り込まれ、東側ではさらに階段状に掘り下げられ、上幅18~45cm・深さ15~30cmである。床面は概ね平坦で、堅く踏みしめられており、92号住居跡上面は貼り床になっている。柱穴は14本検出され、EP1-9は掘り方をもった柱穴で、EP1-4とEP5-9は住居跡の東側と西側に片寄って並行関係にあり、等間隔で配列されている。炉跡・カマドは確認されなかった。

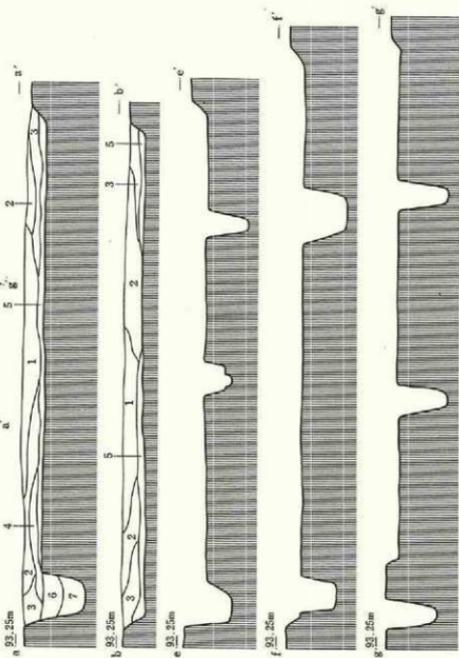
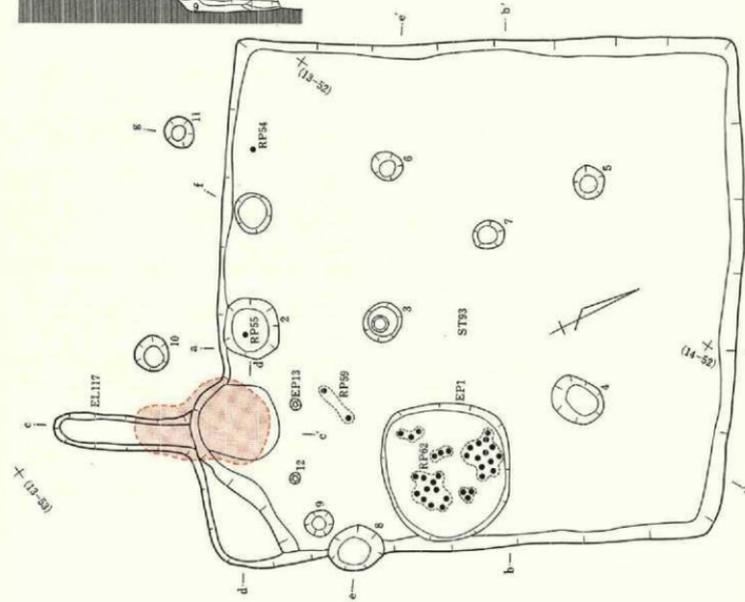
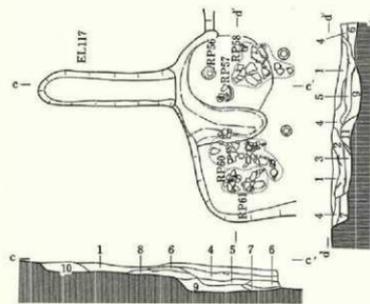
#### (92号住居跡)

平面形は、西側が未調査であるが恐らく不整の隅丸方形を呈すると考えられる。大きさは現存する長さで5.00mで、主軸の方向がN-27°Eを計り、確認面からの深さは42~50cmである。壁の状態は、南辺壁から東辺壁にかけてはほぼ垂直に立ちがり、北辺壁では緩やかな傾斜となっており、北辺壁中央部で堅くしまっている他は軟弱である。現存する壁の高さは38~42cmである。周溝・壁溝は検出されない。床面の状態は、カマド周辺から北辺壁にかけての住居跡中央部が凹凸があり、やや堅く踏みしめられている。他は概ね平坦で軟弱である。

柱穴は15本検出されEP15~29である。大きさは径24~41cmで深さ15~42cmである。柱の構成は、EP17~20・EP20~22・EP22~25・EP17・25・26がそれぞれ各辺の壁と並行あるいは等間隔に配列され、各々において相対関係となっており、恐らく86号住居跡と同様に間切りを行った柱穴と考えられる。

カマド(EL116)は、住居跡の南辺壁の隅部寄りに位置し、煙道部が住居跡外に長く突き出している。両袖部は明確に検出された他は、焚口部・燃焼部などは崩れ落ちている。長さ180cm・幅110cmで燃焼部と焚口部の幅は一致し55~60cmと推定される。袖部は粘土と暗色土を混入して叩きしめており、燃焼部と焚口部は崩れ落ち焼土や粘土ブロックが多量に混っている。煙道部では先端の煙り出しの穴が明瞭に判断できる他は、砂や焼土、粘土ブロックが広く混っている。燃焼部と焚口部の掘り方は明瞭ではなく焚口部から煙道部にかけては、傾斜をもって緩やかに立ち上がっている。右袖部より支脚に使用したRP51・52が出土している。

91・92号住居跡の新旧関係は、土層観察により91号住居跡が新しく、いずれの住居跡の年代は平安時代で10世紀前半の所産である。



第17图 93号住居跡

### 93号住居跡 (第17図 図版44~47)

C地区の中央部の東側寄り平坦地、14・15-51・52グリッド内に位置し、東側で96号建物跡と、北側で108号井戸跡と隣接して在る。遺存状態は、北側の住居跡上面が後世の擾乱を受けている他は、ほぼ良好な状態である。確認された層序は、住居跡の南側から東側にかけてIV層下面より、また西側から北側にかけてはV層上面で確認されている。住居跡の構築状態は、IV層下面よりV層中位まで掘り込まれ壁を構築し、床面はV層中が大半であるが部分的にVI層上面を床面としている。

平面形は、各辺の中央部がやや脹らみをもつ不整の隅丸正方形を呈している。大きさは南北が長軸方向をとり5.28mで、東西方向が短軸で5.08mであり、長軸方向がN-26°-Eを計り、確認面からの深さは18~26cmである。壁の状態は、概ね緩やかに傾斜をもって立ち上り、カマド周辺部と南辺壁の中央部がやや堅くしまっている他は、凹凸もみられず軟弱である。現存する壁の高さは13~22cmである。

床面の状態は、住居跡の中央部EP3~6に囲まれた地区とカマド周辺部がやや凹凸があり堅く踏みしめられており、他は壁に近づくにつれて平坦であり軟弱である。周溝や壁溝は検出されなかった。南東隅部はやや高くベッド状な床面となっている。

柱穴は12本検出される。主柱穴は住居跡の中央部にまとまってあり、径21~41cm・深さ30~41cmである。EP12・13はカマドに付随する施設の柱穴とみられる。その他南辺壁に柱穴が集中し、住居跡外にEP10が検出されている。

EP1は、住居跡の東辺壁の中央から南側にかけて、壁に接するように在る。平面形は不整の円形を呈し、径120cm・深さ24~28cmである。覆土は炭化粒子や炭化物に混って焼土粒子も広く含まれている。上層部から底面にかけて、RP62(カメ)が押しつぶされた状態で出土している。恐らく本住居跡に付属する貯蔵穴と考えられる。

カマド(EL117)は、住居跡の南辺壁の東側寄り隅部に位置し、煙道部が住居跡外に長く突き出している。遺存の状態は、右の袖部が明瞭に検出され他は、左の袖部・焚口部・燃焼部さらに煙道部も上部は崩れ落ちて状態は良くない。カマドの規模は、長さ240cm・幅110cm・焚口部の幅70cmで、燃焼部の幅は推定50~55cmである。右袖部は粘土・黒色土が混り堅く造られている。焚口部から燃焼部にかけては全体とし粘土ブロックや焼土が広く混っているが、中層では焼土と炭化物が密集して堆積している。掘り方は、焚口部から燃焼部は楕円状に緩やかに掘り込まれ、煙道部ではやや傾斜をもって緩やかに立ち上がる。カマド周辺部には土器の坏やカメが廃棄された状態で出土している。

本住居跡の年代は、住居跡内から出土した土器からみて、平安時代で10世紀前半に比定される。

## 2) 建物跡

### 36号建物跡 (第18図)

B地区の東側のやや緩やかな傾斜地、10・11-41・42グリッド内に位置し、北側で37号住居跡と隣接している。南側は未調査である。確認された層序は、V層下部で確認されIV層を掘り込んで柱穴が構築している。

建物跡の方向は、東西棟になり、梁行は恐らく2間で、桁行4間となる。東西主軸方向がN-60°-Eを計る。柱間の距離は北面のEB1・2間が140cm、EB2・3間が135cm、EP3・4間が160cm、EB4・5間が140cmで、東面のEB5・6間が140cmをはかる。建物の規模は、東西が5.20m、南北は恐らく1.40mとなる。掘り方は径50~65cmで隅丸ないし円形を呈し、アタリは確認されなかった。

### 43号建物跡 (第19図)

B地区の中央部から東側寄り平坦地、38・39-11・12グリッド内に位置し、南側で21号溝跡と接している。西側の一部は未調査である。確認された層序は、V層下部で確認されIV層を掘り込んで柱穴が構築している。

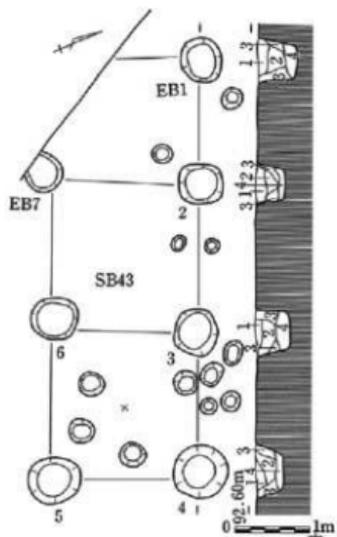
建物跡の方向は、ほぼ東西棟になり、梁行1間で、桁行3間となる。東西の主軸方向はN-65°-Wを計る。柱間の距離は北面のEB1・2間で175cm、EP2・3間で200cm、EB3・4間が200cmであり、東面のEB4・5間が200cmである。建物の規模は東西方向が5.80m、南北方向は2.00mをはかる。柱穴の掘り方は、径50~60cmで深さ40~50cmであり、不整形円形やや隅丸を呈している。アタリは確認されなかった。

柱穴内からは遺物が出土しなかったが、恐らく平安時代で10世紀前半と考えられる。

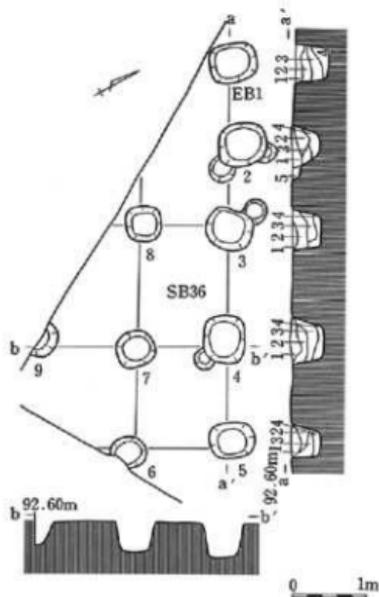
### 67号建物跡 (第20図 図版48)

A地区の中央部東寄りの平坦地、5・6-38・39グリッド内に位置し、北側には63・64号土垣があり隣接している。南西側は未調査である。確認された層序は、V層下部で確認されIV層を掘り込んで柱穴が構築している。

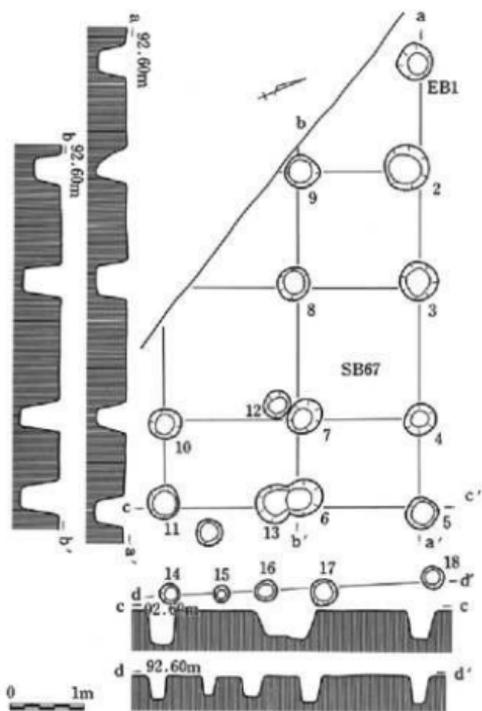
建物跡の方向は、ほぼ東西棟となり、梁行2間で、桁行4間となっている。東西の主軸方向がN-68°-Wを計り、東面に柱間が不規則な縁束が付している。柱間の距離は北面でEB1・2間が150cm、EB2・3間が160cm、EB3・4間が175cm、EB4・5間が120cmであり、東面ではEB5・6間が170cm、EB6・11間が180cmである。縁束の柱間が50~110cmの間隔で不規則である。建物跡の規模は、東西方向が7.00mで、南北方向が3.50mをはかる。柱穴の掘り方は、径50~60cmで深さ40~65cmであり、不整形円形を呈している。アタリは確



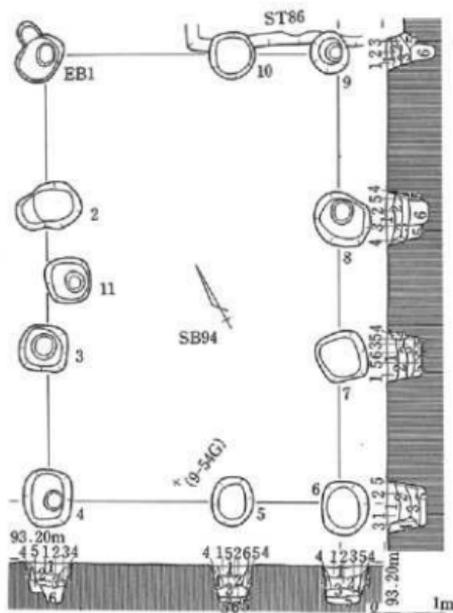
第19图 43号建物跡



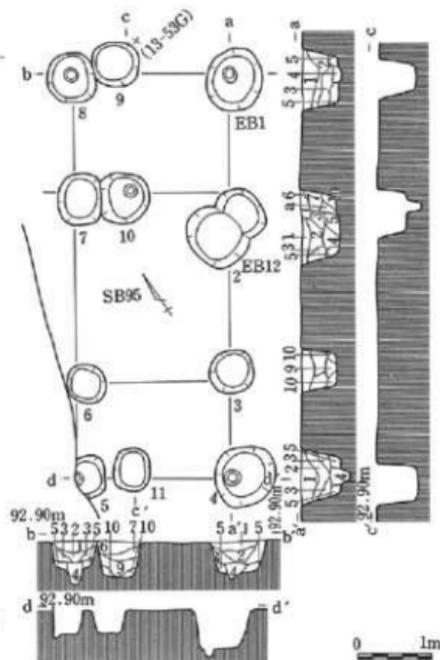
第18图 36号建物跡



第20图 67号建物跡



第21図 94号建物跡



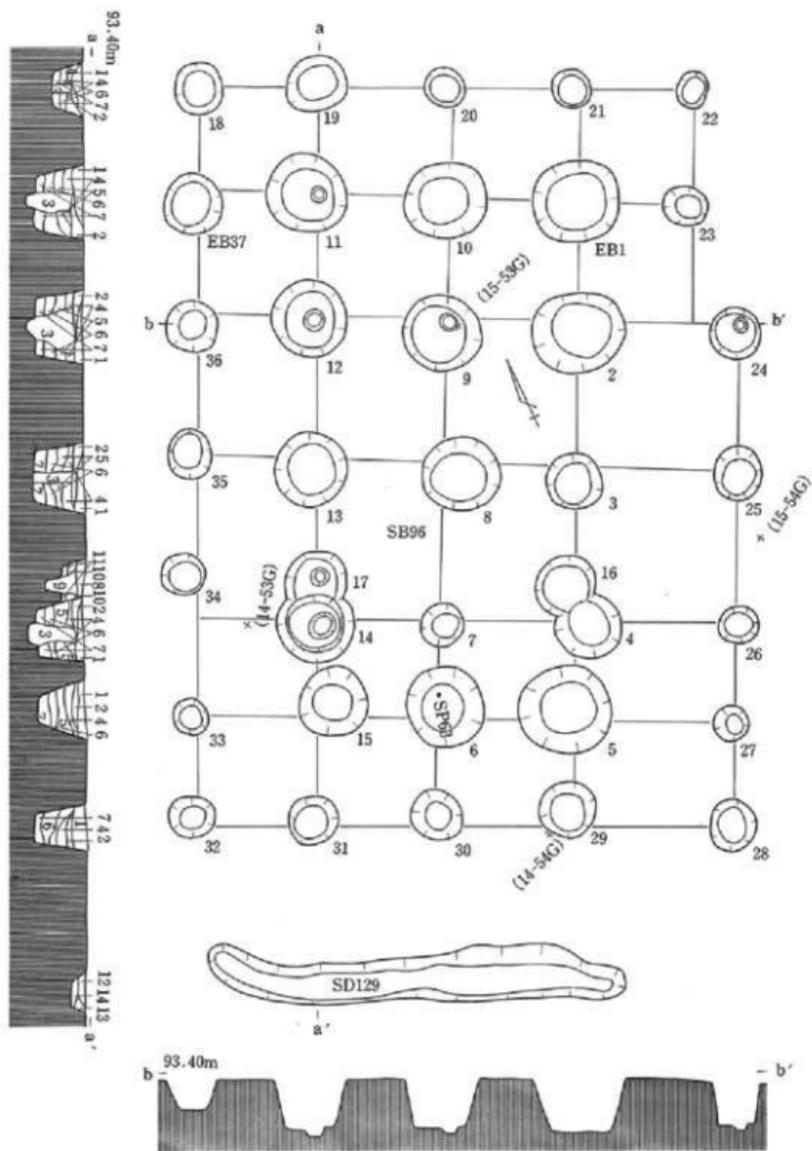
第22図 95号建物跡

認められなかった。柱穴の掘り方内からは遺物が出土しなかったが、恐らく平安時代に10世紀後半に比定されると考えられる。

#### 94号建物跡 (第21図 図版48・49)

C地区の南側の平坦地、8・9-53・54グリッド内に位置し、北側で86号住居跡と重複し、土層堆積状態の観察結果から、94号建物跡が新しい。確認された層序は、IV層下部でIV層を掘り込みで柱穴の掘り方が構築されている。

建物跡は、ほぼ南北棟に長く、梁行2間で桁行3間となる掘立柱建物跡であり、南北主軸方向はN-27°-Eを計る。柱間の距離は南面でEB4・5間が220cm、EB5・6間が160cmとなり、東面ではEB6・7間が200cm、EB7・8間が200cm、EB8・9間が210cmである。建物跡の規模は南北が6.00m、東西が4.00mをはかり、東面と西面が等間隔とはならず、梁行が東側へやや片寄っている。柱穴の掘り方は、径70~80cmで深さ50~70cmで、平面形が隅丸を呈している。EB1・3・4・9・8の各掘り方でアタリが確認され、推定すると径30cm前後の丸柱であったとみられる。掘り方内の出土器からみて、年代は平安時代



第23图 96号建物跡

の10世紀前半に比定される。

#### 95号建物跡 (第22図 図版49)

C地区の北西側の平坦地、11～13—47・48グリッド内に位置し、南側で91・92号住居跡と隣接している。確認面は、V層上部で確認されIV層中を掘り込んで柱穴の掘り方が構築されている。

建物跡はほぼ南北棟に長く、梁行1間で桁行3間となる掘立柱建物であり、南北主軸方向N—35°—Eを計り、西面で柱の建替が確認されている。柱間の距離は南面でEB4・5間が200cm、建替前のEB4・11間が150cmであり、東面ではEB1・2間が200cm、EB2・3間が200cm、EB3・4間が150cmである。柱穴の掘り方は、径60～80cm・深さ55～75cmであり、平面形が不整形あるいは隅丸を示している。EB1・4・5・10・8でアタリが確認され、推定すると径20cm前後の丸柱であったと考えられる。

本建物跡の年代は、掘り方内から遺物は出土しないが、恐らく平安時代の10世紀前半の所産とみられる。

#### 96号建物跡 (第23図 図版52～56)

C地区の北東側の平坦地、13～15—51～54グリッドに位置し、西側で93住居跡と接しており、東側で128号土塚と重複し土層観察により96号建物跡が新しい。確認面はIV層中位より確認され、VI層を掘り込んで構築して造られている。

建物跡はほぼ南北棟に長軸をもち、梁行2間で桁行4間で各面に縁束が付属する掘立柱建物跡であり、南北主軸方向がN—27°—Eを計る。柱間の距離は東面ではEB1・2間が170cm、EB2・3間が200cm、EB3・4間が200cm、EB4・5間が150cmであり、北面ではEB1・10間が175cm、EB10・11間が180cmである。縁束は各面とも柱間の距離が180～200cmであり、EB23とEB24では若干桁行が異なっている。規模は南北が10mで、東西7.60mである。SD29は雨ち溝と考えられ、U字状に窪んでいる。EB9・11・14・17でアタリが確認され、径40～50cmの丸柱があったとみられる。柱穴の掘り方は、径50～135cmで深さが50～80cmである。平面形は不整形を示している。建物跡の年代は、EB6から出土したRP63からみて、平安時代の10世紀前半に比定される。

### 3) 井戸跡

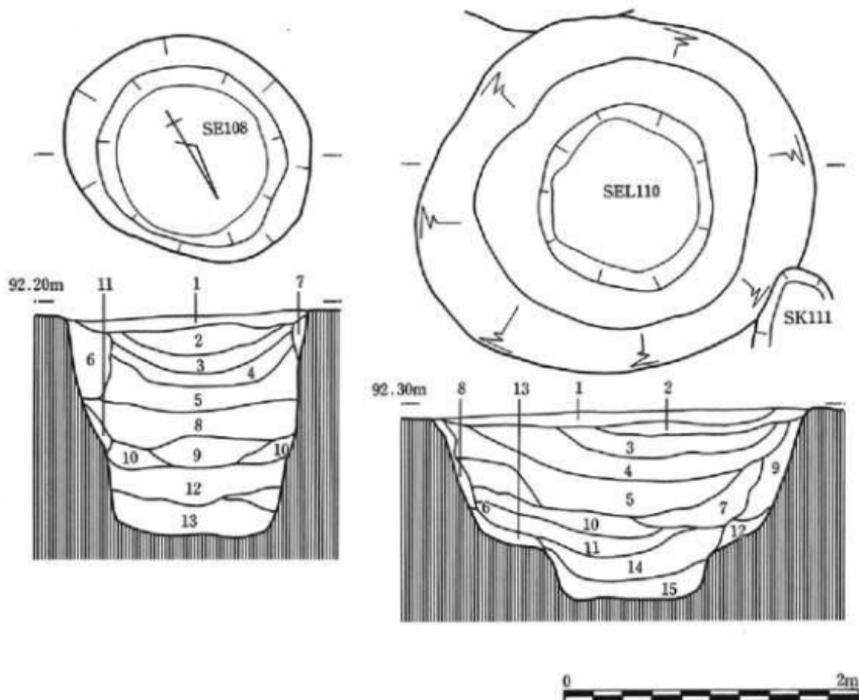
#### 108号井戸跡 (第24図 図版53)

C地区の中央部北側寄りの平坦地、13—50・51グリッド内に位置し、東側で93号住居跡と隣接している。遺存状態はほぼ良好である。確認面はIV層下部で確認され、VI層中を深

く掘り込んで造られている。平面形は、不整の楕円形を呈し、長径1.70m・短径1.45mで深さ1.50m・底面径1.30mである。壁は中位でオーバーハングし、底面付近ではほぼ垂直に掘り込まれている。底面は中央部で起伏がみられる他は平坦である。時代は平安時代で10世紀前半である。

112号井戸跡 (第24図 図版54)

C地区の北側の平坦地、12・13-48・49グリッド内に位置し、111号土坑・113号土坑とそれぞれ重複し、111号土坑より旧く、113号土坑より新しい。確認面はV層上面で確認され、VI層中を深く掘り込んで造られている。



第24図 108・110号井戸跡

平面形は、やや東西方向に長い不整の楕円形を呈している。大きさは上面の長径2.76m・短径2.50mで深さ1.30m、底面での長径1.18m・短径1.24mをはかる。壁の状態は、上面から中位面まではやや傾斜をもって緩やかに掘り込まれ、下底面付近で平坦となりさらにほぼ垂直に掘り込まれている。壁体は凹凸がみられ軟弱である。底面は、西側で起伏がみられる他は、概ね平坦である。

本井戸跡の時代は、出土した土器からみて、平安時代の10世紀前半に比定される。

#### 4) 土 壇

2号土壇(第25図 図版55) 12-28グリッドに在り、確認面はV層下部である。

平面形は不整形を示し、径105×110cmで深さ30cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は中央が若干起伏がある他は平坦である。遺物は検出されない。

3号土壇(第25図 図版55) 11-28グリッドに在り、確認面はV層下部である。

平面形は長楕円形を呈する。径148×55cmで深さ17cmを測る。壁は傾斜をもって緩やかに立ち上がり、底面は西側で起伏ある他は平坦である。下層に焼土粒が混っている。

4号土壇(第25図 図版55) 10-28グリッドに在り、確認面はV層下部である。

平面形は不整形を示す。径139×94cmで深さ20cmを測る。壁は西側で急激に立ち上がる他は緩やかである。底面は概ね平坦である。下層に焼土粒が多量に混っている。

5号土壇(第25図 図版55) 11-28・29グリッドに在り、V層下部で確認される。

平面形は不整の長楕円形を呈し、径200×80cmで深さ37cmを測る。壁は緩やかに傾斜をもって立ち上がり、底面は西側でさらに掘り込まれ、焼成を受け焼土が堆積している。

6号土壇(第25図 図版56) 11-30グリッドに在り、VI層上面で確認される。

平面形は不整形を呈し、径166×143cmで深さ42cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面の概ね平坦である。遺物は検出されなかった。

7号土壇(第25図) 13-30グリッドに位置し、確認面はVI層上面で確認される。

平面形は不整の隅丸方形を呈する。径135×90cmで深さは21cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は概ね平坦である。下層に焼土や灰が混っている。

13号土壇(第25図 図版56) 12-35グリッドに位置し、IV層中で確認される。

平面形は不整の隅丸長形を呈し、径305×117cmで深さ30cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は西側で傾斜がみられる他は平坦である。中層には炭化物層が下層には焼層が広く混っている。

14号土壇(第25図 図版56) 12-36グリッドに在り、V層下部で確認される。

平面形は長楕円形を示し、径340×111cmで深さ31cmを測る。壁は全体としてほぼ垂直に

立ち上がり、底面も概ね平坦である。底面付近には炭化・焼土層が広く混っている。

16号土坑(第25図) 13-39グリッド内に在り、確認面はIV層下部である。

平面形は不整形円形を示す。径155×130cmで深さ14cmを測る。壁は概ね緩やかに傾斜をもって立ち上がり、底面ではほぼ全体が平坦である。下層には焼土・灰が混っている。

9号土坑(第26図 図版56) 10-13-31・32グリッドに在り、IV層下部で確認される。

平面形は東側で張り出しをもち大きく脹らむ長楕円形を呈している。壁は東側の先端で緩やかに立ち上がり、他は急激な立ち上がりである。底面は中央部がやや窪んでいる他は、凹凸もなく平坦である。長径780cm×短径140-115cmで深さ15-36cmを測る。全体に焼土・炭化層に混って灰も密集し広くみられ、とくに東側の脹らみ部は全体に密集し厚く堆積している。10号土坑・50号溝跡よりも新しい。

10号土坑(第26図 図版56) 12-31・32グリッドに在り、9号土坑検出の際確認する。

平面形は円形を呈し、径72cmで深さ36cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面では概ね平坦である。遺物は検出されなかった。

15号土坑(第26図 図版56) 14・15-37・38グリッドに在り、IV層下部で確認される。

平面形は不整形円形を呈し、径193×188cmで深さ43cmを測る。壁は全体としてほぼ垂直に立ち上がり、底面は概ね平坦である。遺物は検出されなかった。

38号土坑(第26図) 11・12-29・30グリッドに在り、確認面はV層下部である。

平面形は不整形の円形を呈し、径185×157cmで深さ43cmを測る。壁は上部でオーバーハングし中位から下部では垂直に立ち上がる。底面は北側でやや窪み凹凸がみられる他はほぼ平坦である。中層では焼土粒や炭化物が広く混り、下層では焼土が厚く堆積し、底面全体が焼けている。

29-32号土坑(第27図) 10-12-40・41グリッドに位置し、V層中でいずれも確認。

29号土坑は、平面形が不整形丸方形を呈し、径270×195cmで深さ25cmを測る。壁は上部で急激に中位から下部で緩やかに立ち上がる。底面は概ね平坦である。土層全体に焼土・灰・炭化物が充満し、南側壁付近の底面が焼成を受けている。

30号土坑は、平面形が不整形円形であり、いわゆる風倒木根跡である。径405×350cmで深さ55cmである。多量の遺物が出土する。

31号土坑は、平面形が恐らく楕円形となり、長径250cm・短径183cmで深さ12cmを測る。壁は緩やかに傾斜をもって立ち上がり、底は平坦である。遺物は出土せず。

32号土坑は、平面形が楕円形を示し、径243cm×(推定)120cmで深さ10cmを測る。

新旧関係は、29号土坑と31号土坑では29号土坑が新しく、30・31・32号土坑では31・32号土坑より30号土坑が新しい。

22～25号土坑（第28図） 13・14-40・41グリッド在り、V層中でいずれも確認される。

22号土坑は、平面形が不整の楕円形を呈し、径357×（推定）290cmで深さ12cmを測る。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は概ね平坦である。土層全体に焼土や炭化物が多量に含まれ広く認められる。底面全体が焼成を受けている。

23号土坑は、平面形が東側で大きく脹らむ不整形を呈している。径410×255cmで深さ18cmを測る。壁は、上部で急激になり下部でほぼ垂直に立ち上がる。底面は概ね平坦である。下層で焼土ブロックや粒子が多量に混り、壁際に寄っている。

24号土坑は、平面形が恐らく不整の隅丸方形を呈し、長径・短径とも不明である。深さ14cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面も平坦である。遺物は検出されなかった。

25号土坑は、平面形が懸らく楕円形になるもので、現存する径は233cmで深さ9cmを測る。壁は緩やかに傾斜をもって立ち上がり、底面は平坦である。炭化材が充満している。

新旧関係は、12号溝跡・22～24号土坑では12号溝が一番新しく、24号土坑より23号土坑が新しい。23・25号土坑では25号土坑が古い。

17号土坑（第29図 図版56） 12-37・38グリッドに在り、IV層下部で確認される。

平面形は不楕円形を呈し、径130×120cmで深さ42cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は中央部がやや盛り上がり壁際に傾斜している。土層全体が焼土粒・炭化材・灰が互相になって堆積し、土坑中央部の底面が良く焼けている。

28号土坑（第29図） 12-41グリッドに在り、V層中で確認される。

平面形は、楕円形を呈し断面が皿状となっている。径137×113cmで深さ12cmを測る。壁は傾斜をもって緩やかに立ち上がっている。底面は概ね平坦である。焼土粒と炭化粒が充満している。

33号土坑（第29図） 14-42グリッド内に位置し、V層上面で確認される。

平面形は、不整の円形を呈し、径162×140cmで深さ27cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は概ね平坦である。遺物は検出されなかった。

34号土坑（第29図） 12・13-42グリッドに在り、IV層下部で確認される。

平面形は、不整形を呈する。径150cm×（推定）125cmで深さ41cmを測る。壁は上部で若干オーバーハングし中位から下部では垂直に立ち上がる。底面は概ね平坦である。

35号土坑（第29図） 14-29グリッドに在り、VI層下部で確認される。

平面形は、不整形を呈し、径118×98cmで深さ17cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面ではほぼ平坦である。下層に焼土が広く混じる。

37号土坑（第29図） 14-30グリッドに在り、V層上面で確認される。

平面形は、不整形を呈している。径165×141cmで深さ44cmを測る。壁はほぼ垂直に立

ち上がる。底面は中央部で凹凸が若干みられる他は平坦である。焼土や炭化粒に混じって粘土ブロックが含まれ、互相に堆積している。

54・55号土坑(第29図 図版58) 6・7-31・32グリッドに在り、V層中で確認する。

54号土坑は、平面形が西側で半円状に張り出す不整の長楕円形を呈している。壁は西側で緩やかに傾斜をもって立ち上がり、他はほぼ垂直に立ち上がる。底面は中央部で起伏があり堅く踏みしめられ、他は平坦で軟弱である。中央部から西側と東側で底面が良く焼けている。下層では焼土が堆積している。径260×83cmで深さ37cmを測る。

55号土坑は、平面形が東側でやや脹らむ不整の長楕円形を呈している。径247×78cmで深さ39cmを測る。壁は全体とし、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は中央部がやや窪み東側で凹凸がみられ、西側では平坦である。下部層で若干の焼土粒や炭化粒が混じる。

新旧関係は、土層観察により54号土坑が新しく、55号土坑が古い。

56号土坑(第29図 図版58) 7・8-31グリッドに在り、V層中で確認される。

平面形は、円形を呈し、径100cmで深さ30cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は概ね平坦である。遺物は検出されなかった。

57号土坑(第29図 図版59) 8-32・33グリッドに在り、V層中で確認される。

平面形は、不整の円形を呈する。径142×126cmで深さ27cmを測る。壁は全体としてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、西側壁寄で窪んでいる他は平坦である。遺物は検出されなかった。

53号土坑(第30図 図版57) 5・6-8・9グリッドに在り、V層中で確認される。

平面形は不整の隅丸方形を呈する。径250×200cmで深さ34cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は概ね平坦である。上層では風化粒に混って粘土ブロックが含まれる。

58号土坑(第30図 図版59) 8-33グリッドに位置し、V層中で確認される。

平面形は、円形を呈する。径100cmで深さ46cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は全体として平坦である。遺物は検出されなかった。

59号土坑(第30図 図版59) 8-33グリッドに在り、V層中で確認される。

平面形は、不整の隅丸方形を呈する。径137×82cmで深さ16cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は全体として平坦である。炭化材・焼土が全体に充滿している。

62号土坑(第30図 図版60) 5-34グリッド内に在り、V層中で確認される。

平面形は、不整円形を呈し、径140×135cmで深さ26cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は概ね平坦である。遺物は検出されなかった。

63号土坑(第30図 図版61) 6・7-37・38グリッドに在り、V層中で確認される。

平面形は、西側で壁外に長く突き出している不整円形を呈している。径345×243cmで深

さ30～40cmを測る。壁は全体としてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、全体として起伏があり堅く踏みしめられ、中央部の東寄りから突出部にかけては良く焼けている。土層は、上層で粘土ブロックが密集して広くみられ、中層から下層にかけては焼土層や炭化層が互相互にレンズ状に堆積している。遺物は中層に多く出土している。

土壇周辺部には、径25～52cm・深さ30～45cmの柱穴が検出され、覆土にも土壇上層の土が同様に堆積している。恐らく土壇に付属する施設があったと考えられる。

61号土壇（第31図 図版60） 7・8—33・34グリッドに在り、V層中で確認される。

平面形は、円形を呈する。径108cmで深さ34cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は全体として平坦である。遺物は検出されなかった。

64号土壇（第31図 図版62） 7—38グリッドに在り、V層中で確認される。

平面形は、不整の隅丸長方形を呈する。径190×82cmで深さ20cmを測る。壁は全体として緩やかに傾斜をもって立ち上がる。底面は中央部がやや凹凸がみられる他は平坦である。下層に焼土・炭化材が堆積している。

65号土壇（第31図 図版60） 7—39グリッドに在り、V層下部で確認される。

平面形は円形を呈し、断面形が皿状を呈する。径210cmで深さ12cmを測る。遺物は検出されなかった。11号溝と重複し、65号土壇が古い。

66号土壇（第31図 図版60） 6—38・39グリッドに在り、V層中で確認される。

平面形は、隅丸長方形を呈する。径185×120cmで深さ18cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。中層で焼土ブロックや炭化粒を含んで広く認められる。

68号土壇（第31図 図版63） 5—40グリッドに在り、V層下部で確認される。

平面形は、不整の隅丸長方形を呈する。径238×97cmで深さは17cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央部で若干の凹凸がみられる他は平坦である。下層に焼土が厚く堆積している。

69号土壇（第31図 図版63） 5—40グリッドに在り、V層下部で確認される。

平面形は、円形を呈する。径140cmで深さ30cmを測る。壁は、全体にほぼ垂直に立ち上がる。底面は、中央部から壁際にかけて傾斜している。遺物は検出されなかった。

70号土壇（第31図 図版63） 5—40グリッドに在り、V層下部で確認される。

平面形は、不整の円形を呈している。径243×232cmで深さ51cmを測る。壁は、上部でややオーバーハングし、中位から下部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、概ね平坦である。土層は全体に黄褐色・灰褐色の粘土ブロックが広く混じる。

72号土壇（第7図 図版9） 8—41グリッドに在り、V層上面で確認される。

平面形は、不整の隅丸長方形を呈する。径155×110cmで深さ34cmを測る。壁は、緩やか

に傾斜をもって立ち上がる。底面は、概ね平坦であり、土壇中央部で良く焼けている。土層全体に、黄褐色土ブロックや焼土ブロック・砂粒が多く含まれ広く認められる。

78号土壇(第32図 図版63) 5-42グリッドに在り、V層中で確認される。

平面形は、不整の楕円形を呈し、断面形が皿状を呈する。径125×82cmで深さ12cmを測る。遺物は検出されなかった。

79号土壇(第32図 図版63) 6-43グリッドに在り、V層中で確認される。

平面形は、不整の隅丸長方形を呈している。径146×90cmで深さ18cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。

80号土壇(第11図 図版22) 6-44グリッドにあり、V層中で確認される。

平面形は、不整円形を呈している。径192×184cmで深さ37cmを測る。壁は、緩やかに傾斜をもって立ち上がっている。底面は、概ね平坦である。土層全体に、焼土・炭化粒子を多量に含み広く認められる。

83号土壇(第32図) 7-44グリッド内に在り、V層下部で確認された。

平面形は、不整円形を呈する。径128×120cmで深さ32cmを測る。壁は、北側で垂直に西側で緩やかに立ち上がる。底面は、概ね平坦である。遺物は検出されなかった。

138号土壇(第9図 図版4) 7-42・43グリッドに在り、VI層下部で確認される。

平面形は、不整隅丸長方形を呈する。径134×55cmで深さ27cmを測る。壁は、全体としてほぼ垂直に立ち上がっている。底面は、中央部でやや起伏がある他は平坦である。

139号土壇(第32図 図版68) 6-30グリッドに在り、V層中で確認される。

平面形は、不整円形を呈している。径183×154cmで深さ13cmを測る。壁は、傾斜をもって緩やかに立ち上がる。底面は、全体として平坦である。遺物は検出されなかった。

97号土壇(第32図 図版64) 9・10-51グリッドに在り、VI層下部で確認された。

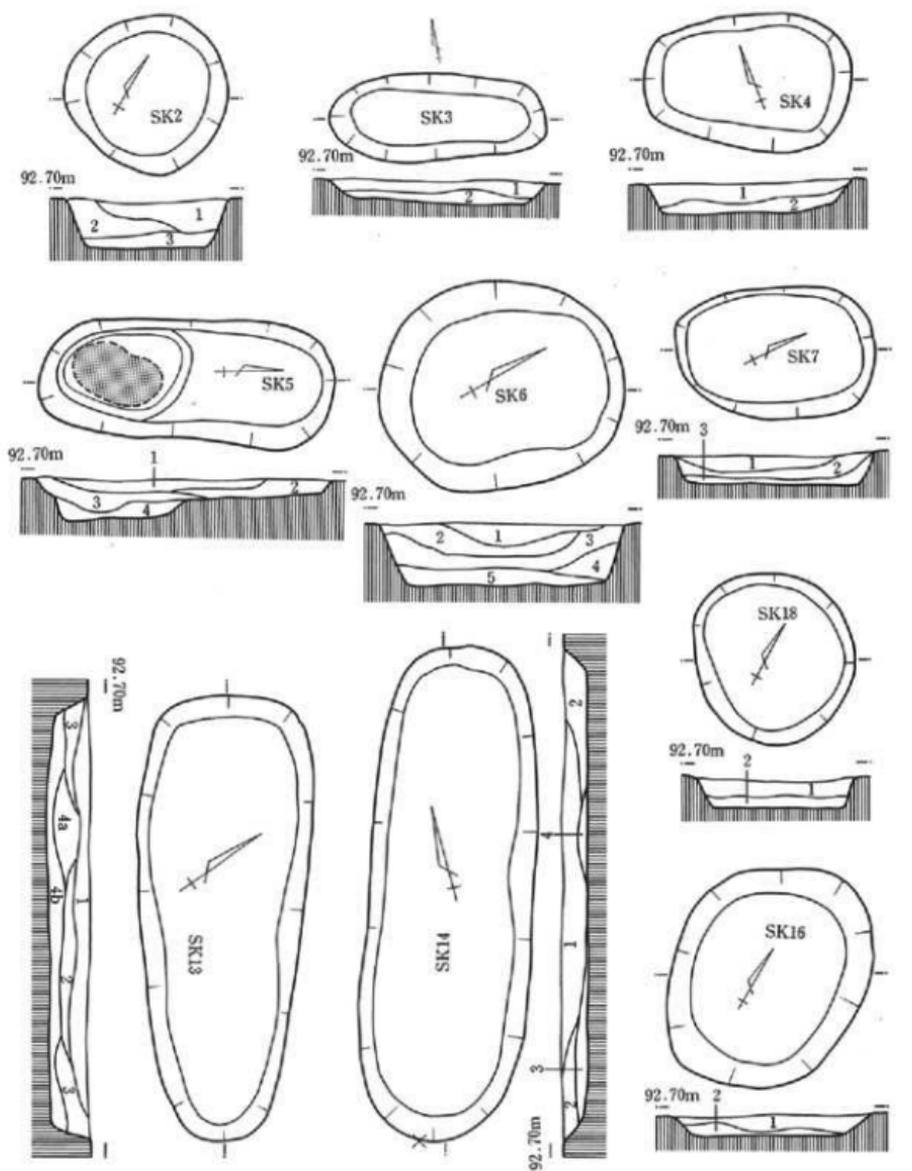
平面形は、不整隅丸長方形を呈する。径132×104cmで深さ14cmを測る。壁は、傾斜をもって緩やかに立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。下層で焼土・炭化粒子が多く含まれている。

100号土壇(第32図 図版64) 8-52グリッドに在り、VI層下部で確認される。

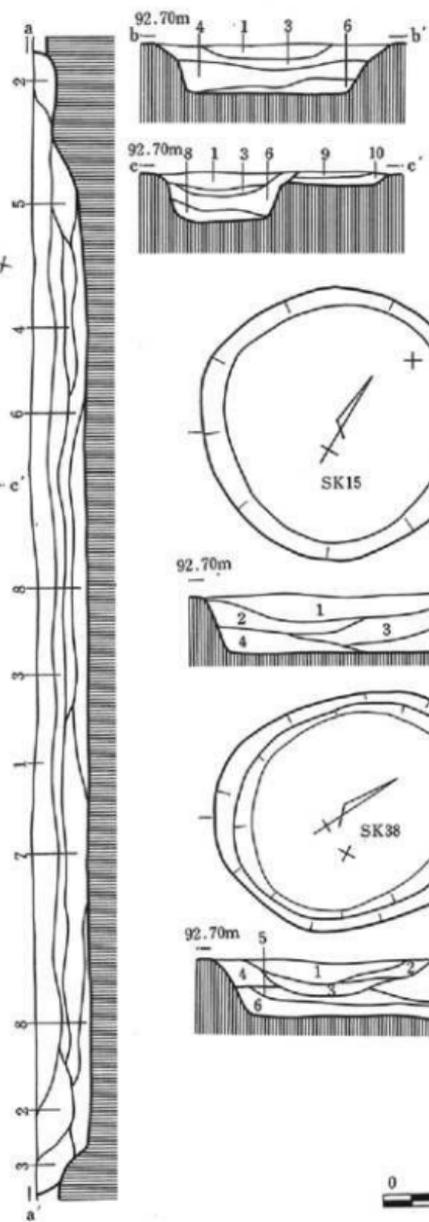
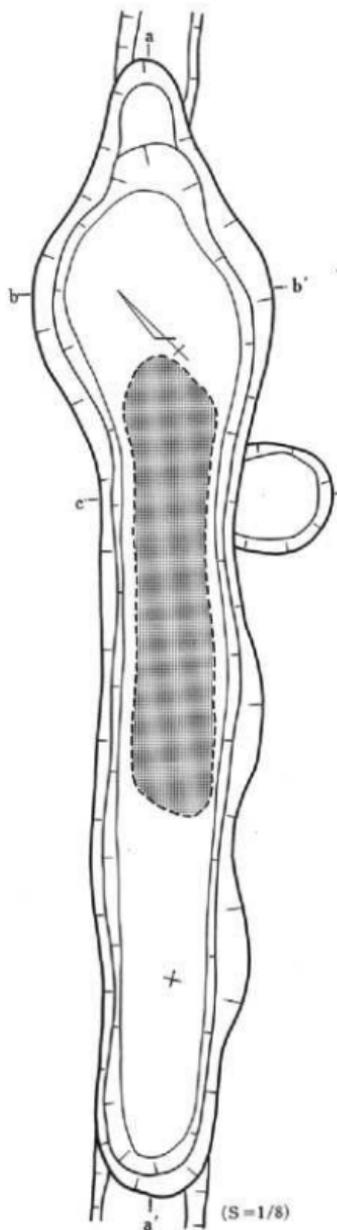
平面形は、隅丸長方形を呈し、断面形が皿状を呈する。底面は平坦である。遺物は検出されなかった。

98号土壇(第32図 図版64) 9-52グリッドに在り、VI層下部で確認される。

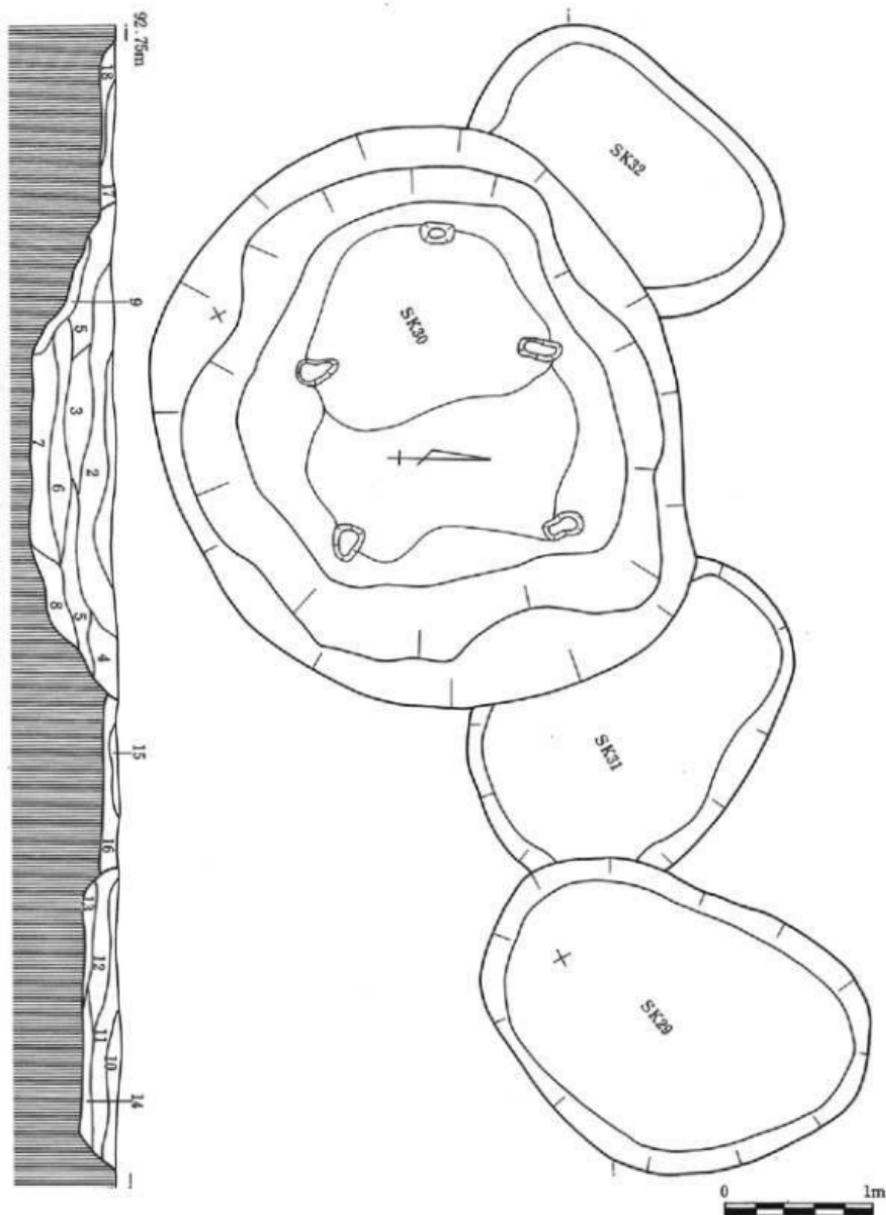
平面形は、不整円形を呈する。径258×250cmで深さ54cmを測る。壁は、全体としてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、中央部で起伏がみられる他は平坦である。土層全体に粘土ブロックが充満している。

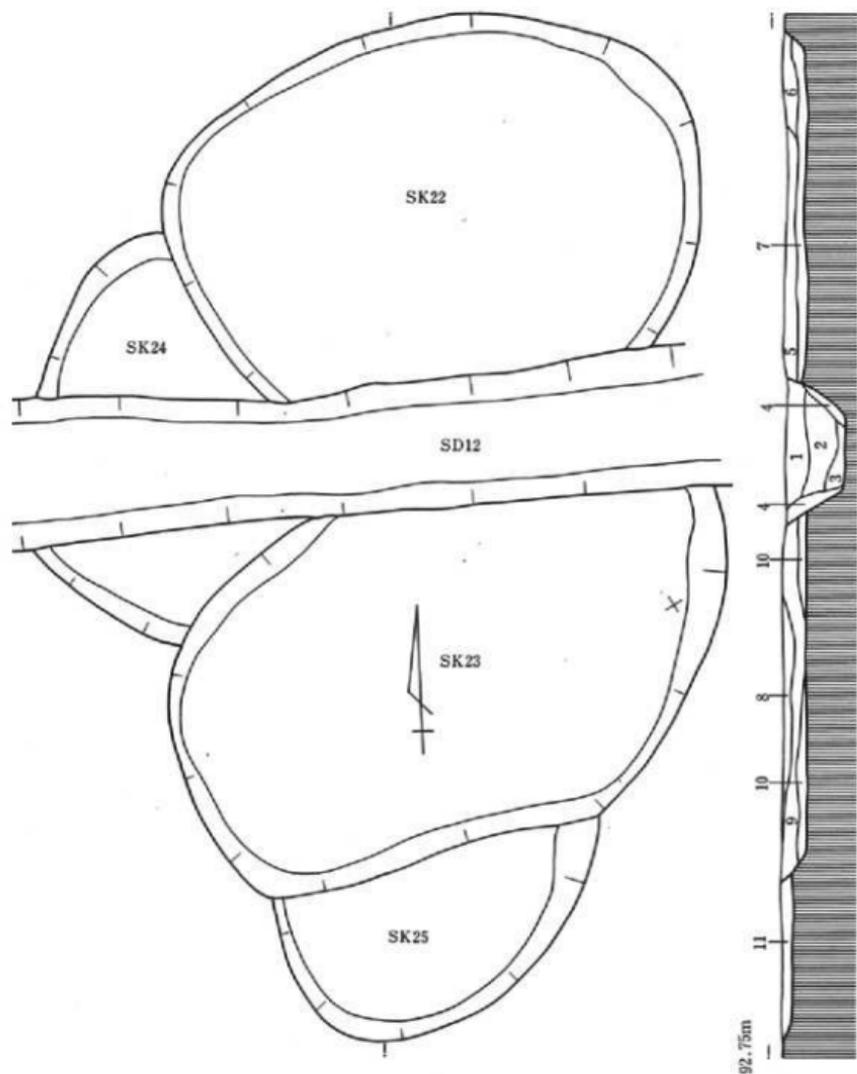


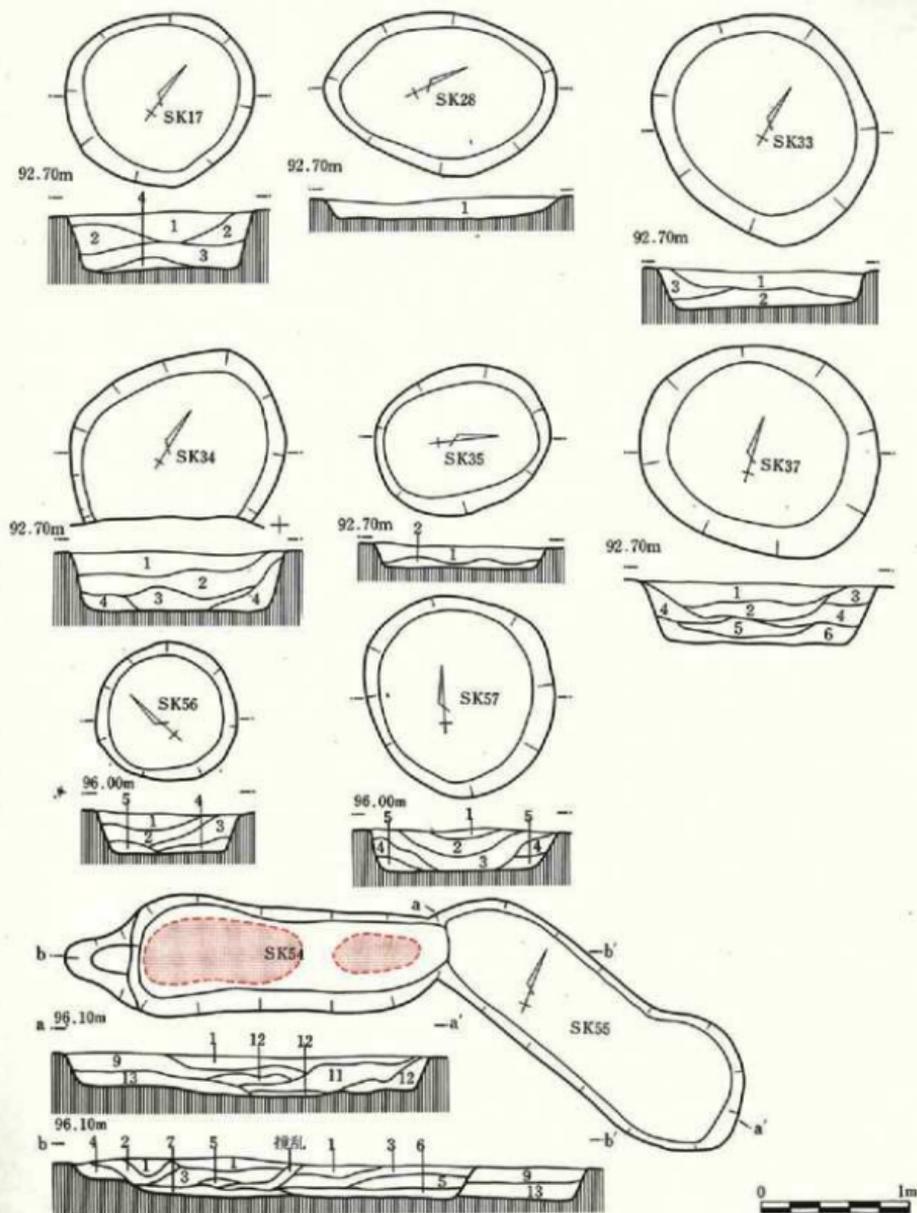
第25図 土坑(1)



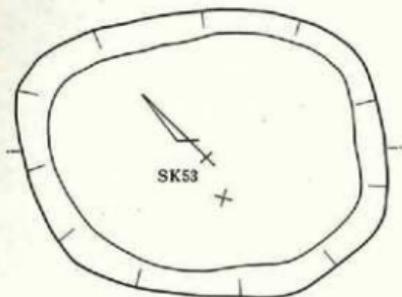
第26图 土坑(2)







第29图 土坑(5)



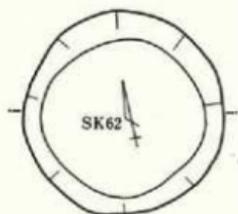
96.10m



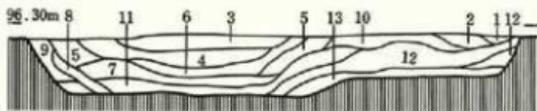
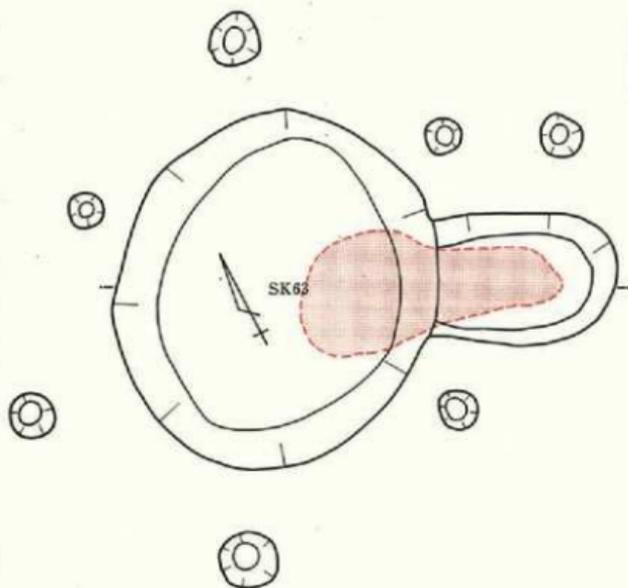
96.00m



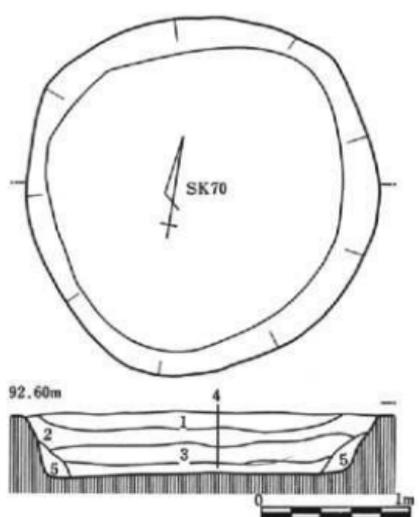
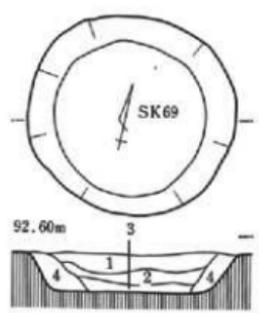
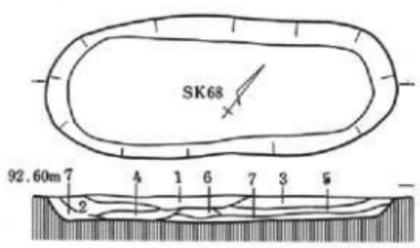
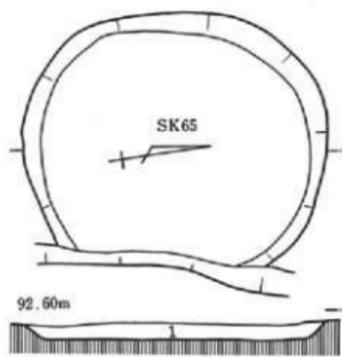
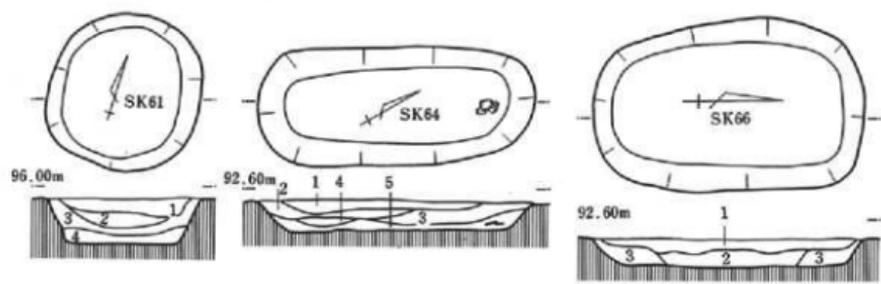
96.00m



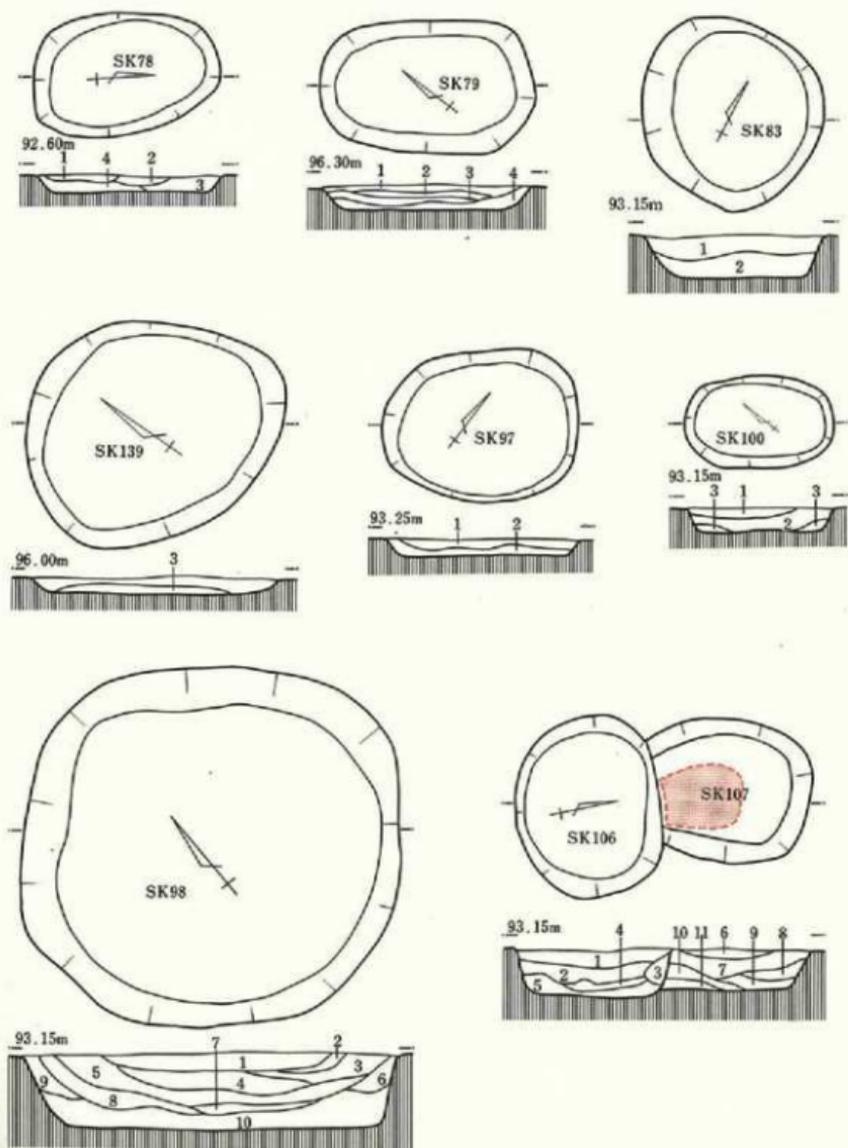
96.00m



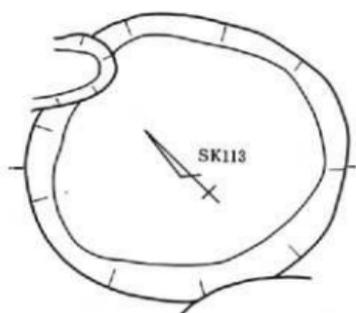
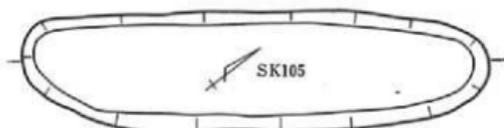
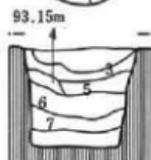
第30图 土城(6)



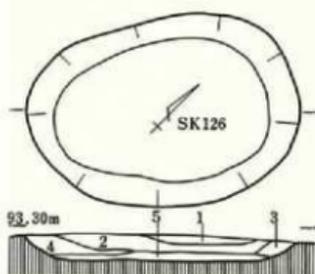
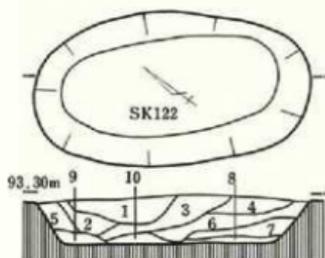
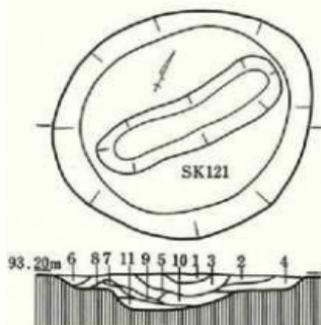
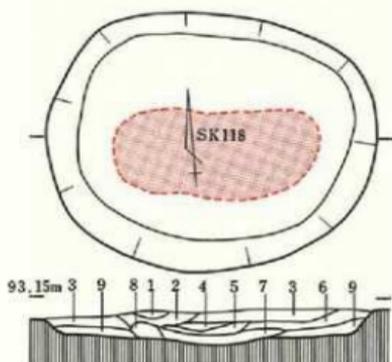
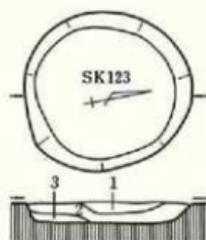
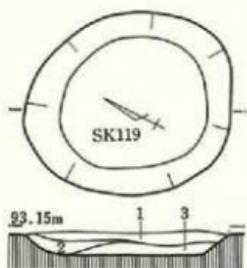
第31图 土坑(7)



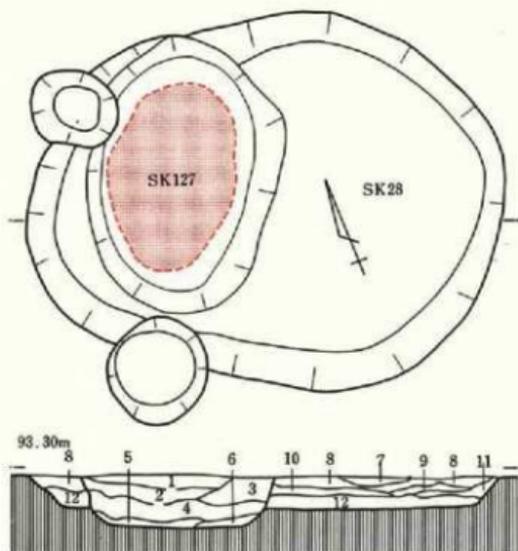
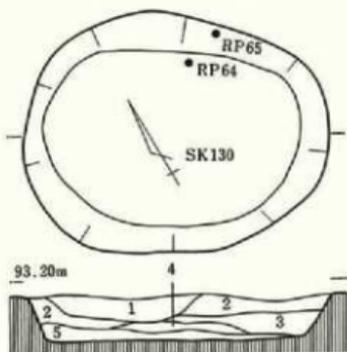
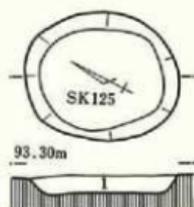
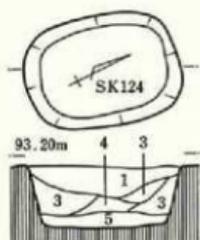
第32圖 土坑(8)



第33図 土坑 (9)



第34图 土坑(10)



第35图 土坑 (11)

106・107号土坑（第32図 図版65） 10・11—49グリッドに在り、VI層下部確認する。  
平面形が、両土坑とも不整隅丸長方形を呈し、大きさは106号土坑で径123×100cmで深さ33cm、107号土坑で現存径100cmで深さ27cmである。いずれも壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。106号土坑が107号土坑よりも新しい。

101号土坑（第33図 図版64） 8・9—51・52グリッドに在り、VI層下部で確認する。  
平面形が円形を呈し、径82cmで深さ68cmである。壁は垂直になり、底面は平坦である。

105号土坑（第33図） 10—49グリッドに在り、V層中で確認される。  
平面形は長楕円形を呈し、径320×84cmで深さ16mを測る。壁は緩やかで、底面は平坦である。

109号土坑（第33図 図版65） 14—49グリッドに在り、V層中で確認される。  
平面形は円形を呈し、径170cmで深さ20cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。下層で焼土が堆積している。

110号土坑（第33図 図版66） 12—49グリッドに在り、VI層下部で確認される。  
平面形は円形を呈し、径150cmで深さ23cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。下層で焼土・炭化材が堆積している。

113号土坑（第33図 図版66） 13—48・49グリッドに在り、VI層下部で確認される。  
平面形は円形を呈し、断面形が皿状を呈する。径200cmで深さ22cmである。

119号土坑（第34図 図版67） 14—50グリッドに在り、V層中で確認される。  
平面形は円形を呈し、断面形が皿状を呈する。径145cmで深さ16cmである。

120号土坑（第33図 図版66） 14—50グリッドに在り、V層中で確認される。  
平面形は円形を呈し、断面形が皿状を呈する。径132cmで深さ11cmを測る。

121号土坑（第33図 図版67） 14・15—50・51グリッドに在り、V層中で確認される。  
平面形は円形を呈し、径180cmで深さ35cmを測る。中央部に長さ145cm、幅35cmの溝状の落ち込みが在る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。溝状の落ち込み内には焼土が堆積している。

122号土坑（第33図 図版67） 11・12—53グリッドに在り、V層中より確認される。  
平面形は、楕円形を呈し、径187×108cmで深さ44cmを測る。壁は全体に垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。土層全体に粘土ブロックが互層に堆積している。

124号土坑（第35図 図版68） 14—54グリッドに在り、IV層下部で確認される。

平面形は、隅丸長方形を呈し、径105×75cmで深さ45cmを測る。壁は垂直に立ち上がる。

125号土坑（第35図 図版68） 14—54グリッドに在り、V層中で確認される。

平面形は円形を示し、断面形が皿状になる。径105cmで深さ11cmを測る。

126号土坑（第34図 図版68） 15-51・52グリッドに在り、V層中で確認される。

平面形は、不整の楕円形を呈する。径170×130cmで深さ18cmを測る。壁は全体として緩やかに傾斜をもって立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。下層には粘土ブロックが広く混入されている。

127・128号土坑（第35図 図版69） 15-53グリッドに在り、IV層下部で確認される。

127号土坑は、平面形が不整の隅丸長方形を呈する。径200cm×100cmで深さ38cmを測る。壁は、西側の上部でオーバーハングするが、他は概ね垂直に立ち上がる。底面は全体として平坦である。上層から下層にかけて、焼土や炭化材が充満し互層に堆積している。

128号土坑は、平面形が不整の隅丸長方形を示し、大形である。径315×260cmで深さ23cmを測る。壁は、緩やかに傾斜をもって立ち上がる。底面は概ね平坦である。上層で粘土ブロックや焼土が多量に含まれ、下層では炭化層がみられる。

本土坑はいずれも重複し、さらに96号建物跡とも重複している。新旧関係は127・128号土坑では、127号土坑が新しい。96号建物跡では、いずれの土坑とも古い。

130号土坑（第35図 図版70） 16-52グリッドに在り、VI層下部で確認される。

平面形は、不整の楕円形を呈する。径205×165cmで深さ32cmを測る。壁は全体としてほぼ垂直に立ち上がる。底面は、東側でやや凹凸がみられる他は概ね平坦である。土層全体として、焼土粒やブロック、炭化粒子を多量に含み広く認められる。

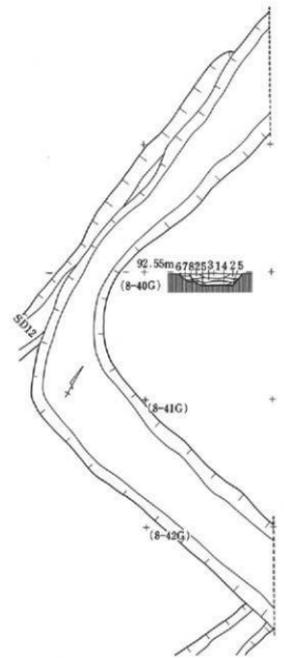
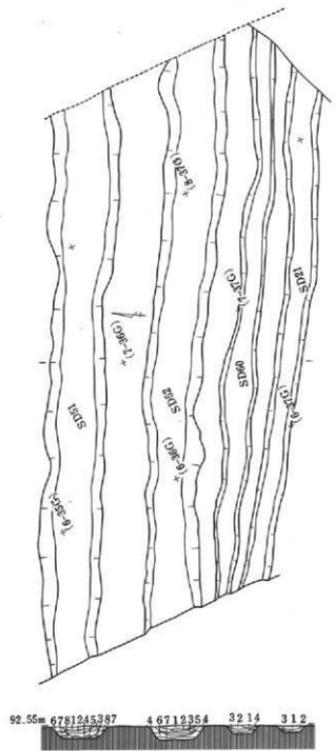
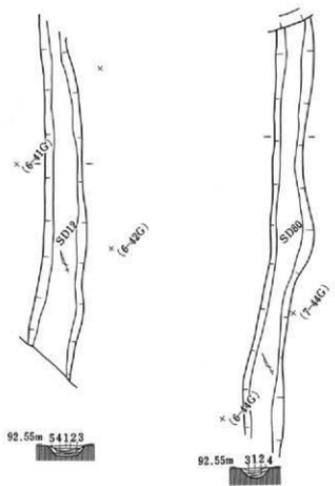
## 6) 溝 跡

11号溝跡（第36図 図版71・72）

A・B・C地区に亘って検出され、III層の上面で確認され確認面からの深さは45~52cmである。B地区からA地区の7-39・40グリッドまでは、ほぼ磁北方向を取り南北に走り、A地区からC地区にかけては東西方向に走っている。溝の幅は2.45~3.50m、検出された面からは25~34cmで、総延長約112mである。底面は若干の凹凸がみられるがほぼ平坦である。壁はA地区で起状がみられるが、全体として緩やかに傾斜をもって立ち上っている。断面形はU字状を呈している。覆土は砂層でレンズ状に中央部が窪むように堆積している。

12号溝跡（第36図 図版71・72）

A・B地区にわたって検出され、IV層下部で確認される。ほぼ磁北方向を取り、南北方向に走っている。溝の幅は0.85~1.00mで、確認面からの深さは24~32cmで、総延長約72mである。断面はU字状を示している。底面は中央部がやや窪んで段階状になっており、とくにA地区では顕著にみられる。壁は全体として緩やかに立ち上っている。A地区では覆土



上層に焼土や炭化粒子、灰などを若干含んでいる。覆土はおおむねレンズ状に堆積している。

#### 20号溝跡 (第36図 図版73)

B地区のみで検出され、11号溝跡によって切られA地区には延びていないとみられる。IV層下部で幅1.21~1.30mで確認面からの深さ15~31cmで、総延長約24mである。壁の断面はV字状を呈している。底面はほぼ平坦である。ほぼ東西方向になる。

#### 21号溝跡 (第36図 図版73)

A・B地区で検出され、8-38グリッドで11号溝跡によって切られ、IV層下部で確認される。総延長約52m、幅0.73~1.15mで、確認面からの深さは23~38cmで、壁がV字状を示している。ほぼ東西方向に走っている。底面はほぼ平坦である。22~27号土坑と重複している地区では、底面に焼土や炭化粒子が流れ落ちている。

#### 55・52・60号溝跡 (付図1 図版75~77)

いずれもA地区で検出され、11号溝跡に関連する溝跡でIII層上面で確認される。形状や覆土の状態は11号溝と類似している。幅は2.20~2.35mで確認面からの深さは43~61cmで総延長22~24mで、ほぼ東西方向に走っている。52号溝跡と60号溝跡の新旧関係は52号溝跡が新しい。

#### 82号溝跡 (付図1 図版77)

A地区の東側で検出され、IV層下部で確認される。現存する延長は約20m、幅は1.00~1.30mで、V字状の断面を呈し、深さ24~32cmである。ほぼ東西方向に走っており、底面はやや中央部が窪んでいるがほぼ平坦である。

#### 99号溝跡 (付図1 図版78・79)

C地区の南側で検出され、IV層中で確認される。現存する延長は約15~18m、幅1.70~2.15mで、V字状の断面を呈し、深さ124~135cmである。壁は上面で段階にややオーバーハングするが、中位から下部で傾斜をもって掘り込まれる。底面は概ね平坦である。覆土はレンズ状に堆積している。

#### 131号溝跡 (付図1 図版79)

C地区で検出され、IV層中で確認され、幅約1.00m、深さ10~14cmである。

## 2 遺物

本遺跡からは1次調査で平箱にして20箱、2次調査で41箱の計61箱の遺物が出土した。大半は平安時代の土器であり、その他、鉄製品・石製品等が若干含まれる。本稿ではこれらのうち、遺構内から出土した遺物、それに遺構外出土遺物で図示可能なものを中心に述べる。

### 1) 竪穴住居跡出土の土器

#### a 71号住居跡の土器 (第37図1~8、表2、8)

覆土とカマド周辺から1~8に示した土器と合わせて254片の土器片が出土した。

1は口縁部が「く」の字状に強く外反する土師器の甕である。外面は縦方向の、内面は横方向の刷毛目調整が施され、外面口縁から頸部にかけてはヨコナデが認められる。

2・3は須恵器の坏、5・6は高台付坏であり、4も器形、法量からみて高台付坏であろう。底部のあるものは、すべて回転糸切りで、破片資料にもへら切りは1点もない。

7~8は直線的に立上って外形する赤焼土器の坏で、9も同じような器形となる。

供膳形態土器の破片資料の割合は土師器が15%、須恵器が56%、赤焼土器が29%である。

#### b 73号住居跡の土器 (第37図10~13、表2、8)

覆土と床面、それにカマド周辺から10~13に示した土器と63片の土器片が出土しただけで遺物量は少ない。

10・11はやや内湾的な立上りを示す回転糸切り甕をもつ坏である。12は格子目ふうタタキ、平行アテとなる須恵器の甕の体部破片である。

13は口径が220mmの赤焼土器の甕で、口縁部は「く」の字状に外反した後、口唇部が上方につまみ出され、蓋受けのような段をもつ。

供膳形態土器の破片資料の割合は土師器が5%、須恵器は41%、赤焼土器は54%となり須恵器の底部切り離しはすべて回転糸切りである。

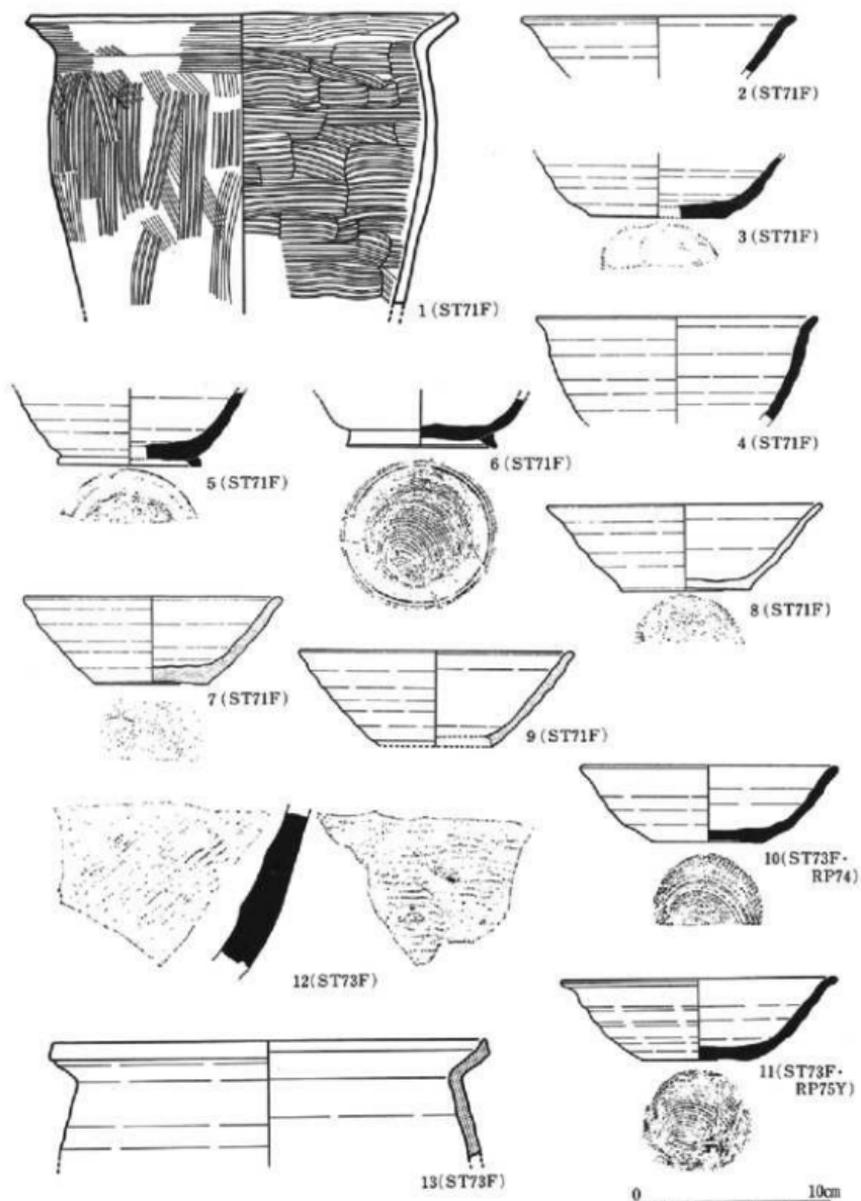
#### c 74号住居跡の土器 (第38図14~16、表2、8)

覆土と床面、カマド周辺から14~16の土器と147片の土器片が出土した。

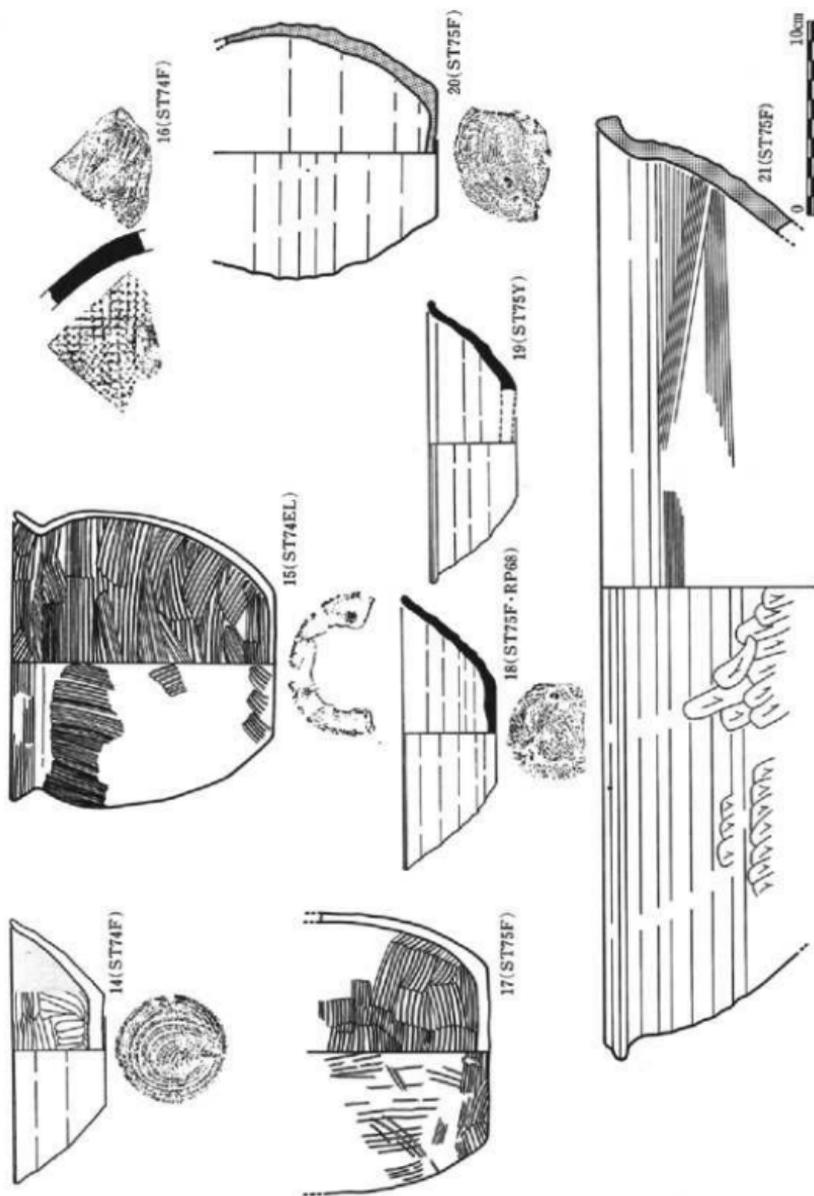
14は土師器の坏である。ロクロ整形、回転糸切りでロクロから切り離された後、内面にミガキ、黒色処理が施されている。15はカマドから出土した口縁部が「く」の字状に強く外反する中形の土師器甕である。火熱で外面の中央部に剝落が認められるが、上半部は縦方向の刷毛目、下端には彫りの深い斜め方向の刷毛目が観察される。内面は概ね横方向の刷毛目が、口頸部外面にはヨコナデが施されている。

16は格子目タタキ、青海波アテとなる須恵器甕の体部破片である。

供膳形態土器の破片資料は土師器が5%、須恵器が30%、赤焼土器が65%である。



第37図 出土遺物 (1)



第38圖 出土遺物(2)

d 75号住居跡の土器（第38図17～21、表2、8）

覆土と床面、カマド周辺から17～21に示した土器と113片の土器片が出土した。

17は急角度の立上りとなる土師器甕の体部下半以下の資料である。内・外面とも刷毛目調整が施されている。

18は底径は小さいが器高の高くなる回転糸切り痕をもつ坏で、19も同様であろう。

20は中形の赤焼土器甕で、口頸部は失われている。体部中央がふくらむ器形となり、ロクロ整形の際の器面の凹凸が著しい。回転糸切り後の再調整は認められない。21は口径476mmの大形の甕である。口縁部は外反し、口唇部は肥厚する。外面体部下半にはヘラケズリが施され体部内面にはカキメが認められる。

供膳形態土器の破片資料は土師器が11%、須恵器が22%、赤焼土器が67%となり、須恵器にヘラ切り痕をもつものはない。

e 76号住居跡の土器（第39図22～29、表2、8）

覆土とカマド周辺から22～29の土器と485片の土器片が出土した。

22・23は須恵器甕の口頸部、24は体部破片である。22は1段の、23には2段の波状文が認められ、24は格子目ふうタタキ、青海波アテの組み合わせをもつ。

25は赤焼土器の蓋である。ロクロ整形後に橋状のつまみが付けられ、紐通しのような形態となる。外面には粗いヘラナデが認められる。26は焼け歪みが著しい坏、27は内面がナデで平滑に仕上げられた大形の高台付坏である。両者とも回転糸切り痕が残る。28は口縁部に最大径のある中形の甕である。口縁部は短く外反した後、上方に長くつまみ出されており、回転糸切り後の再調整はない。29は最大径が口縁にある大形の甕で、口縁部のつくりは28と似ている。外面体部中央以下にはヘラケズリが施され、体部上半と内面にはカキメが認められる。

供膳形態の破片資料は土師器が12%、須恵器が21%、赤焼土器が67%、75号住居跡とほぼ同じ比率となる。須恵器の高台付坏に1点ヘラ切り痕をもつ破片がある。

f 77号住居跡の土器（第40図30～37、表2、9）

覆土、床面、カマド周辺から30～37に示した土器と301片の土器片が出土した。

30は土師器の坏蓋で本住居跡を中心に73、75、76号各住居跡の覆土から出土した破片がそれぞれ1片ずつ接合した。ロクロ整形後に内外面とも丁寧なヘラミガキ、そして黒色化処理が施されている。つまみは宝珠様である。

31・32は須恵器坏、33・34は甕である。31は底径が小さく、内湾気味に立上り、32は底径が大きく、そのまま外傾する。33は口径504mmの大甕で、頸部が直立した後、口縁に向けてゆるやかに外反し、口縁直下で急激に外反している。口唇部は上方と下方につまみ出さ



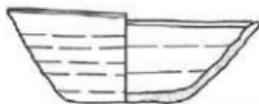
22(ST76F)



24(ST76F)



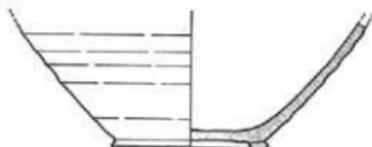
23(ST76F)



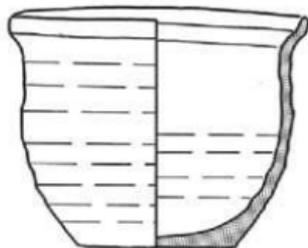
26(ST76EL-RP77)



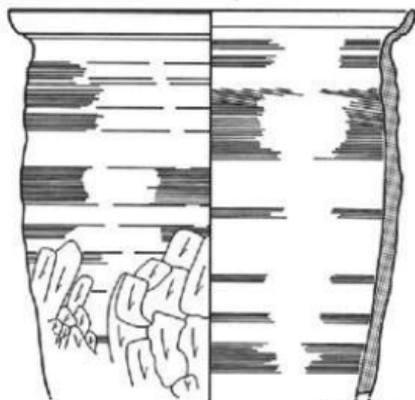
25(ST76F-RP67)



27(ST76EL)



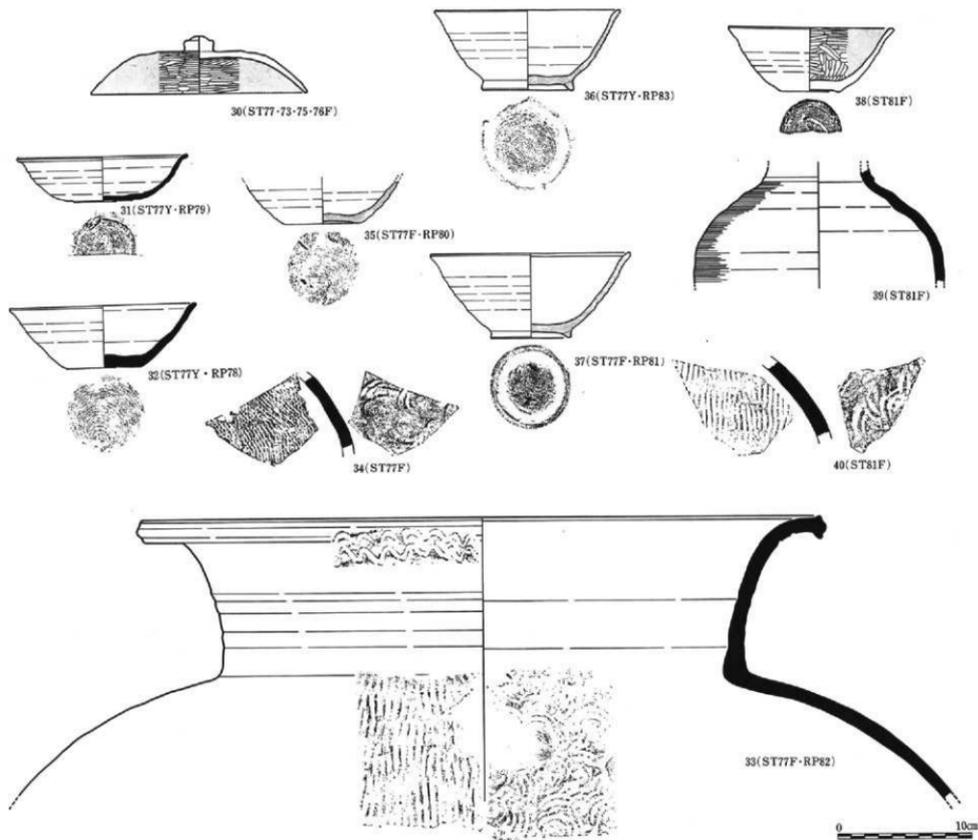
28(ST76EL-RP77)



29(ST76EL)



第39図 出土遺物(3)



第40図 出土遺物(4)

れている。口頸部はロクロ整形で、口縁直下に2段の波状文が施されている。体部は格子目ふうタタキ、青海波アテの組み合わせとなっている。34は体部破片で、条間の狭い平行タタキ、青海波アテ痕をもつ。

35は赤焼土器の坏、36・37は高台付坏である。37は高台接着の際のナデのため坏部の切り離しは不明である。なお、この土器の内面はナデによって平滑に仕上げられている。

供膳形態の破片資料は土師器が11%、須恵器が29%、赤焼土器が60%となり、須恵器にヘラ切り痕をもつものはない。

#### g 81号住居跡の遺物(第40図38~40、表2、9)

覆土から38~40の土器と102片の土器片が出土した。

38は土師器坏である。ロクロ整形、回転糸切りによって切り離された後、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。

39は須恵器壺、40は甕である。39は頸部下から体部上半の資料で、頸部と体部の境界には一条の凸帯が巡っている。40は格子目ふうタタキ、青海波アテとなる体部上半の破片である。

供膳形態土器の破片は土師器・須恵器がそれぞれ11%、赤焼土器が78%となり、須恵器の底部切り離しはすべて、回転糸切りである。

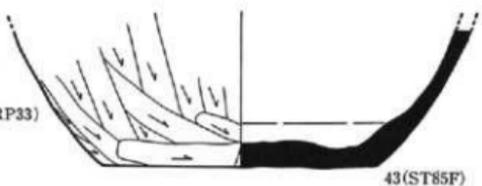
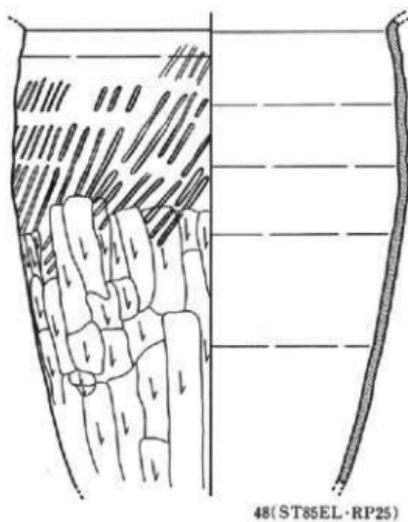
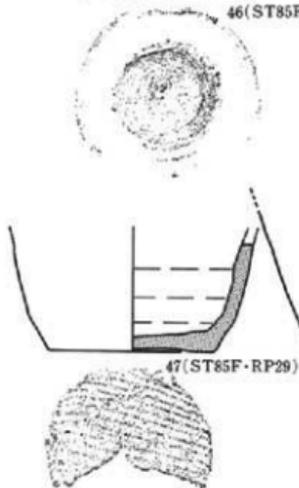
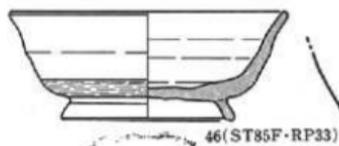
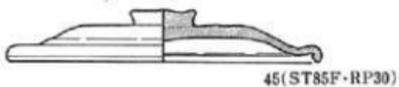
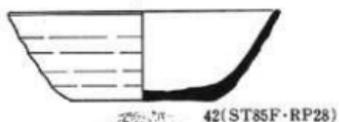
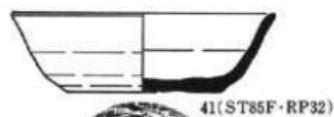
#### h 85号住居跡の土器(第41図41~48、表3、9)

覆土、床面、カマド周辺から40~48に示した土器と238片の土器片が出土した。

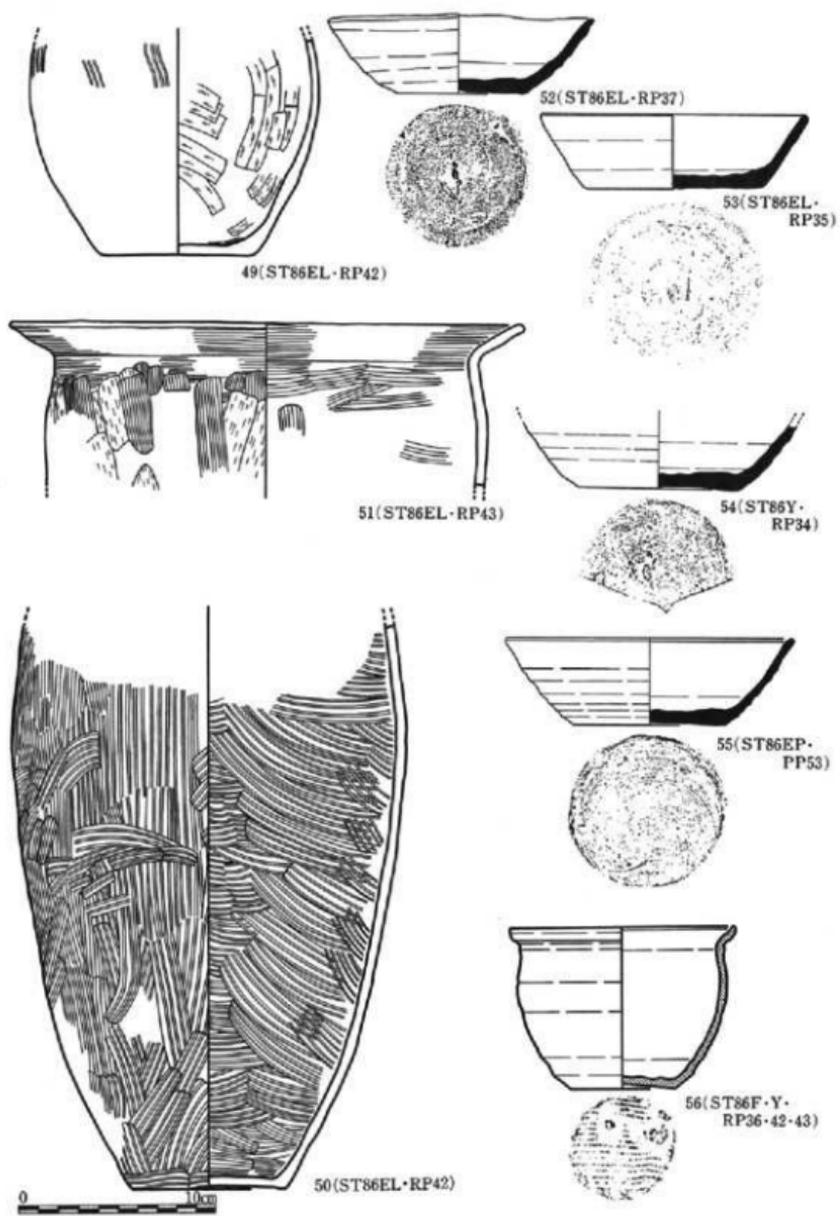
41・42は須恵器の坏、43・44は甕である。41・42とも底部の切り離しは回転ヘラ切り、比較的急角度で立上り、器高は高い。内面はナデでロクロの凹凸が消されている。本住居跡には破片資料にも回転糸切りの坏はない。43は体部下半にヘラケズリが認められる平底の甕、44は外面に格子目ふうタタキ、内面に青海波アテが残る平底の甕である。

45は赤焼土器の坏蓋である。回転ヘラ切りで切り離された後、擬宝珠様のつまみが付けられている。赤焼土器の蓋は破片資料で、さらに1個体分が確認されているが、本遺跡では本住居跡にしかない。46との組み合わせが考えられる。46は高台付坏である。坏部は回転ヘラ切りによって切り離され、下半に回転ヘラケズリが施されている。器形、製作技法とも、本遺跡の他の高台付坏とは明らかな差異が認められる。47は中形の甕である。体部下半以下の資料で、静止糸切りによってロクロから切り離されている。外面はナデで平滑に仕上げられている。48は体部最大径203mmの大形の甕で頸部から体部下半にかけての資料である。器壁は薄く、体部外面はタタキの後、ロクロで整形され、さらに下半にヘラケズリが施されている。

供膳形態の破片は19点しかないが、須恵器・赤焼土器とも回転糸切技法は認められない。



第41圖 出土遺物(5)



第42図 出土遺物(6)

i 86号の住居跡の土器（第42・43図49～63、表3、9）

覆土、床面、カマド周辺から49～63に示した土器と110片の土器片が出土した。

49～50は土師器の甕である。49は中形の甕で体部外面には部分的に刷毛目が残し、内面はヘラナデが認められる。50は体部最大径が200mmの長胴甕で体部上半以上は欠損する。外面には概ね縦方向の、そして、最終的に体部中央と下端に横方向の、また、内面には横方向の刷毛目が施されている。51は口径260mmの大形の甕の口縁部資料で、外面にはヨコナデ、ヘラナデ、刷毛目の順で調整が行なわれている。いずれもロクロは使われていない。

52～55は須恵器の坏である。52～54は回転ヘラ切り、55は回転糸切りである。55は糸切りではあるが、底径は大きく、立上りの状況等、ヘラ切りの坏と大差ない器形をもち、本遺跡の糸切りの坏のなかでは特異な存在である。

56～63は赤焼土器の甕である。56は口縁部に最大径のある小形の甕である。ロクロからは静止糸切りによって切り離されている。

57～63は大形の甕である。口縁部はいずれも「く」の字状に長く外反した後、口唇部が上方につまみ出されるという共通性が認められる。また、最大径もすべて口縁部にあり、59・62が体部上半にふくらみをもつが、他はふくらみの度合いが少ない。57は部分的にタタキの痕跡が認められ、現存する範囲内で、ヘラケズリはない。58は体部中央以下にヘラケズリが認められ、内面の頸部直下に部分的に刷毛目が観察される。59は体部の上半部から部分的なヘラケズリが施されている。61は体部上半にタタキの痕跡が残し、体部下半には全面にヘラケズリが施されている。また、内面の下部には部分的に彫りの浅い刷毛目がある。62はRP35・36・43として取り上げたものが接合した甕で63とともに全体のかたちや法量が明らかな数少ないもののひとつである。体部外面には相当上位からヘラケズリが施され、内面には彫りの浅い筋状の刷毛目が縦方向に施されている。63は62とほぼ同じ法量となる。外面ヘラケズリは体部中央以下に限られ、内面の彫りの浅い刷毛目も体部下半にだけ認められる。

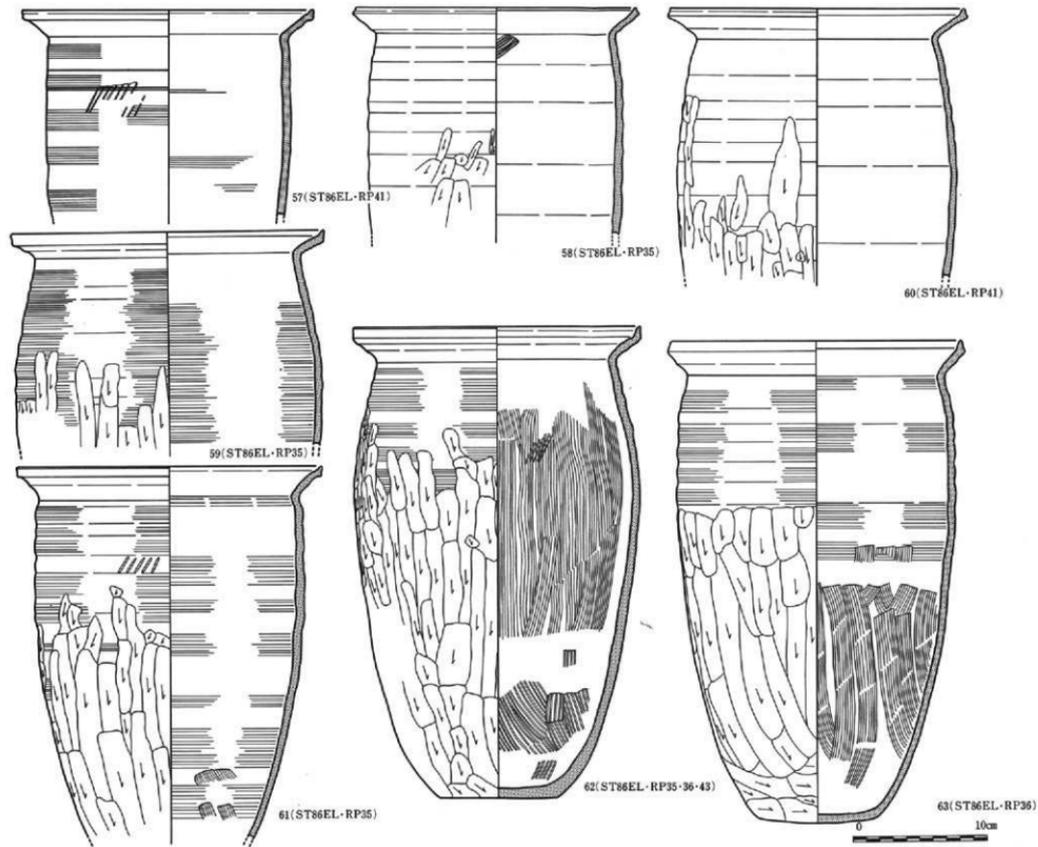
62・63の底部外面には切り離しの痕跡はなく、また、57・61に認められるタタキの痕跡から、これらの大形甕の製作には、粘土紐積み上げ、タタキしめの成形の後、回転力を利用した整形、さらに下半のヘラケズリという工程をたどったことが窺える。

供膳形態土器の破片資料は13片と少なく、うち、赤焼土器片が5片であるが、底部資料は出土していない。

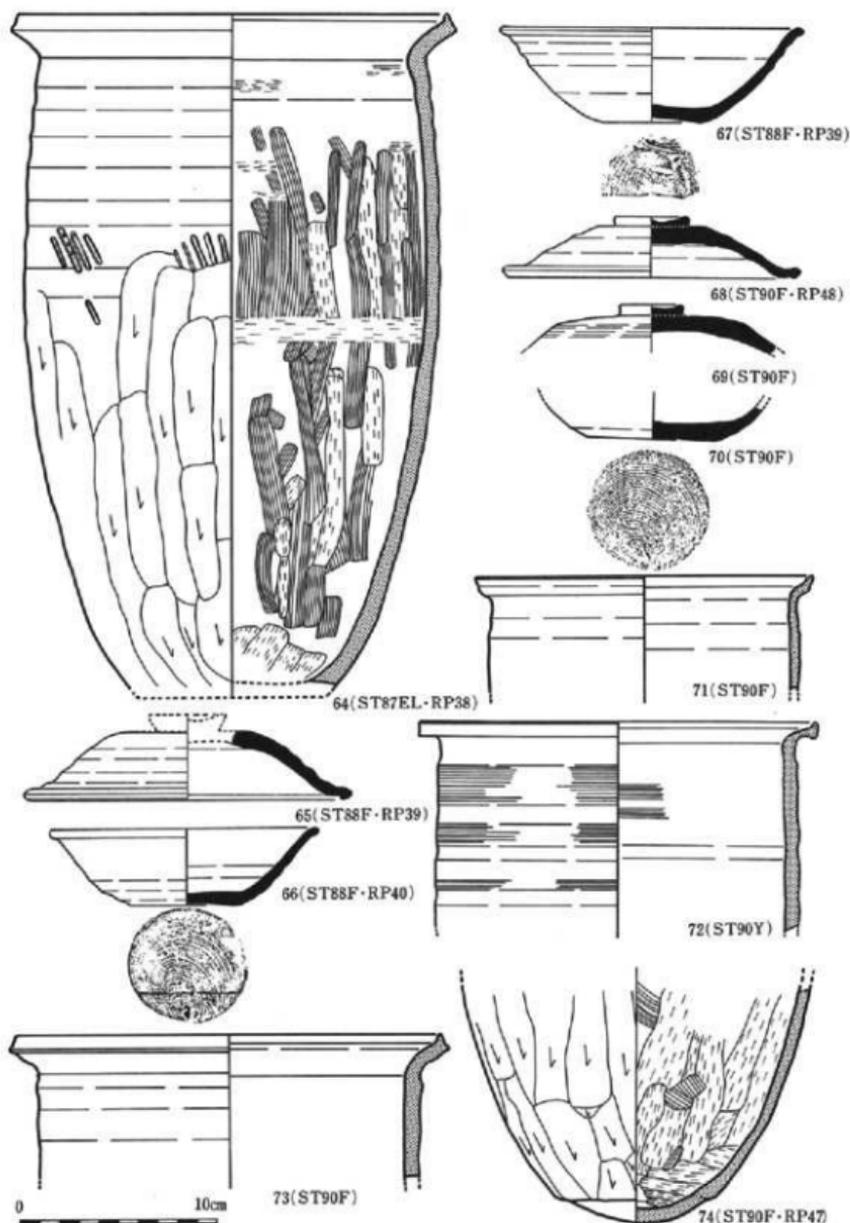
j 87号住居跡の土器（第44図64、表3、9）

カマドから64に示した土器が出土し、床面から7片の土器片が出土した。

64は赤焼土器の甕である。口縁部は「く」の字状に長く外反し、口唇が上方につまみ出



第43図 出土遺物 (7)



第44図 出土遺物(8)

され、この位置に最大径がある。外面に残された痕跡からタタキ→ロクロ→ケズリの順で調整が行なわれたことがわかる。体部内面には縦方向の刺毛目、ヘラナデが施されている。

供膳形態土器は須恵器の坏蓋の口縁部破片が2点出土しただけである。

k 88号住居跡出土の土器（第44図65～67、表3、9）

覆土から65～67の土器と12片の土器が出土しただけで遺物量は少ない。

65は須恵器の坏蓋で、天井部、つまみ部を欠いているが、器高は高い。66・67は坏で両者とも回転糸切り後の調整はない。この他に、回転糸切り痕をもつ底部破片が3片あるが、ヘラ切りのものはない。

ℓ 89号住居跡の土器（第58図214、表9）

覆土から6片の土器片と第 図218に示した砥石が出土した。88号住居跡と同様、一部の調査しか実施していないため詳細は不明である。

m 90号住居跡の土器（第44図68～74、表3、9）

覆土と床面から68～74の土器と106片の土器片が出土した。

68・69は須恵器の坏蓋である。両者ともリング状に近い擬宝珠様のつまみをもち、69の体部と天井部との境界付近には回転ヘラケズリが施されている。70は回転糸切り痕をもつ須恵器の坏である。

71～74は赤焼土器の甕である。71～73は体部中位から口縁にかけての、74は体部中位から底部にかけての資料である。71は中形の甕で「く」の字状に短く外反した後、さらに上方に曲げられて、蓋受けの段がつけられている。72・73は口径200mmを超える大形の甕で、「く」の字状に短く外反し、口唇部がつまみ上げられた口縁部に最大径を有する。74は本遺跡では唯一の丸底ふうの甕である。体部と底部が別々につくられ、後にはめ込まれている。外面にはヘラケズリ、内面にはヘラナデ、部分的に浅い刷毛目が施されている。

供膳形態土器の破片資料は16片と少なく、須恵器の底部破片はない。

n 91号住居跡の土器（第45図75、表3、10）

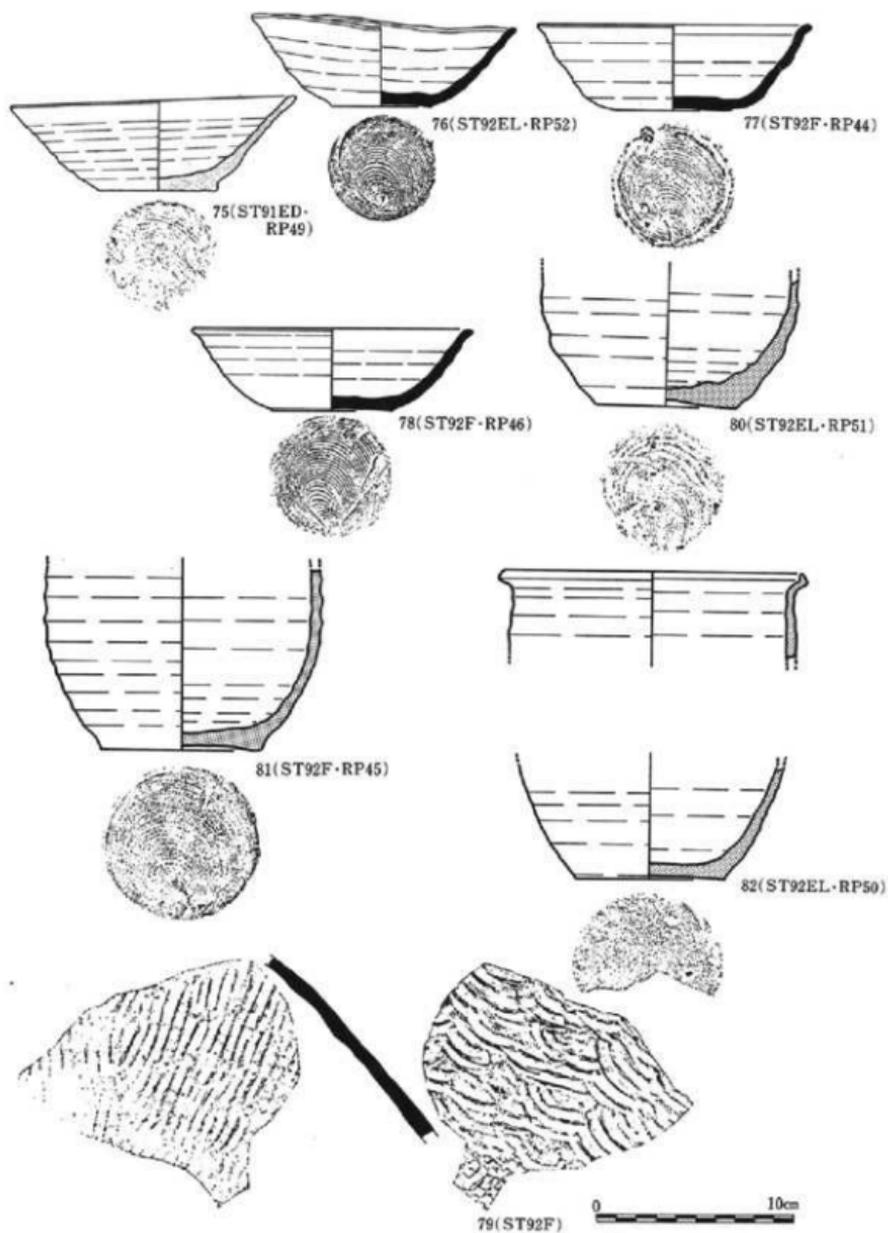
周溝と柱穴で確認された住居跡であるが、周溝から75に示した赤焼土器の坏と108片の土器片が出土した。75はロクロの凹凸の著しい坏で、底部から一気に外傾している。

供膳形態の破片資料は94片で、土師器・須恵器がそれぞれ9%、赤焼土器82%を占める。須恵器にヘラ切りの底部破片はなく、両黒土師器が6片存在する。

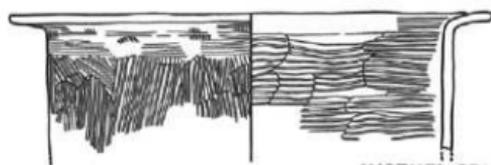
o 92号住居跡の土器（第45図75～82、表3～4、10）

覆土、床面、カマドから76～82に示した土器と134片の土器片が出土した。

76～78は須恵器の坏である。いずれも回転糸切りによって切り離されており、形態・法量から見てもほとんど差異のない坏である。79は甕の体部破片で、格子目ふうタタキ、青



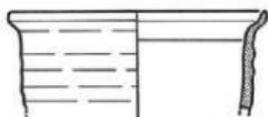
第45図 出土遺物(9)



83(ST93EL·RP61)



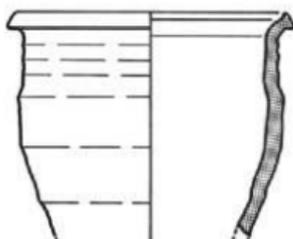
84(ST93EP·RP55)



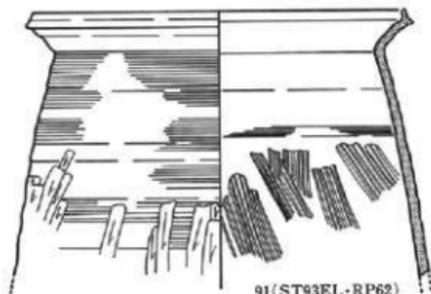
86(ST93Y)



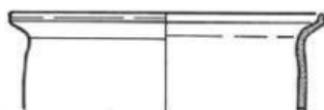
85(ST93EL·RP55)



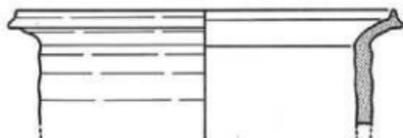
87(ST93EL·RP57)



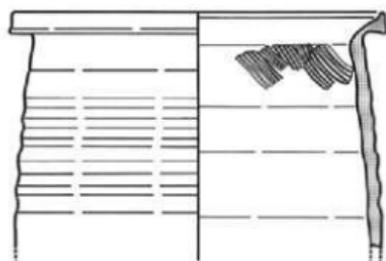
91(ST93EL·RP62)



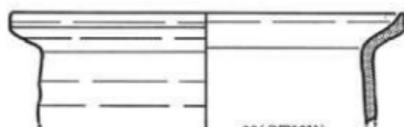
88(ST93EL)



90(ST93EL·RP62)



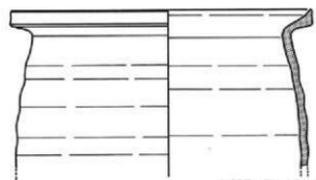
89(ST93EL·RP58)



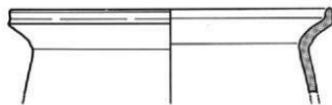
92(ST93Y)



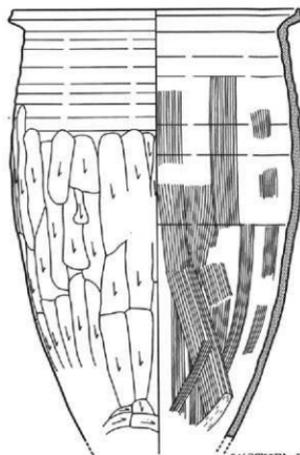
第46図 出土遺物 (10)



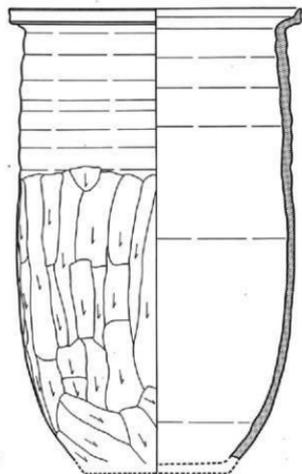
93(ST93EX-RP62)



96(ST93Y<sub>E</sub>)



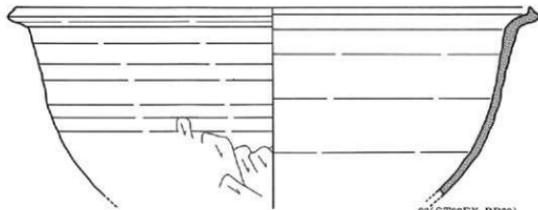
94(ST93EL-RP58)



95(ST93Y-RP54)



97(ST93EX-RP62)



98(ST93EX-RP62)

0 10cm

第47回 出土遺物 (11)

海波アテの組み合わせとなっている。

80～82は赤焼土器の中形の甕である。いずれも底部に回転糸切り痕が残る。80・81は内外面ともクロの凹凸が著しい。82は体部中央が欠失するが同一個体である。口縁部は「く」の字状に短く外反した後、さらに逆「く」の字形に折り曲げられて明瞭な段を形成する。最大径はこの屈曲点にある。

供膳形態の土器片は37点で、土師器が11%、須恵器が38%、赤焼土器が51%となり、須恵器の底部破片は回転糸切りだけである。

P 93号住居跡の土器（第46・47図83～98、表4、10）

覆土、床面、落込みから83～98に示した土器と629片の土器片が出土した。

83は土師器の甕である。口縁部はほぼ直角に近く外反し、この位置に最大径をもつ長胴形の甕であろう。外面には縦方向の、内面には横方向の刷毛目が施され、口頸部にはさらにヨコナデが施されている。

84・85は回転糸切りで切り離された須恵器の坏である。84は急角度で立上った後、体部中程で屈曲して外反する器高の低い坏である。

86～88は赤焼土器の中形の甕で87は体部がややふくらむ器形となるが、86・88はほとんどふくらみをもたない。86・88は「く」の字状に外反し、さらに上方に折れ曲がる口縁となるが87は口唇部を上・下の両方につまみ出すことによって段を形成している。いずれも現存部でのケズリ調整はない。89～95は口径が180mmを超える大形の甕であり、口縁のつくりには、次の三者がある。①鋭く短く外反した後、口唇部が上方につまみ出されるもの（89・93～95）、②「く」の字状に外反した後、口唇部が上・下につまみ出されるもの（90・91）、③「く」の字状に比較的長く外反し、口唇部が上方にだけつまみ出されるもの（92）。このなかで主体を占めるのは①、②であり、①、②のない86号住居跡の大形甕との差異が指摘できる。最大径の位置は91が体部にある他は口縁部にあるが、93・94は体部にふくらみをもつ。89・91・94・95の体部外面にはヘラケズリが施され、このうち95を除いて、内面に部分的な彫りの浅い刷毛目が認められる。96・97は口径が240mmを超え、89～95よりもひと回り大形の甕である。口縁のつくりは96が上記の③に、また97は②に相当する。両者とも体部がふくらむ傾向を示しており、97の最大径の位置は体部となる。両者とも現存する範囲内で、ケズリ調整は認められない。93は埴もしくは鉢である。口径384mmをはかり器壁は薄い。体部下半に丸味をもち、強く外反した口唇部が上方につまみ出されて、鋭い稜を形成している。体部下半以下にはヘラケズリが施されている。

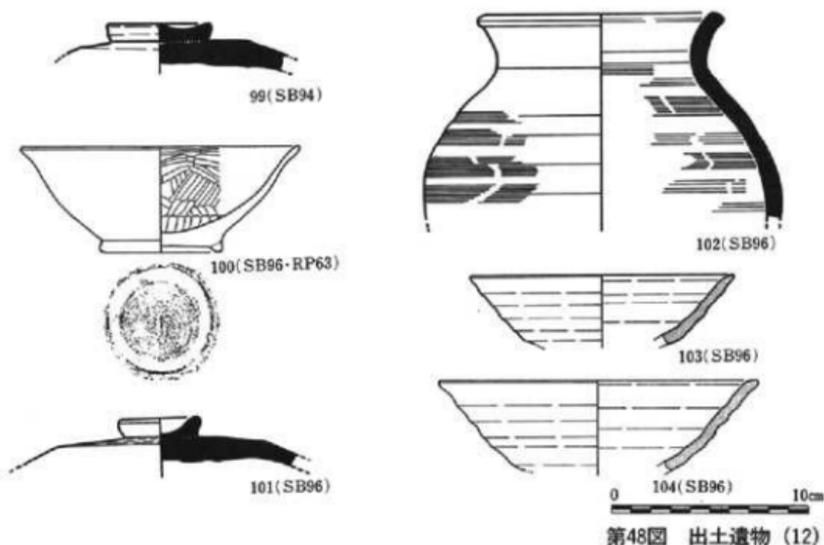
供膳形態の土器片は94点で土師器はなく、須恵器が32%、赤焼土器が68%となり、須恵器坏の底部破片は回転糸切りだけである。

## 2) 建物跡出土の土器 (第48図、表4、10)

67、94、95、96号建物跡の掘り方から遺物の出土があった。このうち、67、95号建物跡の遺物は小破片で図示できるものはなかった。破片の種類は表10に示した。

第48図99は94号建物跡から出土した須恵器の蓋である。

100～104は96号建物跡の遺物である。100は完形の土師器高台付坏で外面はナデで平滑に仕上げられており、内面はヘラミガキの後、黒色処理が施されている。底部には回転糸切り痕が明瞭に残っている。101は須恵器蓋で天井部に回転ヘラズリが施された後、中央部の凹むリング状のつまみが付けられている。102は須恵器の壺で、口縁部が外反し、球形の体部となる。103、104は赤焼土器の坏の口縁部破片である。両者とも大きく開く様相を示す。供膳形態の土器片は189片が出土しており、土師器が21%、須恵器が17%、赤焼土器62%で、須恵器坏の底部破片は回転糸切りだけである。



## 3) 土坑出土の土器 (第49～53図105～160、表4～5、10～13)

本遺跡で検出した土坑のうち54基から遺物の出土があった。そのうちの図示可能なものは第49図106から第53図160までに示し、他の破片については表10～13に示した。以下、図示した遺物を中心に述べる。

105～108は9号土坑から出土した赤焼土器の小形皿である。いずれも器高は低く106、107

の底部には回転糸切り痕が残っている。9号土塚からは、これらと同じ種類の土器片が7片と両黒の土師器杯の口縁部破片が1点出土している。

109～111は13号土塚から出土した土器である。109・110は須恵器の壺で、110は頸部と体部の境界に凸帯が巡っている。111は底部に糸切り痕をもつ赤焼土器の高台付坏である。内面はナデで平滑に仕上げられている。

112は14号土塚から出土した平行タタキ、青海波アテの須恵器の体部破片である。

113～116は17号土塚から出土した土器である。113は体部と天井部の境界に回転ヘラケズリの施された須恵器の蓋で低いリング状のつまみとなっている。114・5は回転糸切りの須恵器坏である。116は赤焼土器の坏である。

117は18号塚から出土した回糸切りの須恵器坏である。

118～120は22号土塚から出土した須恵器である。118は回転ヘラ切りによって切り離され、宝珠様のつまみがつけられた蓋、119・120は回転糸切りの坏である。供膳形態土器片の割合は土師器が4%、須恵器が74%、赤焼土器が22%となっており、須恵器坏の底部破片はすべて回転糸切りである。

第50図121・122は23号土塚出土の土器である。121は回転糸切りによって切り離された坏の底部端の粘土をつまみあげて低い台を形成するいわゆる引出し高台を有する。この種の高台をもつ土師器の底部破片は71、74、77、79号の各住居跡と128号土塚から出土しており、赤焼土器の同様な底部破片は71号住居跡、108号土塚、114号溝跡から出土している。122は回転糸切りの底部をもつ須恵器の坏である。

123は27号土塚から出土した格子目タタキ、青海波アテの須恵器壺の体部破片である。

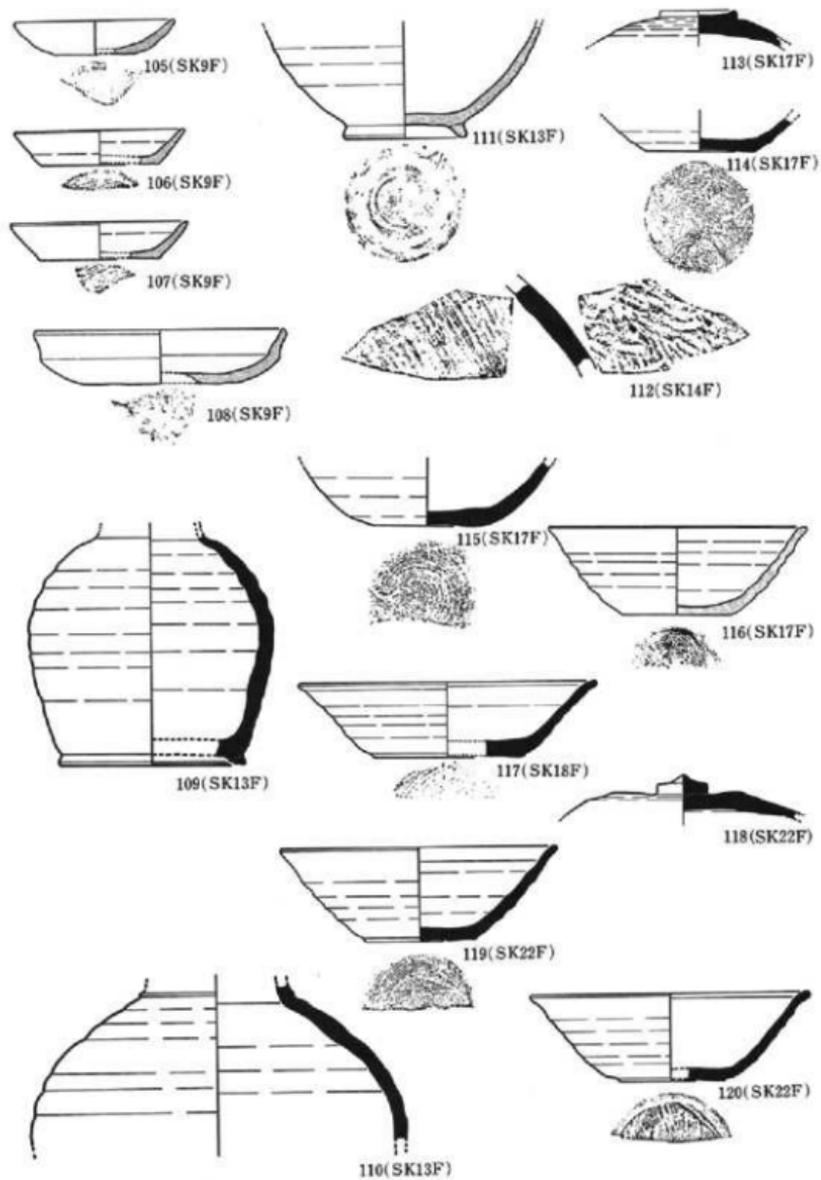
124～126は29号土塚から出土した土器である。124は体部中央に最大径のある小形の土師器甕である。内外面とも刷毛目調整が施された後、口頭部にヨコナデが施されている。125は回転糸切りの須恵器坏、126は体部が球形になるロクロ整形の甕である。

127は31号土塚から出土した底径の小さい回転糸切り底部となる須恵器の坏である。

128～131は32号土塚から出土した土器である。128は器高の高い、129は低い回転糸切りの底部をもつ須恵器坏で、130は平行タタキ、平行アテの甕である。131は赤焼土器の坏である。32号土塚からは80片の供膳形態の土器片が出土しているが、その割合は土師器が6%、須恵器が78%、赤焼土器が16%となり、12片の須恵器坏、高台付坏の底部破片はすべて回転糸切りとなる。

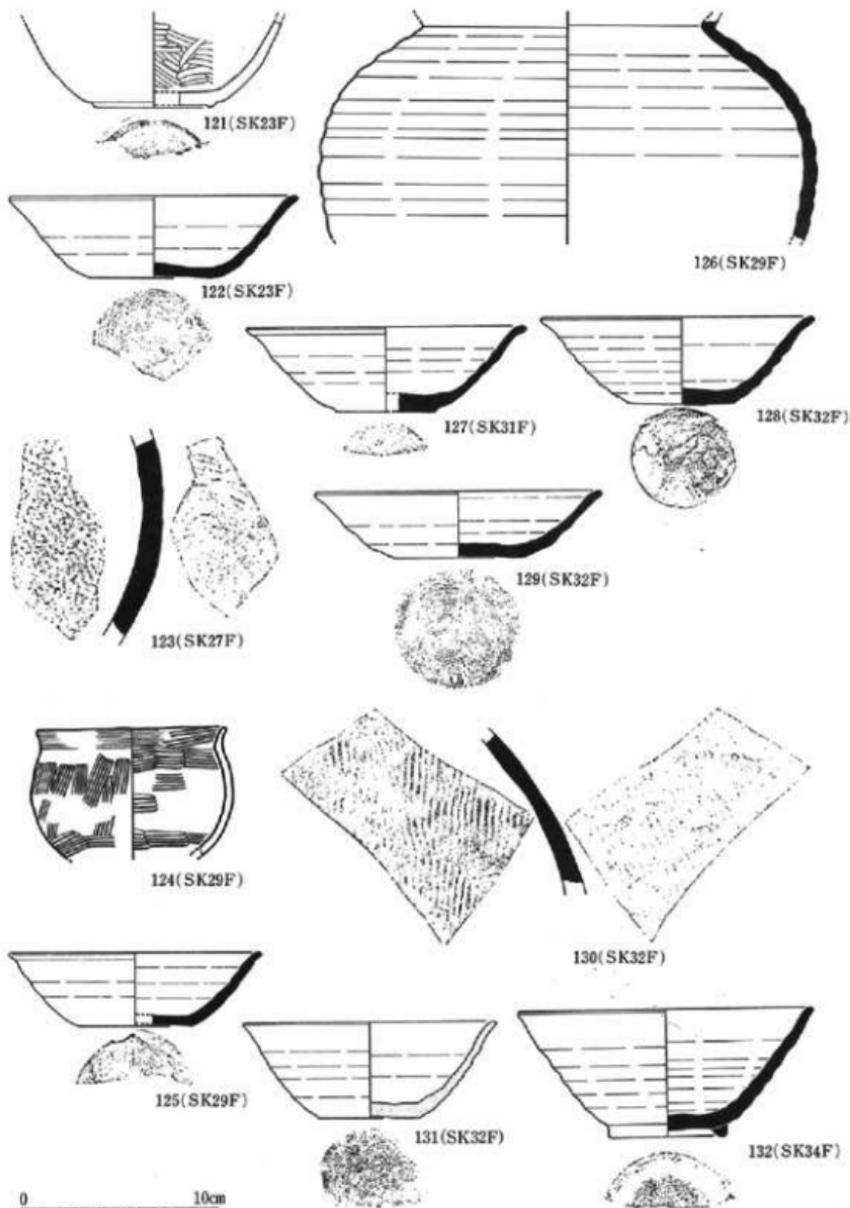
132は34号土塚から出土した回転糸切り痕をもつ須恵器の高台付坏である。急角度で立上ってそのまま直線的に外傾する器形となる。

第51図133は38号土塚から出土した須恵器壺の体部破片である。外面は平行タタキ、内面

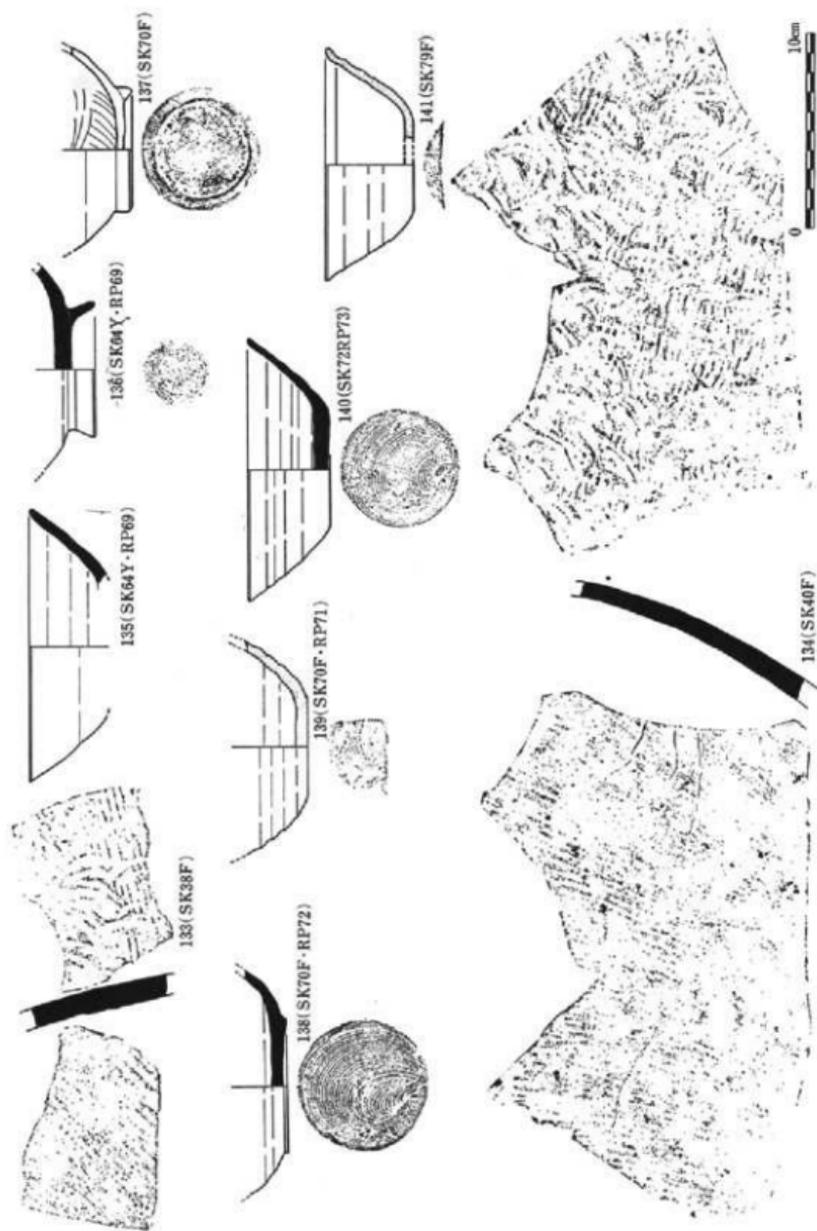


0 10cm

第49図 出土遺物 (13)



第50図 出土遺物 (14)



第51図 出土遺物 (15)

は上部が青海波、下部が平行アテとなっている。

134は40号土塚から出土した須恵器大甕の体部破片である。外面に平行タタキ、内面にやや乱れた青海波アテと、下半にはそれの上から平行アテが認められる。

135、6は64号土塚から出土した須恵器である。136は「ハ」の字形の高い台の付く高台付坏で、底部には回転糸切り痕が残る。135はこれとは別個体の坏である。

137～139は70号土塚から出土した土器である。137は土師器の高台付坏である。底部切り離しはナデにより不明である。138は内湾気味に立上る回転糸切りの須恵器坏である。139は赤焼土器坏である。

140は72号土塚から出土した須恵器の坏で、底部は回転糸切りである。本土塚からは38片の供膳形態土器片が出土しているが、その割合は土師器5%、須恵器84%、赤焼土器11%となる。須恵器坏の底部破片7点はすべて回転糸切りである。

141は79号土塚から出土した赤焼土器坏である。口径は小さいが器高の高い器形となる。

第52図142は106号土塚から出土した赤焼土器の甕である。口径の方が器高の数値より大きいずんぐりした器形となり、体部下半にはヘラケズリが施されている。口縁部は短かく強く外反し、口唇端が上方につまみ上げられて段が形成されている。

143は108号土塚から出土した須恵器甕の体部破片である。外面には平行タタキの後カキメが施され、内面は格子目のアテとなっている。

144は119号土塚から出土した回転糸切りの須恵器坏で、底径は小さく、内湾しながら立上っている。

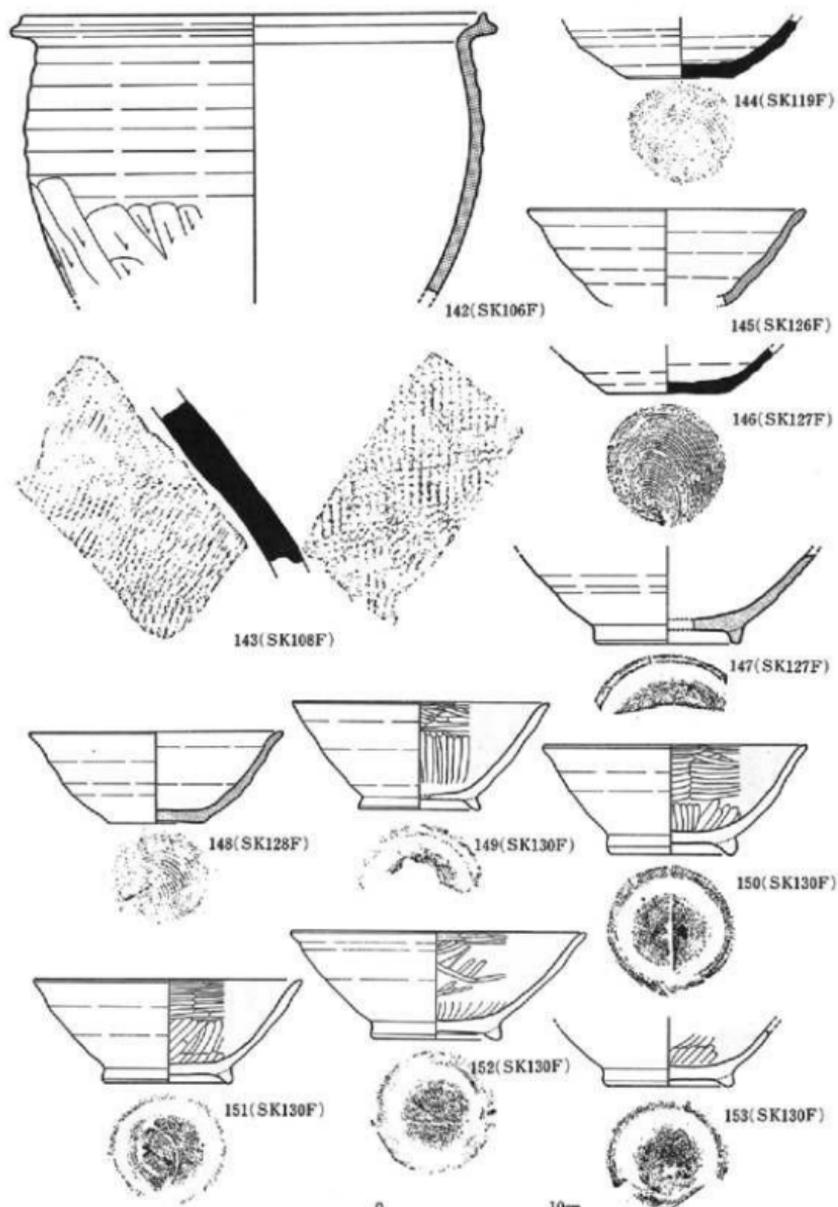
145は126号土塚から出土した赤焼土器の坏で底部を欠いている。本土塚からは35片の供膳形態の土器片が出土しており、土師器が20%、須恵器が11%、赤焼土器が69%である。

146・7は127号土塚から出土した土器である。146は回転糸切りの底部から直線的な立上りとなる須恵器の坏、147は内面がナデで平滑に仕上げられた赤焼土器の高台付坏である。

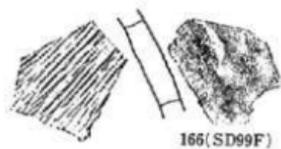
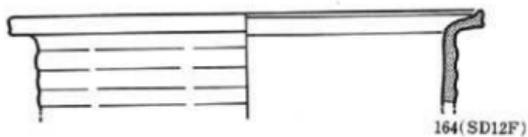
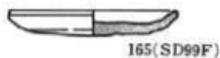
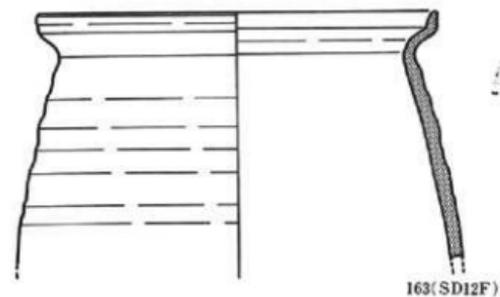
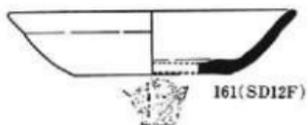
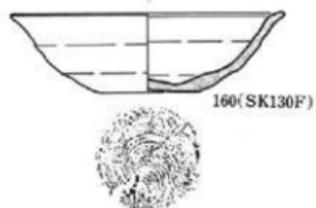
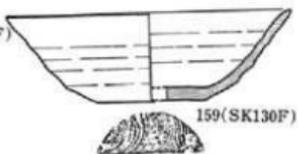
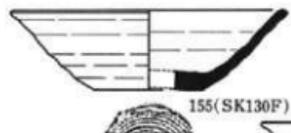
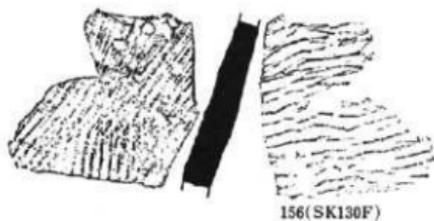
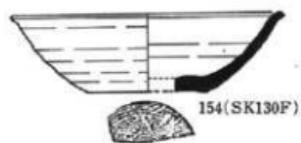
148は128号土塚から出土した赤焼土器の坏である。本土塚からは91片の供膳形態土器片が出土しているが、その割合は土師器が7%、須恵器が45%、赤焼土器が48%となっている。須恵器坏の底部破片3点は回転糸切りである。

149から第53図160までは130号土塚から出土した土器であり、本土塚からは、この他216片の土器片が出土しており、本遺跡で検出した土塚のなかでは最も遺物量が多い。

149～153は土師器の高台付坏である。152は口径が大きく、開く器形となるが、他は若干の量差はあるが、器形はほとんど差が認められない。底部は高台接着の際に切り離しの痕跡がナデによって消されている。内面のミガキは体部上半は横方向の、体部下半から底部は放射状となる。154・5は須恵器の坏で154は内湾気味に立上り、155は直線的に外傾す



第52図 出土遺物 (16)



第53図 出土遺物 (17)

るが、法量差はほとんどない。両者とも回転糸切りである。156は須恵器甕の体部破片で格子目ふうタタキ、平行アテの組み合わせとなる。157～160は赤焼土器の坏である。157は口径が小さく器高の高い器形となるが、他は口径が大きく器高の低い器形となる。破片数216の86%にあたる187片が供膳形態土器であり住居跡内の遺物に比べて供膳形態の割合が高い。この割合は、土師器が28%、須恵器が14%、赤焼土器が58%となっている。

#### 4) 溝跡出土の土・陶器 (第53図161～166、表6、13)

本遺跡で検出した10条の溝跡のうち遺物が出土したのは表13に示した6条の溝跡と、11号溝跡であるが、このうち11号溝跡からは平安時代の土器片に混って近世陶器片が出土しているため、ここでは除外した。このうち図示可能なものを161～166に示した。

161～164は12号溝跡から出土した土器である。161は回転ヘラ切りの須恵器坏、162は格子目ふうタタキ、青海波アテの甕である。163は体部が大きくふくらむ赤焼土器の甕、164は口縁部に最大径のある甕である。12号溝跡から回転糸切りの須恵器底部破片が3片出土している。

165・6は99号溝跡から出土した赤焼土器の小形皿で、これと共伴して条線状タタキ無文アテの須恵器系中世陶器が出土している。

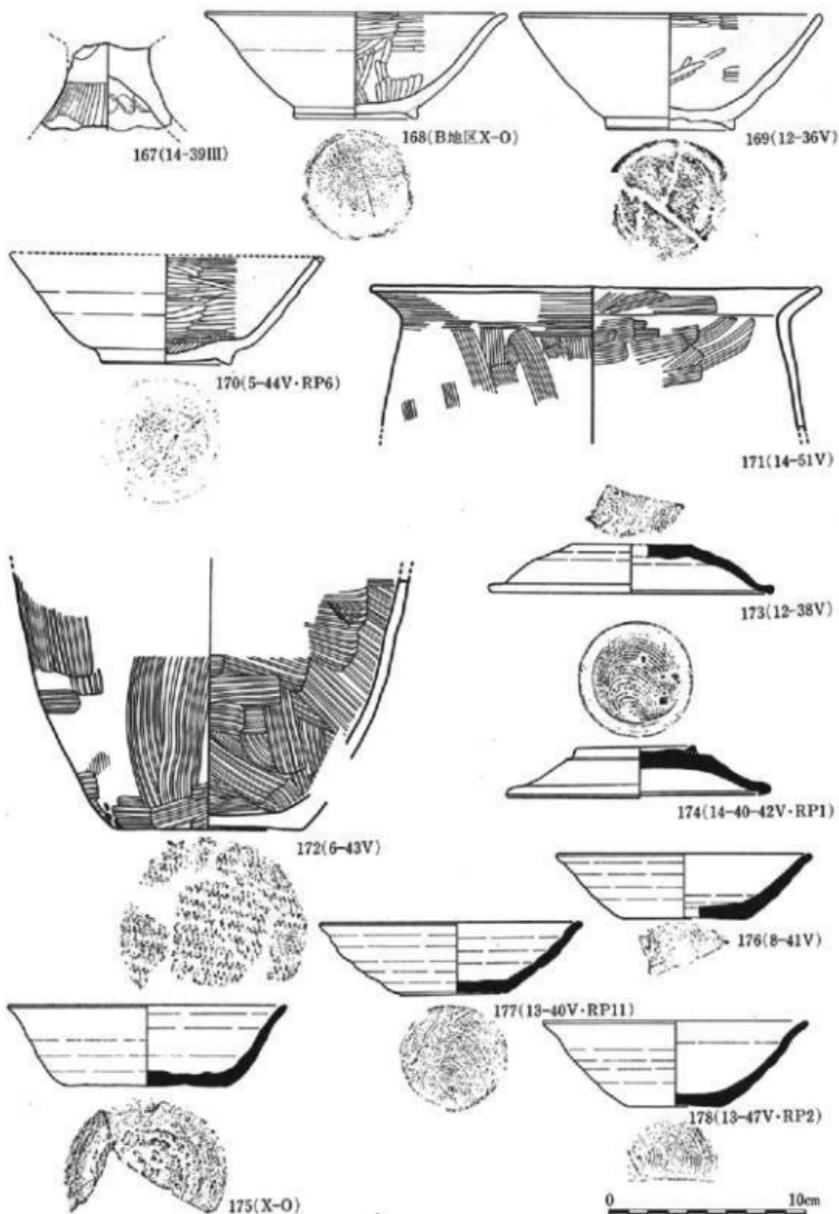
#### 5) 遺構外出土の土・陶器 (第54～57図167～213、表6～7)

平箱にして61箱の遺物総量の約半数にあたる32箱が包含層から出土しているが、その多くは破片である。ここでは図示可能な土器・陶器を取りあげた。

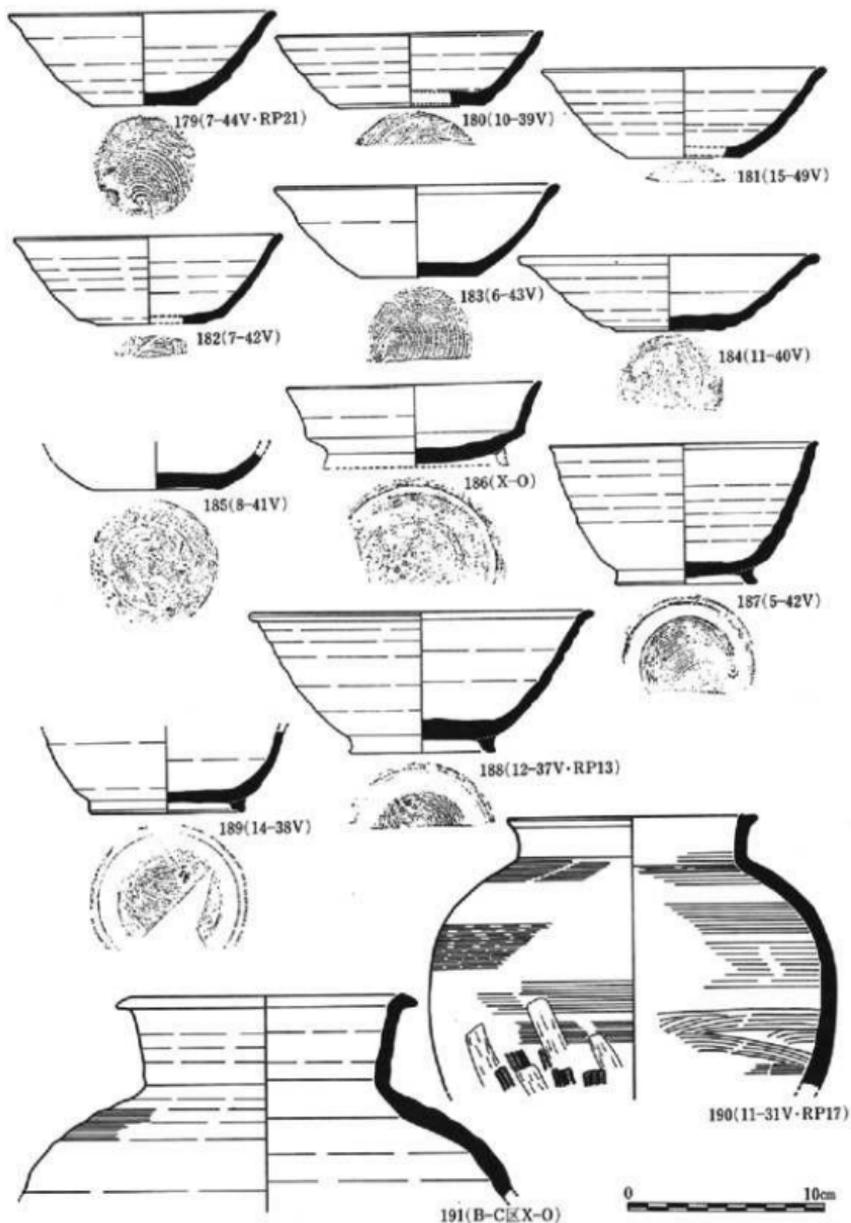
167は土師器の高坏である。脚部外面にヘラミガキが施され、内面には指頭圧痕が残る。古墳時代の土器であるが、上層部から出土しており、後世の流れ込みであろう。

168～170は土師器の高台付坏である。168・9は付高台であるが、170はロクロから切り離した後、底部端をつまみ上げて高台を作出している。168には回転糸切り痕「+」印のヘラ描きが残る。171・172は土師器甕である。内・外面とも刷毛目調整が施され、171の口縁部外面にはヨコナデが施されている。また、172の底部には、縦糸の間隔の狭いむしろ痕が残されている。

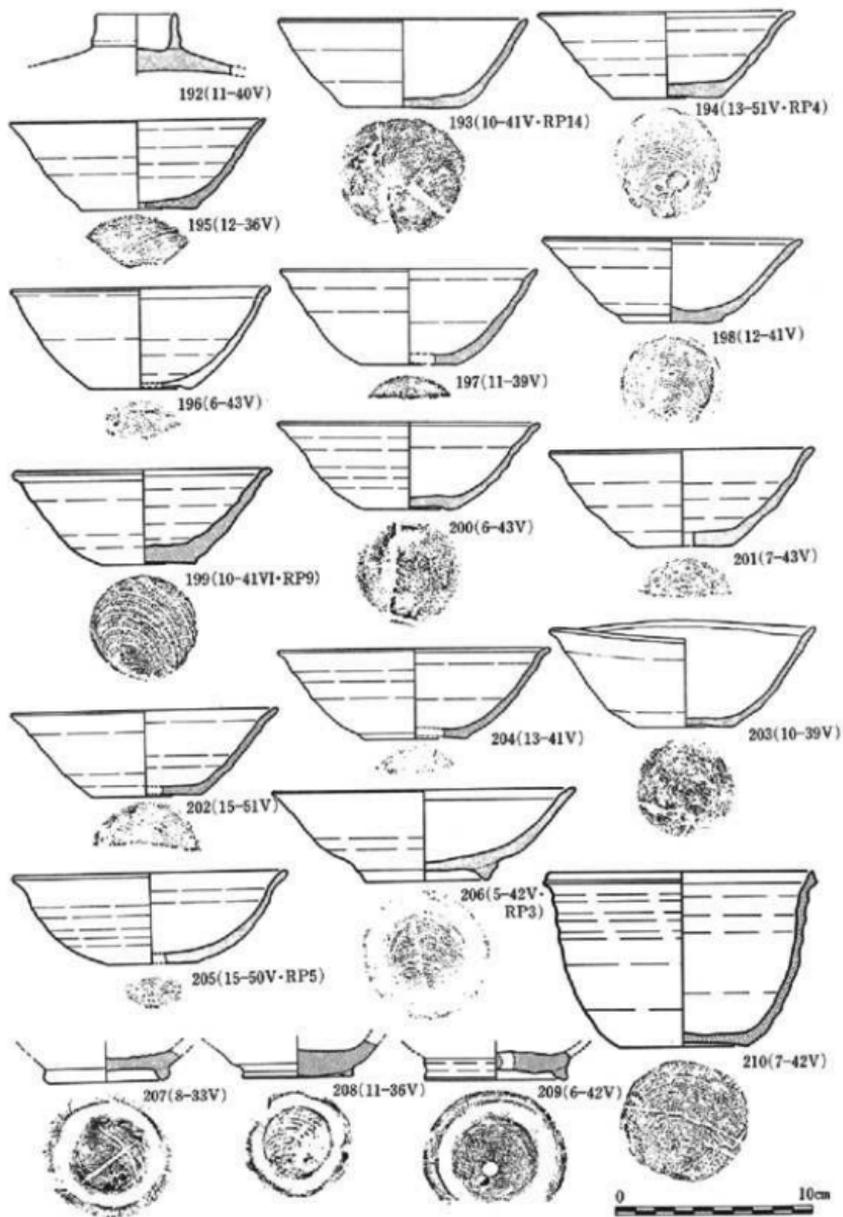
173～174は須恵器の坏蓋である。173はつまみがなく、174には天井部と体部の境界をつまみ上げたりんぐ状のつまみがつけられている。両者とも回転糸切りである。175はヘラ切りの坏で形態的には85・86号住居跡出土のものに似る。176～185は回転糸切りの坏である。器形は、比較的急角度で立上って器高が高くなるもの(178・9、181～183)、同じく低いもの(180)、浅い角度で立上って器高が低いもの(176・7、184)の三者がある。186は体部下半で折れ曲がって口縁に達するいわゆる稜境である。底部は回転ヘラである。重機で表土を削いだ際出土したものである。187～189は須恵器の高台付坏である。いずれも急角



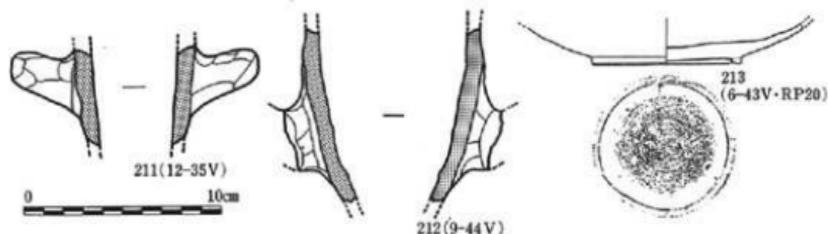
第54图 出土遺物 (18)



第55図 出土遺物 (19)



第56図 出土遺物 (20)



第57図 出土遺物 (21)

度で立上る身の深い器形となる。190・191は須恵器の小形甕である。190は直立する短い頸部に球形の体部となり、体部上半はロクロ整形となるが、下半には格子目ふうタクキが残り、ヘラケズリがこれらを切っている。

192は赤焼土器の蓋とみられる資料である。高いリング状のつまみがついている。193～205は坏である。口径は127mm～140mm、器高は44～53mmの間におさまるもので、130号土壇にある器高の低い坏はない。206～209は高台付坏である。206は内面中央部からゆるやかなカーブを描いて立上る塊状の器形となるが他は急角度で立上がる様相を示している。206～208の底部は回転糸切りで三者に「+」のヘラ描きがある。209の底部には径5×7mm程度の焼成前の穿孔がある。210は口径154mmの中形の甕であるが器高は低い。底部に回転糸切り痕が残る。211・2は取手付甕の取手部分である。

213は本遺跡で出土した唯一の灰釉陶器の皿である。外面下半と底部外面は回転ヘラケズリが施され、内面に緑灰色の釉がかかっている。10世紀前半とされる黒笹90窯式(斎藤編1983)のものであろう。

#### 6) 鉄製品・石製品 (第58図 214～221)

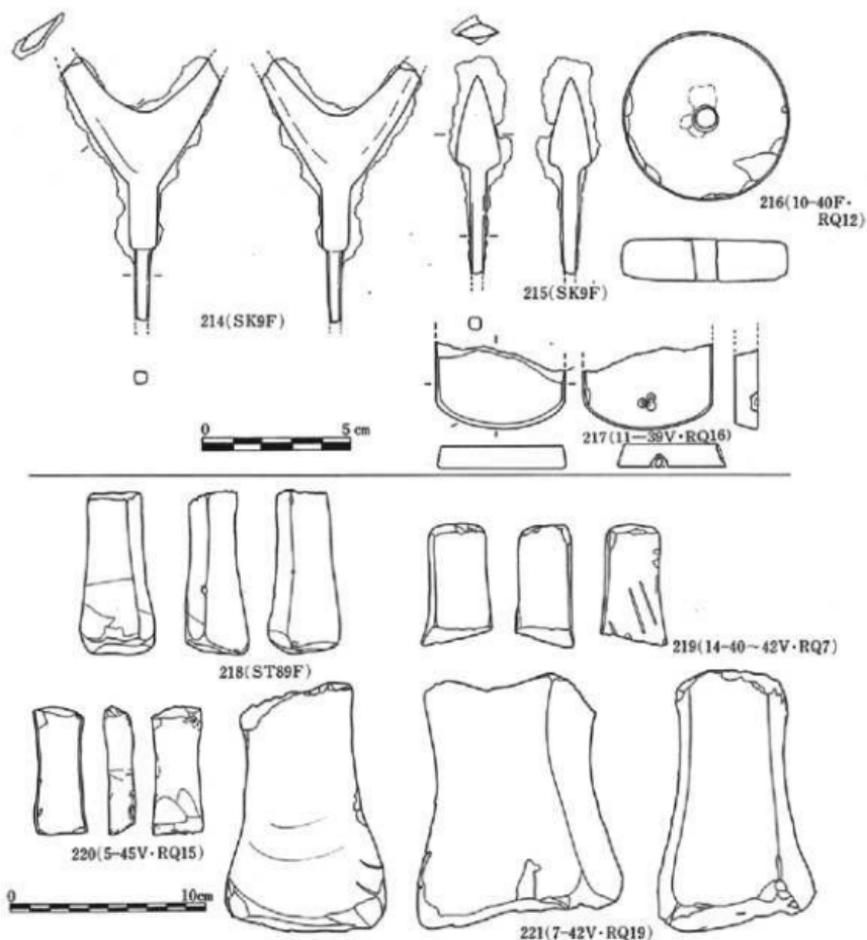
214・215は9号土壇から出土した鉄鏃である。214は雁股で、基部側と両先端が欠損する。現存長90mmで刃部の最大厚は4mmをはかる。215は錆のため原形が損なわれている。9号土壇からは小形皿を多出しており、これに似た皿が須恵器系中世陶器と99号溝跡で共伴している。したがって9号土壇も中世に降る可能性がきわめて高い。この鉄鏃もおそらく中世のものであろう。

216は石製の鈎垂車である。直径が56mm前後、厚さ13mmをはかり、中央に径7～8mmの孔が穿たれている。

217は石帯である。粘板岩製で表面と側面は良く磨かれて光沢がある。幅44mm、厚さ8mmをはかり、裏面には径3mm程の孔が3ヶ所認められるが、このうち、右側の2個が最初の

セットで、破損後に左側から穿たれた孔が使われたとみられる。

218～221は砥石である。89号住居跡から出土した218は5面の砥磨面をもち、断面形は五角形を示す。219～221は4面の砥磨面をもち、断面形は四角形となっている。これらの砥石のうち、218と220は肌理の細かい泥岩が使われており、219、221は砂岩系の石材が使われている。前者は仕上砥、後者が荒砥の部類に入ろう。



第58図 出土遺物 (22)

表一 2 土器計測表(1)

標 号	遺 物 番 号	器 種	計 測 値 (m/m)			底 部 切 離	調 整 方 法		出 土 地 点 層 位		
			口 径	底 径	器 高		外 面	内 面			
37	1	土師器	甕	215				刷 毛 目	刷 毛 目	ST71F	
	2	須恵器	坏	140				ロ ク ロ	ロ ク ロ	#	
	3			68			圓・糸	#	#	#	
	4			143			#	#	#		
	5	高台付坏		73			圓・糸・付台	#	#	#	
	6			77			#	#	#		
	7	赤焼土器	坏	132	56	44	圓 糸	#	#	#	
	8			140	65	45	#	#	#	#	
	9			140	(58)	(50)	#	#	#	#	
	10	須恵器	坏	131	55	40	#	#	#	ST73F (PR74)	
	11			140	56	42	#	#	#	# Y (RP75)	
	12		甕					格子目ふりタタキ	平 行 ア テ	# F	
	13	赤焼土器	甕	220				ロ ク ロ	ロ ク ロ	# F	
38	14	土師器	坏	136	57	47	圓・糸	ロ ク ロ	ミガキ・黒色処理	ST74F	
	15		甕	147	70	132	ナ デ	刷 毛 目	刷 毛 目	# EL (RP76)	
	16	須恵器	甕					格子目タタキ	青 海 波 ア テ	# F	
	17	土師器	甕		88		ナ デ	刷 毛 目	刷 毛 目	ST75F	
	18	須恵器	坏	140	50	47	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ST75F (RP68)	
	19			144	(56)	(43)		#	#	#	# Y
	20	赤焼土器	甕		66			#	#	# F	
21	柄		476				ロクロ・ケズリ	ロクロ・カキメ	#		
39	22	須恵器	甕					ロクロ・波状文	ロ ク ロ	ST76F	
	23						#	#	#		
	24							格子目ふりタタキ	青 海 波 ア テ	#	
	25	赤焼土器	高台付坏	甕	108		44	ロクロ・ヘラナデ	ロ ク ロ	# (RP67)	
	26			坏	130	54	45	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	# EL (RP77)
	27					80		圓・糸・付台	#	ロ ク ロ ナ デ	#
	28			甕	151	80	123	圓・糸	#	ロ ク ロ	# (RP77)
29		甕	208				ロクロ・ケズリ	ロクロ・カキメ	#		
40	30	土師器	蓋	82		43		ミガキ・黒色処理	ミガキ・黒色処理	ST77・73・ 75・76F	
	31	須恵器	坏	128	44	34	圓・糸	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ST77Y (RP79)	
	32			140	60	46	#	#	#	# (RP78)	
	33	須恵器	甕	504				波状文・格子目 よりタタキ	ロクロ・青海波アテ	# F (RP82)	
	34							平 行 ク タ キ	青 海 波 ア テ	#	
	35			坏		56		圓・糸	ロ ク ロ	ロ グ ロ	# (RP80)
	36	赤焼土器	高台付坏	140	68	61	圓・糸・付台	#	#	# Y (RP83)	
	37			152	62	63	不明付台	#	ロクロ・ナデ	# F (RP81)	
	38	土師器	坏	125	45	48	圓・糸	ロ ク ロ	ミガキ・黒色処理	ST81F	
	39	須恵器	蓋					ロクロ・カキメ	ロ ク ロ	#	
	40								格子目ふりタタキ	青 海 波 ア テ	#

表-3 土器計測表(2)

挿入 番号	遺物 番号	器 種	計測値(m/m)			底部 切離	調整技法		出土地点 層位				
			口 径	底 径	器 高		外 面	内 面					
41	41	須恵器	坏	134	78	40	凹・ヘラ	ロク	ロ	ロキロ・ナデ	ST85P (RP31)		
	42			137	72	46	#	#	#	#	# (RP26)		
	43		140				ロクロ・ケズリ	ロク	ロ	#			
	44		153				梶子目ふうタタキ	青海波	アテ	#			
	45	45	赤土器	蓋	154		30	凹・ヘラ	ロク	ロ	ロク	ロ	# (RP30)
	46	46		高台付坏	141	88	56	凹・ヘラ・付首	ロクロ・ケズリ	#	#	# (PR33)	
	47	47		奘	84			静・糸	ロクロ・ナデ	#	#	# (RP29)	
	48	48						タタキ・ロク ロ・ケズリ	ロク	ロ	ロ	ロ	# EL (RP25)
42	49	土師器	奘		76		ナ	デ	刷毛目・ナデ	ヘラ	ナデ	ST86EL (RP42)	
	50				78		#		刷毛目	刷毛目	#	# (RP42)	
	51				260			ヘラナデ刷毛目	刷毛目	#	# (RP43)		
	52	須恵器	坏	135	66	40	凹・ヘラ	ロク	ロ	ロク	ロ	# (RP37)	
	53			135	93	38	#	#	ロク	ロ	ナデ	# (RP35)	
	54			80			#	#	ロク	ロ	ロ	# Y (RP34)	
	55			146	77	45	凹・糸	#	#	#	#	# EP (RP53)	
	56			115	54	83	静・糸	#	#	#	#	# FY(RP 36-42-43)	
43	57	赤土器	奘	217				タタキ・ロク	ロ	ロ	ロ	# EL (RP41)	
	58			218				ロクロ・ケズリ	ロクロ	刷毛目	#	# (RP25)	
	59			234				#	ロクロ	ナデ	#	# (RP35)	
	60			220				#	ロク	ロ	ロ	# (RP41)	
	61			230				タタキ・ロク ロ・ケズリ	ロクロ	刷毛目	#	# (RP35)	
	62			216	88	351		ロク	ロ	ケズリ	#	# (RP 35-36-43)	
	63			219	87	358		#	#	#	#	# (RP36)	
	64			64	赤土器	奘	218	(94)	(350)		タタキ・ロク ロ・ケズリ	刷毛目	ナデ
65	65	須恵器	蓋	168					ロク	ロ	ロク	ロ	ST88F (RP39)
66	66			坏		136	58	39	凹・糸	#	#	#	# (RP40)
67	67					154	50	49	#	#	#	#	# (RP39)
68	68		蓋	150			32		#	#	#	ST90F (RP48)	
69	69							ロク	ロ	ケズリ	#	#	
70	70	坏		64			凹・糸	ロク	ロ	#	#		
71	71	赤土器	奘	170					#	#	#	# Y	
72	72			202					#	#	#	#	
73	73			218					#	#	#	# F	
74	74						(丸底)	ロク	ロ	ケズリ	ロク	ロ	刷毛目 # (RP47)
45	75	75	坏	145	60	46	凹・糸	#	#	#	ST49IED (RP49)		
	76	76	須恵器	坏	135	51	43	#	#	#	#	ST90EL (RP52)	
	77	77			140	57	45	#	#	#	#	# F (RP44)	
	78	78			142	61	43	#	#	#	#	# (RP46)	
	79	79			奘				梶子目ふうタタキ	青海波	アテ	#	
	80	80	赤土器	蓋		60		凹・糸	ロク	ロ	ロク	ロ	# EL (RP51)

表-4 土器計測表(3)

押洞 番号	遺物 番号	器 種		計 測 値 (m/m)			底 部 切 離	調 整 技 法			出土地点 層 位										
				口 径	底 径	器 高		外 面	内 面												
45	81	赤褐色土器	甕		80		圓・糸	口	ク	口	ク	口	ST92F (RP45) # EL (RP50)								
	82			150	76		#	#	#	#	#	#									
46	83	土師器	甕	245				刷	毛	目	刷	毛	目	ST93EL (RP61) # EP (RP56) # EL (RP55)							
	84	須恵器	坏	132	60	32	圓・糸	口	ク	口	ク	口	# Y (RP57)								
	85			143	57	41	#	#	#	#	#	#	# EX (RP62)								
	86			132			#	#	#	#	#	#	# Y								
	87			136			#	#	#	#	#	#	# EL (RP57)								
	88			159			#	#	#	#	#	#	# EX								
	89			186			#	#	#	口	ク	口	刷	毛	目	# EL (RP58)					
	90			190			#	#	#	口	ク	口	#	# EX (RP62)							
	91			190			#	#	#	口	ク	口	刷	毛	目	# (#)					
	92			赤褐色土器	甕	200			#	口	ク	口	#	#	# Y						
	93			須恵器	甕	214			#	#	#	#	#	#	# EX (RP62)						
	94					216			口	ク	口	ケ	ズ	リ	口	ク	口	刷	毛	目	# EL (RP58) # Y (RP54)
95	219	(39)	(345)			#	口	ク	口	#	#	#	# Y								
96	243					#	#	#	#	#	#	#	# EX (RP62)								
97	244					#	#	#	#	#	#	#	# EX (RP62)								
98	384					口	ク	口	ケ	ズ	リ	#	# EX (RP62)								
48	99	須恵器	蓋					口	ク	口	ク	口	SB94								
	100	土師器	高台付坏	141	60	56	圓・糸・付台	口	ク	口	ナ	デ	ミ	ガ	キ	・	黒	色	結	理	SB96 (RP63)
	101	須恵器	蓋					口	ク	口	ケ	ズ	リ	口	ク	口	#				
	102		蓋	121				口	ク	口	カ	キ	メ	口	ク	口	カ	キ	メ	#	
	103	赤褐色土器	坏	134				口	ク	口	ク	口	ク	口	#						
	104			162			#	#	#	#	#	#	#	#							
49	105	赤褐色土器	甕	80	40	18	ナ	デ	口	ク	口	ク	口	ク	口	SK9F					
	106			85	30	18	圓・糸	#	#	#	#	#	#	#							
	107			90	60	20	#	#	#	#	#	#	#	#							
	108			125	80	28	ナ	デ	#	#	#	#	#	#							
	109	須恵器	甕			94	#	#	#	#	#	#	SK13F								
	110						#	#	#	#	#	#	#								
	111	赤褐色土器	高台付坏	62			圓・糸・付台	#	口	ク	口	ナ	デ	#							
	112	須恵器	甕					平	行	タ	タ	キ	青	濁	波	ア	チ	SK14F			
	113		蓋					口	ク	口	ケ	ズ	リ	口	ク	口	SK17F				
	114	須恵器	坏	56			圓・糸	口	ク	口	#	#	#	#							
	115			56			#	#	#	#	#	#	#	#							
	116	赤褐色土器	坏	131	55	47	#	#	#	#	#	#	#								
117	須恵器	坏	152	74	38	#	#	#	#	#	#	#	SK18F								
118		蓋				圓・ヘ	ラ	#	#	#	#	#	SK22F								
119		坏	140	56	49	圓・糸	#	#	#	#	#	#	#								
120		142	54	45	#	#	#	#	#	#	#	#	#								

表-5 土器計測表(4)

埴田 番号	遺物 番号	器種	計測値(m/m)			底部 切離	調整技法		出土地点 層位	
			口径	底径	器高		外 面	内 面		
50	121	土師器 高台付坪		58		凹・糸・引台	口クロ・ナデ	ミガキ・黒色処理	SK23F	
	122	須恵器 壺	坪	146	65	42	凹・糸	口クロ	口クロ	
	123							格子目タタキ	青海波アテ	SK27F
	124	土師器 壺	96				刷毛目	刷毛目	SK29F	
	125	須恵器 坪	坪	128	58	39	凹・糸	口クロ	口クロ	
	126		壺							
	127			141	50	44	凹・糸			SK31F
	128			134	53	55	〃			SK32F
	129			145	64	34	〃			〃
	130	壺					平行タタキ	平行アテ	〃	
	131	赤焼土器 坪	128	53	48	凹・糸	口クロ	口クロ	〃	
	132	高台付坪	坪	150	60	66	凹・糸・付台			SK34F
	133		壺					平行タタキ	青海波・平行アテ	SK38F
51	134	須恵器 坪							SK40F	
	135		坪	140				口クロ	口クロ	SK64Y (RP69)
	136	高台付坪		70		凹・糸・付台			〃	
	137	土師器 高台付坪		60		不明付台		ミガキ・黒色処理	SK70F	
	138	須恵器 坪		68		凹・糸		口クロ	〃 (RP72)	
	139	赤焼土器 坪		50		〃			〃 (RP71)	
	140	須恵器 坪	135	60	42	〃			SK72F (RP73)	
	141	赤焼土器 坪	120	47	45	〃			SK79F	
52	142	赤焼土器 壺	234				口クロ・ケズリ	口クロ	SK106F	
	143	壺					平行タタキ・タタキ	格子目アテ	SK108F	
	144	須恵器 坪		52		凹・糸	口クロ	口クロ	SK119F	
	145	赤焼土器 坪	140	(60)	(49)		口クロ	口クロ	SK126F	
	146	須恵器 坪		60		凹・糸			SK127F	
	147	高台付坪		75		不明付台		口クロ・ナデ	〃	
	148	赤焼土器 坪	128	50	47	凹・糸		口クロ	SK128F	
	149	土師器 高台付坪		130	60	58	不明付台	口クロ	ミガキ・黒色処理	SK130F
	150			134	62	56	〃			〃
	151			136	63	53	〃			〃
	152			150	64	56	〃			〃
	153				65		〃			〃
	53	154	須恵器 坪	坪	140	60	40	凹・糸		口クロ
155		坪		140	56	41	凹・糸			
156		壺					格子目タタキ	平行アテ	〃	
157		赤焼土器 坪	坪	128	57	50	凹・糸	口クロ	口クロ	
158				142	50	41	〃			
159				145	55	46	〃			
160			148	50	41	〃				

表-6 土器計測表(5)

棟号	遺物番号	器種	計測値(m/m)			底部切離	調整技法		出土地点	層位			
			口径	底径	器高		外面	内面					
53	161	須恵器	坏	146	80	33	圓・ヘラ	ロク	ロ	ロク	ロ・ナゲ	SD12F	
	162		甗					格子目ようタタキ			青布波アテ	#	
	163	赤坂土器	甗	203				ロク	ロ	ロク	ロ	#	
	164			240				#		#	#	#	
	165		皿	86	58	13	ナゲ	#		#	#	SD99F	
	166		甗						糸線状タタキ			無文アテ	#
54	167	土師器	高坏					ミガキ			オサエ	14-39IIIb	
	168			154	62	54	目・糸・付台	ロク	ロ		ミガキ・黒色処理	B地区X-O	
	169		高台付坏	154	67	60	不明付台	ロク	ロ・ナゲ		#	12-36V	
	170			(160)	67	(56)	不明引台	ロク	ロ		#	5-44V (RP6)	
	171		甗	230				刷毛目			刷毛目	14-51V	
	172				98		むしろ痕	#		#	#	6-43V	
	173	甗		144	25	60	圓・糸	ロク	ロ	ロク	ロ	12-38V	
	174			132	59	34	目・糸・引出し	#		#	#	14-40~42 V (PR1)	
	175			142	80	43	圓・ヘラ	#		#	#	X-O	
	176			130	60	33	圓・糸	#		#	#	8-41V	
	177			133	55	36	#	#	#	#	#	13-40V (RP11)	
	178			135	50	44	#	#	#	#	#	13-47V (RP2)	
	179		坏		136	53	48	#	#	#	#	#	7-44V (RP21)
	180				136	72	38	#	#	#	#	#	10-39V
181		144		60	47	#	#	#	#	#	15-49V		
182	須恵器			144	63	45	#	#	#	#	#	7-42V	
183				145	60	47	#	#	#	#	#	6-43V	
184				154	52	39	#	#	#	#	#	11-40V	
185					65			#	#	#	#	8-41V	
186	高台付坏			130	(41)	80	圓・ヘラ・付台	#	#	#	#	X-0	
187				136	72	73	圓・糸・付台	#	#	#	#	5-42V	
188				176	73	73	#	#	#	#	#	12-37V (RP13)	
189					77			#	#	#	#	14-38V	
190		甗		127				タタキ・ロク ロ・テズリ			カキ	メ	11-31V (RP17)
191			152				ロク	ロ	ロク	ロ	B-C区X-O		
56	192	赤坂土器	甗									11-40V	
	193		坏		127	60	46	圓・糸	#	#	#	#	10-41V (RP14)
	194				130	55	45	#	#	#	#	#	13-51IV (RP4)
	195				130	58	45	#	#	#	#	#	12-36V
	196				130	50	53	#	#	#	#	#	6-43V
	197				130	50	50	#	#	#	#	#	11-39V
	198				131	50	44	#	#	#	#	#	12-41V
	199				131	48	48	#	#	#	#	#	10-41IV (RP9)
	200				134	53	44	#	#	#	#	#	6-43V

表-7 土器計測表(6)

採回 番号	遺物 番号	器 種	計 測 量 (m/m)			底 部 切 離	調 整 技 法			出土地点 層 位	
			口 径	底 径	器 高		外 面	内 面			
56	201	赤絵土器	坏	134	50	50	回・糸	口ク	口ク	口ク	7-43V
	202			136	54	44	〃	〃	〃	15-51V	
	203			136	52	50	〃	〃	〃	10-39V	
	204			138	54	47	〃	〃	〃	13-41V	
	205			140	48	46	〃	〃	〃	15-50V (RP5)	
	206	高台付罎		154	63	47	罎・糸・付台	〃	〃	5-42V (RP2)	
	207			58		〃	〃	〃	8-33V		
	208			60		〃	〃	〃	11-36V		
	209			72		〃	〃	〃	6-42V		
	210			罎	133	65	89	回・糸	〃	〃	7-42V
57	211	赤絵土器	取手付罎							12-35V	
	212									9-44V	
	213	反胎陶器	皿		75		不明付台	口クロ・ケズリ	口クロ・蓮軸	6-43V (RP20)	

表-8 破片集計表(1)

種類	部位	断面調整		特徴	ST71			ST73			ST74			ST75			ST76					
		外面	内面		F	EL	計	F	EL	計	F	Y	EL	計	F	Y	EL	計	F	EL	計	
土 環・高台付環	口縁部	ロクロ	ミガキ黒色		7		7						4			4	8		8			
		ミガキ黒色	ミガキ黒色																			
	体部	ロクロ	ミガキ黒色		5	2	7	1		1	2		1	3		1	1	10	2	12		
		ミガキ黒色	ミガキ黒色																			
	底面	ケズリ	ミガキ黒色																			
		糸切り	ミガキ黒色		3		3											1		1		
		糸切り付高台	ミガキ黒色		3	3	6	1		1									2		2	
		糸切り引出高台	ミガキ黒色		6	1	7					1	1	2								
	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ		1		1				1	1		2	1		1	2	7	7		
		ヨコナデ	刷毛目		1		1												1	1		
刷毛目		刷毛目																				
刷毛目・ナア		刷毛目・ナア		19	19	4	4	15	1	5	21	29	2	2	33	90	20	110				
体部	ロクロ	ミガキ黒色											1		1	3		3				
	ナデ																					
	むしろ直								1		1					5		5				
土 環・高台付環	口縁部	ロクロ	ロクロ		1		1															
		ロクロ	ロクロ					1		1				2		2	2	1	3			
	体部	ケズリ	ロクロ																			
		つまみ																			1	1
	口縁部	ロクロ	ロクロ		41	5	46	5	2	7	3	1	2	6	2		2	11	1	12		
		ロクロ	ロクロ		28	6	34	4	1	5	6		3	9	3		3	16	2	18		
		ハウ切り																				
		糸切り			13		13	3		3	2			2	1		1	6	6			
	底面	ハウ切り付高台																			1	1
		糸切り付高台			1		1															
不明付高台				3		3											1		1			
不明付高台																						
口縁部	ロクロ	ロクロ		1		1																
	ロクロ	ロクロ		2		2						2			2	2		2				
	ケズリ	ロクロ																		1	1	
	ナデ			3		3																
口縁部	ロクロ	ロクロ								1		1							4	4		
	格子目クタク	青海波アテ																				
	平行クタク	平行アテ					1		1										1	1		
	平行クタク	青海波アテ																				
底面	文	カキメ																				
	文	カキメ																				
土 環・高台付環	口縁部	ロクロ	ロクロ																			
		ロクロ	ロクロ																			
	体部	つまみ																				
		つまみ																				
	口縁部	ロクロ	ロクロ		19	3	22	7	2	9	4	1	2	7	7		2	9	30	14	44	
		ロクロ	ロクロ		14	4	18	6	6	12	19	3	4	26	14		2	16	57	11	68	
		糸切り			6	2	8				2	1		3	6			6	14	2	16	
		糸切り付高台										1		1								
	底面	糸切り引出高台			2		2															
		不明付高台																				3
不明付高台																						
不明付高台																						
土 環・高台付環	口縁部	ロクロ	ロクロ	有段	2		2	4	1	5	5		5	1		1	7	7	14			
		ロクロ	ロクロ	有段																		
	体部	ロクロ	ロクロ		17		17	3	1	4	14	7	10	31	11		11	72	13	85		
		ロクロ	刷毛目・ナア																			
		クタク	クタク																			
		クタク	クタク																			
	底面	クタク	クタク		23	4	27	8	2	10	13	5	8	26	16		16	46	10	56		
		クタク	クタク																			
口縁部	糸切り			2		2	1						2			2	5	1	6			
	ナデ			3	1	4	1					1	1	1		1	2		2			
口縁部	ロクロ	ロクロ	小形																			
	ロクロ	ロクロ	小形																			

表-9 破片集計表(2)

種類	部位	断面調整		特徴	ST77		ST81	ST85			ST86			ST87	ST88	ST89	ST90					
		外 面	内 面		F	EL	F	F	Y	EL	計	F	Y	EL	計	Y	F	F	F	Y	計	
土	口縁部	ロ ク ロ	ミガキ黒色		4	4	3	1		1												
		ミガキ黒色	ミガキ黒色																			
	体部	ロ ク ロ	ミガキ					1		1												
		ロ ク ロ	ミガキ黒色		5	2	7	2														
	底部	ミガキ黒色	ミガキ黒色																			
		ケズリ	ミガキ黒色																			
		糸切り	ミガキ黒色		1	1	2															
		糸切り付高台	ミガキ																			
	器	口縁部	糸切り付高台	ミガキ黒色		1	1	1		1												
			糸切り引出高台	ミガキ黒色		1	1														1	1
体部		ヨコナデ	ヨコナデ		4	4	1	2		2	3		3		2							
		ヨコナデ	刷毛目		1	1		2	1	3												
体部		刷毛目	刷毛目						1	1												
		刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ		59	12	71	13	28	7	16	51	19	1	1	21			2	4	4	
瓶		口縁部	ロ ク ロ	ミガキ黒色																		
			ナデ			1	1															
		体部	ナデ																			
			むしろ直																			
	口縁部	ロ ク ロ	ロ ク ロ																		2	
		ロ ク ロ	ロ ク ロ										1		1							
	体部	ケズリ	ロ ク ロ										1		1							
		つみみ																				
	瓶	口縁部	ロ ク ロ	ロ ク ロ		22	1	23		2	2	4	2	1	3		2	3		3	3	
			ロ ク ロ	ロ ク ロ		9		9	2				2			2	1		3		3	
体部		ヘタ切り						2		1	3	1	1									
		糸切り			5	5	1										3					
底部		ヘタ切り付高台																				
		糸切り付高台			1	1	2	1														
瓶		口縁部	ロ ク ロ	ロ ク ロ									1		1							
			ロ ク ロ	ロ ク ロ		1	1									1						
		体部	ケズリ	ロ ク ロ		2	2		1		1											
			ナデ																			
	口縁部	ロ ク ロ	ロ ク ロ																			
		格子日タタキ	青海波アテ																			
	体部	平行タタキ	平行アテ		1	1	1		1													
		平行タタキ	青海波アテ																			
	瓶	口縁部	ロ ク ロ	ロ ク ロ					1		1											
			ロ ク ロ	ロ ク ロ		1	1															
体部		つみみ																				
		つみみ																				
口縁部		ロ ク ロ	ロ ク ロ		28	1	29	12	1	1	2		2						3	3		
		ロ ク ロ	ロ ク ロ		33	6	39	15	5	5	2	1	3				1	2	4	6		
体部		糸切り			8	3	11	7														
		糸切り付高台			3	3																
土		口縁部	ロ ク ロ	ロ ク ロ	有段	9	1	10	3	9	2	1	12	4	2	2	8	1		7	3	10
			ロ ク ロ	ロ ク ロ	外反					2	2	1	3									
	体部	ロ ク ロ	ロ ク ロ		26	1	27	24	22	5	7	34	25	6	1	32	1	1	12	12	24	
		ロ ク ロ	刷毛目・ナデ								1	1					1					
	口縁部	タタキ・ロク	ロ ク ロ								1	1										
		ロク・ナズリ	ロ ク ロ		42	42	11	42	20	33	95	14		6	20	1	2		22	9	31	
	体部	ロク・ナズリ	刷毛目・ナデ		1	1	1	7	3		10	6	4	1	11			3	3	12	15	
		糸切り			1	1		1	1		2	1		1					1	1		
	口縁部	ナデ			3	3	3	1	2		3									1	4	5
		ナデ																				

表一10 破片集計表(3)

種類	部位	断面調整		特徴	ST91				ST92				ST93			SB	SB	SB	SK						
		外面	内面		RD	F	Y	EL	計	F	Y	EX	計	67	95	96	4	9	13	14	15	16			
土 高台付 環	口縁部	ロクロ	ミガキ黒色		2		1		1	10							11				2			1	
		ミガキ黒色	ミガキ黒色		6												2		1	5					
	体部	ロクロ	ミガキ														3								
		ロクロ	ミガキ黒色					2	1	3	4						1	21			9	1			
	底部	ミガキ黒色	ミガキ黒色																			2			
		ケズリ	ミガキ黒色								1														
		糸切り	ミガキ黒色								2														
		糸切り付高台	ミガキ		1																				
		糸切り引出高台	ミガキ黒色								2							2							
	環 溝	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ		1		4	1	5	1	3						1				1			
ヨコナデ			刷毛目					2	1	3		1						1				2			
体部		刷毛目	刷毛目		1																				
		刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ				1	4	3	8	15	27	2	44	5			10				5	1	1	
ナデ		ロクロ	ミガキ黒色															2							
		ナデ					1	1	2	4														1	3
		むしろ痕								1	1												1		
環 溝		口縁部	ロクロ	ロクロ								5	1	1	7			4							3
			ロクロ	ロクロ																					
		体部	ケズリ	ロクロ															1						
	つまみ													1		1									
土 高台付 環	口縁部	ロクロ	ロクロ		3	4		2	6	5	5			10			14	1			3			1	
		体部	ロクロ	ロクロ		4	2	2	2	6	7			7			10								
	底部	ヘラ切り																							
		糸切り				1	1		2	4	1			5			3					1			
		ヘラ切り付高台																							
		糸切り付高台			1																				
	不明付高台																	2							
		不明付高台																							
	環 溝	口縁部	ロクロ	ロクロ		4		2	2	3	1			4			3					14	1		
			体部	ケズリ	ロクロ		1																		
底部		ナデ																							
環 溝	口縁部	ロクロ	ロクロ														1								
		体部	格子タタキ	青銅被アテ													1								
	底部	平行タタキ	平行アテ																						
		平行タタキ	青銅被アテ															2				1			
溝	文	カキメ				1		1																	
土 高台付 環	口縁部	ロクロ	ロクロ																					3	
		体部	ロクロ	ロクロ																					
	つまみ																								
	環 溝	口縁部	ロクロ	ロクロ		20	2	2	2	6	11	1			12			2	38				5		
			体部	ロクロ	ロクロ		41	4	3	3	10	31	8			39	1	3	57				12		3
		底部	糸切り			17	1		2	3	13				13		2	29							
			糸切り付高台																2						
	不明付高台																								
		不明付高台									1			1			1	1				1			
環 溝	口縁部	ロクロ	ロクロ	有段		1	2	4	7	22	11	2	35				4								
		ロクロ	ロクロ	外段				1	2	3															
	体部	ロクロ	ロクロ		2	2	5	20	27	94	92	10	196				29					1			2
		ロクロ	刷毛目・ナデ							2			2												
		タタキ・ロケロ	ロクロ																						
		ロケロ・ナズリ	ロクロ		4	1	17	13	31	115	91	17	223				34						3	1	
ロケロ・ナズリ	刷毛目・ナデ		2	2	1	5	3	4	3	10					1	2									
底部	糸切り								7			7									1	1			
	ナデ									11	1	12				3								1	
環 溝	口縁部	ロクロ	ロクロ	小形																		4			
	体部	ロクロ	ロクロ	小形																		3			

表-11 破片集計表(4)

種類	部位	断面調整		特徴	SK	SK	SK	SK	SK	SK	SK	SK	SK	SK	SK	SK	SK	SK	SK	SK	SK	SK			
		外面	内面		17	18	22	23	24	25	27	28	29	30	31	32	33	34	38	39	39	40	41		
土	口縁部	ロク	ロ	ミガキ黒色		1	2				1	1	2	5											
		ミガキ黒色		ミガキ黒色						3															
	体部	ロク	ロ	ミガキ																					
		ロク	ロ	ミガキ黒色																					
	底部	ミガキ黒色		ミガキ黒色									1												
		ケズリ		ミガキ黒色																					
		糸切り		ミガキ黒色																					
		糸切り付高台		ミガキ																					
		糸切り付高台		ミガキ黒色																		1			
	土	口縁部	ココナデ		ココナデ			2						2							2				
ココナデ				刷毛目		1	1																		
体部		刷毛目		刷毛目																					
		刷毛目・ナデ		刷毛目・ナデ		2	7	8		3	1														
ナデ		ロク	ロ	ミガキ黒色																	2	3	13		
		ナデ																			1				
		むしろ紙				1	2															1			
土		口縁部	ロク	ロ	ロク				6		5	2	1	2	1	4					2		1		
			ロク	ロ	ロク						2														
		ケズリ		ロク						1												1			
土	つまみ																								
	口縁部	ロク	ロ	ロク		1	1	22	2	2	3	4	1	6	10					37	4	3	1	1	1
		ロク	ロ	ロク				1	4		5	6	1	3	8					9	5	2			
	体部	ヘラ切り																							
		糸切り							5		3	3	1	4	1					9	1	1			
		ヘラ切り付高台																							
	土	糸切り付高台																							
		不削付高台																							
		口縁部	ロク	ロ	ロク		1																		
	土	体部	ロク	ロ	ロク																13	3	2		
ケズリ				ロク																					
底部		ナデ																							
土	口縁部	ロク	ロ	ロク																					
		格子目タキ		青海波アテ																					
	体部	平行タキ		平行アテ																					
		平行タキ		青海波アテ		1																			
		無文		カキメ																					
土	口縁部	ロク	ロ	ロク																					
		ロク	ロ	ロク																					
	体部	糸切り																							
		糸切り付高台																							
		糸切り付高台																							
	土	不削付高台																							
		口縁部	ロク	ロ	ロク																				
		体部	ロク	ロ	ロク		1	1	9	1		4	6		1	2	2	6	2	2					
	糸切り																								
	土	口縁部	糸切り付高台																						
糸切り付高台																									
体部		不削付高台																							
		ロク	ロ	ロク																					
		タタキ・ロク		ロク																					
土	体部	ロク	ロ	ロク																					
		ロク	ロ	刷毛目・ナデ																					
土	体部	タタキ・ロク		ロク																					
		ロク	ロ	ロク																					
	タタキ・ケズリ		ロク		2	11	1	4	2	7	1	13	1							3	1	3			
土	体部	タタキ・ケズリ		刷毛目・ナデ																					
		糸切り																							
土	体部	ナデ																							
		ナデ																							
土	体部	ロク	ロ	ロク																					
		ロク	ロ	ロク																					

表-12 破片集計表(5)

種類	部位	断面調整		特徴	SK	SK															
		外面	内面		42	44	46	63	64	65	66	70	72	78	79	80	83	96	106	107	108
土 高台付 環	口縁部	ロク	ミガキ黒色		2						2	2		1							
		ミガキ黒色	ミガキ黒色																		
	体部	ロク	ミガキ黒色		1			1						1			1	1	1		3
		ミガキ黒色	ミガキ黒色																		
	底部	ケズリ	ミガキ黒色																		
		糸切り付高台	ミガキ																		
		糸切り付高台	ミガキ黒色		2																
		糸切り引出高台	ミガキ黒色																		
	環 ・ 焼	口縁部	ココナデ	ココナデ									2		1			3			
			ココナデ	刷毛目			2								1	1	1		1	1	
体部		刷毛目	刷毛目												1	1	1		1	1	
		刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ		3	3	2	2					12	10	23	15	1	8			
		ロク	ミガキ黒色																		
		ナ	デ													1		3			
むしろ底																					
環 高台付 環	口縁部	ロク	ロク		1	3															
		ロク	ロク																		
	体部	ケズリ	ロク																		
		つまみ																			
	口縁部	ロク	ロク		3	1		3					19	1	4	1		3	1	1	1
		ロク	ロク		3	1		3		1			6	1	1	2					
		ヘラ切り																			1
		糸切り								1		7			1	1					1
	体部	ヘラ切り付高台																			
		糸切り付高台																			
不明付高台																					
環 ・ 焼	口縁部	ロク	ロク											1							
		ロク	ロク		1																
	体部	ケズリ	ロク																		
		ナ	デ																		
環 ・ 焼	口縁部	ロク	ロク																		
		格子目タタキ	青海波アテ							1											1
	体部	平行タタキ	平行アテ																		
		平行タタキ	青海波アテ					2							1						
無文カキメ										2											
土 高台付 環	口縁部	ロク	ロク																		
		ロク	ロク																		
	体部	ロク	ロク																		
		つまみ																			
	口縁部	ロク	ロク																		
		ロク	ロク																		
		糸切り																			
		糸切り付高台																			
	体部	糸切り引出高台																			
		不明付高台																			
土 ・ 焼	口縁部	ロク	ロク	有段	4	1	1	1				1	2		2						
		ロク	ロク	外底																	
	体部	ロク	ロク		1	1	5						3	2	15	9	1	13	14	4	
		タタキ・ロク	ロク																		
		ロク・ケズリ	ロク		5	4	2	2					1	2	14	11		9	6	1	1
		ロク・ケズリ	刷毛目・ナデ																		
底部	糸切り																				
	ナ	デ																			
環	口縁部	ロク	ロク	小形																	
	体部	ロク	ロク	小形																	

表-13 破片集計表(6)

種類	部位	器 器 調 査		特 徴	SK	SD	SD	SD	SD	SD	SD											
		外 面	内 面		112	113	118	119	121	122	124	126	128	130	138	12	20	21	99	114	129	
土 器 類	口縁部	ロク	ロク	ミダキ黒色						2	3	4	6	28			1					
		ミダキ黒色	ミダキ黒色				1															
	体部	ロク	ロク	ミダキ黒色																		
		ロク	ロク	ミダキ黒色			1	6			3	3				24		3	4	1		2
	底部	ケズリ	ミダキ黒色																			
		糸切り	ミダキ黒色											1		1		1				1
	口縁部	糸切り付高台	ミダキ黒色																			
		糸切り付高台	ミダキ黒色				1				2											
		糸切り引出高台	ミダキ黒色																			
	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ																			
		刷毛目	刷毛目									1	1	1								
	体部	刷毛目・ナデ	刷毛目・ナデ				2	5			3	1		4	2	4	4		2	11	23	
ナデ																						
ナデ																				4		
口縁部	ロク	ロク	ロク																			
	ロク	ロク	ロク			1						2	1					3	1	1		
体部	ロク	ロク	ロク										1		1						2	
	ケズリ	ロク	ロク																			
つまみ																						
土 器 類	口縁部	ロク	ロク	ロク																		
		ロク	ロク	ロク			2	10	1	1		1			24	14		7	13	12	6	2
	体部	ロク	ロク	ロク																		
		ヘラ切り																				
	底部	糸切り																				
		糸切り付高台																				
	口縁部	糸切り付高台																				
		不明付高台																				
		不明付高台																				
	口縁部	ロク	ロク	ロク																		
		ロク	ロク	ロク																		
	体部	ケズリ	ロク	ロク																		
ナデ																						
口縁部	ロク	ロク	ロク																			
	拾子日タタキ	青海波アテ																				
	平行タタキ	平行アテ																				
体部	平行タタキ	青海波アテ																				
	無文カキ																					
口縁部	ロク	ロク	ロク																			
	ロク	ロク	ロク																			
体部	つまみ																					
	つまみ																					
口縁部	ロク	ロク	ロク																			
	ロク	ロク	ロク																			
体部	糸切り																					
	糸切り付高台																					
底部	糸切り引出高台																					
	不明付高台																					
口縁部	ロク	ロク	ロク																			
	ロク	ロク	ロク																			
体部	糸切り																					
	ナデ																					
口縁部	ロク	ロク	ロク																			
	ロク	ロク	ロク																			
体部	糸切り																					
	ナデ																					
口縁部	ロク	ロク	ロク																			
	ロク	ロク	ロク																			
体部	糸切り																					
	ナデ																					
口縁部	ロク	ロク	ロク																			
	ロク	ロク	ロク																			
体部	糸切り																					
	ナデ																					

## V ま と め

### 1 遺跡について

達磨寺遺跡は、須川によって形成された自然堤防上に立地し、河床面から比高は5～6mの差があり、遺跡の西側は自然堤防から連なる微低地となり、標高93.5mを計るものである。須川流域における遺跡の分布状況は、山形市から山辺町そして中山町に続く流域一帯は標高約90m前後の位置にあり、ほぼ一定の標高さに在り古墳時代から平安時代にかけて遺跡が多く分布している。このことは、2,000BP以降は自然堤防を大きく埋没されるような堆積作用はなく、少なくとも居住地となった自然はかなり安定してたとみられる。

本遺跡での遺構の時期は、大きく4区分され、奈良時代から平安時初頭、平安時代の中頃、平安時代の後半、中世以降と4期にわたる長期間、須川と密接に結びついて集落跡が営まれたものと考えられ、中でも平安時代の前半期は、住居跡や建物跡など多く検出されていることは、主体となる時期を示している。

### 2 遺構について

本遺跡で検出された遺構は、竪穴住居17・建物跡6・井戸跡2・土壇76・溝跡12・不明ピット94である。これら遺構群の分布は、住居跡群では調査区の中央部の平坦地に位置し、主軸方向（カマド方向をもつ）は、その大半が東向や南側向であり一定方向性を示し、住居跡間の間隔が大きくとられている。建物跡群は、94・95・96号建物跡は住居跡と隣接あるいは重複しているが、全体として住居跡群を取り囲むように遍在している。土壇群は、焼けている土壇群は、さらに住居跡群や建物跡群をさらに囲むように周辺部に在り、焼土等を有していない土壇群は住居跡や建物跡の間に取り囲まれるように位置している。このように住居跡・建物跡・土壇群は、集落内において規則的に各期にわたって配置が設定されているのが特徴である。なお、これら溝と住居・建物跡群との関連については不明確である。また、11・51・52・60号溝は本遺跡では最も新しく中世以降の時期として考えられるが、それらに関連する時期の住居跡あるいは柱穴は検出されていない。

#### （住居跡）

##### 第I期（8世紀末葉から9世紀初頭頃）

85・86・87号住居跡で、いずれもカマド方向が若干長くなる不整隅丸方形を呈し、85号住居跡は4本の支柱穴、86号住居跡は間切り用柱穴をもつ4本の支柱穴を有する構造の住居跡である。87号住居跡は柱穴が確認されていない。カマドは明確に検出され、煙道の

長さが1.80～3.00mと他の住居跡と比べても非常に長く造られているの特徴であり、住居跡の隅部から中央部寄りに位置している。85号住居跡・86号住居跡は東側に、87号住居跡は南側に向いている。構築は、85号住居跡では、黄褐色・白色粘でカマド芯部を構築しているが支脚等の施設はみられない。86号住居跡は、カマドの両袖にカメ形土器を2個体合せて支脚として再利用している。87号住居跡は全体的に崩れ落ちているため不明確である。

#### 第Ⅱ期（10世紀前半頃）

71・73～77・81・88・90～93号住居跡が第Ⅱ期に相当する時期である。平面形は長軸がカマドを有する方向と反対になり、不整の隅丸長方形を呈している。柱の構造は、いずれも4本を主とする構造と考えられるが明であるが、76・77・93号住居跡のように主柱穴が住居跡の中央部から南側や西側に片寄って位置している。75・91号住居跡は主柱穴が6～10本と、それぞれの住居跡の長軸方向にそって直線的に位置し、柱間も1.5～1.8mと等間隔に配置している。カマドは、東側に向いている76・77・88号住居跡、南側に向いている71・73・92・93号住居跡で、北側に向きを取る75号住居跡である。

煙道部の長さは、第Ⅰ期の85・86号住居跡カマド比較して、住居跡外に張り出す長さが短くなり、長さ1.3～1.8mとなる。構築の状態は、第Ⅰ期と比べても相異はないが支脚を有するカマドが検出されていない。カマドは全体的に崩落が激しいため明瞭に残っていないがなかでも92・93号住居跡は遺存状態が良い。周溝あるいは壁溝が検出された住居跡は91号住居跡のみである。周溝は東辺部の中央部で、段階状に掘り込まれているのが特徴である。

その他1号住居跡や37号住居跡は、摩滅した若干の出土した土器からみて、第Ⅱ期に相当する時期と考えられる。

第Ⅲ期（10世紀後半頃）と第Ⅳ期（中世以降）に該当する住居跡は検出されていない。

#### （建物跡）

建物跡群の配置は、住居跡群が遍在する地区の外縁部に位置し、建物間の距離は20～25mであり、倉庫風の建物跡である。建物の主軸方向は、36・43・67号建物跡は磁北方向に直交する近い数値を示す一群であり、磁北方向あるいは破れる一群が94・95・96号建物跡である。

96号建物跡は、東西・南北の各面に縁東が付属する建物跡であり、東面では縁東の柱間が若干のずれがあり、南側の柱穴が重複している柱と柱間が異なっているため、恐らく1～2の建替があったものと考えられるが、柱の規模や柱間の状況から推察すると倉庫としてではなく、竪穴住居跡との関係で主屋的な構造の建物跡ともみられる。

時期は、その柱穴内から出土した土器からみて第Ⅱ期（10世紀前半頃）の所産と推定される。

#### （井戸跡・土坑）

井戸跡は住居跡群と隣接する地区で2基検出され、住居跡や建物跡群が遍在して場所に位置する。径が1.70～2.50m、深さ約1.5mとなっており、断面観察において井桁組などの施設も検出されていないため、恐らく掘り抜き井戸と考えられる。

土坑は、覆土の状態を観察からすると大きく2つに分けられ、焼土・炭化材・灰などを有するもの、焼土なども含まず単純にレンズ状に堆積するものである。前者は焼土を有する他に10・37・53・63号土坑では多量の鉄細片が出土し、10・63号土坑は中でも異質な形状になっている。これら焼土を有する一群の土坑は、鍛工房的な性格の土坑と考えられる。

時期は第Ⅱ期から第Ⅲ期（10世紀後半頃）とみられる。

#### （溝 跡）

第Ⅱ期から第Ⅲ期の溝は7条確認され、12・20・21・50・99号溝跡である。

### 3 遺物について

#### 1) 赤焼土器の範囲について

赤焼土器の認識において、日本海側と太平洋側で大きなズレがあることは以前に述べたことがあるが、赤焼土器を「成・整形では須恵器製作の技術的系譜があるが酸化焰で焼成された土器」とすることで大方の共通理解があるものと考えられる。この観点でまとまる土器には当然煮沸形態の土器も含まれよう。前回（渋谷1984）では太平洋側の煮沸形態土器にしばしばみられるタタキの痕跡のある「土師器の甕」はまぎれもない赤焼土器であり、また、タタキの痕跡はなくとも、ロクロ、ケズリの「土師器の甕」も刷毛目調整を施す前代からの土師器製作の技術伝統からは生じにくいもので、これらも、赤焼土器の範囲で捉えられるものではないかとの考えを述べた。赤焼土器を土師器、須恵器と同等に扱うためには、それぞれがもつ意義、生産体制までも念頭に入れる必要があるとの意見（小井川1984）もあるが、小井川氏のいうように、この時代の土師器生産が自給的な生産体制にあったときめつけるわけにもいかないであろう。ロクロ技術導入後の土師器、赤焼土器の成・整形では、専業集団の工人が製作する須恵器と変換することのない技術が駆使されているのであり、土器製作の一連の工程の大部分が両者に共通することから、土師器・赤焼土器・須恵器とも同じ集団が製作したということも考慮する必要があるのではなかろうか。

本稿では先の考えを進めて次の条件を満たすものを赤焼土器と理解した。①酸化焙焼成であること。②製作にあたってロクロが使用されていること。③ヘラミガキ、黒色処理の技術を欠くこと。①によって須恵器と、②によって土師器の甕と、③によって土師器の供膳形態の土器と一部の甕との区別ができる。

## 2) 土器の組み合わせと年代

本遺跡の住居跡から出土した土器は、各器種の製作技術、形態の相異によって次の二群に大別できる。

A群土器……85・86号住居跡出土の土器群

B群土器……74～77、81、90～93号住居跡の土器群

A群土器…供膳形態のうち坏は回転ヘラ切りで急角度で立上る身の深い須恵器が主体を占め、これと同じ形態をもつ回転糸切りの坏も伴う。特殊なものとして、赤焼土器の蓋、それに体部下端に回転ヘラケズリのある高台付坏がある。糸切り無調整の赤焼土器の坏はない。煮沸形態土器には土師器と赤焼土器があり、土師器の甕は口縁部が「く」の字状に外反する。赤焼土器の小形・中型甕の底部切り離しは静止糸切りとなる。大形の甕は、「く」の字状に長く外反し、口唇部が上方につまみ出される形態となる。全体的に器壁が薄く、精巧なつくりとなる。体部外面上半にはタタキの痕跡が認められるものがある。本遺跡では、このほか87号住居跡もこの時期の住居跡と考えられる。これらの土器群は山形市の境田遺跡群で最も古いC遺跡B地区—9世紀中葉—を遡り、同塩辛田遺跡30・31号住居跡…8世紀末～9世紀初頭—に近いと考えられる。

B群土器…供膳形態の土器は赤焼土器の坏が主体となり、回転糸切りの須恵器坏と土師器坏、高台付坏が伴う。煮沸形態の土器は土師器と赤焼土器がある。土師器は口縁部が強く外反する。赤焼土器の小形・中型の甕は回転糸切りとなり、大形の甕ではタタキの痕跡のあるものはなくなる。また、口縁部のつくりでは鋭く短かく外反し、口唇端が上方につまみ出されるものと「く」の字状に外反した後、口唇部が上・下につまみ出されるものなどが出現する。さらに、塙が加わる。貯蔵形態の土器では頸部下端に凸帯の巡る壺、波状文をもつ大形の甕がある。この土器群は供膳形態における赤焼土器の割合が2/3前後を占める。境田遺跡群で10世紀前半を中心とする年代が想定されるSD1南水路の土器群の組成に近い数値を示す。これらの住居跡は切り合いもあるが73・75～77の4住居跡で接合関係もあり、時間的に近接した時期の建替と考えられる。

この他71号住居跡の土器群の供膳形態は須恵器が過半数を占めることから、B群土器をやや遡る時期が想定でき、130号土壇出土の土器群は境田C遺跡の組成に近く、10世紀後半頃と考えられる。

〈参考文献〉

- 佐藤正俊他（1981）『山形市柏倉遺跡群発掘調査報告書』  
山形県埋蔵文化財調査報告書第33集
- 斎藤孝正編（1983）『愛知県古窯跡群分布調査報告書(Ⅲ)』愛知県教育委員会
- 渋谷孝雄（1984）『境田C・D遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第76集
- 小井川和夫（1984）「いわゆる赤焼土器について」『研究紀要』第10巻 東北歴史資料館

圖 版



遺跡近景 (NW 1)



遺跡近景 (SE 1)



16-46~51G土層セクション (S↑)



16-49G土層セクション (E↑)



A地区全景 (1) (E1)



A地区全景 (2) (W1)



B地区全景 (1) (W↑)



A・B地区全景 (2) (NW↑)



C地区全景 (1) (SE↑)



C地区全景 (2) (NW↑)



粗掘作業 (A地区) (SE1)



面整理作業 (C地区) (E1)



体験学習説明



体験学習粗掘作業



体験学習精査作業 (1)



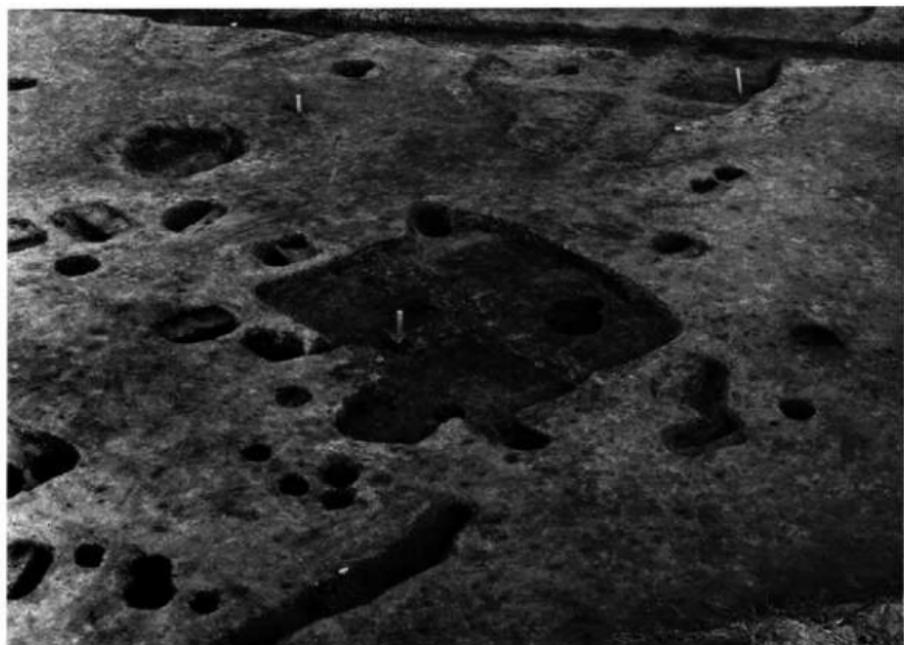
体験学習精査作業 (2)



体験学習面整理作業 (S1)



1号住居跡全景 (E↑)



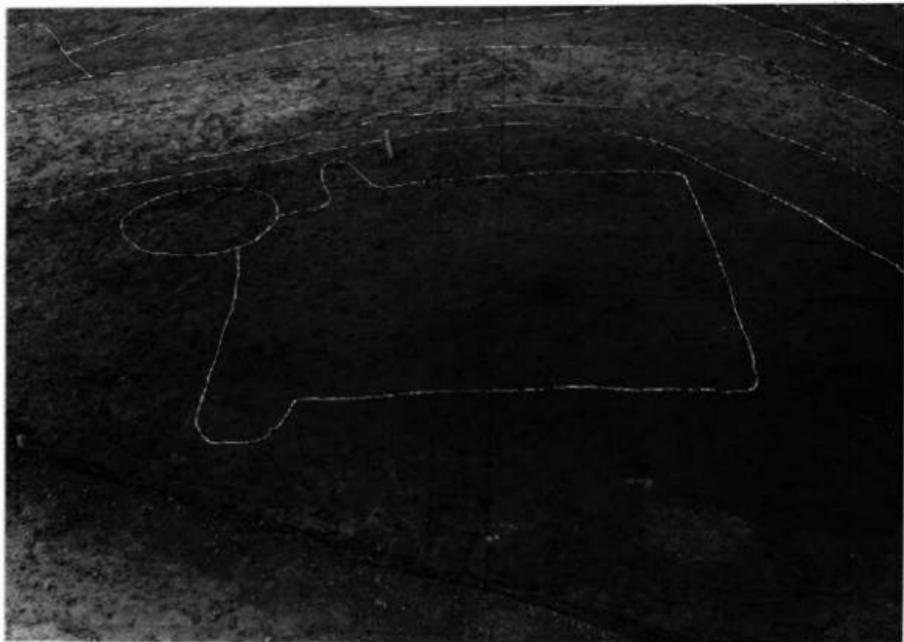
45号住居跡全景 (SW↑)



71号住居跡・72号土壇全景(1)(NW↑)



71号住居跡・72号土壇全景(2)(WE↑)



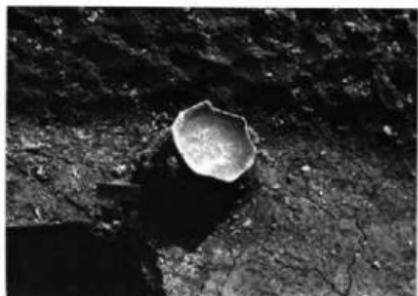
71号住居跡・42号土城 (N↑)



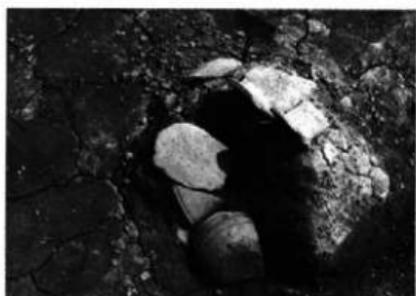
71号住居跡土層セクション (E↑)



EL132土層セクション (N↑)



RP70出土状態 (N↑)



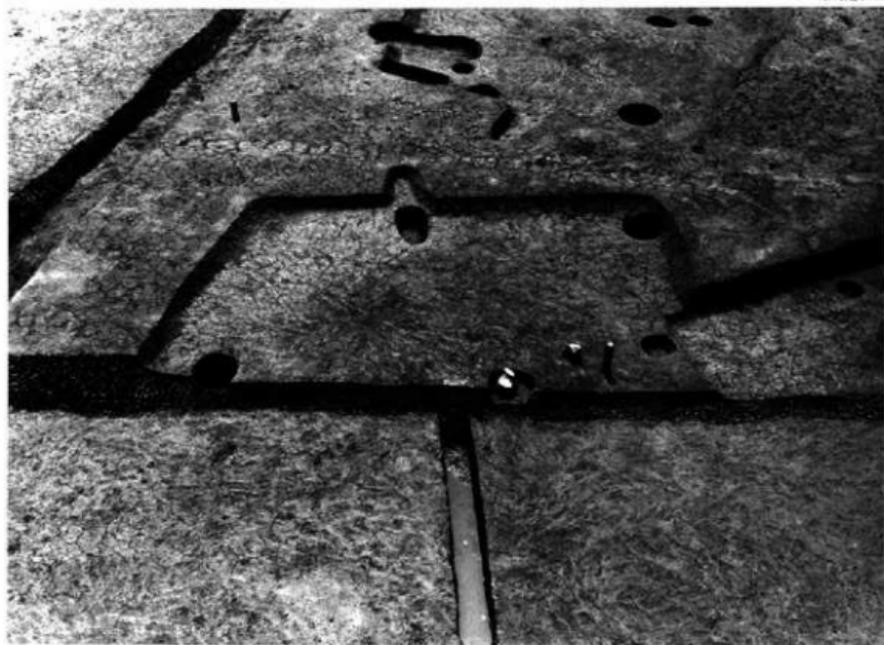
RP71出土状態 (NW↑)



RP73出土状态 (SK72内) (NW ↑)



73・74号住居跡全景 (E ↑)



73号住居跡全景 (NW↑)



74号住居跡全景 (N↑)



73号住居跡土層セクション (NE↑)



EL133土層セクション (ST37内) (N↑)



RP74出土状態 (ST73内) (NE↑)



RP75出土状態 (ST73内) (W↑)



73・74号住居跡検出作業 (E↑)



74号住居跡土層セクション (NE↑)



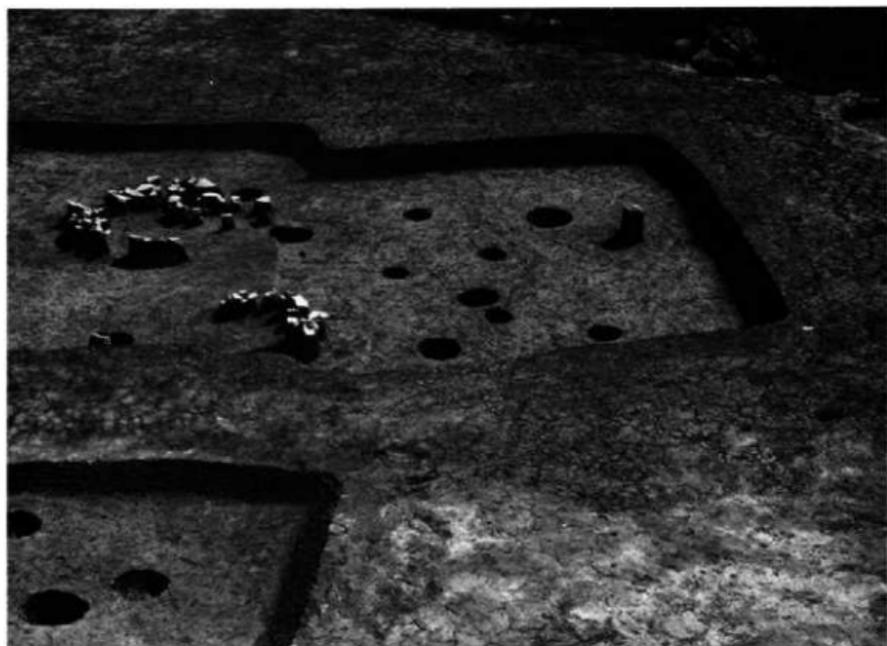
EL134土層セクション (ST74内) (E↑)



RP76出土状態 (ST74内) (SE↑)



75号住居跡全景 (1) (S1)



75号住居跡全景 (2) (E1)



75号住居跡土層セクション (SE ↑)



EL135土層セクション (ST75内) (SE ↑)



76·77号住居跡全景 (W1)



76号住居跡全景 (N1)



76号住居跡東西土層セクション (NW↑)



76号住居跡南北土層セクション (南) (SE↑)



EL136土層セクション (ST76内) (E↑)



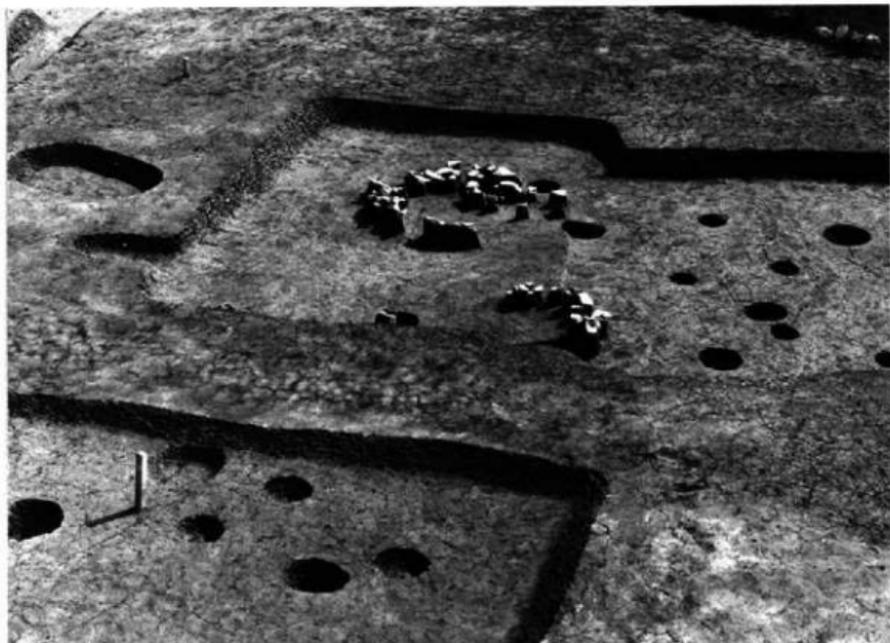
PR67出土状態 (ST76内) (SW↑)



RP77出土状態 (EL136内) (NW↑)



RP77出土状態 (ST76内) (SW↑)



77号住居跡全景 (N↑)



77号住居跡東西土層セクション(東)(SW↑)



77号住居跡南北土層セクション(西)(SW↑)



EL137土層セクション (ST77内) (SW ↑)



77号住居跡・土器群出土状態 (SW ↑)



RP78・79出土状态 (ST77内) (S↑)



RP80出土状态 (ST77内) (S↑)



RP81出土状态 (ST77内) (SE↑)



RP83出土状态 (ST77内) (S↑)



RP82出土状态 (ST77内) (SE↑)



RM66出土狀態 (S↑)



80号土坑・81号住居跡全景 (N↑)



85号住居跡全景 (1) (W↑)



85号住居跡全景 (2) (S↑)



85号住居跡東西土層セクション (S1)



85号住居跡南北土層セクション (W1)



EL102確認状況 (ST85内) (W↑)



EL102全景 (ST85内) (W↑)



EL102南北土層セクション (ST85内) (WN ↑)



EL102東西土層セクション (ST85内) (W ↑)



EL102焚口部土層セクション (ST85内) (N ↑)



RP25出土状態 (EL102内) (W ↑)



EL102完掘状況 (ST85内) (W ↑)



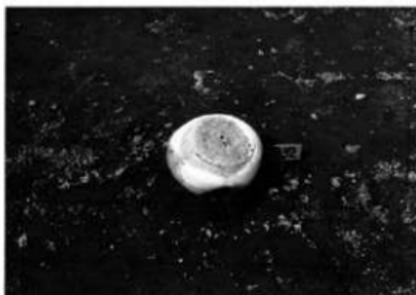
RP28・29出土狀態 (ST85内) (S↑)



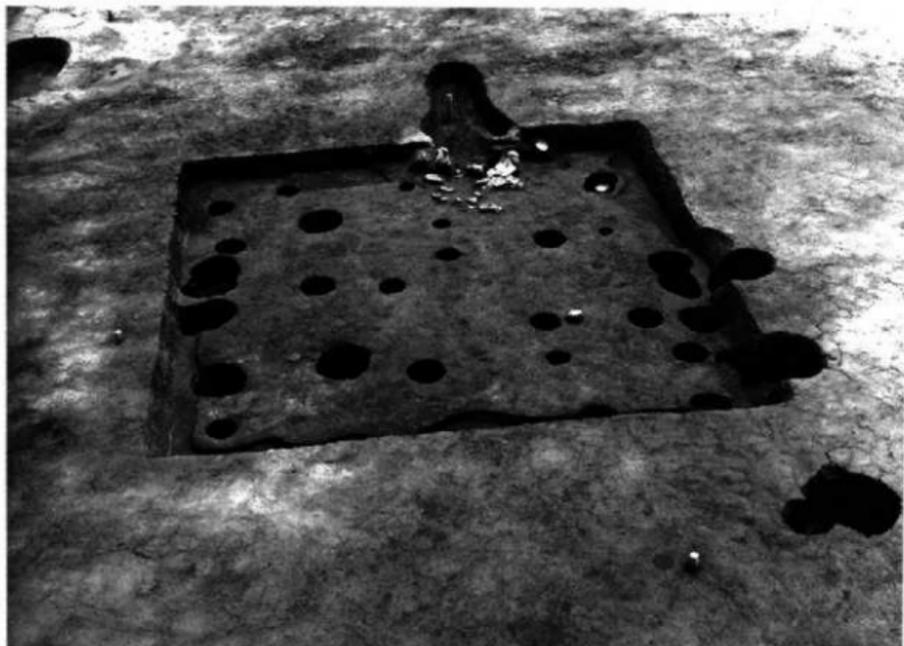
RP30出土狀態 (ST85内) (S↑)



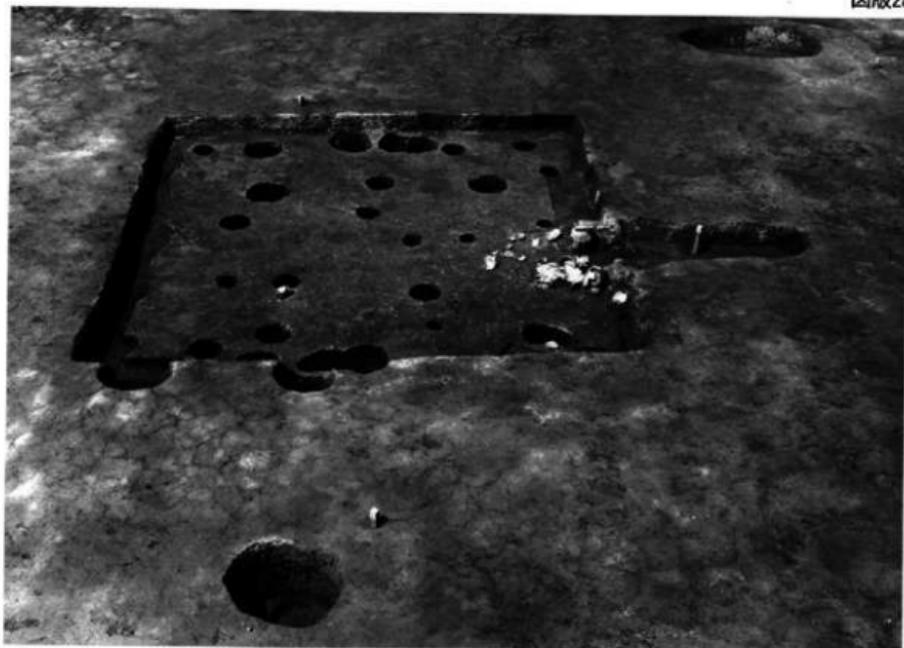
RP31出土狀態 (ST85内) (S↑)



RP32出土狀態 (ST85内) (S↑)



86号住居跡全景 (1) (W↑)



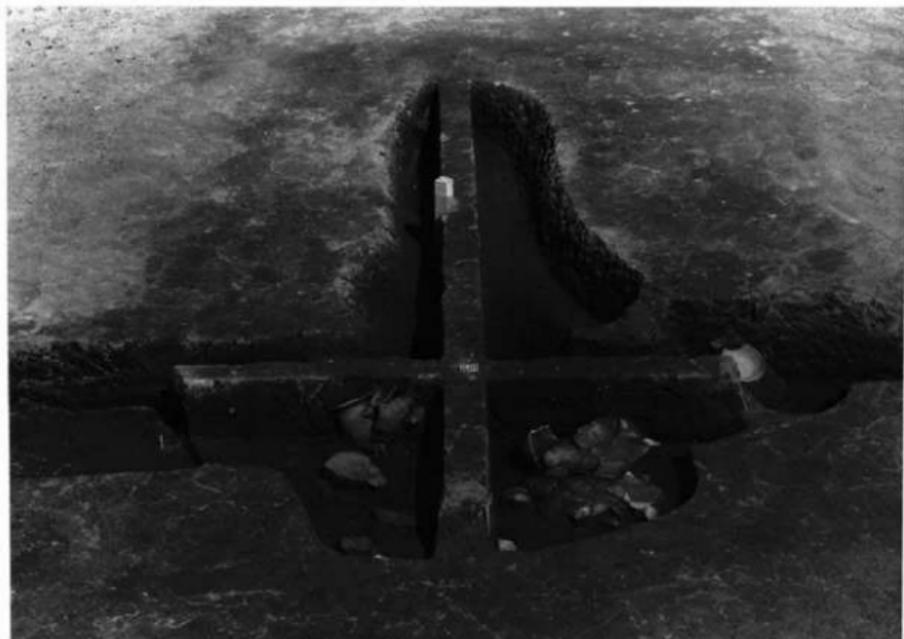
86号住居跡全景(2)(S↑)



86号住居跡南北土層セクション(W↑)



86号住居跡東西土層セクション (S1)



EL103全景 (ST86内) (W1)



EL103完葬状況 (ST86内) (W1)



EL103土器群出土状態 (ST86内) (W1)



EL103南北土層セクション (ST86内) (W↑)



EL103東西土層セクション (ST86内) (S↑)



EL103東西土層セクション近接 (ST86内) (NW↑)



EL103土層セクション近接 (WN↑)



RP35出土状態 (EL103内) (NE↑)



RP36・41・42出土状態 (EL103内) (SW ↑)



RP37出土状態 (EL103内) (SW ↑)



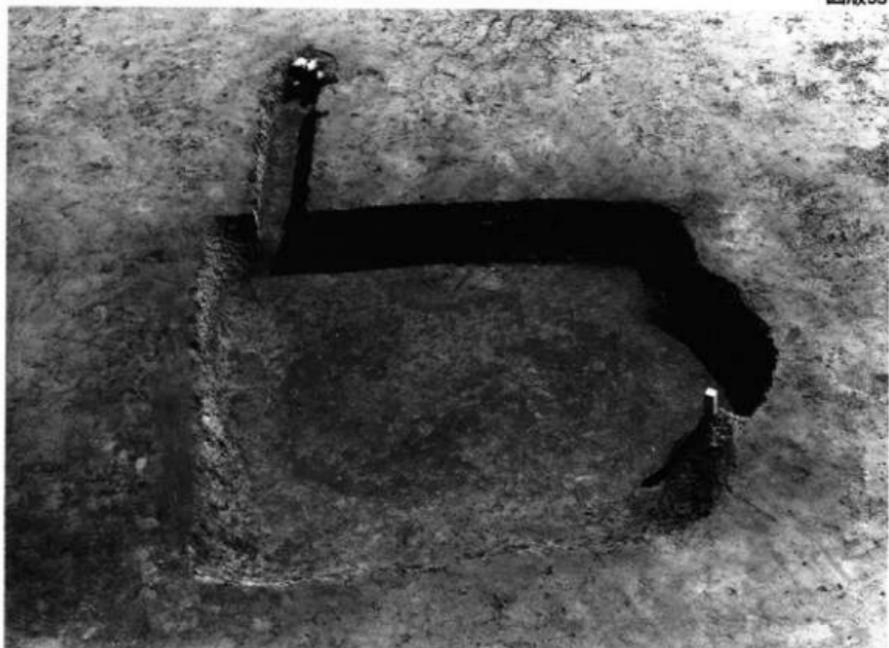
RP41~43出土状態 (EL103内) (SE ↑)



RP41・42出土状態 (EL103内) (SW ↑)



RP36・37・41~43出土状態 (EL103) (NW ↑)



87号住居跡全景 (N1)



87・88号住居跡全景 (E1)



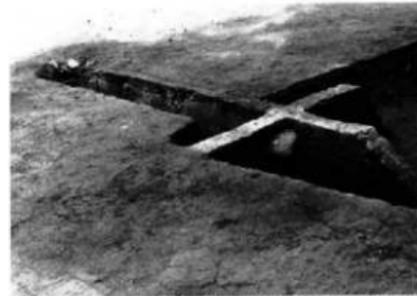
87号住居跡南北土層セクション (E↑)



87号住居跡東西土層セクション (S↑)



EL104東西土層セクション (N↑)



EL104南北土層セクション (NE↑)



88号住居跡東西土層セクション (NE↑)



EL南北土層セクション (SE↑)



RP39出土状態 (ST88内) (SE↑)



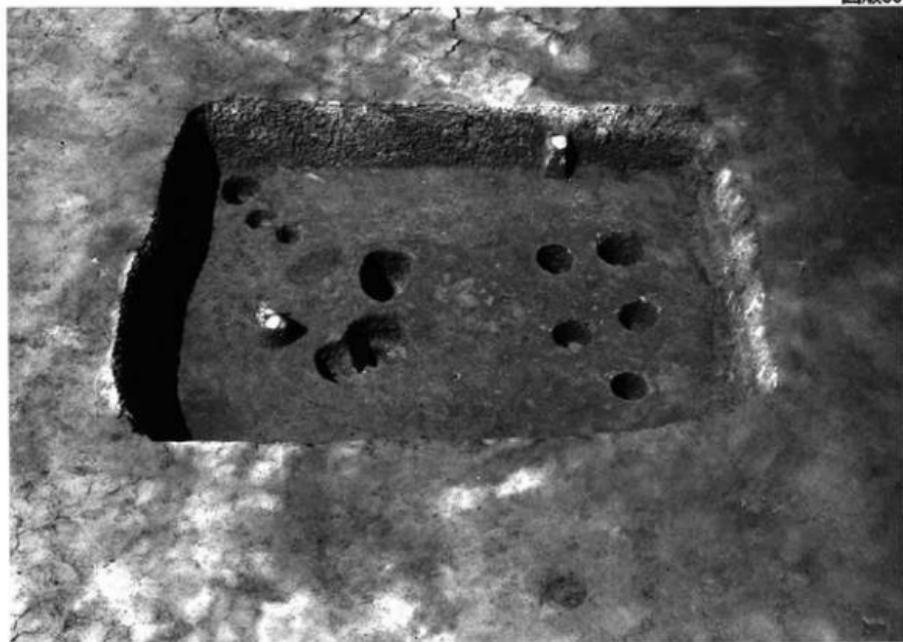
RP40出土状態 (ST88内) (SE↑)



89号住居跡全景 (1) (NE↑)



89号住居跡全景 (2) 土層セクション (SE↑)



90号住居跡全景 (1) (S↑)



90号住居跡全景 (2) (W↑)



90号住居跡南北土層セクション (SE ↑)



90号住居跡東西土層セクション (SW ↑)



RP47出土状態 (ST90内) (SW ↑)



RP48出土状態 (ST90内) (S ↑)



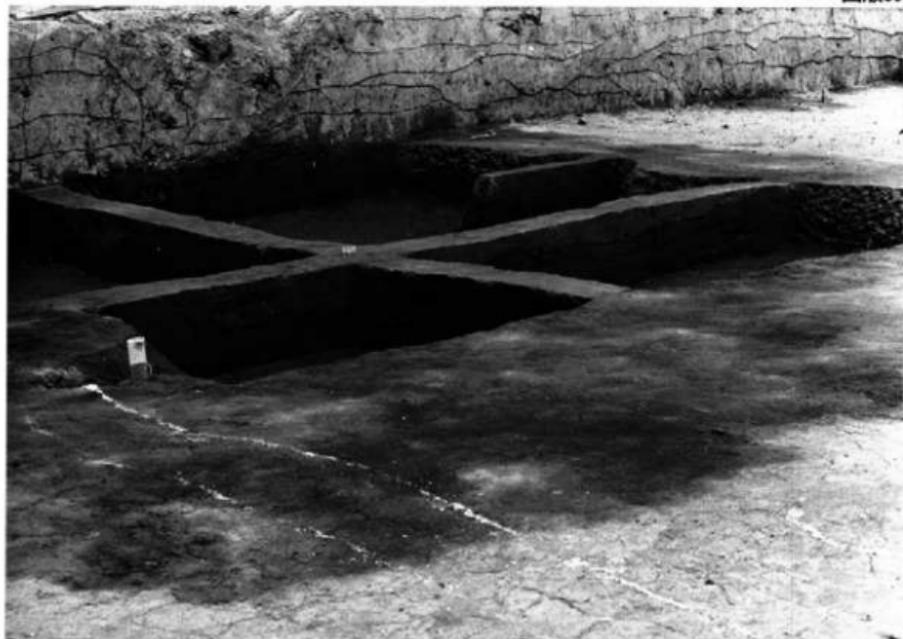
91・92号住居跡全景 (E ↑)



91号住居跡全景 (N↑)



92号住居跡全景 (N↑)



92号住居跡南北土層セクション (SE↑)



92号住居跡東西土層セクション (NE↑)



EL116全景 (ST92内) (N1)



EL116近接 (ST92内) (N1)



EL116完掘状況 (ST92内) (N↑)



EL116完掘状況近接 (ST92内) (N↑)



EL116東西土層セクション西側 (ST92内) (N↑)



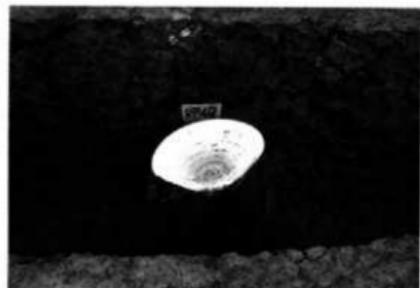
EL116南北土層セクション (1) (ST92内) (E↑)



EL116南北土層セクション (2) (ST92内) (E↑)



EL116 (ST92内) 東西土層セクション (N↑)



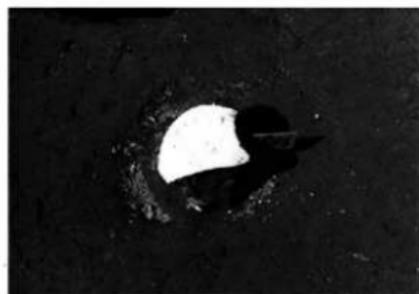
RP49出土状態 (ST91内) (W↑)



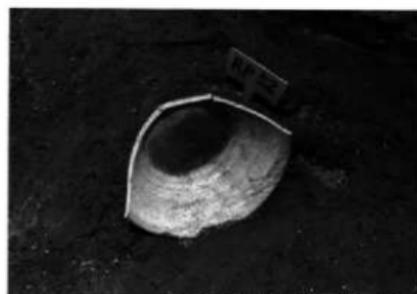
RP44出土状态 (ST92内) (N↑)



RP45出土状态 (ST92内) (N↑)



RP46出土状态 (ST92内) (S↑)



RP52出土状态 (ST92内) (N↑)



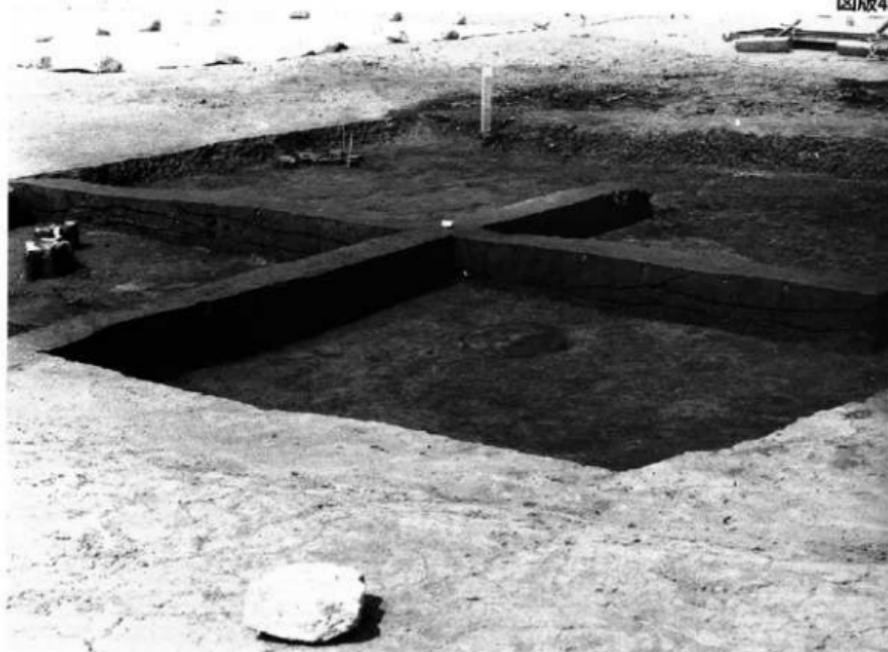
RP50・51出土状态 (ST92内) (N↑)



93号住居跡全景 (1) (N↑)



93号住居跡全景 (2) (W↑)



93号住居跡土層セクション (NE↑)



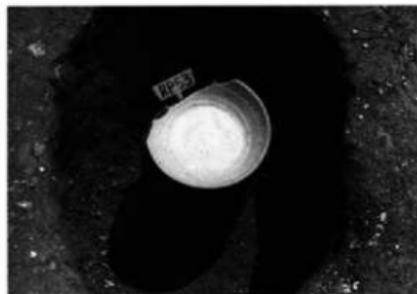
EL117土層セクション (ST93内) (NE↑)



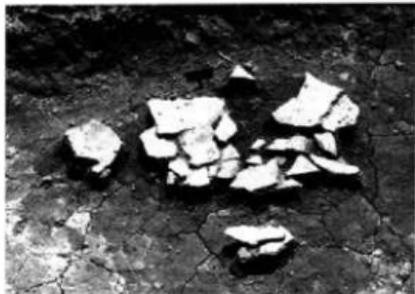
EL117東西土層セクション (ST93内) (N↑)



EL117近接 (ST93内) (N↑)



RP53出土状態 (ST93内) (W↑)



RP54出土状態 (ST93内) (N↑)



EL117全景 (ST93内) (N↑)



RP55出土状態 (ST93内) (W ↑)



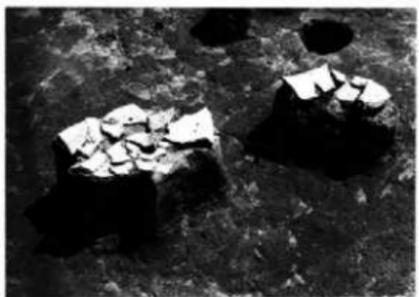
RP56出土状態 (ST93内) (N ↑)



RP57出土状態 (ST93内) (N ↑)



RP58出土状態 (ST93内) (N ↑)



RP59出土状態 (ST93内) (N ↑)



RP60・61出土状態 (ST93内) (N ↑)



RP62出土状態 (ST93内) (N ↑)



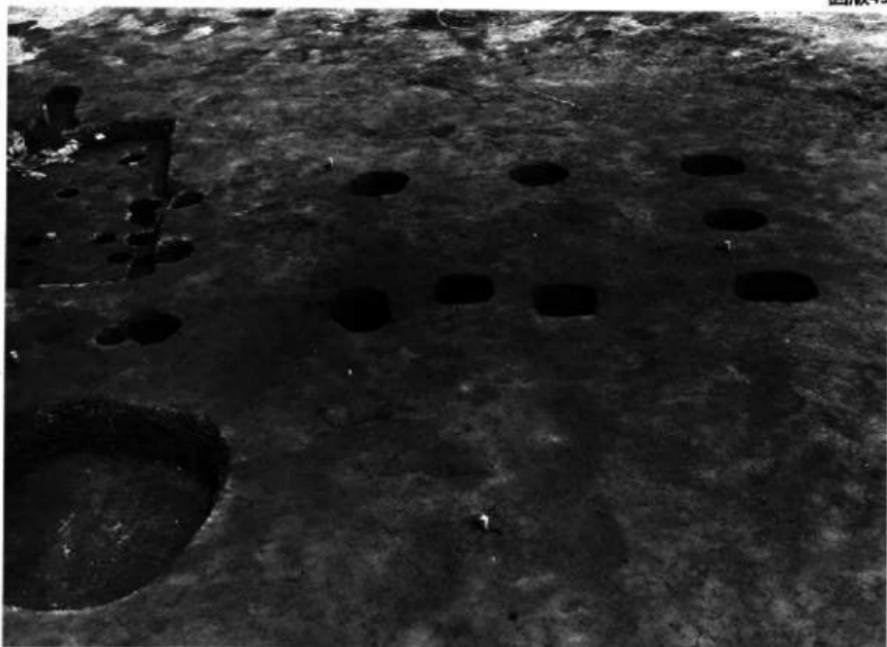
RP64・65出土状態 (ST93内) (S ↑)



67号建物跡全景 (NE↑)



94号建物跡全景 (1) (S↑)



94号建物跡全景(2)(W↑)



95号建物跡全景(N↑)



96号建物跡全景 (N)



96号建物跡全景 (2) (E↑)



96号建物跡全景 (3) (W↑)



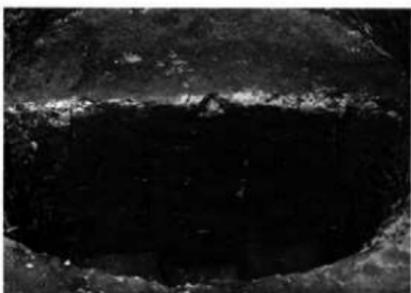
96号建物跡全景 (4) (N↑)



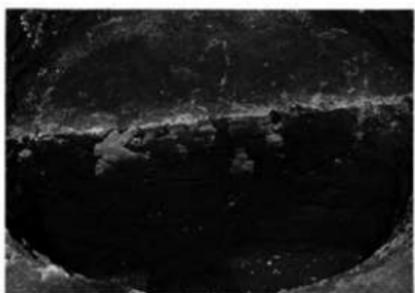
96号建物跡検出作業 (SW↑)



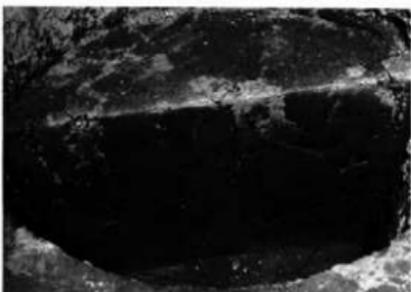
EP 1 土層セクション (E↑)



EP 2 土層セクション (SB96) (E↑)



EP 3 土層セクション (SB96) (E↑)



EP 4 土層セクション (SB96) (E↑)



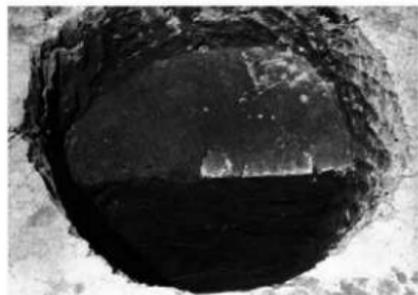
EP 5 土層セクション (SB96) (NE↑)



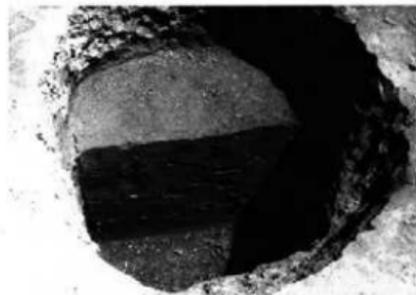
96号建物跡実測作業 (N↑)



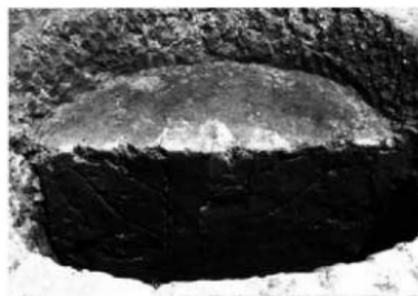
EP 6 土層セクション (SB96) (E↑)



EP 7 土層セクション (SB96) (E↑)



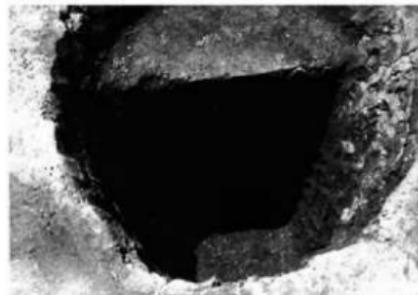
EP 8 土層セクション (SB96) (S↑)



EP 9 土層セクション (SB96) (S↑)



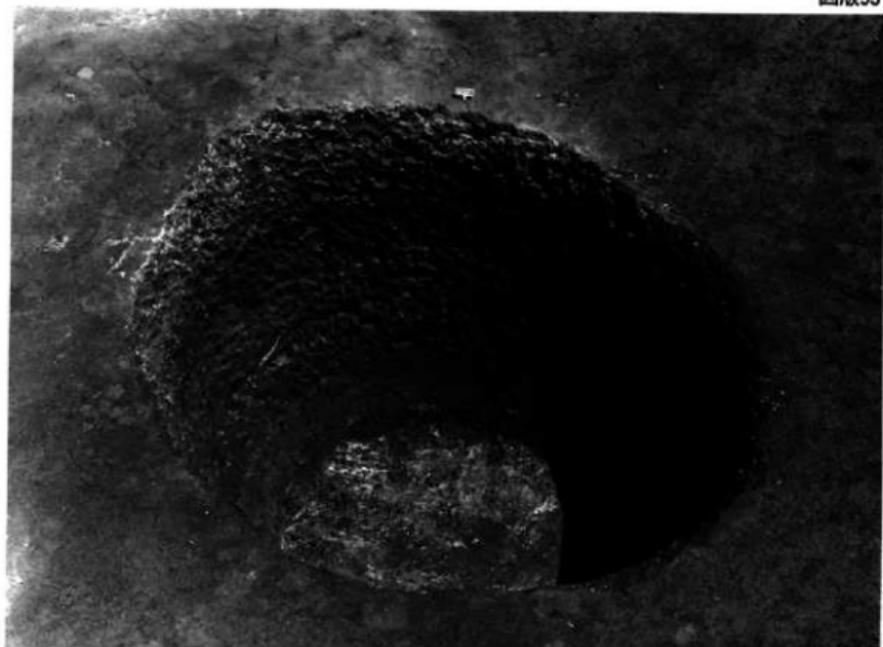
EP10土層セクション (SB96) (S↑)



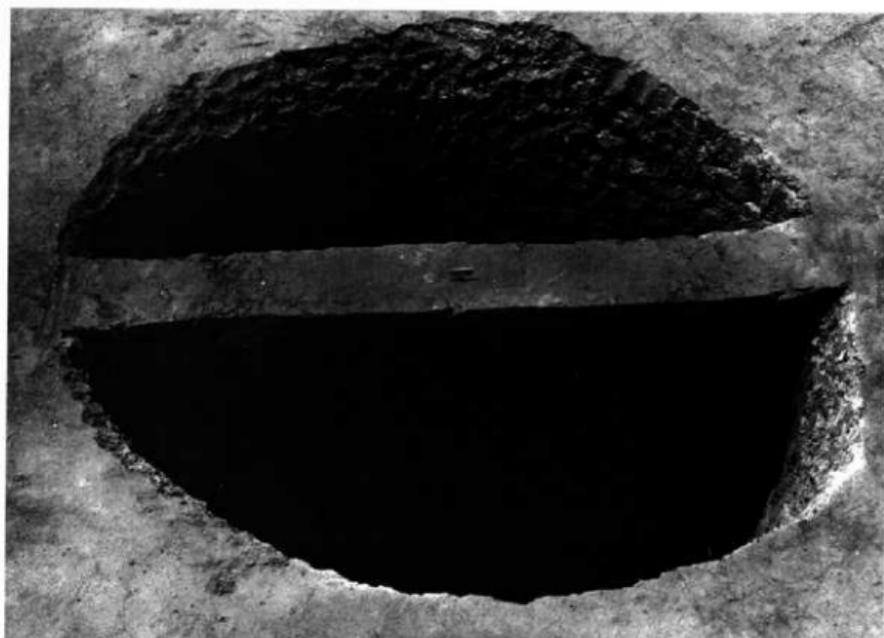
EP11土層セクション (SB96) (N↑)



EP12土層セクション・RP63出土状態 (SB96) (E↑)



108号井戸跡全景 (S↑)



108号井戸跡土層セクション (N↑)



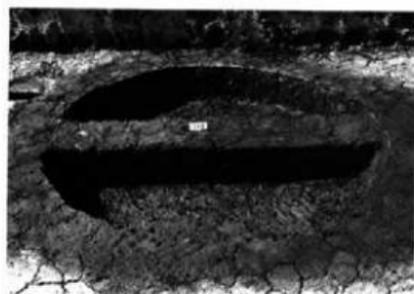
112号井戸跡全景 (S↑)



112号井戸跡土層セクション (S↑)



2～5号土坑全景 (W↑)



2号土坑全景 (SE↑)



3号土坑全景 (SW↑)



4号土坑全景 (SW↑)



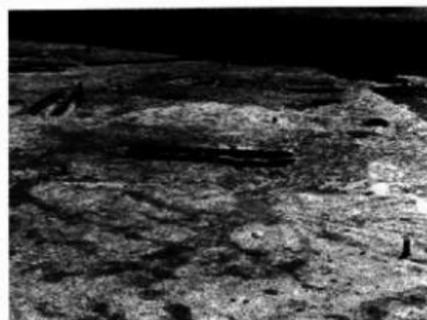
5号土坑全景 (SE↑)



6号土坑全景 (N↑)



9号土坑全景 (S↑)



13·14·19号土坑全景 (NE↑)



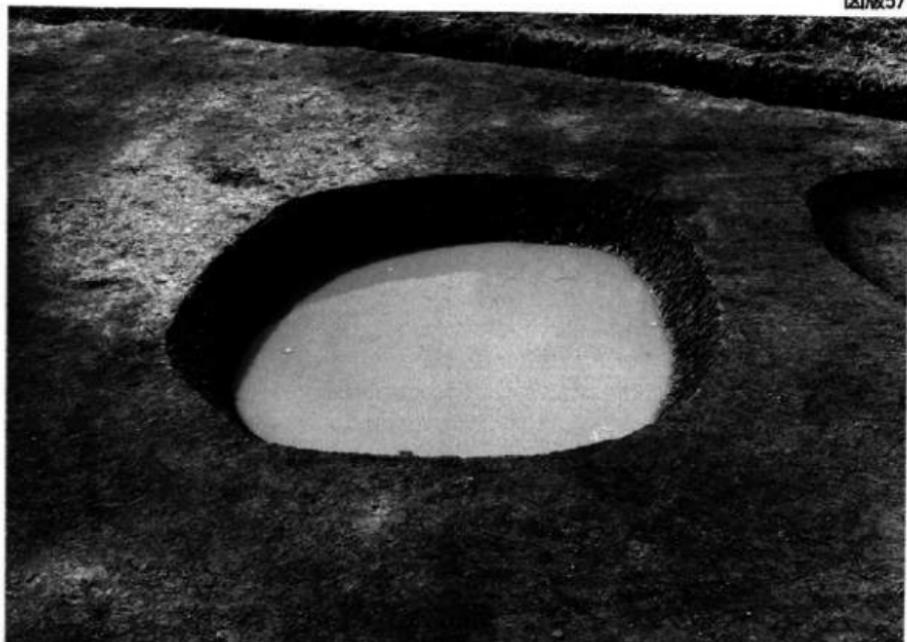
28~32号土坑全景 (SW↑)



22~26号土坑全景 (E↑)



25~27号土坑全景 (E↑)



53号土城全景 (E1)



53号土城土層セクション (S1)



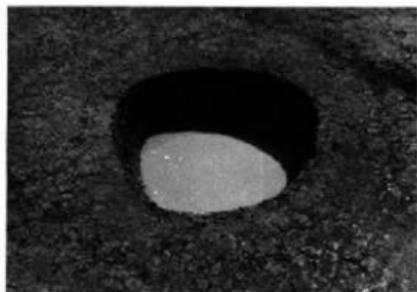
54・55号土坑全景 (E↑)



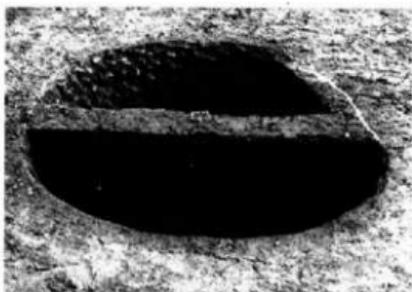
54号土坑土層セクション (SE↑)



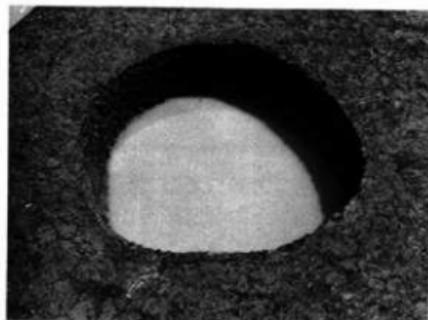
55号土坑土層セクション (E↑)



56号土坑全景 (N↑)



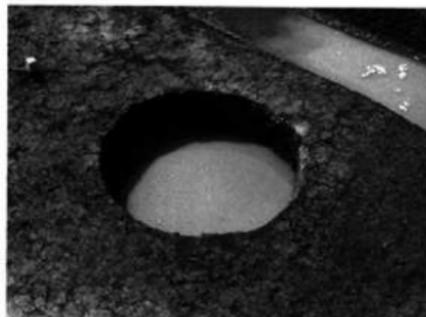
56号土坑土層セクション (S↑)



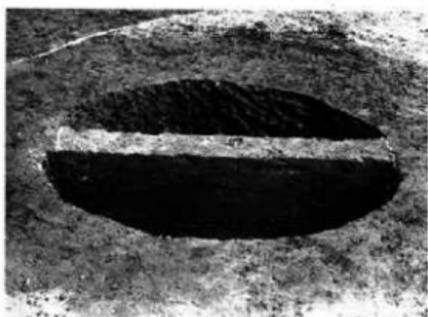
57号土坑全景 (S↑)



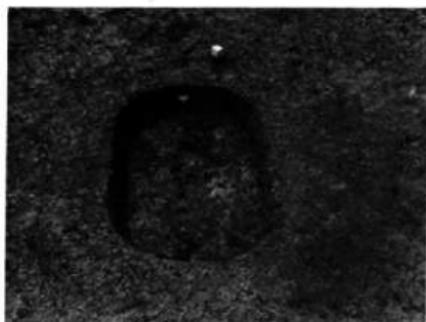
57号土坑土層セクション (SE↑)



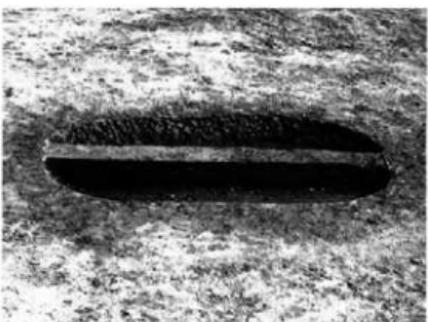
58号土坑全景 (E↑)



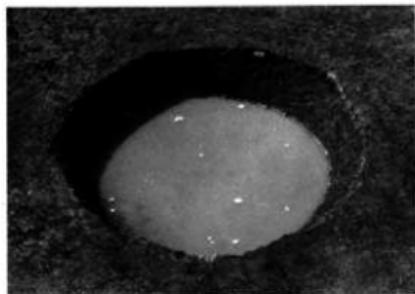
58号土坑土層セクション (SE↑)



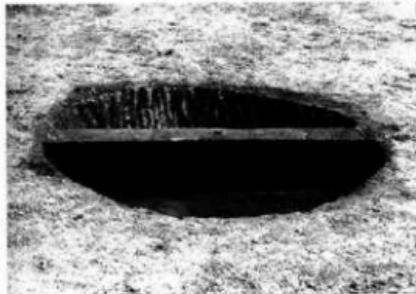
59号土坑全景 (E↑)



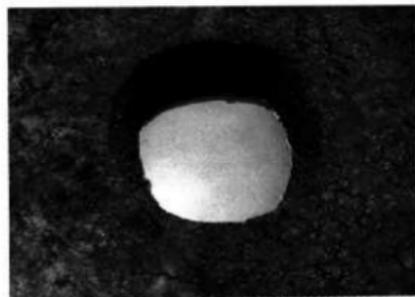
59号土坑土層セクション (SE↑)



61号土坑全景 (E↑)



61号土坑土層セクション (SE↑)



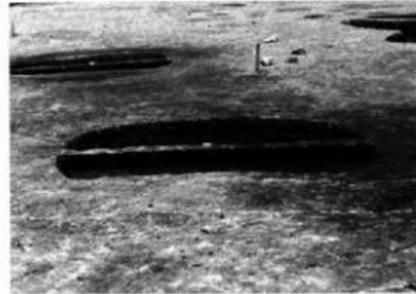
62号土坑全景 (NW↑)



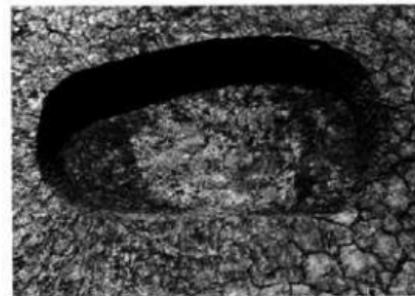
62号土坑土層セクション (SE↑)



65号土坑全景 (NW↑)



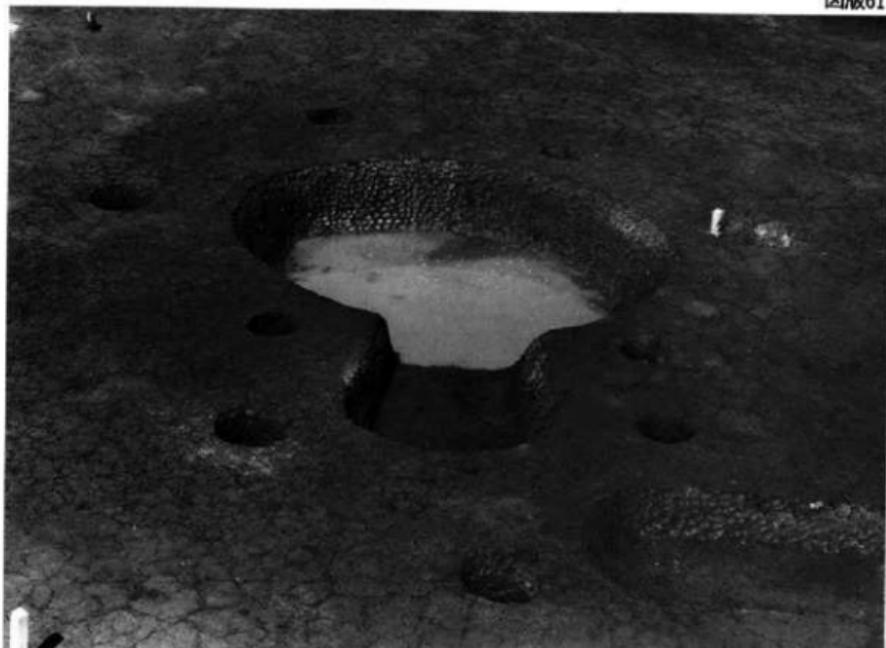
65号土坑土層セクション (N↑)



66号土坑全景 (NE↑)



66号土坑土層セクション (N↑)



63号土城全景 (NE↑)



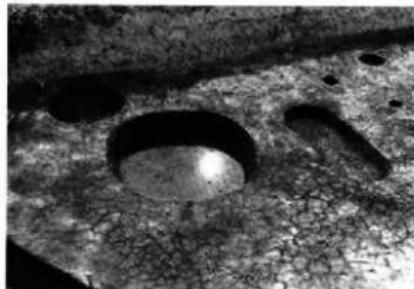
63号土城土層セクション (SW↑)



64号土坑全景 (E1)



64号土坑土層セクション (E1)



68・69・70号土坑全景 (N↑)



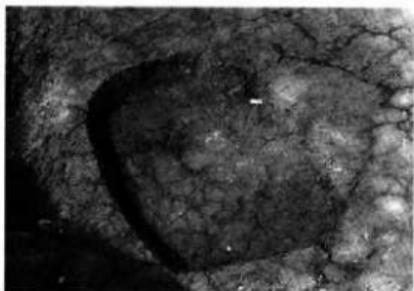
RP68出土状態 (SK68) (NE↑)



69号土坑土層セクション (E↑)



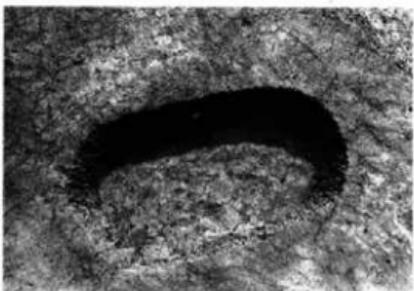
RP69出土状態 (W↑)



78号土坑土層セクション (SE↑)



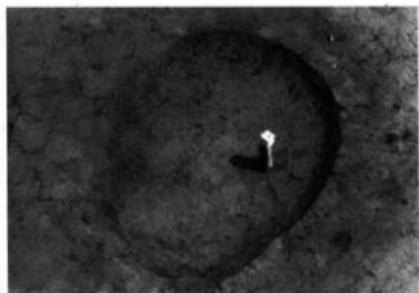
78号土坑土層セクション (NE↑)



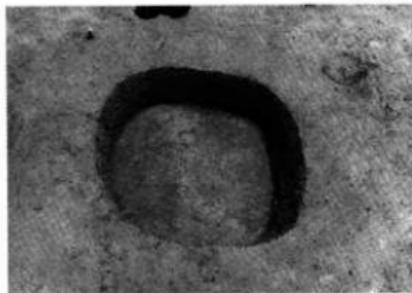
79号土坑全景 (E↑)



79号土坑土層セクション (S↑)



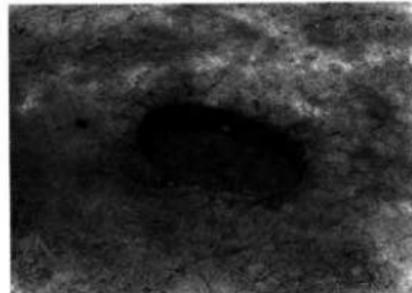
97号土坑全景



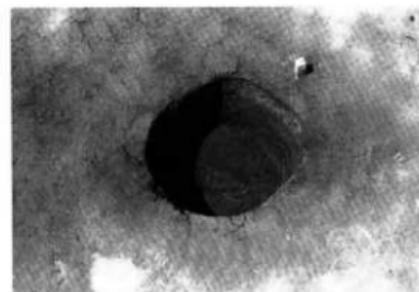
98号土坑全景 (W↑)



98号土坑セクション土層 (E↑)



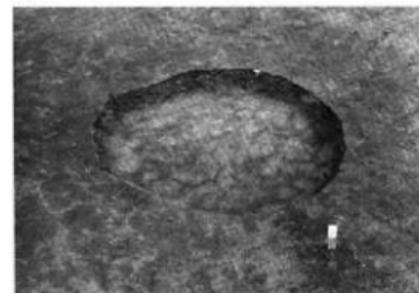
100号土坑全景 (N↑)



101号土坑全景 (NE↑)



105号土坑全景 (E↑)



109号土坑全景 (W↑)



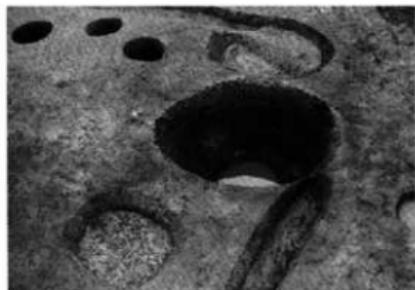
109号土坑土層セクション (S↑)



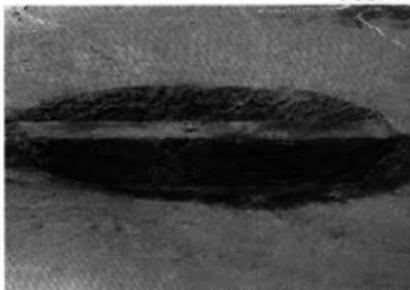
106・107号土城全景 (SE ↑)



106・107号土城土層セクション (SE ↑)



110～113号土坑全景 (SE↑)



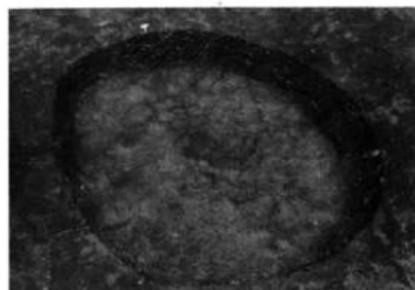
110号土坑土層セクション (S↑)



111号土坑土層セクション (SE↑)



113号土坑全景 (N↑)



118号土坑全景 (W↑)



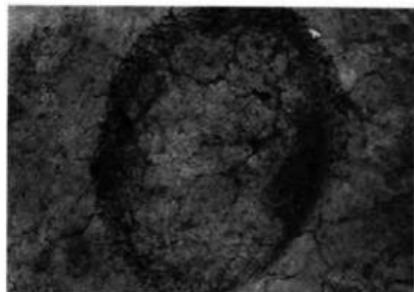
118号土坑土層セクション (S↑)



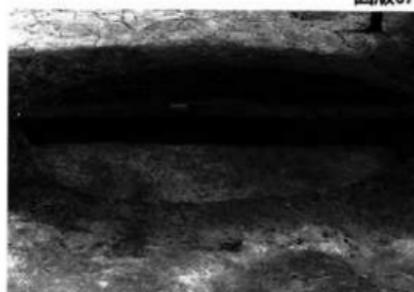
119号土坑全景 (N↑)



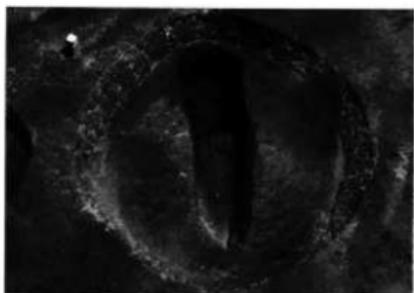
119号土坑土層セクション (S↑)



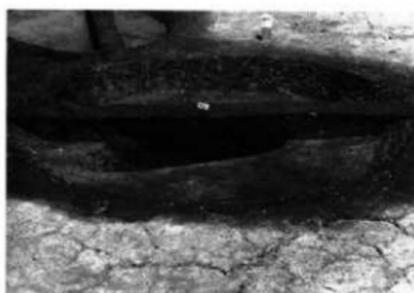
120号土坑全景 (N↑)



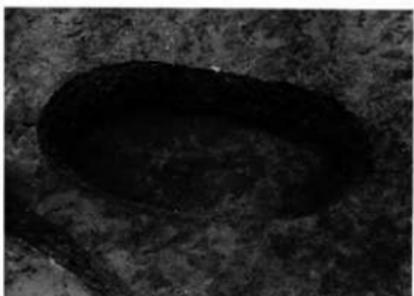
120号土坑土層セクション (S↑)



121号土坑全景 (S↑)



121号土坑土層セクション (E↑)



122号土坑全景 (N↑)



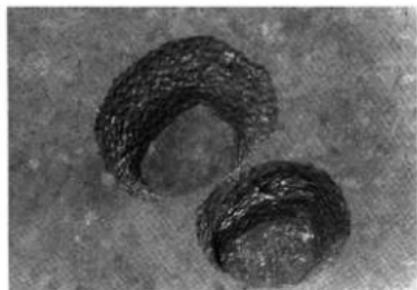
122号土坑土層セクション (S↑)



123号土坑全景 (W↑)



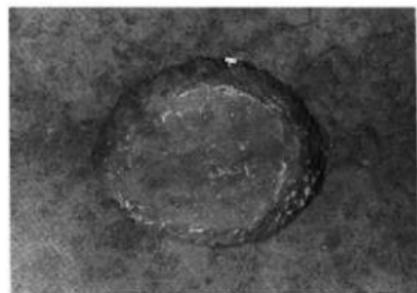
123号土坑土層セクション (SW↑)



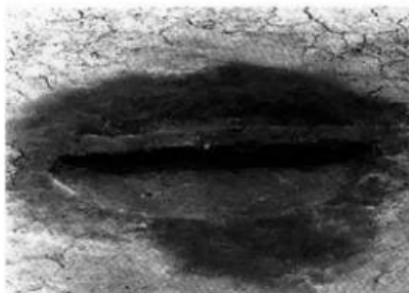
124号土坑全景 (SE↑)



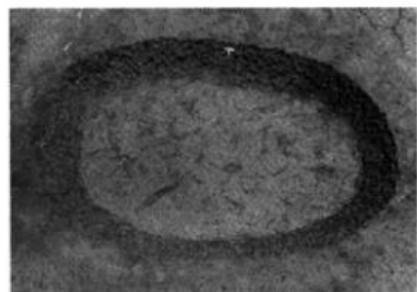
124号土坑土層セクション (E↑)



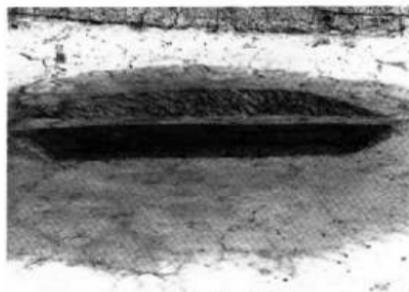
125号土坑全景 (S↑)



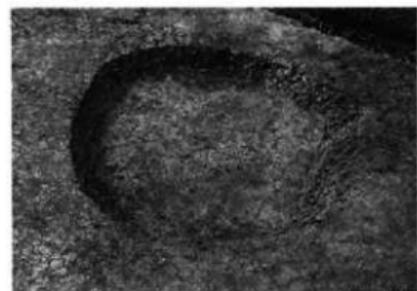
125号土坑土層セクション (SW↑)



126号土坑全景 (S↑)



126号土坑土層セクション (S↑)



139号土坑全景 (E↑)



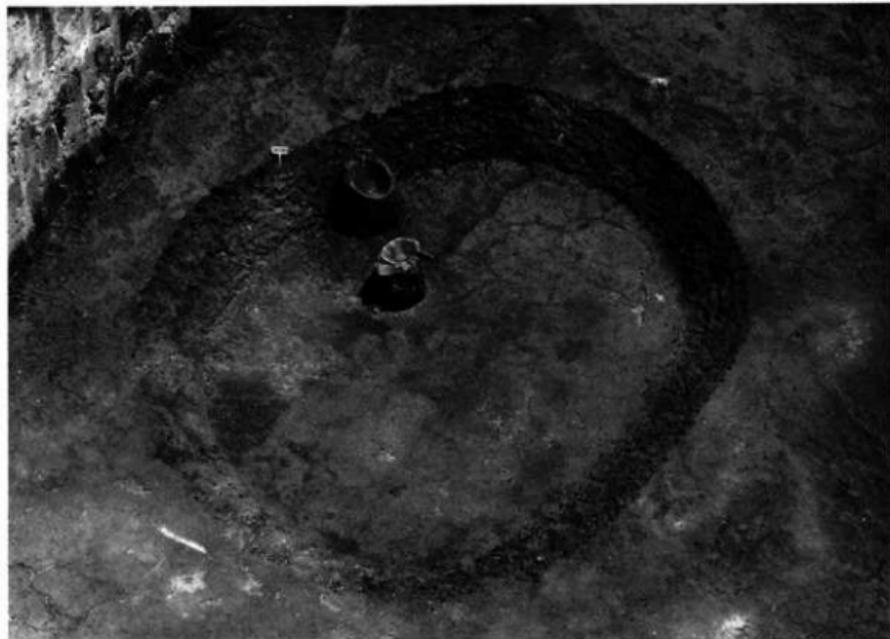
139号土坑土層セクション (S↑)



127・128号土城全景 (S↑)



127・128号土城土層セクション (SE↑)



130号土城全景 (SW ↑)



130号土城土層セクション (SE ↑)



11号溝跡 (A地区) 全景 (N↑)



11号溝跡 (A地区) 近景 (1) (E↑)



11号溝跡 (A地区) 近景 (2) (NW↑)



11号溝跡土層セクション (A地区) (E↑)



11号溝跡排水作業 (NE↑)



11号溝跡 (C地区) 全景 (NE↑)



11号溝跡土層セクション (C地区) (E↑)



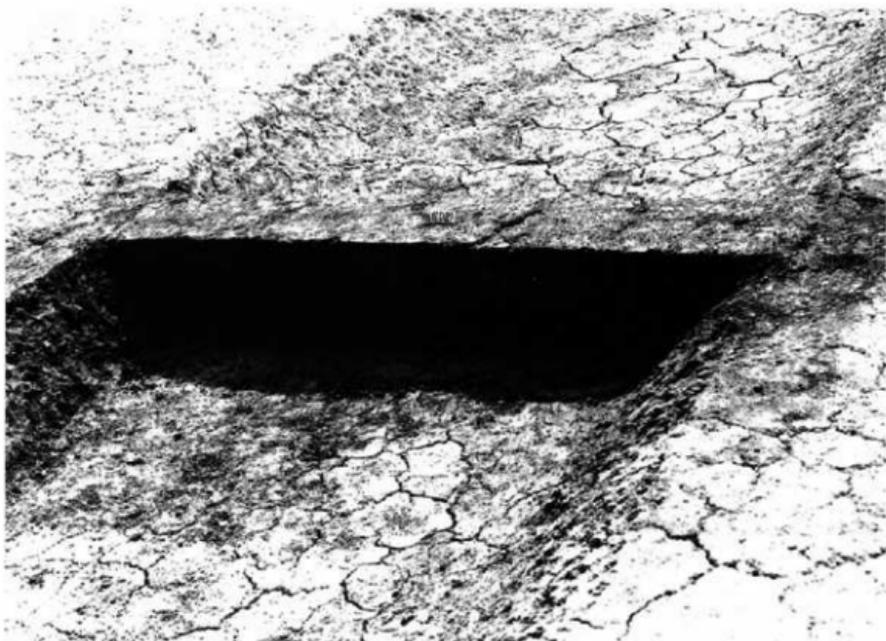
12号溝跡全景 (W↑)



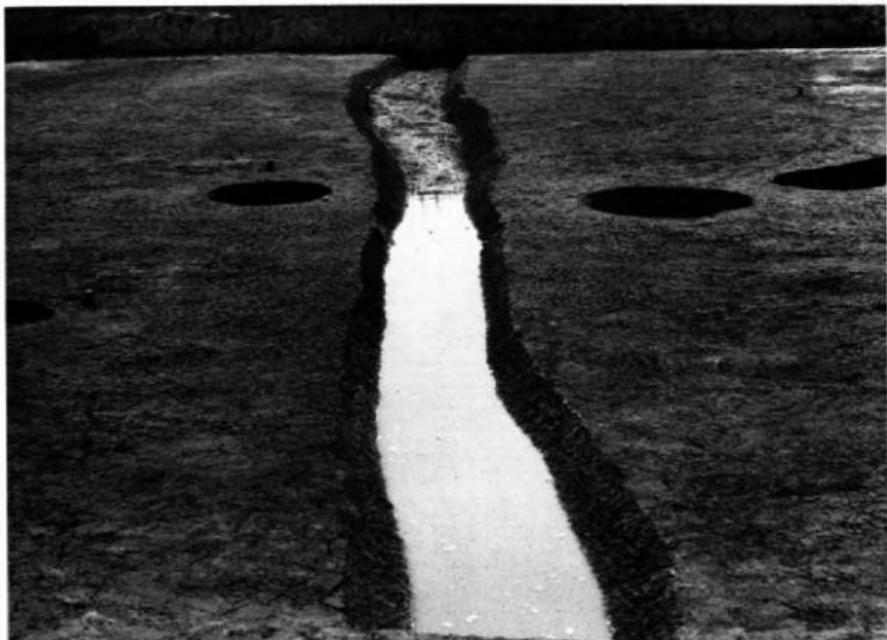
12号溝跡土層セクション (SE↑)



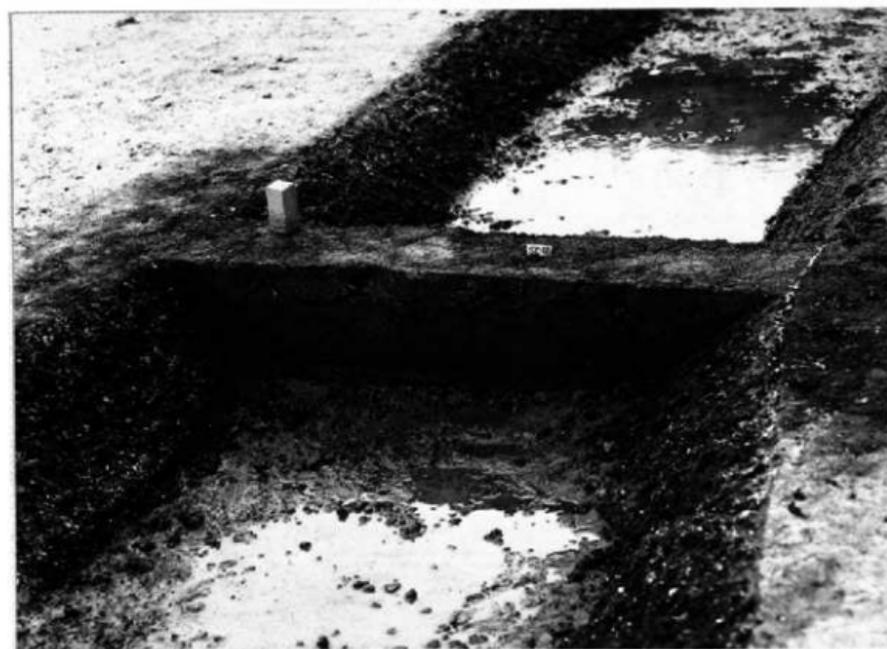
21号溝跡全景 (NE↑)



21号溝跡土層セクション (N↑)



50号溝跡近景 (E↑)



50号溝跡土層セクション



51号溝跡近景 (N↑)



51号土坑土層セクション (N↑)



52・60号溝跡近景 (NE↑)



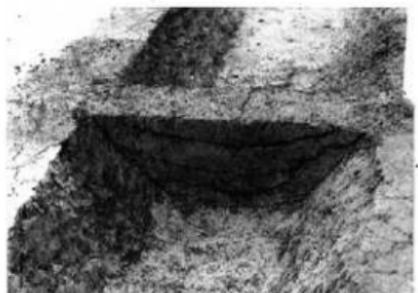
52号溝跡土層セクション (N↑)



60号土垣溝跡土層セクション (N↑)



82号溝跡全景 (N↑)



82号溝跡土層セクション (SE↑)



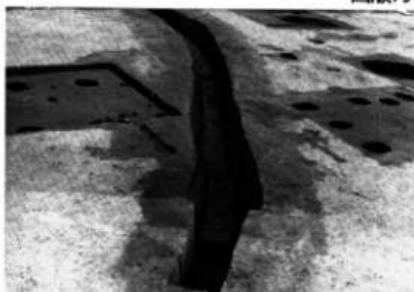
99号满跡全景 (1) (SE ↑)



99号满跡全景 (2) (W ↑)



99号溝跡近景 (1) (E↑)



99号溝跡近景 (2) (W↑)



99号溝跡土層セクション (1) (E↑)



99号溝跡土層セクション (2) (E↑)



99号溝跡土層セクション (3) (E↑)



99号溝跡土層 (4) (E↑)



99号溝跡土層セクション (5) (E↑)



114号溝跡全景 (S↑)



129号沟迹全景 (W ↑)



131号沟迹全景 (E ↑)



10



11



14



18



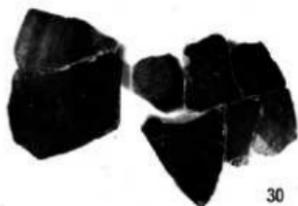
25



26



27



30



31



32



36



37



38



41



42



45



46



52



53



54



55



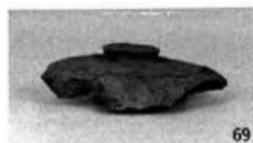
65



66



67



69



75



76



77



78



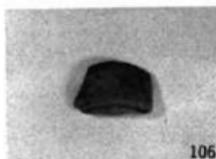
84



85



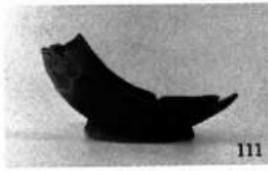
100



106



108



111



113



118



119



120



122



128



129



131



132



140



148



149



150



152



154



55



157



158



167



168



169



170



174



175



176



177



178



179



180



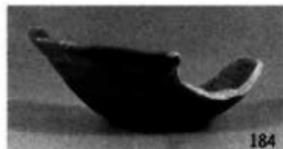
181



182



183



184



186



187



188



192



193



194



198



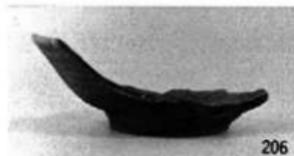
199



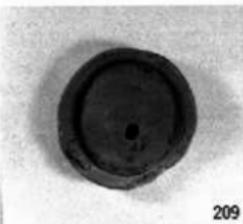
200



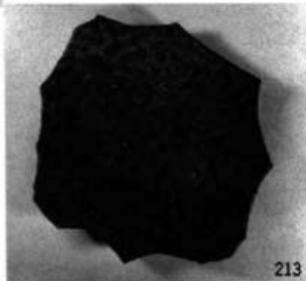
203



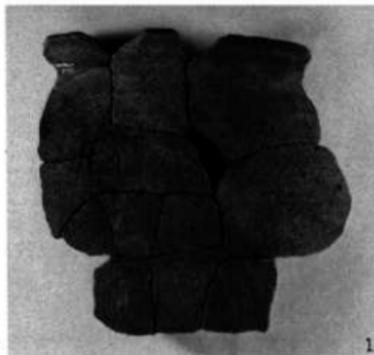
206



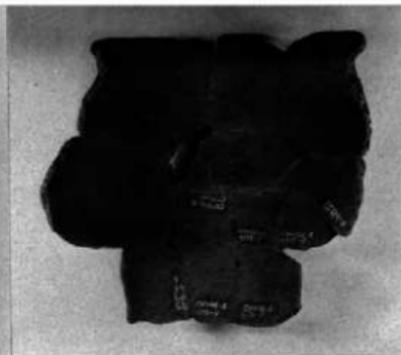
209



213



1



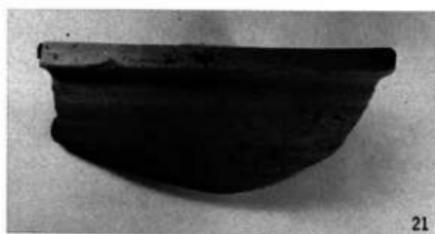
15



17



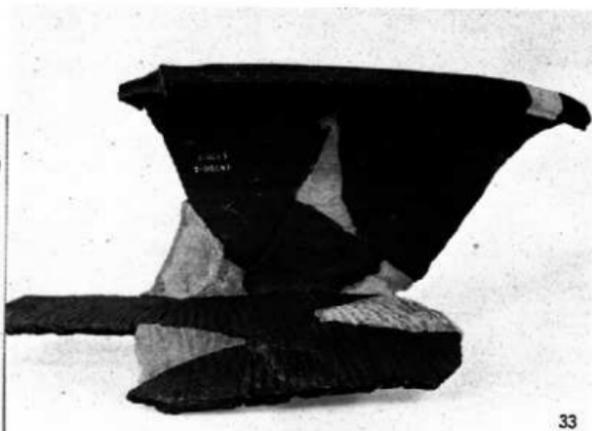
20



21



28



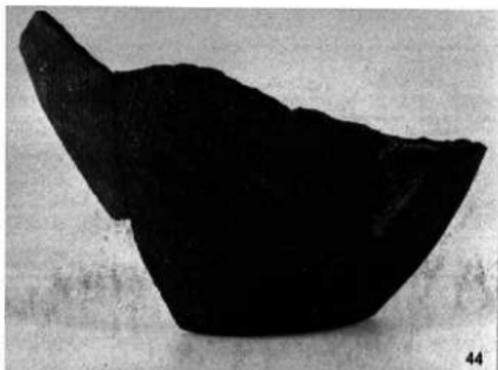
33



29



43



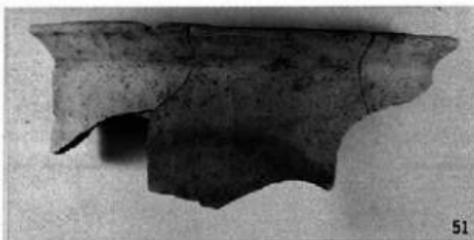
44



48



49



51



50



55

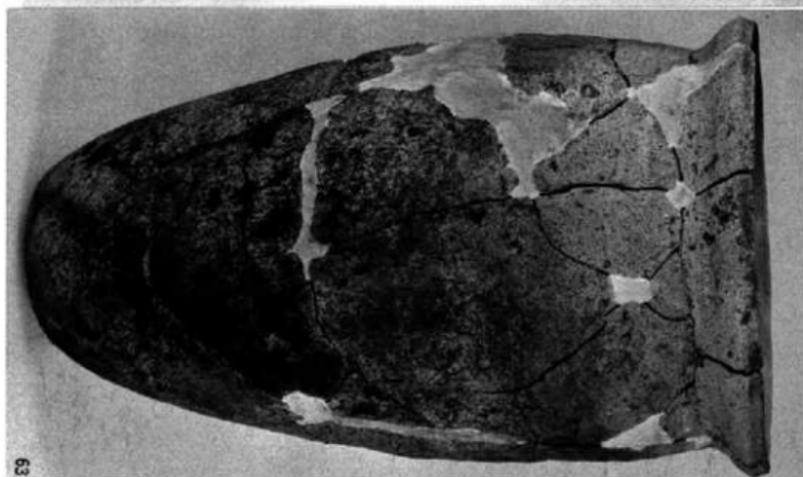
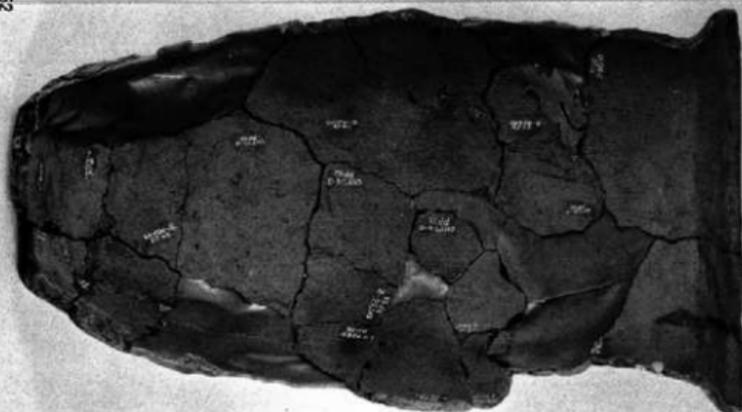


57





62



63



64



74



80



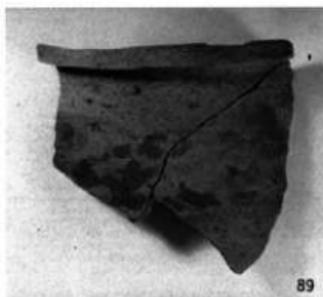
81



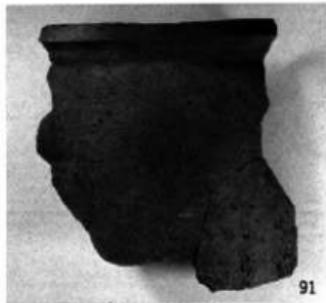
83



87



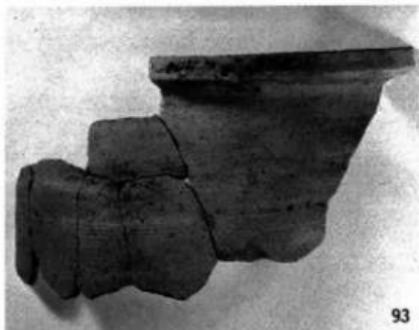
89



91



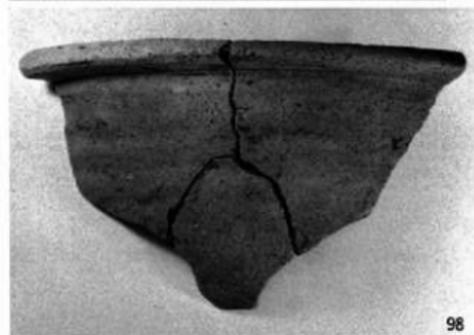
94



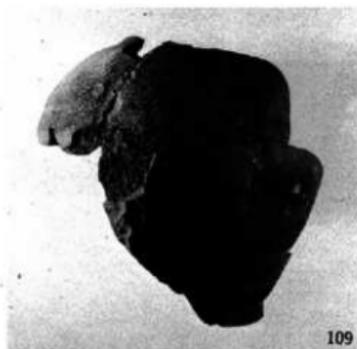
93



97



98



109



102



124



142



190



172



191



214



215



216



217

---

山形県埋蔵文化財調査報告書 第104集

だる ま じ  
達 磨 寺 遺 跡  
発 掘 調 査 報 告 書

昭和61年3月25日 印刷  
昭和61年3月31日 発行

発行 山 形 県 教 育 委 員 会  
印刷 藤 庄 印 刷

---

付 編

達磨寺遺跡土層説明

(第5回)劣住居跡

- 1: 暗褐色土 炭化粒子を含む
- 2: 褐色土 黄褐色土ブロックを含む
- 3: 黒褐色土 炭化粒子を多く含む
- 4: 暗褐色土 黄褐色土・炭化粒子を含む

- 3: 黒褐色土 炭化・粘土・粘土粒を含む (E L 137)

- 1: 黒褐色土
  - 2: 黒褐色土
  - 3: 黒褐色土 焼土・炭化・粘土を含む
  - 4: 暗褐色土 3に近似より焼土粒が多い
- } 77号住居7・8に同じ

(第9回)75号住居跡

- 1: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒を含む
- 2: 黒褐色土 1に類似、焼土粒を若干含む
- 3: 褐色土 炭化粒子を含み、軟らかい

(第11回)81号住居跡

- 1: 暗褐色土 砂粒を含む
- 2: 黄褐色土 砂粒を多く含む
- 3: 黒褐色土 炭化粒を多量に含む
- 4: 黒褐色土 炭化・焼土粒子を含む
- 5: 暗褐色土 焼土層
- 6: 暗褐色土 焼土・炭化粒・灰を含む
- 7: 黒褐色土 焼土粒・炭化材を含む
- 8: 暗褐色土 7に近似若干の灰を含む
- 9: 黒褐色土 炭化粒を含み堅い
- 10: 暗褐色土 炭化・黄褐色土粒を含む
- 11: 黄褐色土 砂層
- 12: 褐色土 砂粒・炭化粒を含む
- 13: 褐色土 炭化・黄褐色土粒含み砂質
- 14: 暗褐色土 13に類似より軟らかい
- 15: 褐色土 炭化粒・黄褐色土ブロック含む
- 16: 暗褐色土 15に近似より軟らかい

(第7回)72号住居跡

- 1: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む
- 2: 暗褐色土 炭化・黄褐色土ブロックを含む
- 3: 褐色土 炭化・黄褐色土粒多量に含む
- 4: 褐色土 焼土・炭化粒子を含む

(E L 135)

- 1: 黒色土 炭化粒子を含み軟らかい
- 2: 黒褐色土 75号住居跡1に同じ
- 3: 黒褐色土 焼土・粘土・炭化粒を含む
- 4: 褐色土 焼土粒・炭化粒を多く含む
- 5: 褐色土 粘土粒・炭化粒を多く含む
- 6: 褐色土 炭化粒・焼土粒を含む

(S K 138)

(E L 132)

- 1: 黒褐色土
  - 2: 暗褐色土
  - 3: 褐色土
  - 4: 褐色土
  - 5: 褐色土 焼土ブロックを多量に含む
  - 6: 暗褐色土 焼土・粘土ブロックを含む
  - 7: 黒褐色土 焼土・粘土・炭化粒子を含む
  - 8: 黒色土 炭化粒子を含む
- } 72号住居跡1~4に同じ

(S K 71)

- 1: 黒褐色土 炭化粒子を含む
- 2: 黒褐色土 炭化・焼土粒を含む
- 3: 暗褐色土 黄褐色土ブロックを含む
- 4: 暗褐色土 3に近似、炭化粒子若干含む
- 5: 黒色土 炭化材を多量に含む
- 6: 赤褐色土 焼土・炭化粒子を多く含む

(第10回)76・77号住居跡

- 1: 暗褐色土 黄褐色土ブロック・炭化粒を含む
- 2: 黒褐色土 焼土・炭化粒を含む
- 3: 黒褐色土 2に近似より堅い
- 4: 暗褐色土 黄褐色土・炭化粒子を含む
- 5: 黒褐色土 黄褐色土・炭化粒を多量に含む
- 6: 褐色土 黄褐色土・炭化粒含み軟らかい
- 7: 黒褐色土 炭化粒子を含み堅い
- 8: 黒褐色土 炭化・焼土・黄褐色土粒を含む
- 9: 黒褐色土 炭化粒子多量に含み軟らかい
- 10: 黒色土 炭化層
- 11: 暗褐色土 炭化・焼土粒を多量に含む
- 12: 黒褐色土 10に近似炭化粒がより少ない
- 13: 暗褐色土 炭化・黄褐色土粒含み軟らかい
- 14: 暗褐色土 炭化・黄褐色土粒含み軟らかい
- 15: 褐色土 黄褐色土ブロックを含む
- 16: 暗褐色土 炭化粒子・多量に含む

(第12回)85号住居跡

- 1: 褐色土 粘土・黄褐色土ブロック含む
- 2: 暗褐色土 黄褐色土・炭化粒含み軟らか
- 3: 黒褐色土 黄褐色土・炭化粒含み粘質
- 4: 茶褐色土 黄褐色土粒含み砂質
- 5: 褐色土 4に近似より砂質
- 6: 暗褐色土 黄褐色土・炭化粒を含む
- 7: 褐色土 炭化粒子を含み軟らかい

(E L 102)

- 1: 褐色土 85号住居跡1に同じ
- 2: 暗褐色土 粘土ブロック・焼土粒を含む
- 3: 暗褐色土 粘土・粘土粒・炭化粒を含む
- 4: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒を含む
- 5: 褐色土 炭化粒子含み軟らかい
- 6: 暗褐色土 炭化・焼土粒を若干含む
- 7: 黒褐色土 85号住居跡3に類似
- 8: 黒褐色土 7に近似より軟らかい
- 9: 黒褐色土 炭化・焼土粒を多量に含む
- 10: 黒褐色土 9に近似より軟らかい
- 11: 暗褐色土 炭化粒子を多量に含む
- 12: 褐色土 粘土・黄褐色土ブロック含む

(第8回)73・74号住居跡

- 1: 黒褐色土 炭化粒子を若干含む
- 2: 黒褐色土 炭化粒子を多量に含む
- 3: 暗褐色土 炭化・黄褐色土粒を含む
- 4: 褐色土 炭化・黄褐色土粒多量に含む
- 5: 暗褐色土 炭化粒を含み堅い
- 6: 暗褐色土 炭化・黄褐色土粒を含む

(E L 133)

- 1: 黒褐色土
  - 2: 黒褐色土
  - 3: 黒褐色土 炭化・粘土粒を含む
  - 4: 黒色土 炭化・粘土粒を含む
  - 5: 黒褐色土 粘土・焼土を多量に含む
- } 73住居跡1・2に同じ

(E L 134)

- 1: 暗褐色土
  - 2: 暗褐色土
- } 74住居跡5・6に同じ

(E L 136)

- 1: 褐色土
  - 2: 黒褐色土
  - 3: 黒褐色土
  - 4: 赤褐色土 焼土層
  - 5: 赤褐色土 4に近似炭化材を含む
  - 6: 暗褐色土 焼土粒・ブロックを含む
  - 7: 暗褐色土 焼土・粘土ブロックを含む
  - 8: 黒褐色土 焼土・粘土・炭化粒を含む
- } 76号住居1~3に同じ

- 13: 灰褐色土 粘土 (E L 104)
- 14: 褐色土 粘土 1: 褐褐色土 } 87号住居跡 1・2に同じ
- 15: 暗褐色土 粘土・黄褐色粘土を含む 2: 褐色土 }  
3: 黒褐色土 炭化粒子を含む  
4: 黒褐色土 炭化・焼土・粘土粒を含む  
5: 黒色土 炭化粒子を若干含む  
6: 暗褐色土 炭化・焼土・粘土粒を含む  
7: 褐色土 焼土粒を多く含む  
8: 黒色土 炭化・粘土粒を含む
- (第13回)86号住居跡 (S T 88)
- 1: 褐色土 黄褐色土ブロック多量に含む  
2: 暗褐色土 炭化粒・粘土・黄褐色粒を含む  
3: 暗褐色土 2に近似より炭化粒を多く含む  
4: 褐色土 炭化粒・黄褐色土粒を含む  
5: 黒褐色土 炭化粒子を多量に含む  
6: 暗褐色土 炭化・黄褐色粒を多量に含む  
7: 黒色土 炭化粒・材を含む  
8: 黒褐色土 炭化粒・砂粒を含み堅い  
9: 黒褐色土 8に近似より堅い  
10: 暗褐色土 黄褐色土ブロックを含む  
11: 黄褐色土 炭化粒子を若干含む堅い  
12: 暗褐色土 炭化粒子を多量に含む
- (E L 103) (E L 105)
- 1: 黒色土 若干の炭化・焼土粒を含む  
2: 黒褐色土 炭化・焼土粒を含む  
3: 黒褐色土 2に近似より炭化粒を含む  
4: 褐色土 86号住居跡 1に同じ  
5: 褐色土 4に近似するが砂粒混る  
6: 暗褐色土 砂粒が多く混る  
7: 暗褐色土 砂粒・炭化粒を多く含む  
8: 褐色土 焼土・砂粒が混る  
9: 暗褐色土 焼土・砂粒・黄褐色粒を含む  
10: 暗褐色土 86号住居跡 3と同じ  
11: 褐色土 9に近似より焼土粒を含む  
12: 褐色土 焼土ブロックを多量に含む  
13: 黒褐色土 焼土・粘土ブロックを含む  
14: 赤褐色土 焼土層  
15: 暗褐色土 焼土・炭化粒を含む  
16: 暗褐色土 焼土・炭化ブロック多量含む  
17: 灰褐色土 粘土  
18: 暗灰色土 粘土・褐色土ブロックが混る
- 1: 暗褐色土 炭化・焼土粒を含む  
2: 褐色土 炭化・粘土粒を多量に含む  
3: 褐色土 粘土ブロックを含む  
4: 暗褐色土 炭化・粘土ブロックを含む  
5: 暗褐色土 4層より炭化粒子を多く含む  
6: 黒褐色土 黄褐色土粒を含む
- (第15回)90号住居跡 (S T 91)
- 1: 褐色土 黄褐色土粒・砂粒を若干含む  
2: 褐色土 炭化粒・黄褐色土粒を含む  
3: 黒褐色土 炭化粒を多量に含む軟らかい  
4: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒多量に含む  
5: 暗褐色土 炭化粒子を含む  
6: 暗褐色土 5に近似より軟らかい  
7: 黒褐色土 4に近似より軟らかい  
8: 褐色土 褐色土ブロック多く含む  
9: 黒褐色土 炭化粒子を多く含む軟らかい
- (第16回)91・92号住居跡 (S T 92)
- 1: 暗褐色土 炭化・粘土粒を含む  
2: 暗褐色土 炭化・黄褐色土粒を含む  
3: 暗褐色土 炭化・焼土・粘土粒を含む  
4: 黒色土 炭化材を多く含む  
5: 黒褐色土 3に近似より軟らかい  
6: 黒褐色土 炭化粒子を多量に含む  
7: 黒褐色土 黄褐色土ブロック多量に含む
- 1: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒を含む  
2: 黒褐色土 炭化・砂粒を含む  
3: 黒褐色土 炭化・砂粒・焼土粒を含む  
4: 黒色土 炭化材を多く含む  
5: 黒褐色土 3に近似より軟らかい  
6: 黒褐色土 炭化粒子を多量に含む  
7: 黒褐色土 黄褐色土ブロック多量に含む
- 1: 黒褐色土 白色粘土ブロックを含む  
24: 褐色土 炭化・粘土ブロックを含む  
25: 黒褐色土 炭化・粘土・焼土粒を含む  
26: 褐色土 粘土ブロック  
27: 褐色土 粘土・焼土ブロックを含む  
28: 褐色土 黄褐色土・炭化粒子を含む  
29: 黒色土 焼土・炭化粒子を多量に含む  
30: 黒色土 29層に近似より軟らかい  
31: 黒褐色土 黄褐色土粒子を多量に含む
- (第17回)93号住居跡 (第18回)36号建物跡
- 1: 黒褐色土 炭化粒子を多量に含む  
2: 黒褐色土 2層と近似より軟らかい  
3: 褐色土 炭化・黄褐色土粒を多く含む  
4: 褐色土 炭化・焼土粒を含む  
5: 黒褐色土 炭化粒子を多量に含む  
6: 黒褐色土 炭化・焼土粒を多く含む  
7: 褐色土 焼土粒・ブロックを含む  
8: 褐色土 焼土・粘土ブロックを含む  
9: 黒褐色土 焼土・粘土・炭化粒を含む  
10: 褐色土 炭化粒を含みやや堅い
- 1: 黒褐色土 炭化黄褐色土粒を多量に含む  
2: 暗褐色土 1層に近似・褐色味がある  
3: 黒褐色土 黄褐色土ブロックを含む  
4: 黒色土 炭化粒子を多量に含む
- (第14回)87・88号住居跡 (S T 87)
- 1: 褐色土 炭化粒子を若干含む  
2: 褐色土 炭化粒・褐色土ブロック含む  
3: 暗褐色土 炭化粒子を多く含む  
4: 暗褐色土 3に近似より軟らかい  
5: 褐色土 黄褐色・褐色土粒を含む

- 5: 黒褐色土 1層に近似・黒味を増す 2: 黒褐色土 1層に近似より軟らかい 3: 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む
- 3: 黒褐色土 1層に近似より軟らかい 4: 赤褐色土 焼土
- (第19回)43号建物跡
- 1: 黒褐色土 炭化粒を含み固い 4: 褐色土 黄褐色土粘土ブロックを含む 1: 暗褐色土 炭化粒子を含む
- 2: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒を多く含む 6: 暗褐色土 炭化粒子を多量に含む 2: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む
- 3: 褐色土 黄褐色土ブロックを含む 7: 褐色土 黄褐色粘土ブロック 3: 黒褐色土 2層に近似より炭化粒子を含む
- 4: 黒色土 炭化粒子を多量に含む 8: 褐色土 6層と近似 4: 褐色土 黄褐色粘土ブロックが混る
- 9: 黒色土 炭化粒子を含む軟らかい 5: 黒褐色土 若干の炭化粒子を含む
- (第21回)94号建物跡
- 10: 黒褐色土 白色粘土ブロックを含む (SK7)
- 1: 黒褐色土 炭化粒子を多量に含む 11: 黄褐色土 黄褐色粘土ブロック 1: 黒色土 炭化粒子を多く含む
- 2: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒を多く含む 12: 褐色土 黄褐色土粒を多く含む 2: 黒色土 炭化粒子を若干含む
- 3: 黒色土 炭化・黄褐色土粒を含む 13: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒を多く含む 3: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む
- 4: 褐色土 粘土・黄褐色土粒を多く含む 14: 黒褐色土 12層に近似・より軟らかい (SK13)
- 5: 黒褐色土 2層に近似する (SK110)
- 6: 黒色土 炭化粒を多量に含む軟らかい 1: 黒褐色土 炭化・焼土粒子を多量に含む 1: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒を多く含む
- 2: 暗褐色土 炭化・黄褐色土粒を含む 2: 黒褐色土 1層より多く含む
- 3: 暗褐色土 2層に近似・より炭化粒を含む 4: 暗褐色土 黄褐色粘土ブロックが混る
- 4: 暗褐色土 4層に近似・より粘土粒強い 4: 黒色土 炭化粒子を多量に含む
- 5: 褐色土 4層に近似・より粘土粒強い 4: 黒色土 焼土を多く含む (SK14)
- 6: 褐色土 黄褐色粘土ブロック 1: 黒褐色土 焼土・炭化粒子を若干含む
- 7: 褐色土 6層に近似・炭化粒が混る 2: 暗褐色土 炭化粒を含む
- 8: 褐色土 黄褐色粘土小ブロック混る 3: 暗褐色土 焼土・炭化粒子を含む
- 9: 褐色土 8層に近似より粘土粒混る 4: 褐色土 焼土・黄褐色土粒を含む
- 10: 黒褐色土 炭化粒子を多く含む (SK18)
- 11: 黒褐色土 炭化・粘土ブロックを含む 1: 暗褐色土 炭化粒子を若干含む
- 12: 黄褐色土 粘土ブロック 2: 暗褐色土 1層に近似・黄褐色土粒を含む
- 13: 黄褐色土 12層に近似・炭化粒を含む (SK16)
- 14: 黒色土 炭化粒子を若干含む 1: 黒褐色土 炭化粒子を含む
- 15: 黒色土 14層と近似より軟らかい 2: 暗褐色土 黄褐色土粘土粒を含む
- (第23回)96号建物跡
- 1: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒子多く含む 13: 黄褐色土 12層に近似・炭化粒を含む (SK16)
- 2: 暗褐色土 1層と近似するが粒子少ない 14: 黒色土 炭化粒子を若干含む 1: 黒褐色土 炭化粒子を含む
- 3: 黒色土 炭化粒子を多量に含む軟らか 15: 黒色土 14層と近似より軟らかい 2: 暗褐色土 黄褐色土粘土粒を含む
- 4: 褐色土 粘土ブロック
- 5: 褐色土 4層に近似 (第25回)土壌(1) (第26回)土壌(2)
- 6: 褐色土 褐色粘土ブロック (SK2) (SK10)
- 7: 暗褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む 1: 黒褐色土 炭化粒子を多く含む 1: 黒色土 炭化粒子・灰を多量に含む
- 8: 黒褐色土 炭化粒子を多量に含む 2: 黒褐色土 1層に近似より軟らかい 2: 黒色土 1層に近似より灰を多く含む
- 9: 褐色土 黄褐色土粘土ブロック 3: 褐色土 黄褐色土粒を含む 3: 黒色土 炭化材層
- 10: 褐色土 黄褐色粘土ブロック (SK3) 4: 黒褐色土 焼土・灰を多く含む
- (SD129) 1: 暗褐色土 黄褐色土粒を多量に含む 5: 黒褐色土 焼土・灰を多く含む
- 11: 黒色土 炭化粒子を多量に含む 2: 褐色土 若干の炭化粒子を含む 6: 黒褐色土 炭化粒子・木炭を多く含む
- 12: 褐色土 黄褐色土ブロックを含む (SK4) 1: 暗褐色土 焼土を若干含む 7: 褐色土 炭化・焼土粒子を含む
- 13: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒子多く含む 2: 暗褐色土 焼土・炭化粒を含む (SK15)
- (第24回)108・110号井戸跡 (SK5)
- 1: 黒色土 炭化・焼土粒子を多量に含む 1: 黒褐色土 粘土ブロックを多量に含む
- (SK108) 2: 黒褐色土 炭化・焼土粒子を多量に含む 2: 黒褐色土 焼土ブロックを含む
- 1: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む 3: 黒色土 炭化粒子を若干含む

- 4: 褐色土 黄褐色土粒が混る  
 5: 暗褐色土 4層に近似若干炭化粒子を含む (SK38)
- 1: 黒褐色土 炭化粒子を多く含む  
 2: 暗褐色土 黄褐色土粒を多く含む  
 3: 黒褐色土 1層に近似  
 4: 黄褐色土 黄褐色粘土ブロックが混る  
 5: 暗褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む  
 6: 暗褐色土 5層に近似・より軟らかい (第27図) 土壌(3)
- 1: 褐色土 砂層  
 2: 褐色土 黄褐色粘土ブロックを含む  
 3: 暗褐色土 炭化・黄褐色粒を多量に含む  
 4: 褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む  
 5: 黒褐色土 若干の炭化粒子を含む  
 6: 黒褐色土 炭化粒子を多量に含む  
 7: 暗褐色土 黄褐色粘土ブロックを含む  
 8: 褐色土 4層に近似  
 9: 褐色土 4層に近似  
 10: 黒褐色土 炭化・焼土粒子を含む  
 11: 黒色土 炭化層  
 12: 黒褐色土 炭化・焼土粒子を含む  
 13: 褐色土 黄褐色粘土粒を多量に含む  
 14: 暗褐色土 13層に近似・黒味がある  
 15: 褐色土 若干の炭化粒子を含む  
 16: 暗褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む  
 17: 黒褐色土 若干の炭化粒子を含む (第28図) 土壌(4) (SD12)
- 1: 黒褐色土 若干の炭化・黄褐色土粒を含む (SK57)  
 2: 黒褐色土 1層に近似より黒味がある  
 3: 褐色土 黄褐色粘土ブロックが混る (SK22~25)  
 4: 黒褐色土 若干の炭化・焼土粒子を含む  
 5: 黒褐色土 5層に近似より軟らかい  
 6: 黒色土 炭化粒子を多量に含む  
 7: 暗褐色土 焼土粒子を多量に含む  
 8: 黒褐色土 炭化・焼土粒子を若干含む  
 9: 暗褐色土 黄褐色土粒子を多く含む  
 10: 褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む (第29図) 土壌(5) (SK17)
- 1: 暗褐色土 炭化粒子を若干含む  
 2: 褐色土 炭化・黄褐色土粒を含む  
 3: 暗褐色土 1層に近似する  
 4: 黄褐色土 黄褐色粘土ブロックが混る (SK28)  
 1: 暗褐色土 若干の炭化粒子を含む (SK33)  
 1: 褐色土 若干の炭化粒子を含む  
 2: 黄褐色土 粘土ブロックが混る  
 3: 褐色土 1層に近似より黒味がある (SK34)  
 1: 黒色土 多量の炭化粒子が混る  
 2: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒が混る  
 3: 黒褐色土 2層に近似より軟らかい  
 4: 暗褐色土 黄褐色粘土粒を含む (SK35)  
 1: 黒褐色土 炭化粒子を含む  
 2: 暗褐色土 炭化粒子を含む (SK37)  
 1: 暗褐色土 多量の粘土小ブロック含む  
 2: 暗褐色土 1層に近似よりこまくなる  
 3: 褐色土 褐色粘土  
 4: 黄褐色土 黄褐色粘土  
 5: 黒褐色土 炭化粒子を含む  
 6: 黒褐色土 5層に近似より軟らかい (SK56)  
 1: 黒褐色土 若干の炭化粒子を含む  
 2: 黒色土 炭化粒子を多く含む  
 3: 黒褐色土 炭化粒子を含む  
 4: 暗褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む  
 5: 暗褐色土 4層に近似より堅い  
 1: 褐色土 若干の炭化粒子を含む  
 2: 暗褐色土 炭化粒子を多量に含む  
 3: 褐色土 褐色粘土  
 4: 暗褐色土 炭化粒子を若干含む (SK54・55)  
 1: 黒褐色土 炭化・焼土粒子を多く含む  
 2: 赤褐色土 焼土層  
 3: 褐色土 炭化・焼土粒子を多量に含む  
 4: 黒褐色土 焼土ブロックを含む  
 5: 黒色土 炭化材層  
 6: 黒褐色土 炭化・焼土粒子を多量に含む  
 7: 黒褐色土 6層に近似より堅い  
 8: 暗褐色土 若干の炭化粒子を含む  
 9: 暗褐色土 8層に近似より堅い (SK64)
- 10: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む  
 11: 黒褐色土 10層と近似より軟らかい  
 12: 赤褐色土 焼土層  
 13: 黒褐色土 炭化・焼土粒子を含む (第30図) 土壌(6) (SK53)
- 1: 暗褐色土 若干の炭化粒子を含む  
 2: 暗褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む  
 3: 暗褐色土 2層に近似より軟らかい (SK58)  
 1: 黒褐色土 炭化粒子を多量に含む  
 2: 黒褐色土 1層に近似より軟らかい  
 3: 暗褐色土 炭化粒子を若干含む  
 4: 暗褐色土 3層と近似より堅い  
 5: 暗褐色土 黄褐色粘土ブロックを含む (SK59)
- 1: 暗褐色土 炭化・焼土粒子を若干含む  
 2: 暗褐色土 炭化粒子を含む (SK62)
- 1: 黒色土 炭化粒子を多量に含む  
 2: 褐色土 褐色粘土ブロックを含む  
 3: 黒褐色土 炭化粒子を若干含む  
 4: 暗褐色土 炭化粒子をやや多く含む (SK63)
- 1: 黒褐色土 若干の炭化粒子を含む  
 2: 黒色土 1層に近似より軟らかい  
 3: 黒褐色土 炭化・焼土・粘土粒子を含む  
 4: 黒色土 炭化材層  
 5: 黒褐色土 炭化材・焼土粒子を多量含む  
 6: 黒褐色土 多量の焼土ブロックを含む  
 7: 褐色土 焼土層  
 8: 黒色土 炭化材層  
 9: 褐色土 褐色粘土ブロック層  
 10: 黒褐色土 炭化・焼土粒子を多量に含む  
 11: 黒褐色土 焼土層(より堅い)  
 12: 黒褐色土 炭化材・焼土層が混る  
 13: 赤褐色土 焼土層 (第31図) 土壌(7) (SK61)
- 1: 黒褐色土 炭化粒子を多量に含む  
 2: 黒色土 炭化粒子を若干含む  
 3: 黒褐色土 炭化粒子を多量に含む  
 4: 暗褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む

- 1: 黒褐色土 炭化・焼土粒子を含む (SK139)
- 2: 黒褐色土 炭化・焼土粒子を多量に含む
- 3: 黒褐色土 炭化粒子を多く含む
- 4: 黒色土 炭化粒子を多量に含む (SK66)
- 1: 暗褐色土 炭化粒子を多く含む
- 2: 暗褐色土 1層より軟らかい
- 3: 褐色土 粘土小ブロックを含む (SK65)
- 1: 黒褐色土 炭化粒子を多く含む (SK68)
- 1: 暗褐色土 若干の炭化粒子を含む
- 2: 黒褐色土 若干の炭化・焼土粒子を含む
- 3: 暗褐色土 1層に近似より軟らかい
- 4: 暗褐色土 炭化・焼土粒子を含む
- 5: 黒色土 炭化粒子を多く含む
- 6: 黒褐色土 若干の焼土小ブロックを含む
- 7: 黒褐色土 炭化粒子を若干含む (SK69)
- 1: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む
- 2: 黒褐色土 1層に近似より軟らかい
- 3: 暗褐色土 炭化粒子を含む
- 4: 褐色土 黄褐色土ブロックを含む (SK70)
- 1: 暗褐色土 炭化粒子を含む
- 2: 暗褐色土 若干炭化粒子を含む
- 3: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む
- 4: 暗褐色土 3層に近似色調明るくなる
- 5: 暗褐色土 黄褐色粘土ブロックを含む (第32図)土壌(8)
- (SK78)
- 1: 褐色土 褐色土小ブロックを含む
- 2: 暗褐色土 炭化・褐色土粒子を含む
- 3: 暗褐色土 炭化粒子を含む
- 4: 黒褐色土 炭化粒子を若干含む (SK79)
- 1: 黒褐色土 炭化粒子を多く含む
- 2: 暗褐色土 黄褐色土粒子を多く含む
- 3: 暗褐色土 2層に近似色調より明るい
- 4: 黒色土 炭化粒子を多量に含む (SK83)
- 1: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒子多く含む
- 2: 黒褐色土 2層に近似より軟らかい
- 1: 暗褐色土 炭化粒子を多く含む
- 2: 暗褐色土 炭化粒子を若干含む (SK100)
- 1: 黒色土 多量の炭化粒子を含む
- 2: 黒色土 炭化粒子を若干含む
- 3: 暗褐色土 黄褐色土小粒子を含む (SK98)
- 1: 暗褐色土 黄褐色粘土小ブロックを含む
- 2: 黒褐色土 炭化粒子を含む
- 3: 黒褐色土 2層に近似より軟らかい
- 4: 黒色土 炭化・黄褐色土粒子を含む
- 5: 黒色土 4層に近似より軟らかい
- 6: 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック混る
- 7: 黒褐色土 炭化粒子を若干含む
- 8: 黒色土 炭化粒子を含み軟らかい
- 9: 暗褐色土 6層に近似する
- 10: 黒色土 炭化粒子を多量に含む (SK106・107)
- 1: 黒褐色土 炭化粒子を含む
- 2: 黒褐色土 1層に近似より軟らかい
- 3: 暗褐色土 褐色粘土ブロックが混る
- 4: 黒色土 炭化粒子を多量に含む
- 5: 黒色土 4層に近似より軟らかい
- 6: 暗褐色土 炭化・焼土粒子を含む
- 7: 暗褐色土 焼土粒子を多量に含む
- 8: 黒色土 炭化材層
- 9: 黒褐色土 焼土ブロックを多量に含む
- 10: 黒褐色土 9層に近似より軟らかい
- 11: 褐色土 焼土層 (第33図)土壌(9)
- (SK101)
- 1: 褐色土 炭化粒子を含み軟らかい
- 2: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む
- 3: 暗褐色土 黄褐色粘土ブロックを含む
- 4: 暗褐色土 3層に近似よりブロック含む
- 5: 黒色土 炭化粒子を若干含む
- 6: 黒色土 5層に近似より軟らかい
- 7: 黒色土 5層に近似さらに軟らかい
- 8: 黒色土 炭化粒子を多く含む (SK105)
- 1: 暗褐色土 炭化粒子を含む
- 2: 暗褐色土 炭化粒子を若干含む
- (SK111)
- 1: 黒褐色土 炭化・焼土粒子を若干含む
- 2: 黒色土 炭化材層
- 3: 暗褐色土 黄褐色土小粒子を多く含む (SK109)
- 1: 黒褐色土 炭化粒子を若干含む
- 2: 黒褐色土 1層より炭化粒子を含む
- 3: 黒色土 黄褐色土粒を多く含む
- 4: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む
- 5: 暗褐色土 4層と近似より軟らかい (SK110)
- 1: 黒褐色土 炭化粒子を含む
- 2: 黒褐色土 1層に近似より堅い
- 3: 暗褐色土 炭化・黄褐色土小粒子を含む
- 4: 褐色土 炭化粒子を若干含む
- 5: 褐色土 4層と近似より軟らかい (SK113)
- 1: 褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む
- 2: 褐色土 2層に近似より堅い (SK120)
- 1: 暗褐色土 炭化・焼土粒子を若干含む
- 2: 暗褐色土 炭化粒子を若干含む (第35図)土壌(11)
- (SK119)
- 1: 黒褐色土 炭化・焼土粒子を含む
- 2: 暗褐色土 炭化粒子を含む
- 3: 黒褐色土 炭化粒子を多量に含む (SK123)
- 1: 暗褐色土 炭化粒子を若干含む
- 2: 暗褐色土 炭化粒子を含む
- 3: 褐色土 黄褐色土粒子を含む (SK118)
- 1: 黒色土 炭化粒子を多く含む
- 2: 黒色土 1層より炭化粒子を多く含む
- 3: 黒褐色土 炭化・焼土粒子を多く含む
- 4: 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む
- 5: 黒色土 炭化材層
- 6: 黒褐色土 3層に近似より固い
- 7: 褐色土 焼土ブロックを多量に含む
- 8: 黒褐色土 炭化粒子を多量に含む
- 9: 黒褐色土 炭化粒子を多量に含む (SK121)
- 1: 黒色土 炭化粒子を含む

2: 黒褐色土 炭化粒子を多量に含む	4: 黒褐色土 炭化・焼土ブロックを含む	1: 褐色土 粗砂
3: 黒褐色土 2層に近似より軟らかい	5: 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む	2: 褐色土 細砂(粘質若干ある)
4: 黒褐色土 炭化・黄褐色粘土ブロック	6: 赤褐色土 焼土層	3: 黒色土 粘土・炭化粒子を若干含む
5: 黒色土 炭化・焼土粒子を多く含む	7: 暗褐色土 炭化粒子を含み堅い	(S D11)
6: 暗褐色土 炭化粒子を含む	8: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む	1: 褐色土 粗砂
7: 赤褐色土 焼土	9: 黒色土 炭化材層	2: 褐色土 粗砂・若干粘土ブロック含む
8: 黒色土 炭化材層	10: 黒褐色土 8層に近似より堅い	3: 暗褐色土 細砂(粘質若干ある)
9: 黒色土 炭化・焼土粒子を多量に含む	11: 暗褐色土 黄褐色粘土小ブロックを含む	4: 褐色土 細砂(粘質若干ある)
10: 黒褐色土 焼土ブロックを含む	12: 黒褐色土 炭化粒子を多量に含む軟らか	5: 青灰色土 細砂(粘質若干ある)
11: 黒色土 炭化・焼土・粘土粒子を含む	(第36図)溝跡(1)	6: 黒褐色土 粘土
(S K122)	(S D12)	7: 褐色土 粘土
1: 黒褐色土 炭化・黄褐色粘土ブロック	1: 褐色土 細砂(粘質若干ある)	(付図1)溝跡(2)
2: 黒褐色土 1層に近似より軟らかい	2: 褐色土 粗砂(粘質若干ある)	(S D12)
3: 黒褐色土 2層に近似より軟らかい	3: 黒褐色土 炭化粒子を若干含む	第36図に同じ
4: 暗褐色土 炭化粒子を含む	4: 黒色土 炭化粒子を若干含む	(S D11)
5: 褐色土 黄褐色粘土小ブロックを含む	5: 褐色土 粗砂	第36図に同じ
6: 黒色土 炭化粒子を多量に含む	(S D80)	(S D21)
7: 黒色土 6層に近似より軟らかい	1: 褐色土 細砂(粘質若干ある)	第36図に同じ
8: 黒色土 炭化粒子を若干含む	2: 褐色土 粗砂(粘質若干ある)	(S D100)
9: 暗褐色土 黄褐色粘土ブロックを含む	3: 暗褐色土 粗砂	1: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む
10: 黒褐色土 炭化粒子を含む	4: 暗褐色土 粗砂・若干炭化粒を含む	2: 黒褐色土 1層に近似より軟らかい
(S K126)	(S D51)	3: 黒色土 炭化粒子を含み細砂質
1: 暗褐色土 炭化粒子を含む	1: 褐色土 細砂(粘質若干ある)	4: 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック含む
2: 暗褐色土 1層に近似より軟らかい	2: 褐色土 粗砂	(付図)溝跡(3)
3: 褐色土 炭化粒子を若干含む	3: 暗褐色土 細砂(粘質若干ある)	(S D11)
(第35図)土塊(11)	4: 褐色土 粗砂(粘質若干ある)	第36図に同じ
(S K124)	5: 褐色土 炭化粒子を含む	(S D98)
1: 暗褐色土 炭化・黄褐色土粒子多く含む	6: 暗褐色土 粘土	1: 黒褐色土 炭化・粘土ブロックを含む
2: 褐色土 炭化・黄褐色土粒子多く含む	7: 黄褐色土 粘土	2: 暗褐色土 炭化粒子を若干含む
3: 暗褐色土 黄褐色土小ブロックを含む	8: 褐色土 粘土	(S D99)
4: 黒褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む	(S D52)	1: 黒褐色土 炭化・粘土小ブロックを含む
5: 黒褐色土 炭化粒子を含む	1: 暗褐色土 細砂(粘質若干ある)	2: 黒褐色土 2層に近似より軟らかい
(S K125)	2: 暗褐色土 粗砂	3: 暗褐色土 黄褐色粘土ブロックを含む
1: 黒褐色土 炭化・焼土粒子を若干含む	3: 黒褐色土 粘土・炭化粒子を含む	4: 黒色土 若干の炭化粒子を含む
(S K130)	4: 黒褐色土 粘土・褐色粘土ブロック	5: 暗褐色土 炭化・黄褐色土粒子を含む
1: 黒褐色土 炭化・焼土粒子を多く含む	5: 黒色土 細砂(粘質若干ある)	6: 暗褐色土 5層に近似より炭化粒を含む
2: 黒褐色土 焼土粒子を多量に含む	6: 暗褐色土 細砂(粘質若干ある)	7: 黒色土 4層に近似より軟らかい
3: 黒色土 炭化材層	7: 暗褐色土 細砂(粘質若干ある)	8: 黒色土 7層に近似・細砂質
4: 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む	(S D60)	9: 黒褐色土 炭化粒子を含む・細砂質
5: 黒色土 炭化・焼土粒子を若干含む	1: 暗褐色土 粘土・炭化粒子を含む	10: 暗褐色土 黄褐色粘土ブロックを含む
(S K28・127)	2: 暗褐色土 粘土小ブロックを含む	11: 黒色土 細砂質・若干炭化粒を含む
1: 黒色土 炭化粒を多量に含む軟らかい	3: 褐色土 粗砂	
2: 黒色土 炭化・焼土粒子を含む	4: 褐色土 粗砂	
3: 黒褐色土 炭化・焼土粒子を多量に含む	(S D21)	